
やっぱ海でしょ！（修正版）

北野 鉄露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やっぱ海でしょ！（修正版）

【Nコード】

N8127U

【作者名】

北野 鉄露

【あらすじ】

休日に釣りへ出かけた平凡な高校生・達郎。帰り際に釣り上げたのは美しい人魚の女の子・ナーちゃんだった。キャッチアンドリリースしようとするも彼女は海に帰ろうとはせず、そのまま達郎の元に居着いてしまう。それからというもの、次々に現れる海の愉快すぎる仲間達やアブない奴ら。そんな連中が繰り広げる海底世界のドタバタに巻き込まれて右往左往する達郎だったが、とある事件をきっかけに彼は一大決心し、そして。ぬるくて冷めててほんの少しアツい、バタバタのラブコメ。【以前投稿した作品の修正版です。

【完結済み】

その1 今日釣果(前書き)

この作品は以前投稿した「海へ行きましょう」「やっぱ海でしょ！」を統合のうえ加筆修正したものです。新規投稿作品ではありません。修正版掲載に伴い、修正前作品は閲覧から除外しております。あらかじめご了承ください。

その1 今日釣果

「あー、ちつとも釣れねえなあ。そろそろ、帰ろつかなあ……」
欠伸をかみ殺しながら、ぼやいた俺。

岸壁から海に向かって伸びた釣竿はここ七時間ばかり、ぴくりとも動いていない。

いや、動いてはいる。

とはいっても、打ち寄せる波のせいなのだが……。

気付けば時刻はもう、夕方。

やる気をなくした太陽が、すでに水平線の向こうにとんずらしようとしている。

さっきまで隣で一緒に釣っていた見知らぬおっさんも

「にーちゃん、まだ頑張るのかい？ だったら、ポイント変えた方がいいよー」

とか言い残して去っていった。

一時間くらい前のことだっただろうか。よく覚えていない。眠かったから。

このおっさんも俺が見ている限り、一回も当たりはなかったようだ。

要するに、この埠頭は 釣れないのか？

まあ、俺が魚だったら、間違いなくこんな港には近寄りたくない。空き缶やらビニール袋やら木材やら、とにかくゴミというゴミが浮遊しまくっているのは百歩譲るとしても、水の色が明らかにおかしい。

ウーロン茶、いや、カフェオレ系なカラー。

透明度ゼロ。

この海は炭酸かとツツコミたくなる量の泡。

つまり、足を滑らせれば「カフェオレソーダ」の海を泳ぐ羽目になる。無難に即死だな。

ぐいつと振り返れば、対岸には赤と白が交互に塗られた煙突がタケノコのように何本も生えまくっていて、空に向かって煙を吐き出している。煙突の足元には、変なパイプが絡みついた建物が多数。工場地帯、ってヤツ？

あからさまに「だばーっ」とかやっているようには見えないけど、多分それらが排水を見えないところで垂れ流しているのだろう。そうでもなければ、海がこんなに汚くなる筈がないじゃないか。よくまあ、環境保護団体とか政治家が何も言わないものだ。

そういうところで朝から晩まで釣りをしている俺も俺だけだね。そりゃ電車とかに乗って遠くへ行けば、清流とか沖釣りとか、できる場所はたくさんある。

あるんだけどね。

……そこまでしてやりたくない。

正直、気分転換程度で良いんだよね。

大物を釣り上げてやるうとかいう野心もないし。

それに釣って帰ったところで、うちの親父も母親も残念ながら魚を捌くというスキルは持ち合わせていない。だから「なんたらの開き」とかいう商品以外の魚がうちの敷居をまたいだことはなかった。ともかくも、限界。

俺は帰ることにした。

五本出していた釣竿を一本一本片付けていき、最後の一本を引き上げようとしてリールを巻きにかかった時だった。

「……あ、あれ？」

重い。

竿の先がぐーっとなっている。

何かに引っ掛けたのだろうと思った。

こつこつ埠頭で釣っていれば、引っ掛けることは普通にある。ゴミとか、海底の海藻とか。

ところが。

糸が右へ左へと動いているじゃないですか！

明らかに、何か「生き物」がかかっている感触がある。

「お、お、お……？　もしかして、これは……？」

最後の最後で当たったかと、俺は期待に胸を躍らせた。

こうなりゃ、何が何でも釣ってやるしかない！

バラしてたまるものか！

俺が気合いを入れて巻けば巻くほど、抵抗が強くなっていくのがわかった。

竿がもう、折れんばかりにU字に曲がっている。

でも、心配はない。

こういうこともあるうかと思つて、最新の素材で出来た高い竿を買っていたのだ！　……いや、嘘です。友達のお父さんからもらいました。

暗い岸壁で格闘すること数分。

ようやく獲物を海面近くまで引き摺り上げたことに成功した俺。

もはや、引きは弱くなっていた。

「よっしゃあ！　もうちょい！」

自分で自分を褒め称えつつ、最後の巻きにかかった。

どんな獲物だろう？

巻くスピードをゆーっくりと遅めながら、俺は海面を注視した。

釣果はもう、ほとんどそこまで上がってきている。

「……いよっ！」

気合をかけて引つ張った。

ざっ

獲物が海面から姿を見せた。

「……あれ？」

目に飛び込んできたそれを見た瞬間、俺は勝利の喜びを忘れ、しばし呆然としていた。

「　たたたたたた、た、達郎っ！」

玄関先で、親父が腰を抜かしてひっくり返っている。

口がぱくぱくしている。次の言葉が出てこないらしい。

初めてみる親父のコケぶりが面白くはあるが、笑うに笑えない。

その後ろから

「あら、達郎おかえりなさい。まあ、お友達？ あらあら、連れてくるんなら連絡くれればよかったのに。夕飯の用意がねえ」

親父の後ろから俺の母親登場。

……ちつとも驚いてねえ。

電波時計みたいに細かい性格の親父とは正反対の母親。一言で表現すれば天然なんだな。

仮に俺がキングコングを連れて帰ったところで、まったく同じリアクションをしただろう。

「たつ、ただい、ま……」

ちよつとばつが悪そうに言った俺。

それには理由がある。

「それにしても、綺麗なコねえ。達郎のお友達にしては、ちよつともつたいたいみたい。……お名前は、何ていうの？」

母親 ああ、幸子というのだが、幸子が傍まで近寄ってきてそんなことを言った。ほつとけ。

余計なお世話だ。

「あのー、クラスメイトとか友達じゃないんだよね。見て、わかんないかな？」

わかるだろ、フツー！

脳みそのネジが何本足りないんだか、うちの母親は。

そう。

誰だつて、一目見りゃわかるだろう。

現に、親父は一発で吹っ飛んだ。

本日の、俺の釣果。

今まさしく、両手に抱えている。

ってか、正確には「お姫様だっこ」。

間違いないく、大物であることに変わりはないのだが　大物とい
うよりも変物だな。

長く伸びた美しい髪。

大きく濟んだ瞳に小さくて形のよい、整った顔立ち。

白く透き通った肌、スレンダーで色つばさ全開のボディ。

……ただし、腰から先は七色に光る綺麗な鱗に覆われていて、先
の方では半透明の大きなひれが「ぴちぴち、ぴちぴち」と跳ねてい
たりする。

確か、人魚、とか言わなかったっけ？　こっこの。

なんとか童話に出てくるヤツ？

その昔、幸子が寝る前に読んでくれたような記憶がある。俺が寝
付く前に自分が寝てましたけどね、この母親は。

人魚の口はちよつと怯えたような表情で、突然目の前に現れた俺
の両親を見ている。まあ、人間界にもこんな変な生き物がいるんで
すよ。彼女に同情しつつ説明してやりたくなくなった。

俺は幼稚園児でもわかるような質問を発したつもりだったが、幸
子の頭上には明らかに「？」が点滅しており「……なあに？　お友
達じゃないの？　そしたら……」

困った顔で考え込みやがった。

考えるとこころですか、そこ！

が、彼女は数秒後、急にパツと明るい顔になり

「ああ、達郎ったら、イヤだわあ。いつの間に、こんな素敵な女
の子をつかまえちゃって。そうならそうと、お母さんにこっそり教
えてくれればいいのに。向こうの両親にも、きちんと挨拶は済
んだの？」

恥かしそうにしてやがる。

「……はい？」

何を勝手な妄想しとるんだ、この幸子は。

そりゃあ、捕まえましたよ、ついさっき。

だから、彼女のご両親にはまだ……って、ちがーう！

「だーかーらー！ 見てわかるでしょーに！ 人魚なの、に、ん、ぎよ！ お友達以上でも恋人未満でもないんだっつーの！」

幸子のバカさ加減について、イラっときた俺。

叫んでしまった。

すると！

幸子よりも人魚の彼女がびっくりしたらしい。びくつと震えてから怯えた瞳で俺の方をじっと見つめ始めた。

こうして明かりの下でよくよく見れば、すっごい美人。

年の頃は俺とそんなに変わらないだろうか。　　ってか、人魚の

歳なんてわかりませんけどね。

怯えた表情が、なんとも可愛い。

人間と人魚の関係を飛び越えてつい、憐憫の情を覚えてしまったよ。

「あ……ごめん、何でもないから
つい謝っていた。

言葉が通じたのかどうか、彼女はきよとんとしてから表情を緩めてくれた。

「とっ、とにかく！」

この腰抜け親父と天然幸子を相手に玄関で激論かましても始まらない。俺はそう思っている。

「風呂沸かしてくれ、風呂！ 話はあと、あと！」

不倫していて堂々と自宅に帰ってきた夫のような台詞を吐きつつ、俺はどかどかと二階に上がっていった。

そんな俺を下から親父が呆然と、幸子がにこにこしながら見送ってやがる。

「あのコもそういう歳になったのねえ。大きくなったわあ」

妙な感心をしている幸子の声が聞こえてきた。

やかましいわ。

自分の部屋に戻った俺。

まずは人魚のコをゆっくりと床の上に下ろしてやった。

彼女は辺りを見回すでもなく、じっと俺の方ばかり見ている。

そんなに穴が開くほど見るなよ。

取って食ったりしないよ。増して襲ったり　しても仕方がない

のか？　この場合。

それはともかく。

海から釣ったとはいえ、半分は人間の形をしているのだ。

人間的なおもてなしをしておくのが人道的な判断というものだろう。

う。細かい話はあとからだ。

カフェオレソーダの海から水揚げされた彼女、体中が汚れてしまっている。

風呂が沸くまでは、とりあえずお茶でも飲んでいてもらって

ああ、ちがうちがう！

彼女は怪我をしているではないか。

左腕の肘のあたりが痛々しく傷ついている。まあ、俺が放り込ん

だ釣り針に引っかけたままだったせいなんですけどね。

病院に連れて行った方がいいのか？

……いや、今日は日曜日だ。そして、いきなり人魚を病院に搬送するのは色んな意味で問題がある。応急処置でもしてやるか。

薬箱を持ってきた俺は、彼女の傍に腰を下ろし

「ちよつと見せてみ。今、手当てるから」言いながら、左腕に触れた。

イヤがるかと思ったが、意外にも彼女は素直に従ってくれた。

傷口に消毒液をつけると、さすがに痛そう。ちよつと泣きそうな顔で俺を見た。

人魚でも痛いのか。

「ああ、ごめんごめん。でも、もう大丈夫だから」

田舎にいる親切なオジサンみたいに独り言を言いながら、ガーゼ

を当てて包帯を巻いてやった。

「よし。とりあえず、これでいいぞ」

不思議そうな顔で、左腕に巻かれた包帯を眺めている人魚のコ。俺は薬箱を閉じて立ち上がるうとした。

その時。

ガシャーン

突然窓ガラスが派手に割れ、外から何者かが飛び込んできた！

「うおっ！」

これにはびびった。

まったく意味の不明な奇声を発してしまった俺。

さっきの親父状態で腰を抜かしつつも、そちらの方を見れば

「姫様！ ご無事でございましたか！」

俺は思わず目を疑っていた。

ええと……こういうのを何と表現すればいいのだろうか？

そこには、魚がいた。

魚。

アジとかサバとかサンマとか、そういう光り物系なヤツ。青魚と

もいっ？

が、タダの魚じゃない。

突然変異かと思われる位でっかい青魚に「によっ」って腕と足が生えているではありませんか！ 着ぐるみとかでありそうだが、ヤツが果たして着ぐるみなのかどうか、判断しているだけの心理的余裕など俺にはなかった。

完璧ブサイクとしか形容詞が当てはまらないアジ野郎は右手に原始人みたいなヤリを持っている。

そのヤリ先を俺につき付け

「よくも姫様をさらったな、この人間め！ この超美形最強万能護衛隊長、イワシヤール様が相手になってやる！」

はい。

とりあえずヤツの名前と元ネタはわかりました。

アジでもサバでもない。

イワシでしたか。アジ野郎呼ばわりして失礼いたしました。

言われてみれば、何となく弱そうだ。

っていうかこのイワシ、もしかして今……自分のことを「超美形」とかほざいた？

俺の聞き違いだろうか。

その2 ナーちゃんとイワシ

「さあ、姫様を返せ！ この悪党め！」

自称「超美形最強万能護衛隊長」イワシャルは俺の鼻先すれすれに原始人のヤリを突きつけた。

変なものを見た驚きで最初こそ気がつかなかったが実はこのイワシ、イワシの分際でもいい声をしている！

歌劇とかで出てくる男性役の女性、みたいなの？

歌を唄わせたらきつと期待に込えてくれるに違いない。

声だけで判断する限りこのイワシ、性別は女らしい（断定できる何物もないが）。

「これ以上姫様に狼藉を働くというのなら、この聖なるポセイドンのヤリでお前を殺すからそう思え！」

……？

ポセイドンのヤリ？

もしかして……右手に握っているそのことか？

「公園に落ちている木の枝+ちよつと尖った石ころ」にしか見えな
いのは気のせいだろうか。

しかもイワシャル。

ポセイドンのヤリ（自己申告）を持つ右腕が「ぷるぷる」している。
る。

彼女にとってこの得物の重量はかなりキツイようだ。

両腕で持てば良さそうだが 飛び出た頭部があまりにもでかすぎ、
両腕が届かない。

つまり、物理的にムリがある。

俺は確信した。

このイワシャル、最強万能どころか冗談抜きで弱いに違いない。
所詮は突然変異（と結論づけるには無理がありすぎるもの）のイ
ワシに過ぎないのだ。

捕獲して魚屋かオペラ座に売り飛ばしてやるうかと思っただが
ちよつと待とう。

人魚のコが彼女（？）の姿を目にした途端「あっ！」みたいな表情をしたからだ。

道端でばったり友達に出会ったときの顔。

急に明るい表情になった彼女、前のめりになってイワシャルに何か話しかけはじめた。

声になっていない口パクだから何を喋っているのかわからない。

が、イワシャルは表情のない魚顔で「うんうん」と頷いて聞いている。当たり前のことだが、そもそも魚に表情などはないのだ。

人魚の美少女とでっかいイワシの会話。

なんだこのいい加減な光景は。

学芸会かよ。

俺は呆気にとられたまま、ぼーっとその奇つ怪なやりとりを眺めていた。

人魚と魚人、こうして並べてみれば違いがよくわかる。ふと思っただけ。

三分後。

「そうでしたか。わかりました……」

イワシャルは頷き いや、身体全体を一度前にふると、POSE
イドンのヤリをすつと引っ込めた。

そしていきなり、

「いいか、そのブサイクな人間！ よく聞け！」

命令してきやがった！

「お前が連れ去ったそのお方は、私達ブルーフィッシュ共和国の姫君、ナタルシア様にあらせられるのだ！」

ああ。

ブルーフィッシュ「青魚、ね。

わかりやすい。

「姫君はブルーフィッシュ共和国の危機を救うため、他の勢力と平

和協定を結ぶべく御自ら交渉活動にあたられていたのだ。……ああ、なんと健気な姫様！」

ん？

なんか話がおかしいぞ。

平和協定？ 交渉活動？ 海の底で、か？

人類の与り知らぬところでサカナどもが寄ってたかって妙な企てを って、そこ！

イワシヤールがそのでっかい目玉から涙を流してるし。今の話のどこに泣けるポイントがあったのか、全くわからねえ。

ヤツは腕で涙を拭い というより、目玉をごしごしこすったようにしか見えないが 痛くないのだろうか。そーいや魚に痛覚はないという。

イワシはポセイドンのヤリをトン、とじゅうたんの上に立て

「ナーちゃんはこう仰せになっている！」

おい。

自分とところの姫君をいきなり「ナーちゃん」呼ばわりか。

お前はどれだけ偉い側近なんだよ。イワシの分際で。

「この人間のお方は、悪い方ではなさそうです。怪我をした私の手当てをしてくれましたし、とても勇気があつてお優しい方だと思つたのです、と」

褒めすぎだよ。俺はその彼女を釣ってしまった加害者なんですけどね。

ふと視線を移すと、いつの間にかナーちゃんがニコニコして俺の方を見ている。

そこで俺は気が付いた。

そこら中によくあるよな。

RPGで勇者にまつりあげられる的な展開。

「あなたこそ光の戦士です！」チツクな、本人の意向を完全に無視しきつた強引かつハタ迷惑なお話。俺が知る限り、古今東西自主的に悪者退治に立候補した英雄気取りバカ野郎はあの桃太郎くらいな

ものじゃねえ？ 祖国防衛という目的を甚だしく逸脱して鬼達の領土と主権を侵害した悪質な昔話。

あ。

一寸某氏とやらも似たようなパターンだったっけ？

「そこで、美しく心が海底のように広いナーちゃんは、お前みたいなどうしようもない人間の端くれに対して」

「……待て、このイワシ野郎」

俺はなおも勝手に続いているイワシヤールの話を遮った。

「思わず乗せられてしまふところだったが、要はかくかくしかじかという、お前らにとっても都合のいい話だろ？」

「な……！ まだ何も話していないというのに！ お前、タダの冴えない人間じゃないな？」

ずざつと後退りしたイワシヤール。動揺しているらしい。

凶星かよ。

「ま、待て！ 私の話を最後まで聞くがいい」

「あん？」

「そんな勇者などというインチキ話と一緒にするな。聞いて驚

くなよ？ ナーちゃんはお前を『私のダンナ様に』と仰ったのだ」

おつと？

風向きがちょーつと違ったか。

とはいえ、いきなりその「ダンナ様」はどうだろう？ 俺まだ未

成年だし。

しかし、イワシヤールの弁解には続きがあった。

「が、どう見ても貧乏くさくて器が小さそうなお前をナーちゃんの夫になどんでもないと私は思う。しょぼいお前にとっても責任が重すぎるだろう？ だから、この私が今からナーちゃんに、お前を

下僕にするようにたの

うんうん。

そーかそーか。

最後まで聞く必要は一ミリもないね。

さつき発生した俺の頭の上の「怒りマーク」はすでに部屋一杯の大きさになっているから。

「……おい」

俺はゆっくりと立ち上がった。

「ん？　なんだ、非イケメン人間」

俺の拳がばきばきといい音を立てている。

「さつきから黙って聞いていれば、なんだって？　ブサイクにはじまり、どうしようもない人間の端くれ？　タダの冴えない人間？

おまけに貧乏くさくて器が小さそうでしょぼくて、とどめに非イケメン？　よくもまあ、それだけ思いついたものだな、おい」

轟々と燃え上がっている俺の怒りオーラを感じたらしいイワシヤール。

慌てたように両手をぶんぶんと振りながら

「ま、待ちなさい！　ウソをついたのなら私が悪いが、私は事実をありのまま述べたのだ！　ブルーフィツシュ共和国の国是にもあるのだ。『ウソをついてはいけない』とな。　そう、そうだ！　下

僕が気に入らないなら、こういうのはどうだ？　私の夫、兼召使い

！　これなら文句もないだろ　」

「……いっぺん三枚にオロされてこい！！」

ガシヤーン

俺の怒りのシュート炸裂。

イワシ野郎は元来た窓からぶっ飛んでいってしまった。

「あーれー　」

夜空に奴のオスカル的美声がフェードアウトしていく。

「……おとといきやがれ」

仁王立ちではーはーと息を荒くしている俺の背後では　ナーちやんが呆然としていた。

その3 鯛茶漬

無礼な青魚系魚人・イワシヤールに一撃お見舞いしたその後。

「ったくよー。くるんならピンポン押して玄関から来いってんだよなあ、まったく」

俺はぶつぶつ言いながら、とりあえず割れた窓にダンボールを貼っつけておいた。それにしてもイワシヤールのヤツ、どうやって二階まで登ってきたのだろう。

窓の応急処置を終えると、ナーちゃんを風呂場に連れて行った。

カフェオレソーダの海から水揚げされた彼女は可哀相なことになっていたので。

後ろ向きにぺったと座らせてから、ぬるめのシャワーをかけてやった。

目の前にいるのは、一糸まとわぬ姿の女の子。

それが人魚だとはいえエロいっただらないのだが、そうも言ってもらえない。変な汚染物質なんかにやられたら大変じゃないか。俺は自分で自分に「お前は今、環境保護団体の一員なんだ。これは自然保護で、重油の海から鳥を助けているのと同じなんだ」と、言い聞かせた。

しばらく「じゃーっ」とやっている、それまでじっとしていたナーちゃんが不意にこっちを向いた。

……何だか悲しそうな瞳、表情。

俺は咄嗟に思った。

いくら口の利き方を知らないバカイワシとはいえ、彼女にとってはずさぞかし大切なお知り合いだったに違いない。そいつを（有無を言わせた拳げ句）ぶっ飛ばしてしまったのだから、きっと悲しく思っているのだろう。人魚は心優しいって言うし。

ごめん。

渾身の蹴りを入れることはなかった。せめて、グーで殴って

おくんだった。

心の中で謝った、その時。
がばっ

ナーちゃんが俺の首にしっかりと抱きついてきた！
思わずフリーズしてしまった俺。

びっくりして落としたシャワーのヘッドがひっくり返り、俺達にぬるーいお湯をぶっ掛けまくっている。服を着たままず濡れになっ
っていたが、それどころではない。

首に腕を回したまま、俺の額に自分のそれをゆっくりと押し当ててきたナーちゃん。

そのままキ　かと一瞬思ったが、違った。

『　達郎さま。私の声が聞こえていらっしやいますか？』

「……………!？」

びびった。

俺の頭の中に、彼女の透き通った美しい声がダイレクトに飛び込んできたのだ。

これは一体どおいうこと!？　てればしーってヤツ？

ぐっちゃんぐっちゃんに混乱していると

『ふふ。びっくりさせてしまっでごめんなさい。人魚族は額と額をあわせることで人間の方とお話ができるのです。私に向かっ

て、頭の中で話しかけるようにしてみてくださいな』

頭の中で話しかける？

よ、よーし…………

『……………あ、あ。こちら、海藤達郎。聞こえますか、どうぞ』

我ながら、頭の悪い発言だ。

が、ナーちゃんはくすりと笑って

『ええ、ちゃんと聞こえていますよ？　あらためまして、私はブルーフィッシュ共和国のナタルシアと申します。よろしくお願ひしますね、達郎さま』

自己紹介してくれた。

『はあ……こちらこそ』

『さつき、私の側近のイワシヤールがご無礼なことを申し上げたのでしょう？　すぐくお怒りのようだったので、とても気になっていたのです。申し訳ありません。私からお詫びいたします』

『……』

思わず「まったくです。どういう教育をしているんだ！」とか言ってしまうところだった。

しかしそうだったのか。

それでナーちゃん、暗い顔をしていたのか。

いえいえ、悪いのはあなたじゃありませんよ。全部あのブサイクイワシのせいですから。

『ところで……』彼女と会話する術を得た俺。質問が山ほどある。

『ブルーフィツシユ共和国の危機って、何？　ぶっちゃけ、海の世界ってどうなっているの？』

そう訊いてみると、ナーちゃんはまた悲しそうな顔をした。

『人間の方たちはご存知ないと思いますが、海の世界にはいくつかの勢力があります。平和を望む者達がいる一方で、他の勢力をやっつけて自分達が海の世界を支配しようと企んでいる勢力もあるのです』

海底世界の戦国時代ですか？

いや、帝国主義？

『私達ブルーフィツシユ共和国は、か弱い魚達の集まりです。もし今、他の勢力に攻められたならば、あっという間に滅ぼされてしまうでしょう』

そうですね。

イワシにサバにアジ、それにサンマとニシン。

俺が知っているのはその程度だが、いずれも食物連鎖の底辺にいる魚ばかりだ。

『私達や他の平和を望む者達は、海の世界だけでどうにか解決しようとして努力してきました。でも最近、レッドバック帝国という海の世

界を支配しようとしている勢力が一部の人間と結託したことがわかりました。こうなつてはもう、一刻の猶予もありません。私達もまた、人間の方達の協力を得なければ、ブルーフィツシュ共和国はもちろん、海の世界は……」

「なんか、大変そう。」

「権力欲にとりつかれるヤツつてのは、何も人間だけじゃないんだなあ。」

「ご同情申し上げます　ん？」

「ちよつと待て。」

「その……人間である俺に、海の平和を守るために手を貸せ、と？」
「もちろん、お礼をしなくてはいけないのはわかっています。でも、私にできることといつたら何もありません。ですから、その、イワシヤールも申し上げたと思いますが」急に恥じらいながら「私自身でよろしければ……」

「おーい。」

「いきなり身売りですか？」

「人魚、心が広すぎ！」

「もつと自分というものを大切にしてみないかー？」

「あ、あのね……お礼とかどうとかこうとかいう以前に、人間つてこの世界に六十億人もいるんだよ？俺のような非力な一市民に助けを求めたところで、海の世界に平和は永久に」

「……私では、ご不足でしょうか？」
「きーっ！」

「俺の話を聞け！　つてか、空気読めよ！」

「あのね、不足とか満足とかそういうハナシじゃなくつてえ、お礼するものがないから自分を差し出すとか、そおいうのはいかなものか……」

「お礼というだけのお話ではありません。　人魚族には掟があるのです。人間の男性に出会い、もしその方に心惹かれたならば、その方を夫として選びなさいと……」

百歩譲って心惹かれるのはいいけどね。

その男が生活力ゼロだったらどーする気だ？ 夫婦揃って内職でもするのによ。

人魚族の掟とやら、ずいぶんアバウト過ぎねえ？

『でも……』

ナーちゃんにはこつと無邪気そうに微笑んだ。

『私、達郎さまとならば喜んで掟に従います。こんなにも優しく、勇気のある人間の方なのですもの……』
えーと。

詳しく具体的に伺いたい。

このごく一般的な男子高校生である俺のどこをみて「優しくて勇気があるからダンナにしたい」とか思ったの？

あなたを釣り上げてから経過した時間、一時間十六分と四十二秒。ぶつちやけ、結婚決めるの早すぎじゃね？

つてか、無理矢理自分で自分を納得させようとしていませんか、アナタ？ まだ独り身を焦らなくちゃいけない歳でもないでしょーに（多分）。

『あのあのあの、なんで俺が優しいと……？』

『それはですね』

彼女が言うのを聞いて、そういえばと思い出した。

岸壁でナーちゃんを釣り上げてしまった俺は釣り針を外してやる
と「ごめんな、釣ってしまって。もう大丈夫だから、海へお帰り」

そう、促した。キャッチアンドリリース。

が、ナーちゃんはじつと俺を見つめたまま、海に帰ろうとはしなかったのだ。

さすがに、あのひどくこ汚い海に飛び込む勇気はなかったかもしれないが。

『達郎さまは、人魚の私にとっても優しい目をしてくださいました。』

あの時思ったのです。私が長くお傍においていたたくのは、この方の他にはいないと……』

ナーちゃんはそつと俺にもたれかかってきた。

どうやら俺、目で人魚を殺してしまつたらしい。……全くの事故ですけどね。

どうりで海に帰つていかないワケだよ。

これは参つた。

どうすりゃいいんだよ。

脱衣場でナーちゃんに俺のＴシャツを着せてやりながら、途方に暮れる思いだつた。

同級生の春香ちゃんと大分いいところまできているっていうのに、あとはタイミングをみて告るだけなんだ。絶対彼女は「うん」と言ってくれるはず。

けど、こんなザマを見られたら 何もかもぶち壊した。

人魚なんか釣つてしまつた俺にも責任があるんだろうけど。

でも、今のナーちゃんに向かつて「ダメ、ゴメン」とは口が裂けても言えない……。

すっかりキレイになつたナーちゃんを抱えて居間に戻つた俺を、また新たな事態が待ち受けていた。

「あー腹減つた。今日の晩メシはな お、親父!？」

「たつ、たたたたたたたたた達郎! こつ、これ、これ! 何とかしなさい!」

親父が部屋の隅に追い詰められ、なぜか鯛に取り囲まれている!

そう 鯛。

鯛、鯛、鯛、鯛。

もちろん、タダの鯛ではない。

イワシヤールのように、両腕、両脚を完備した奴らである。

とはいえ、さすがは鯛。イワシよりもガタイがいい……って、決して駄洒落ではない。重量感のある肉厚ボディに、隆々とした筋肉のついた腕や脚。なぜそこだけがマツチヨなのかは謎である。

厄介なのは、奴らが手にしている得物。

例の「聖なるポセイドンのヤリ」などというオモチャの類ではない。刃が「うにーっ」と反り返っているばかりでかい刀だった。青竜刀とかいう武器に近いかも知れない。

救いなのはそのどれも「さつき沈没船から持ってきました」的に錆びまくっていて切れ味感ゼロなことだが、それでも、あれで「ガン」とかやられたら、病院送りは間違いないだろう。

親父　海藤舟一、四十四歳　を包んでいたマッチョ鯛の連中は、入ってきた俺達に気がついた。

「おい、あれ…… ナタルシアじゃねえか？」

「うおっ！　間違いねえ！」

俺に「お姫様だっこ」されているナーちゃんは怯えた表情で

『……あの者達がレッドバツク帝国の一味です！　私を捕まえにきたのですわ』

心持ち、俺の首に回されている腕に力がこもった。

なるほど、レッドバツクね。

確かに奴ら、背中が「赤い」魚だ。

すると、仲間は金目とかメバルの類か？　キロあたりの卸値が跳ね上がったよ。エビとかカニとかタコの連中はどうなんだろう。

それはともかく、対立勢力の襲撃だ。

ナーちゃん、まさに大ピンチ！　ついでに俺も大ピンチ！

とそこへ、キッチンで夕食の用意をしていた幸子がやってきて

「あら、達郎。この方達もあなたのお友達かしら？　お父さんと仲良くお話したいみたいなんだけど……」

待てい。

これのどこが「仲良く」だ!?

アブナイ得物を突きつけられているのが見えないのか？

ってか、それより幸子！

あんたの亭主、大ピンチなんだぞ！　鼻歌うたいながら料理なんかしてないで、助けてやんなさいよ！　聖剣・出刃包丁の一本くら

いあるでしょーに！ おかずを一品増やせるんだぞ！

が、幸子は俺達に向かつて

「急だけど、今晚はすき焼きにしちゃった。達郎の大事な人もお見えになつてのことだしね。たくさん食べてもらつてね」

嬉しそうにキッチンへ戻って行ってしまった。

はい、そこ！

カン違いしつぱなしですから！

大体、人魚がすき焼きなんか食うかよ！ いい加減に気がつきなさいよ！

とかツツこんでいる場合ではない。

マツチヨ鯛の一味はさつと素早く横一列に展開しつつぶしつ！とポーズをキメ

「我々は武術に優れた鯛で組織された『THE・武・鯛』だ」

左から二番目の鯛野郎が得意そうに説明した。

部隊のもじりかよ。マジ笑えねえ……。

そもそも「THE」って冠詞がついている意味は？ ネーミングしたのはどこのどいつだ？ 俺には「鯛戦隊マツチヨフォー」に見えないんですけど……。

「そのヘッポコ人間！ ケガをしたくなければ、大人しくナタルシアをこっちに渡してもらおう！」

「うおーっ！」

「うおーっ！」

意味不明（恐らく魚 うおーだろうが）の奇声を発するなり、マツチヨフォーはいきなりこっちに向かって跳ねてきた。

活きがいいねえ とかボケている余裕はない。

咄嗟にナーちゃんを庇おうとした俺。

彼女は俺の体にきゅーっとしがみついている。

その時だった。

サツと俺の目の前を過ぎった影がある。

あっと思う間もなかった。

カン！ キン！ カカカン！

得物同士のぶつかり合う音が響いたかと思いきや

「……う、おっ」

一呼吸ののち、踊りかかってきたマッチョフォー達は、次々と床に倒れ伏した。

「……？」

俺達とマッチョフォー達との間に、誰かいる。

どうやら、この人がマッチョフォーから俺達を守ってくれたらしい。

いつの間にやってきたのだろうかと思っていると

「……はじめまして、達郎様」

ふわさつ、と青色に輝く美しい髪がなびき、その人が振り向いた。完璧に整っていてクールながらも柔和な印象を与える顔立ち。切れ長ではあるがその青い目が限りなく優しい。すらりとして美しい体型。胸と腰下だけを、これまたブルーの装飾で包んでいてセクシィー。こういうキャラ、オンラインRPGにいるかも知れない。

彼女は両手にクリアブルーの拳銃を握っている。美人二丁拳銃使いですか！

見事なクイツクドロウをキメつつそれを太ももにつけたガンホルダーに納めると、

「私はブルーフィッシュ共和国護衛隊長の葵と申します。ナタルシアがお世話になります」

名乗りながら俺ににっこりと微笑みかけてきた。

あれ？

あのバカイワシも確か「護衛隊長」とか名乗ってなかったか？

まあいいだろう。どっちがモノホンの隊長さんかは一目瞭然というものである。

葵さんを一目見たナーちゃんはパツと破顔一笑、嬉しそうな顔になった。

が、葵さんはふうつと大きく一つため息をつき

「まったく、姫様ときたら」仕方なさそうな笑みを浮かべた。「人間世界へ出るなら出ると、一言教えてくださればいいものを。レックバツクの連中や海獣組の者達に捕まったらどうするのですか？ たまたま、こうして心優しい人間の方に出会えたから良かったですが」

たしなめられ、ごめんなさい、というようにしゅんとしているナ
ーちゃん。

「あ、あのさ。涙の再会を果たしているところ、誠に申し訳ないのだが」

「はい、達郎様。どうなさいましたか？」

「……まずは俺にメシを食わせてくれ」

俺の腹が、海鳴りのように鳴っている。

鯛を見て鯛茶（鯛の漬けを乗せたお茶漬けのことであるが）を想像してしまい、一気に空腹感が増長されたためであることは言うまでもない。

その4 浜辺で焼き焼き

なにゆえ、こういうことになっているのだろうか。

THE・武・鯛を一匹残らず家の外につまみ出したあと、やっと夕食にありつくことができた俺。献立は幸子がさつき宣言した通り焼き焼き。いくら鯛が豊漁(?)だからといって、鯛茶漬けになるというワケではない。

焼き焼きを囲んでいるありふれた家族の食卓の風景。

のはずだったけど。

「部外者二名＋一匹が混入している！」

俺の隣には葵さん。そして俺の膝の上にはナーちゃん。

さらには さつき空のはるか彼方までぶっ飛ばした筈のイワシヤールまでがいる。やはり近所の野良猫に追われたらしく、体中あちこちに引っかけキズを負っていた。が、魚だけに痛くないらしい。放っておこう。

親父は一言も喋らず、黙々と食っている。こっちはマッチョフォオに襲われて心にキズでも負ったのだろうか。これも放っておこう。「でね、その奥さんたら、ダンナさんに黙ってへそくりしてたのがバレたみたいなの」

「あら大変！ 見つからないところに隠さないといいけませんよねえ。岩の下とか砂の中とか」

……おい。

なんで幸子とイワシヤールが仲良く世間話してるんだ？

どうもいきさつから察するに、幸子の脳みその中では「イワシヤール＝ナーちゃんの母親」という図式が成立しているらしい。どうしてそうなったのかは、推測するだけ時間の無駄である。やっぱり放っておこう。

で、俺の傍にいる美女二人だが

『……葵さん』

「はい。なんですか、姫様？」

『お水をくださいませんか？』

「わかりましたよ、姫様」

コップに水を汲んで手渡ししてやる葵さん。以上は口パクの会話である。

ナーちゃんは人魚だけに、さすがにすき焼きなんぞは食わない。が、体が乾いてくるといけならしく、しきりと水ばかり飲んでいる。

「……またやりやがったな、母さん」

すき焼きを一口食った俺はぼそりと呟いた。

これはすき焼きなどではない。言ってみれば デザートだ。

言い忘れていたが、幸子は物の味というものがわからない生き物である。

前回のすき焼きは醤油そのもので塩辛くて話にならなかつたので苦情を述べたのだが、今回は砂糖を何kg入れたのだろう。……どうりで肉を一切れ食った親父が二度と箸をつけないワケだよ。

「葵さん、心の底から申し訳ない」

「……どうかしましたか？ 達郎様」

ちまちまと箸を動かしていた葵さんが不思議そうな顔をした。

海の世界の人ながら、彼女はナーちゃんと違って食事ができるらしい。

「いや……こんなこっぴどいゲテモノを食わしてしまって」とすると

「そんなことはありません。みんなで平和に食卓を囲むなんて、とっても素敵なことですわ。いつ以来かしら？」

「……？」

その言葉の意味を、葵さんはすぐに教えてくれた。

彼女は人魚と人間のハーフなのだという。

ずっとずっと前、幼かった頃に人間である父親と人魚である母親とに囲まれ、人間世界で幸せに暮らしていた時期があったのだった。

外見が人間と一緒にいるのは、父親のそれを受け継いだためであるらしい。美貌なのは当然のことだが人魚である母親譲りだろう。

ちよつと待てよ。

もしかして、その幸せは長くは続かなかつた、とかいう話の展開か……？

よくあるイヤな結末を想像した俺は、ちよつと憂鬱な気持ちになつた。

が、事も無げに葵さんは

「人間と人魚じゃ、寿命が違うのですよ。父が亡くなったので、母と共に海へ戻つたのです」

そーでしたか！

いやー、良かった！

ほんつとーに良かった！

気分を回復した俺は、気がつけばありえないすき焼きデザー
トを平らげていた。

幸子がカラになった鍋を見て

「あらま。達郎ったら、みんな食べちゃつたのねえ。私の味付けが良くなつていた証拠ね？」

違う！

断じて違う！

あんたの料理の腕前は何一つ良くなつちやいないぞ、幸子！

長く訳のわからない一日もようやく終わろうとしていた。

個別に布団を用意　する間もなく、ナーちゃんは俺のベッドの上ですやすやと寝息を立てている。

我が身のやり場に困つた俺が突っ立っていると

「……姫様のお傍と一緒に眠ってあげてくださいませんか？　達郎様」

葵さんにそんなことを頼まれた。

「え？ でも……」

困惑している俺に、葵さんは優しい微笑みを浮かべながら

「姫様はここしばらく、気持ちの休まる時がありませんでした。でも、達郎様と出会えてあんなに」ナーちゃんに視線を移した。「安らかに眠っておいでです。心の底から安心していらっしやるのですわ」

そんなものかなあ。

俺にはまだ、十分に理解できなかった。

海の世界で何が起こっているのか、何をそんなにナーちゃんが大変なのか。

そして 彼女が俺の何を頼りにそこまで安心しているのか。

またマツチヨ鯛か何かが襲ってくるんじゃないかという心配もあったが、葵さんが

「ずっと私がついていきますから、安心してお休みください。外にはイワシヤールが見張っていますし」

教えてくれた。

そうか。

さつきからヤツの姿が見えないと思っていたが、そういうことだったのか。口が悪いうえに果てしなく弱いヤツではあるが、それなりに真面目な一面もあるらしい。

またネコに襲われなければいいけれども。

ま、葵さんがついていてくれるというのは、イワシヤールが一万匹いるよりも安心だ。

俺はナーちゃんのために敷きかけた布団を完成させ

「じゃ、そのようにしますけど……葵さんも、これ使って休んでね？」

「はい。ありがとうございます、達郎様」

いい仲間をもってるな、ナーちゃんは。

他にもこういう連中がいるのだろうか。

だとすれば、会ってみるのも悪くないかも知れない。

イワシャルみたいに口も態度も悪いヤツは御免だが。
そんなことを考えつつ、俺はナーちゃんの隣で眠りに落ちかけた。
と。

「にゃーっ！ にゃーっ！」

「ぎいいえええ！ 助けてええ！」

案の定、ネコに追われて助けを求めるイワシャルの悲鳴が
闇をつんざいたのだった。

その5 邪魔なあいつ

「おはよう、海藤くん！」
翌朝。

登校した俺は校門の前で背後から声をかけられた。

振り返ると、すらりとした清楚な女子生徒が柔らかな笑みを浮かべている。

「お！ おはよう、春香ちゃん」
そう。

彼女こそが湊春香ちゃんである！

同じクラスのコで、発情した男子どもが群がってくるような美少女というワケではないが、ほんわかしたおっとり癒し系。男子にも女子にも一種の人気みたいなものがある。

「昨日、どこかへ出かけていたの？」

俺と並んで歩き出しながら、彼女はそんなことを訊いてきた。

「ああ、気分転換に朝から釣りにね。……なんかあったの？」

「うん。学祭の実行委員長やってた峰山さんっているでしょう？」

三年一組の。彼から、急だけど実行委員会のみんなで打ち上げしな
いかってメールが入ったのよ」

知らなかった。

先週学祭が終わったのだが、俺と春香ちゃんは実行委員をやって
いた。ぶっちゃけ、それがあつたがために俺は春香ちゃんとの距離
をぐぐーっと縮めることができたのだ。一緒に色々打ち合わせだの
作業だのやっているうちに何となく春香ちゃんが気になりだし、彼
女もまた、あらゆる場面で俺に好意を見せてくれた。

そういうワケで 春香ちゃん一人いればいいという大変身勝手
な発想に傾斜していた俺は、実行委員長などには切りすぎた爪ほど
も関心をもっていなかった。そいつが峰山という名前であることも、
実はたった今把握したに過ぎない。

まあ、その峰山たらいう三年生から俺に打ち上げの連絡がなかったのも当然だろう。

携帯の番号もメアドも交換してないのだから。

「……で？ 春香ちゃんはその、打ち上げには行ったの？」
何気なく尋ねたつもりだったが、春香ちゃんはふるふると首を横に振り

「水貴ちゃんにもどうする？ って訊かれたのよ。それで海藤クンが行くなら、って言ったたら水貴ちゃんから『ああ、カレなら釣りに行くなってハナシしてたよ。平岸君のお父さんからいい釣竿をもらえるから、とかって』聞いたのよね。だから、行かないことにしたの」
ガンッ

嬉しくて舞い上がってしまった俺が、水銀灯の柱に激突した音である。

「だっ、大丈夫？ 海藤クン！ すっごく痛そうな音が……」

「あ、ああ、ごめんごめん。いつの間に、こんなところに柱が立っただんどう……はは」

入学した時からあったんだよ。

しっかりしろ、俺！

それにしても 朝からこんな（＝電灯にぶつかるくらい）幸せな気分になるといふのはどうだろう。

女の子にしてみれば何気ないコトかも知れない。しかし、男というバカな生き物にとって、憧れの女の子に自分の存在を判断基準にしてもらえろということとは、この上なく幸福な事実であるといつて過言ではない。

俺の時代、到来か！？

タイミンクのいいことに、今週末はクラスの打ち上げが予定されている。

その時こそ、春香ちゃんに
完全に浮かれていると

「……あ、あれ？ 何だろう？ 人だかりだわ」

春香ちゃんの声にハツとなった俺。

行く手に目を向けると、校舎玄関の前に生徒達がわんさかたかっている。

「……?」

近くへ行つて騒ぎの根源を目にした俺は愕然とした。

「達郎どの！ 達郎どの！ この中に、達郎どのはおられるか！ 色魔でボンクラな達郎どの！ いたら返事をしてくだされよ！」

また貴様か、イワシヤール。

学校にはくるな、と、あれだけ言つたろーが！

ざわめいている生徒達、それに駆けつけてきた教師達。

そりゃーそうだろうね。

なんだって、手足の生えたでっかいイワシが日本語を喋っている
とあれば。

「ねーねー達郎くん、あれ、何かしら？ 着ぐるみ？ よくできて
るねー！ 今日ってなんかのイベントかしら？」

いかん。

春香ちゃん、興味津々だ。

あれはね、着ぐるみなんかぢやないんだよ。モノホンのイワシな
んですよ。昨夜ネコに襲われた引っかきキズがあちこちについて
るでしょ？ あれはどうやら、やむなく葵さんが助けたらしい。

「そ、そうだね……」

俺はそそくさとその場を離れようとした。

あんな魚のバケモノと知り合いだと思われてはたまらない。特に
春香ちゃんには。

が。

「あ、そこにいましたな、達郎どの！ 探しましたぞ！ いくらア
水面とはいえ、これだけ人間がいるから見つからないったらありや
しない。ぶつぶつ……」

かーっ！ 見つかった！

群集の視線が一斉に俺に向けられているのがわかる。

イワシャールがぺったぺったと歩き出すと、生徒達がさーっと道を空けた。

「いやいや、ナーちゃんがさびしがっておりますです。このガッコとやらにくだらない用事もあるのかとは思いますが、何より大事な姫様が、フヌケな達郎どのお呼びなのですから。すぐにお戻りになって」

ぶっん。

「………おい、イワシ」

「は？ 私の名前をもうお忘れですか。私には、イワシャールという美しい名前があるというのに。これだから、達郎どのはアンポ」

「………ハンペンにでもなりやがれ！」

キラーン！

一秒後、あーれーという声と共に、イワシャールは雲一つない青空の向こうへと消え去ったのだった。

もちろん、俺の全力シュートによってだが。

その6 天然素材

「ねえ、今の……何だったの？」

真昼に怪異を見た（現にそうなのだが）といった表情でそう尋ねてきた春香ちゃん。

俺は咄嗟に叫んだ。

「……さっ、さかな！」

見ればわかるよな。

春香ちゃんは固まっている。

朝の一件以来、もしかすると、お呼びでない連中がぞろぞろやってきて学校をメチャメチャにしてくれるのではないかという恐怖感が絶えず俺の胸中渦巻いていた。

が、幸いにしてそういう学園ファンタジー的展開は発生しないまま、俺は平和な月曜日を終えた。

「ただいま」

夕方、帰宅するや否や

「お帰りなさい、達郎様！」

麗しの葵さんが優しい笑顔で出迎えてくれた。

彼女に抱き抱えられているナーちゃん、俺を見るなり「がばっ」ときて

『お帰りなさいませ、達郎さま！ いらっしやらない間、とつてもさびしくて……』

その件はあのバカイワシから承っております。

正直、学校にいるうちはナーちゃん存在をふっと忘れかけていた。

が、こうして目の前でうるうるされると、ツライものがある。人魚つてのはここまで情の深い生き物なのかねえ？

ナーちゃんは俺を上目遣いに見て

『ご迷惑なのはわかってはいますが……明日から、私もお傍にいさせていただく訳にはまいりませんか?』

とんでもないことを言い出した!

それだけは勘弁してください。

心の底からお願い申し上げます、姫様!

すると、俺達の会話がわかるらしい葵さんが

「姫様。達郎様を困らせるものではありません。達郎様には達郎様のお努めというものがあるのですから。私やイワシヤールがいるではありませんか? 何かあれば、すぐに達郎様の元へ馳せ参じることもできますから」

と、宥めてくれた。さすがは葵さん、素敵だ!

『そうですよね……』

ナーちゃんはしゅんとしている。

ちよつと、可哀相かも。悪気はないからなあ。

そこへ、幸子が楽しそうにやってきた。

「あら達郎、お帰り。ふふーん、今日はあんとナーちゃんのために、いい物をゲットしたのよお!」

すごくイヤな予感がした。

この母親がこういう笑い方をする時には、大抵ろくなことが起らない。その昔、幸子が笑った直後に隣の家が火事になったこともある。

幸子はエプロンのポケットをこそごととさぐり、見覚えのない携帯電話を取り出した。

それって

「ふふつ、達郎とナーちゃんの赤い糸よお! これさえあれば、いつでもどこでもラブラブでしょお!」

いい年こいて身をよじるな。気持ち悪い。

大体、ラブラブって単語、あんたの年代が使うとブキミなんだよ! ってか、人間以外に携帯電話を買って与えたのは人類であんたが

初めてだ。しかもそれ、ワンセグの最新機種じゃねえかよ。俺のヤツなんか赤外線すらついてないのに。

「あ、あのさ……通話料とかどうすんだよ？ 携帯一台新規契約したら、毎月その分だけ金がかかるのに」

「大丈夫だって！ 達郎の預金口座から引き落としだから、家計には何の問題もなし！」

大問題だろーが！

勝手に契約しておいて、自分の子供に払わせるバカ親がいるかわかつてるのか、幸子！

それからすったもんだの挙げ句、結局その真新しい携帯電話はナーちゃんに託されてしまった。もちろん、月々の通話料は俺負担である。

『達郎さま？ これ、どのように使うのでしょうか？』

何だかよくわからないながらも、嬉しそうなナーちゃん。

新しいおもちゃを買ってもらった子供のように、さわったりすかしたりしている。

念のため葵さんに訊いたが、やはり海の世界に携帯電話はないとのこと。……当たり前か。

俺は内心、ウソの番号でも登録しておこうかと思っただが……やめておいた。それはさすがに人間としてできる行為じゃあない。

と、いう以前に

「達郎の番号とナーちゃんの番号、ラブラブプランだかっていうのにしておいたわよ？ いくら通話してもメールしても、無料なんだから。今の時代の恋愛は便利ねえ」

やっていいことと悪いことの区別がつかんのか、幸子の頭は。

しかもそれ「カップルプラン」だ！

ま、とつても頼りになる葵さんがついてのことだし、なんとかなるだろう。

と、思っただのが大間違いだった。

次の日。

一時間目の授業あたりから、俺は異変に気が付いていた。ズボンのポケットに入れている携帯が鳴りっぱなし。

鳴っては切れ、鳴っては切れ、それがもう何度続いていることだろう。ほとんどストーカーからの電話と変わりが無い。されたことはないけど。

三度目くらいから、発信先が誰なのか想像はついていた。が、授業中に携帯を見ただけでも怒られるので、俺はじっと我慢していた。

結局電話が鳴り止まないまま、一時間目は終わった。

休み時間に入り、そつと着信履歴を見てみると……

『8:55 ナーちゃん』

『8:56 ナーちゃん』

『8:57 ナーちゃん』

面倒くさいので以下省略。これが延々と続くワケだ。

一分刻みですか。電池の残量、すでに残りワンメートルになっている。

ああ……使い方、教えるんじゃないか……。

せめてメールだけにしておけば……。いや、彼女は日本語がわからない。

などとげんなりしていると、またも携帯が鳴り始めましたよ！ここで出てやった方がいいのだろうか？

さにあらず、出たが最後、きつと延々と切らせてくれないに違いない……。

「おい海藤、ケータイが鳴ってるぞ？ 出ないのか？」

背後から声をかけてきたヤツがいる。

高波史郎というクラスメイト。こいつとは中学校からの付き合いで、仲がいい。

高校球児な彼はセンターで四番。俺とは違ってさわやか系イケメ

ン男だから、女子からモテることこの上ない。春香ちゃんは何とも思わないのだろうか、ちょっと気になる。

「あ、うん、いいんだ。迷惑電話みたいだし……」

そう適当にウソを言ったのだが、史郎は画面をひよいと覗き込み「迷惑電話？ でもこれ、電話帳に登録されている名前じゃないのか？ ナーちゃん、ってなっているぞ？ 知り合いじゃないのか？」

あーうー。

ちょこつとKYな史郎は、時々そういう「言わんでもいい」ことを言ってしまう。天然みたいなものだから、苦情の言いようもないのだが。

「あ、そ、そうか？ ナーちゃんからか。そーかそーか……」

この時点で俺、かなり苦しくなっていた。

なおも携帯は狂ったように鳴りまくっている。

史郎は妙な想像と気遣いをしたらしく

「ナーちゃんって知り合いなんだろう？ 出てやれよ。長引くようなら次の授業、俺が先生になんとか上手く誤魔化しておいてやるし」

大声で言いやがった。

「……ナーちゃん？」

……

この声は……！

恐る恐る振り返ると あってはならないことだが、そこには春

香ちゃんがいた。

彼女は無表情のまま、机の上で暴れ続けている俺の携帯を「じつと」見つめている。

そして

「……出ないの？ 何度も鳴ってるケド？」

うわー！

ぎゃー！

ぎいえええ！

声に感情がこもってない！

だよなあ……。ナーちゃんなんて、フツーに聞いたら女の子の名前だっと思うよな。ってか、本当に女の子なんですかね。

ついでに、一度きりならまだしも、何度も鳴らされているのを見れば、さすがに怪しむだろう。

俺はなす術を知らないまま、ただ固まっているよりなかった。

そのうち、とうとう電池が切れたらしく、携帯は沈黙した。

「お？ 電池、切れちまったな。後で俺の充電器、貸してやるよ」
涙が出るくらい心温まる言葉を残し、史郎は去っていった。

「……………」

あとには、皮膚呼吸が出来ないくらいに気まずい空気に包み込まれている俺と、それを放っている春香ちゃんが残されている。

キンコーンカーン

二時間目の始まりを告げる、無情のチャイムが鳴り響いた。

すると、春香ちゃんは「はあっ」と大きく一つ溜息をつき

「高波クンに充電器貸してもらってから、掛けなおしてあげたら？
そのコ、きつと電話を待ってるわよ？」

つかつかと、行ってしまった。

わかってます！

そんなことはわかってます！

十分すぎるくらいにわかってますよ！

わかってますけど……………わかってますけど……………。

そういうハナシじゃないでしょう？ ねえ？

ここ二ヶ月間の、春香ちゃんとお近づきになるためのあの苦労は
一体なんだったんだ！ 苦労の甲斐あって、せっかく、せっかく、
あと一息というところまでもってこることができたというのに……………
ああ……………。

そんなのはお前の思い込みかもしれない？ いや、ほっとけ！
俺には確信があっただんだ！

…………… あっただんですけどね。何もかも、ぶち壊しっすよ。

完全に打ちのめされた、俺。

「おい、海藤！ ケータイしまえよ。授業は始まってんだぞ」
教師が入ってきたことすら、気付かなかった。
もう、いいんです。

俺は本日、破滅しました。

どうなったっていいんです……。

何もかも失ってしまったような気がして、当然、授業なんか耳に
一言も入らなかった。

入ると思えなかったし。

そう。

次の三時間目の途中までは。

その7 エビのかき揚げ

「と、ここでえ、さっきのXを代入してやるわけえ。するとお、こうなつてああなつて答えがであます」

三時間目、数学。

春香ちゃんに嫌われた俺の出力、ゼロパーセントで推移。

むしろマイナス。なおも低下中。

次第に「逆ギレモード」移行しちゃってます。

あー！ もー！ チクショー！

こうなつたのは一体、誰のせいなんだ！？ 誰の！？

史郎か？ ……いやいや、ヤツは天然だ。責めるワケにはいかな
い。

ナーちゃん？ ……違うよな。ナーちゃんは悪くないよ。ケータ
イなんて、何がなんだかわかってないんだし。

葵さん？ ……無条件で相違。

ん！ イワシヤールか！？ そうだ、イワシヤールが全部……悪
くないよな。

残念ながら、今回の大惨事にヤツは塵ほども関係ない。

俺だな。

俺が悪いのさ。

俺が結局、幸子の暴走をとめら……そうか！ 幸子のせいだ！

あのバカ親が勝手に妄想して勝手にケータイを仕入れてきた挙げ
句、勝手に俺の口座から金を抜き取ったのがそもその始まりだよ。
そーかそーか。

幸子め！ ぜえーったいに、許さん！ こうなつたからには、あ
のバカ親に

「おーい！ おーい！ かいどおー！ 聞こえているかー！」
はっ！

教師が呼ぶ声で、俺は現実に戻ってきた。

怒りと悲しみが高じた余り、精神世界へとジャンプしてしまっていたらしい。

「授業中にヘンなコト考えるなよお。ちよおつとお、この問題い、やってみろお」

くすくす笑う声がした。

はあ？ 聞いてねえよ。

あなたの授業、これっぽっちも聞いてませんでしたから！ 文句あるか？ へへーん！

などと抵抗できない小心者の俺。あえなく立ち往生。

「おーい、かいどお？ どおしたあ？ ん？ 前にでてこおい」
勘弁してくれ。

失恋したこの俺に、トドメを刺すつもりかよ。

ふと見れば、三つ隣の席にいる春香ちゃんの眼差しがドライアイスのように冷たい。

いや……これは哀れみか？

浮気なクセに数学の問題一つ解けない、このふがいない俺に対する哀れみなのか？ あああ……。どーせ俺はイワシヤールが言う通り、ブサイクでどうしようもない人間の端くれでタダの冴えない人間かつ貧乏くさくて器が小さそうでしょぼくて非イケメンですよ！俺は再び、現実をシカトして精神世界の中へ逃げ込もうと試みていたらしい。

しかし、現実とは時に、想像の世界すら凌駕してしまうようで「うわあああつ！ な、なんだね、チミ達は！」

数学教師の悲鳴と生徒達のどよめく声にハツとした俺。

見れば、教室のあちこちに エビがいた。

エビ。海老のことね。それ以外にないか。

奴らは例のイワシとか鯛同様「によっ」と腕や脚を生やしていた。色は赤というより、透き通ったピンク色だろうか。この間のマツチヨ鯛とは違って、サイズは大きくない。せいぜい後ろ足で立ち上がったカピバラくらいの……この例えはどうだろう。

昨晚、夕食にかき揚げを食っていた俺は、奴らが「桜エビ」だと直感した。

だってねえ。

数が多いんだもの。

十匹や二十匹ではない。ざっと見だが、もつという。

そういう桜エビ一味が教卓や生徒の机の上、床、とにかくいたるところにうようよいて、時々「ぴっ」とか跳ねるのだ。そこは、エビである。

教卓の上に乗っかっている一匹が「びしっ」と数学教師を指し

「おい、人間たちよ！ よーく聞くエビ！」声が甲高くて早口。「ブルーフィッシュの連中に協力している者がいるエビね！？ どうか教えないと、漏れなくこのツノで、突つつくエビよ！ ちなみに俺は桜エビA！」

「俺は桜エビB！」

「あては桜エビA1」

「同じくB1！」……以下、A2、B2と続く。

そこで点呼をするな、点呼を。

しかもなんでBで終わる？ CとかDはどうした！？ 二進数ですか？

ついでにエビAとかエビBって、言いづらいし。

もう一つツツこんでおけば 語尾に「エビ」を付けるのはどうだろう？

「ちっ、チミ達はなんだね！？ 授業中だぞお！ 席に着きなさい

！」

いやいやセンサー、教室にこれだけの椅子も机も入りませんから。つてか、動転したあまり言うことがそれですか。

「なにイ！？ 魚人に向かって、生意気な人間エビね！ やっ

ておしまい！」

「エビっ！」

「エビっ！」

号令一過、何匹もの桜エビが数学教師目掛けて飛び掛っていく。

「うわーっ！ うわーっ！ × 干」

悲鳴を上げてうずくまる数学教師を、寄ってたかつてブスツではなく、ちくちくとやっっている桜エビ軍団。伊勢じゃなかったのが不幸中の幸いだろすが、あれはあれで微妙な痛さに違いはない。

こういう事態に免疫のある俺を除き、さすがに教室中は大混乱。

数学の時間は見事に潰されていた。不良に殴りこまれたみたいだ。

「きゃーっ！」

「わー！」

みんな廊下に逃げようとするのだが、何せ桜エビの数がハンパない。

逃げる男子生徒に飛びついてちくちくやるヤツ、女子の髪やスカートを引っ張るヤツ、中にはスカートの中に潜りこもうとする不届き者がいる。

すでに場慣れしている俺はテキストにあしらっていたが、ふと見れば

「いやーっ！ いやーっ！ あっちへ行って！」

春香ちゃんが何匹もの桜エビに取り囲まれている！

桜エビ小隊は春香ちゃんをちくちくやったり、髪やスカートをつ張ったり、傍若無人の振る舞いを仕掛けているではないか！ そのうち、頭に乗っかって「ぼかぼか」「げしげしっ」とやりだした。殴る蹴るね。

ゆ、許つさあん！

他の女子なんかどうでも……よくはないが、春香ちゃんだけは別だ！

俺の怒りがメーターを振り切った。

「おい！ そのエビ野郎！ ちよーつと待ちやがれ！」

春香ちゃんをいじめていた桜エビ小隊の動きがぴたりと止まった。俺はビシッと指さし「ブルーフィッシュの姫様とメアド交換してんのは何を隠そう、この俺だ！ 何か文句でもあんのか！？」

ついでに番号もな。
すると！

今までピンク色だった桜エビ小隊の背中が、見る見る赤く染まっ
ていく。

「お前ビかーっ！ ブルーフィッシュと手を組んだ人間は！」

「レッドバックに楯突く小賢しい人間め！」

どうやら、桜エビ小隊も腹を立てたらしい。だから赤くなったん
だな？

やっぱりレッドバック帝国の一味だった。何だかそんな予想はし
ていたけど。

連中、春香ちゃんから飛び降りて一度フォーメーションを整える
と（その理由は全然わからない）、一齐に俺の方へ跳ねてきた。

すでに腹は括っている。

相手の数は多いが、やむを得ない。

こうなりや力を使い果たすまでケンカするまでだ。春香ちゃんに
カツコの一つくらい、見てもらいたいしな。

「エビ必殺！ ぺちつと跳ねて水を掛けるこうげ」

「達郎様っ！」

桜エビの必殺技お約束掛け声を打ち消すように、どこからともな
く聞こえてきた、俺を呼ぶ声。

一瞬、その声の主を思い出せなかった。

タンツタンツ タタタタンツ

断続的に乾いた銃声が轟き

「エビイーツ！」

「エ、エビツ……」

宙を舞っていた桜エビ達が、ぼてぼてと撃ち落されていた。

「……これは！？」

「達郎様！ ご無事ですか！」

教室の入り口を見やると、そこには二丁拳銃を構えた葵さんの姿
があった。

彼女に背後から抱きつくようにして、ナーちゃんもいる。

「葵さん？ どうしてここへ？」

葵さんはそこら中にいる桜エビ軍団に向けて拳銃を乱射して一掃すると

「南氷洋にいる鯨太がこつそり連絡をくれたのです。アーマー・ユニオンの連中が、どうやらレッドバックの下にいたようだ。鯨太はブルーフィッシュとは別の勢力なのですが、自分の食事に困る事態になったとみえて」真剣だった葵さんに、ようやく笑みがこぼれた。「私達に協力しようと思ったようなのです」

鯨太？

ああ、クジラのことね。

クジラのエサはプランクトン……だけじゃなくて、オキアミも食うのか。オキアミはエビだ。海の勢力抗争は食糧問題も絡んでいるらしい。

で、アーマーとは甲殻類か。

この桜エビ一味がそうだな。

って、なにげに海の抗争にずるずると巻き込まれていつてませんか、俺。

「達郎くん？ この人たちは……？」

桜エビの攻撃から解放された春香ちゃんが近づいてきた。

よ、良かった……！ 俺、まだ敬遠されてなかったんだ！

「ああ、この二人は」

言いかけたその時。

春香ちゃんに向かって横から一匹の桜エビが飛びついてきたのを、俺は見逃さなかった。

忘れもしない。

ヤツはさつき、どさくさに紛れて春香ちゃんのスカートをめくっていた野郎だ。触覚が一本、短くなっていたからわかったんだけど。

「……春香ちゃんっ！」

愛が奇跡を呼んでいた。

とつさに彼女をずいっと抱き寄せるや、イワシも吹っ飛ぶシュー
トをキメた俺。

蹴っ飛ばされた桜エビは、そのまま教室の壁にめり込み

「エビッ！ がくっ……」

春香ちゃんのスカートをめくったのが運の尽きだったな、エビ野
郎。

「た、達郎くん……？」

俺の腕の中で、びっくりしている春香ちゃん。

「大丈夫か？ 咄嗟だったから……ゴメン」

「……うん、大丈夫だよ。気にしないで」

お？ お？ おおっ？

これはもしかして……すごくいいカンジじゃねえ？

さっきのあれは、水に流してくれそ

『達郎さまっ！ とつても素敵でございました！』

不覚にも、俺は背後の存在を（ほぼ完全に）忘れていた。

いつの間にか、葵さんに背負われていたはずのナーちゃんが俺の

首に「しっかり！」と抱きつき 例によって、額&額コミュニケーション

ーションをやってきたものである。

春香ちゃんの目の前、もろ視界エリアで、だ。

最悪。

その8 エピゼン

俺は生涯、忘れることはないだろう。

コンマ何秒の「は？」のあと、一瞬にして豹変した春香ちゃんの顔を――！

この世で一番、見てはならないものを見てしまった！

誰か、できることなら俺を今すぐ埋めてください。

春香ちゃんのいない、遠くのお星様まで連れて行ってくれないです。

いや、なんなら塵あくたとなって春香ちゃんに踏まれたい……。踏んで踏んで踏みまくって踏みにじられようとも、それで彼女の気が済むのなら、俺は何も考えずに踏んでもらいます。

『 達郎さま？ どうかなさいましたか？ 』

脳天にエコーするナーちゃんの声。

どうして、どうしてここに来るんだよナーちゃん……来てはいけないって言ったのに！

おかげで俺はもう、ゴミバケツのフタ未満な存在になっちまったよ。

たった今から春香ちゃんは、俺を「つまむのもウザいくらいに汚らしいヤツ」としかみないだろうさ。げんに「つつっ、つつっ」って、俺からメートル以上離れていっちゃったし。どーしてくれんだよーう。

『 達郎さま？ もしかして、私に来てしまったので、それで、とてもしご迷惑を 』

何も言わない俺が不安になったのか？

ナーちゃん、だんだん悲しそうになっていく。

あーうー。あうあう。

違うんです。

そうじゃないんです。

ええ、そうじゃないんです。

ナーちゃんを釣り上げ、連れ帰ったのはこの私、海藤達郎でございます。

ナーちゃんのせいじゃない。

何を八つ当たりしているんでしょうね、俺は。

春香ちゃんに嫌われたことはもちろん悲しいが、それをナーちゃんのせいにしてしている自分が一番悲しいかもしれない。

いや、さ。

今まで彼女なんかろくにできなかったし、ようやく春香ちゃんとお近づきになれて嬉しかったんだよね。ハンバーガー屋に入って「逆スマイル」余裕でかませるくらいに。無難に変態と思われませんでしたよ、店の女の子にさ。

「 達郎様！ お下がりにください！」

葵さん、ずっと前になるクイツクトリガー。

タタタタタタタと小気味よい銃声とともに、撃ち落されていく桜エビ達。

俺が心の旅をしている間に、全エビ野郎から標的にされていたようだ。仲間がボコられて我慢がなくなっただろう。

さすがはブルーフィッシュ共和国護衛隊長、葵さん。一発の逸れ弾もなくエビ達を沈黙させていく。……そういえば、その銃はどういう仕組みなんだろう？ 撃たれた桜エビは討ち死しているワケではなさそうである。床にへばって「エー」とか「ビー」とか呻いている。

タタタタツ、タタンツと銃声が止み 葵さんが両腕をクロスさせて銃口を空に向けた。

「……ほぼ、終わりましたね。アーマー族とはいえ、桜エビ一味。オーシャンイーグルの前では裸も同然です」

俺の方を向いてにっこりと微笑んだ。

つ、強い！ しかも美しい！ セクシー！

俺、葵さんみたいな人がこの ああ、いえいえ、ウソです。何

でもありません。

クラスの間中、ぼかんとしてこっちを見ている。

人魚の女の子ととびきりの美女が乱入してきたとあれば、ね。無理もないか。

ところがだ。

ガシャーン！ と窓ガラスが派手に割れ

「調子に乗るなよ、人魚くずれの女スナイパーが！」

外から新手が飛び込んできた。

鯛だった。

マツチヨフオーのどれかかと思ったが、違った。奴らよりもさらに腕と脚がムキムキで、筋肉に「てらり」とした光沢がある。ローションを塗っているのかどうかは定かではない。ただ、マツチヨフオーよりもウロコに輝きがあって目が澄んでいる。

つまり 活きがいい。刺身にしなければもつたないほどに。

ヤツはびしっとポーズをキめ、

「俺が何者なのか、お前ら知りたいんだろ？ 教えてやるよ！」

ラップのようなノリで独りで勝手に問いかけ、独りで勝手に喋っている。

「俺はさつき、興津からやってきた『THE・鯛・チヨ』さ！」

チヨはロングじゃない、スパーな方だ！ そのほうが、この俺様にはふさわしいからな！ だろ！？」

しーん。

教室中、沈黙。

ツッコミどころが多すぎる。

そのまま、十秒が経過した。

だんだん可哀相に思えてきた頃、

「あっはっは」

突然笑い出したバカがいる！

よりによって、史郎のヤツだった！

「そーかそーか！ 鯛・チヨで隊長か！ そりゃ気付かなかった

！ あっはっは ー

何故そこで笑う？

こいつのツボがまったくわからん……。

すると、鯛・チヨーは

「なにをっ！ 笑ったな！？ よくも笑ったな！？ よくもよくも、この俺様の美しすぎる筋肉を笑ってくれたな！？」

……ええと。

とりあえず、殴っておいたほうがいいのだろうか。

史郎もこの鯛野郎も、天然だけに手に負えない。……鯛野郎が天然？ 興津からきたってことは天然ものなんだろうさ、きつと。

「この俺様の見事な背ビレを笑った奴は、誰であろうと許さんからそう思え！」

誰も笑ってねえよ。

「そこにいるナタルシアに女スナイパーもろとも海のもずくにしてやるぞ、人間ども！」

さぞかし栄養満点でしょうねえ。やっぱり酔でいただくのがいいよ。

って、そこ「藻屑」だよ！

いい加減に付き合いきれなくなってきた時だった。

「……悪しき者達に魂を売り渡したレッドバックの下っ端さん？ そろそろ、いいかしら？」

ジャキッ

葵さんがオーシャンイーグルを構えた。

が、鯛・チヨーはちゅちゅと人差し指を振り

「俺様にそういうモノを向けてもイミないぜ？」 続けて「そういう一言、心にシミないぜ？」

ラップのつもりらしい。

岩塩で固めて焼いてやりたくなかったが、その前に葵さんが無言でトリガーを引いてくれた。

が、しかし！

「エビーン！」

「エービー！」

「AB！」

床中にぶつ倒れていた桜エビ一味がいきなり一斉に飛び跳ね、鯛・チヨ目掛け宙を飛んでいった。

奴らはこちらに背中を向け、皆で積み重なって鯛・チヨを庇うように壁をつくったのである。

タタタタタタタタタタタタタン

葵さんはリズムカルなクイックトリガーで、オーシャンイーグルを乱射した。

ところが、放たれた銃弾(?)は桜エビ一味が寄り集まって作った壁にことごとく弾かれ、一発たりとも鯛・チヨには届かなかった。

「があつはつはつ！ みたか！ これが『エビせん』だ！ お前の射撃など、効かんわ！」

高笑いしている鯛・チヨ。

言われてみればエビせんか。いや、言われなけりゃわからんな。しかし、これはまずいぞ。

無敵だと思われた葵さんの射撃が通じないのだから。

「ふん。女スナイパーさえ封じれば、コワイ物などないわ」

鯛・チヨがぱちんと指を鳴らした。すると

「うおーっ」

「うおーっ！」

どこからともなくあの「マッチョフォー」が現れた！

奴らは今日に限って素早い動きを見せ、瞬時に「今この場にいる美女ベスト四名」の咽喉元に、あの錆びた青龍刀を突きつけた。ちなみにその四名とはいうまでもなく「葵さん」、あとは「金井洋子」

「白根あみ」そして「貝田理美」である。

それよりもこれはどーいうことだ!?

なんで春香ちゃんが入っていないんだ!

納得いかねーぞ！ 責任者呼べ！

「おい、ナタルシア」

鯛・チヨーがエビせんの影からちょこつと顔を出した。

「まずは大人しく、我々のアジトへ来てもらおうか。抵抗すれば、その女どもの命はもらっ」

「……」

いつになく真剣な表情で黙っているナーちゃん。

「どうするんだ、おい？ 俺様の言っていることがわかるだろ、ああ？」

ガサツ

葵さんの咽喉元の青龍刀が鳴った。

マツチヨフオーの一匹が脅しのつもりでやったのだが、錆びすぎている情けない音しか出なかったのだ。

「……姫様、私が代わりにまいります。あのような者の言いなりになつてはいけません」

おお！ 毅然とした葵さん、素敵だ！ 俺が身代わりになつてもいいです！

「黙ってる！ 女スナイパー！」 鯛・チヨーは怒鳴ってから「……早くしろ、ナタルシア」

ナーちゃんは覚悟を決めたように顎を引いた。

そして口パクで鯛・チヨーに何かを伝えたあと、俺と額をくっつけて

『申し訳ございません、達郎さま。このような、取るに足らない海の世界の争いに、皆さんを巻き込んでしまつて……』

『いや……そんなことはないよ。それより、どうするんだ？』

ナーちゃんの眼差しが深くなった。

『私を、レッドバックに引き渡してください。そうすれば、また達郎さまも普通の生活に戻ることができるでしょう』

『……』

『そもそも、私がいけなかつたのです。素敵な人間の男性に出会え

たばかりに、一緒にいたいと思ってしまっ……。達郎さまには、心に思う方がいらっしやっただのに』
どき。

きちんと話してないのに、なんでわかったんだ？

『さあ、達郎さま』優しく、そして気高く微笑んだナーちゃん。『私を、あの者に引き渡してください。お願いします！』

お願いされても、な。

「はい、わかりました」ってのは、ちょおーっと、どうかと思うぜ？
なんとか、方法はないのだろうか。

一瞬、天井を仰いだ俺。

と、その時だった。

「ちよつとお！ きたない錆びた鉄の塊、くつつけないでよね！
制服が汚れるじゃない！」

そう叫んだ女がいる。

人質の一人、白根あみ。

彼女は露骨にイヤそうな顔でひょいと青龍刀をつまみ、自分からぐいーっと遠ざけてしまった。

「お、おいつ！ 逆らうのか！ うおっ！」

思わぬ抵抗をくらい、マッチョフォーAは慌てたらしい。青龍刀を振り上げた。

が、次の瞬間、白根あみはぱつと離れたかと思いきや「げしっ！」とマッチョフォーAにタメ蹴りをかましていた。

「だいたいさあ、生ぐせーんだよ、てめー！ 気安く寄ってくんない！
バーカ！」

こわー！

可愛いカオして、言う言う！

キレた白根あみ、別名「般若」。

こうなれば、貝田理美も金井洋子も黙っているワケがない。

「どけエ！ オラ！」

「てめエ！ 誰に断って触ってんだよ！」

あとはもう、語るに忍びない。
形勢逆転。

哀れなマツチヨフォー達は、寄ってたかってボコられたのだった。

ちなみに。

「ちっ！ 今日のところは見落としてやる！ 次回はカミングスー
ンだからな！」

わかったような全くわからない台詞を放って、その場から脱走し
ようとした鯛・チヨー。

俺は追いかけたものかどうか、一瞬迷ってしまった。
その時。

「……逃げるのですか？ いつ見てもあなたは卑怯ですね！」

そう叫びながら天井から降ってきたヤツがいる。

青くひよる長いボディ。

えらくひ弱な腕、脚。

表情のない、でかい顔兼ヘッド。

もったいぶるだけの価値はないので正体をあかすが、バカイワシ、
じやなかつたイワシヤールである！

ヤツは身の危険を顧みず、果敢にも鯛・チヨーを追い という
ことはまったくなく

「達郎どの！ 姫様をこのような危険な目に遭わせるとは、救いが
たいカスですね！」

聖なるポセイドンのヤリを振り回しながら、いきなりグチグチと
俺を罵り始めた。

「そもそも、あなたのような意気地なしで頼りなくて女にモテない
ような人間に、姫様をお守りする役目などはどだいあり得なかった
のです！ だから、私は最初に言ったではありませんか。こんなグ
ズに一体、何ができるのか、と」

……ほう。

よくもまあ、毎回毎回違った悪口雑言をプレゼントしてくれるものだ。

特殊スキルであると認めてやってもいいかもしれない。

「……イワシャルさん」

「お？ ようやく、まともにも私の名前が言えましたか。達郎どのにもナマコ程度の知恵が備わっていたのですねえ」

俺は無言のまま、お姫様だっこしていたナーちゃんを葵さんに預けた。

そうして大きく首をひねると、ゴキゴキといい音がした。

「あんたさつき……天井にへばりついていたよな？」

そう、俺は見逃さなかった。

ナーちゃんが「私を差し出してください」と必死に哀願している最中、彼女を助ける素振りすらみせず、ただゴキブリのように無表情で天井に貼り付いていた大きなイワシを。

「なっ！ 何を言うのですか！ 私は……そう！ ほら、スキを見て、鯛のヤツに一泡吹かせてやろうと思って」

イワシャルは動揺しているらしい。

その証拠に、両手を振りながらずりずりと後退りしていく。

「……だったら一緒に吹いてこい！」

キラーン！

「あーれー」

「エービー」

「俺様としたことが失・鯛（失態、と言いたいらしい）」

窓から逃げようとしたが怖くて飛び降りるのを躊躇していた鯛・チヨー、そして分解に手間取っていたエビせんを巻き添えに、イワシャルは遠く空の彼方へと消えていったのだった。

その9 嫌わないで下さい

『とっても楽しいところですね、ガッコーというのは。みなさん、とつてもいい方ばかりで』

『あー、まー……ね』

夕方。

俺は帰り道をだらだらと歩いている。

例によつてナーちゃんをお姫様だっこ。隣には葵さん。

横顔が夕陽に染まったナーちゃん、ここにこしている。

そりゃそうだろう。

思わぬ成り行きでエビと鯛の調理、じゃなかつた撃退に成功した後のことである。

「えーっ!? なに、このコ!? かわいー!」

「なになにーっ? 海藤君の彼女なの!? うっそー! ありえなーい!」

……悪かつたな。どーせ俺はありえませんか。

つてか、彼女じゃねーし!

彼女じゃ、彼女じゃ……彼女じゃ……彼女じゃ……。ナーちゃんの中ではダンナになる勢いではあるのだけれども。

むっきーっ!!

やっぱ、ナーちゃんの愛をスライディングキャッチすべきなの、俺!? ひとり外野手になって、ナーちゃんが放つ愛を右中間だろうとレフト線だろうと、受け止めてやる運命……?」

男には来る愛を拒む権利はないのかーっ!

かき揚げ(鯛+桜エビ+イワシ)が空へと消えたあと、さすがにナーちゃんはちよつと沈んでいた。さびしそくにぼんやりとしている。

俺の気持ちがどこにあるか、気付いてしまったから。春香ちゃんを諦められないんだけど、かといってナーちゃんも可

哀相で仕方がない。

浮気症っていうの？ こういうの？

あーもー！ しらねーよ！ しらん、しらん！

が、俺と春香ちゃんとナーちゃん、三人の気持ちのトライアング
ルなんか知らない女子達。

ナーちゃんが人魚であることに気がついたからさあ大変！

殺到。

女の子でも女の子に関心もつのか。

男は逆だな。男が男に興味なんか（普通なら）もったりしないよ。
汗臭い生き物だしね。寄ってたかると環境によろしくない。

まだ数学の時間、残っているのだが、クラス全員アウトオブ眼中。
なぜなら、男どもは男どもでこれまた、セクシーな葵さんに熱中
しているのだ。

メスの蚊を発見して欲情するオスの蚊である。

「どこに住んでいるの？」

「今は姫様のお傍におります」巧みにかわした！

「あの、あのっ、その……メアドなんか、お持ちでは……」

んなもの持つてるかよ、ばか者！

「メアド……ですか？」

質問された葵さん、百分の一秒くらいのスマイルを披露したのち
「私は姫様と達郎様をお守りする役目ですので、そういうものは……」

途端に、野郎どもの「ケダモノ」目線が一斉に俺に向けられ

「海藤……！ お前、女ツ気がないと思ったら、陰でやることやっ
てたのか！」

「この、淫乱ドスケベマニアックムツツリ変質者め！」
なにおっ！

国語数理科社会じゃなくて「男女のコト」を学ぶために通学し
てきているお前らなんか言われたくないわ！ ……年頃の男女は
まあ、仕方がないけれども。

「まあまあお前ら、そう言うなよ」

そこへ割って入ったのは、にこにこした史郎だった。

「海藤はなあ、ケータイの電池が切れちまったんだよ。だから、許してやれよ」

あ？

それ……フォローなの？

俺自身に対してじゃなくて、ケータイに対するフォローですよね？

「むー！ 納得はいかんが、高波が言うならやむを得まい！」

「早く充電しろ！ この色魔め！」

色魔の群れに色魔呼ばわりされるのは心外だが、途端に野郎どもは沈静化。

ってか、なぜそこで納得する！？

天然系イケメンの存在感というものは、女子だけじゃなくて男子にも効果抜群らしい。

そのメカニズムは全くわからないが、ヤツが男からも女からも常に人気があるのは確かだった。

「達郎さま……」

机の上でサーカスの見世物化していたナーちゃんが、急に俺にしがみついていた。

「みなさん、どうなさったのでしょうか？ 突然、私のところへ集まってきたりして……」

人間の言葉がわからないナーちゃん。

いきなり取り囲まれて注目され、心底困惑している。

「それはね」

俺は説明してやった。

若い人間の女子というものは、自分よりも優れたモノに対して憧れを抱く習性があり、可愛くて美人のナーちゃんを一目見てみんな興奮してしまったのだ、と。

ウソは言っていないと思うけど？

現実にナーちゃんは、金井よりも白根よりも貝田よりも美人で可

愛くて素直でおっとりで癒し系でセクシーで、間違いなく「校内・お嫁さんにしたい女子コンテスト」ぶっちぎりナンバーワンになるだろう。校内つてのはどうだろう？

ただ、俺の表現が直球過ぎた。

途端に彼女は「きゅん！」という顔で

『そんな、達郎さま……！ 私をそのように褒めていただいてはいけません。そんな風に言っていたら私、恥かしくてどのようにすればよいのか……』

俺の胸に顔をうずめてもじもじやりだした！

すかさず黄色い歓声が爆発。

「やっだー海藤くん！ 今、なんか口説いたんでしょー！？」

「キミはボクのすべてだ！ キミがいなかったら、この世に愛は誕生しなかっただろう！ とかなんとか、言ったんじゃないのお

！？」

「やーっ！ カノジヨ、恥かしがってんじゃん！ 早くなんとか言ってあげなよあ！ ガッコー終わったら、ウエディングドレスをみにいこうか？ なーんて」

ちがーっ！ ちやぶ台ひっくり返すぞコノヤロー！

あれば本当にぶちかましていたに違いない。

……うちの幸子といい、女つてのは一体なんなんだ！

どーしてそう、他人の恋とか愛が大好物なんだよ！ ごはん三杯食えるのか！？

女子ども、勝手に妄想をおっぴろげて勝手に盛り上がってやがる。好きにしる。

俺は……そう！ あくまでも、直接死の宣告を突きつけられるまでは、なんとしても春香ちゃんにこの胸の純愛を はっ！？

そ、そーだった！

人魚という生き物はどこまでも情が深く、疑うことを知らない生き物。

俺が優しい目を（当人にいささかもそのつもりはなかったが）し

ただで、胸キュンになるくらいだし。

と、いうことは……俺のさっきの解説は、ナーちゃんにとっては

『達郎さま……。私は嬉しゅうございます。人魚の私を、そのように思ってくださいなんて……』

その美しい瞳をうるうるとさせて、熱っぽく俺を見つめているナーちゃん。

『ナタルシアはずっと、達郎さまのお傍についてまいります……！』

ノーン！！

あとはもう、後の祭り。

キヤーキヤー騒がれている四面楚歌の俺、そしてうれしはずかしでごろにゃんしているナーちゃん。（きわめて遺憾だが）納得いかなそうに憤慨している野郎ども。

終わった。

なにもかも……。

俺と春香ちゃんの間には「永遠」という名のシャッターが下ろされたよ。

決して上がることはない、冷たい鋼鉄の……。

ふと、その春香ちゃんの姿が目に入った。

盛り上がりまくっている輪の外でひとり、じっとこっちを見つめている。

が、それは俺じゃなくて ナーちゃん？

人魚なんかには浮気しやがって。

きっと、そう思っているに違いない！

いいよ、もう。

俺はナーちゃんと一生、ラブラブするさ。もう、全世界公認のカップルですよ。

浮気野郎とでも浮き輪野郎とでもなんとでも、罵るがいい！

罵るが……罵るが……ののし……られたくないよ……。

などという、ロミ男とジュリエットよりも悲しい一日を終え、ヤケメシを食うために帰路を急いでいたのである。

今日なら、どんなに最悪で腹だたしい幸子の料理も残さず食べそうな気分だ。

黒い生姜焼きでも、衣が白い天ぷらでも、赤いかたまりの存在感全開なマーボ豆腐であったとしても……。ぜんぶ、冗談抜きにあるけどな。ちなみに昨夜のかき揚げはなぜか歯ごたえ感ゼロだった。

ガッコーから俺の自宅まで、徒歩で二十分。

毎月の定期代をケチった幸子が、俺に無断で願書を出したからこうなった。言い忘れていたが、地球は幸子を中心に回っていて、彼女がそうだといえれば例え南極と北極でさえ入れ替わるのだ。自分の子供などは茶碗に残った飯粒ほども気にならない女である。

俺達は自宅にほど近い商店街にさしかかっていた。

買い物をしに出てきたおばちゃん達、多数。

その中を、人魚を抱っこしつつ超セクシー美女と並んで歩くのだから、奇異な視線がぐっさぐさと俺に突き刺さってくる。

平静な顔を保ちつつ歩くに耐えなくなった俺は

「葵さん」

声をかけた。

道の両側に立ち並ぶ商店を面白そうに眺めていた彼女は

「はい、達郎様」

「その……オーシャンイーグルって、どういう仕掛けなの？」

「どういう仕掛けだろうと、俺にとって別に問題はない！

ただ、話題が欲しかっただけだ。

「ええ、これはですね」

水分を瞬時に凝縮しつつ弾丸と化して発砲できる、海の世界の武器なのだと教えてくれた。

「普通は手に入らないものなのですが、南の海にいるドルファが手に入れて送ってくれたのです。姫様をお護りするには、これくらい

のものは必要でしょう、って」

ドルファア？

また、あらたな固有名詞が登場した。

葵さんの大切なお知り合いなんだろうね。

ま、南氷洋の鯨太さんといいドルファアさんといい、協力してくれているということは、他にも仲間がいるという証拠なんだろう。特に鯨太さん、クジラだもんな。なんか、えらく頼りがいがありそうだ。こっちにきてはくれないんだろうか。

そういうことをぶつぶつと考えながら歩いていた俺。
すると。

道の先で、俺達を待ち構えている人影を見つけた。

最初は夕陽が逆光となってよく見えなかったが、よく見れば

春香ちゃんだった！

春香ちゃんはゆっくりとこっちに歩み寄ってきて、俺の前で立ち止まった。

「海藤クンの家、こっちの方なんだってね？ 高波クンに訊いたら教えてくれたのよ」

「あ？ ああ、史郎がね……教えてくれたんだ」

内心、他校の不良にでも出会ったかのようにどぎまぎしている俺。口調がオウムになっている。

とうとう「死の宣告」をしにここまでやってきたのかと思った。

いふなれば、俺はてくてくと死刑場への道を歩いてきたことになる。

「恋の死刑場」！ イヤな例えだな。

が、よくよく考えれば、それはあり得ないというものだ。

なぜなら 俺達は付き合ってたワケでもなく、まだ告つてもいなかったし。

じゃあ、なぜ春香ちゃんはここにいる？

彼女はいつもどおりのほんわかフェイス。殺気とか邪悪なオーラは出ていない。

「……海藤クン」

「あ？ え……？ な、何？」

春香ちゃんは急に、そっぽを向いた。
顔が赤くなっている。

「私ね……人魚の口相手に嫉妬しているのって、なんだかヘンだなあって思ったの。よくよく考えてみたら、自分で自分が可笑しくてゆーっくりと、小さな声で呟くように、春香ちゃんは言った。

はあ。

はい。

さようなものでしょうかね？

……ん？ 嫉妬？ それって

「で、さ」

はい。

そのまま、しばらくあつちを向いていた春香ちゃん。

急にくるつと向き直るなり

「私は、その……別に、海藤クンのことを、キライじゃないから！
言い捨てるなり、春香ちゃんは「だっしゅ！」で走り去って行ってしまった。

……？

にゃ？

あえ？

これって、もしかして……許してくれたってこと！？

その10 ようこそ海の家

俺はなぜか、ほっそーい吊り橋の真ん中にいた。

冒険ものでよく出てくる谷間にかかっているやつで、渡ろうとしたら「バラバラバラバラっ」って分解して落ちていくようなアレ。手すりらしきものといえば、ロープが左右に張ってあるだけだ。

はるか下はごうごうと濁流が飛沫を上げている。落ちれば無難に即死。

と、風もないのに吊り橋が右へ左へとぶらんぶらん揺れ始めた。早くどっちかへ逃げたいのだが、歩くに歩けない。

「達郎くん！ 早く！ こっちへ来るのよ！」
右側から俺を呼ぶ声がした。

「お！？」
吊り橋の付け根に目をやれば、なんと春香ちゃんがいた。
なぜか……白無垢姿。よく似合っているけど、今はガン見している余裕はない。

「達郎くん！ その橋は保たないわ！ 早く、早くこっちへくるのよ！ そうすれば、ずっと一緒にいられるから！ あたしと結婚しましょう！」

「そ、そうか！」
よし！ こんなヤバい橋はとつとと渡りきって、俺は春香ちゃん
と！

俺はずりずりとガニマタになって、吊り橋の上をゆっくり歩きかけた。すると

「そちらへ行ってはなりません！ 達郎さま！」
反対側の付け根から、またも俺を呼ぶ別の声。
ウェディングドレスをまとった清楚なナーちゃんが！ いや、なぜかメイド服姿の葵さんもいるし！

「こちらへきてください、達郎さま！ そちらへ行けば、谷底へ落

ちてしまいます！」

「姫様の言う通りですよ！ 私と姫様でお助けしますから、達郎様さあこちらへ！」

これはいったいどおいうこと!？

何で吊り橋の両端に春香ちゃん、ナーちゃん・葵さん組が分かれていますんだ？

とか考えているうちにも、吊り橋が「めき」「ばき」とか軋み出しました。

欠け落ちた木の足場がぱらつと散って、谷底に吸い込まれていく。

「達郎くん！ 早く！」

「さあ、達郎さま、こちらへ！」

「達郎様！ おいでください！」

両側から呼び込み合戦をされてもねえ……。どうしていいのかわからない俺、立ち往生。

そのうち、白無垢を着ていた春香ちゃんが「ばさっ」と着物の裾をめくり上げ、なんと中から自動小銃を取り出した！

対岸へそれを向け

「達郎くんは私のものよ！ そうやって邪魔をするなら、許さないんだから！」

すると、葵さんも太ももにつけているガンホルダーからオーシャンイーグルを抜き

「達郎様を惑わすとは、やっていいことと悪いことがあるでしょう？ 相手になりますわ！」

だだだだだだだだっ だだっ だだだだだだだだっ！

タタタタンツ タタンツ タタタタン！

速攻で銃撃戦。

待て待て待て待て待てっ！

俺を挟んで撃ち合いをするな！

吊り橋のど真ん中で、左右から飛んでくる銃弾をかわそうと必死になっている俺。

そういうことをやればやるほど、橋は「ぶーん！　ぶーん！」と大きく揺れていく。

「おい！　二人とも！　やめ、やめてくれ　」
叫んだ瞬間、お約束が待っていた。

「……あー！！」
つるつ。

「あーっ　」
俺は悲鳴を上げながら、谷底へ向かって真っ逆さまに落ちていった。
。

「　　つるつどの！　達郎どの！」

う……あ？

確か、俺は吊り橋から落ちて谷底へ真っ逆さまに　　つて、あれ？

目の前がぼんやりと霞んで見える。

なんか、暗い。

もしかして、あの世へ直行便でやってきてしまったのか？

舟一（親父だ）、幸子、先立つ親不孝をお許してください。俺は二股をかけたばかりに、人知れず山奥で交際相手に殺害され

「アタマ悪くて顔も悪い、救えない達郎どの！　しっかりなされよ！　ボンクラがぼんやりしてどうします！」

はっ！

この一度聞いたら忘れられない、オスカルボイス（？）な罵詈雑言は……！！

「やっと、気がつきやがりましたか。まったく、普段からウスラバ力だつてのに、いざとなればオタンコナスの腐れトマトほども役に立たないんですからな、たつる　ぶべっ！！」

言い終わらずして、ヤツは壁にめり込んでいた。

俺は握り固めた拳をほどこきながら

「懲りずに生きてやがったか、クズイワシ。……ここはどこだ？」
暗く、小さな部屋らしい。

「つてか、なんでこんなところにイワシ野郎と一緒にいるんだ？」
「そ、それはですな、達郎どの……」

壁にめりこんだ身体を起こしながら、イワシヤールは説明した。
授業が終わり、一人で家路についた俺。

人通りの少ない小公園のあたりにさしかかった時、急に背後から後頭部を一撃されてしまったのだという。言われてみれば、ふと目に入った小公園の風景から先、記憶がない。そうすると俺……誘拐されたのか？

「つてか、なんでお前、それを知っている？」

「やっと壁から抜け出たイワシヤール、俺の前にぺたりと正座し

「知っているも何も、姫様が一大事なのですぞ！」

怒っているようだが、無表情だからイマイチ伝わってこない。

「一大事？ ナーちゃんが？」

「夕方、姫様は達郎どのお帰りを今や遅しと待っていていらっしやいました。すると突然、柄の悪い連中が押しかけてきて、あつという間に姫様を……。ああ、老いたイワシヤ……」

「おいたわしや」ですから、そこ。老いて腐ったイワシは貴様だ。

「連れ去られた？ レッドバックの連中か？ つてか、葵さん

はどうした？ 葵さんがいれば問題ないはずだろ？」

すると、イワシヤールはツッコミを入れるように片手を振り

「だから言つたでしょう、柄の悪い連中が来たつて。幾ら葵どのがいたつて、あんな奴らに一人で敵うワケがありませんよ。葵どのはヤツらに取り押さえられる前、この私に言いました。『すぐに、達郎様に身を隠すようにお伝えしなさい』と。だから、私は涙を

飲んでその場から離れたのです。で、道行くアナタを見つけてラッキードと思つていたら、あつちゅー間にやられちまいやがつて。おかげでこの私まで、捕まつてしまいましたよ」

どーもわからん。

柄の悪い連中って、何ヤツ？ 葵さんでも敵わないくらいいつえーのか？

ま、事情の半分くらいは理解した。

吊り橋から落ちたのは夢だったってことだ。

ああよかった。夢で。

いやいや！ ちっともよくねーし！

ナーちゃんと葵さん、マジでピンチ（このイワシの話が本当なら、だが）じゃねーかよ！

二人とも美人でセクシーだから、柄の悪い連中に捕まったら何をされるかわからんだろう！ ひよっとして今頃、着ている服を剥ぎ取られて「いやーっ！ やめてください！」なんて……ぶるぶる。そんな想像をしてはいかんいかん。

とりあえず、俺はゆっくりと立ち上がった。

「どうするつもりですか、達郎どの。あなたみたいなノロマが何かしようとしたところで、たかが知れていますよ？ ここはまず、敵の裏をかくために様子を見るといのが、戦術の第一歩です。達郎どののは普段でさえ、使えないヤツなんですから」

ぶすっ

「あぎやーっ！ な、な、何をなさるのです！ 目が！ 目があー

ッ！ ぎいええ！」

「……いいからとっとと来い。お前をエサに敵を釣るのが戦術として上策だ」

目潰しをくらってのたうち回っているクソイワシの尾びれをつかむと俺は

「ふんっ！」

壁に向かって元気いっぱい叩きつけてみた。

バキッ！

「あーれー！ x 干 ……」

イワシヤールは壁を魚の形にぶち抜きつつ、意味不明な叫びを上げながらそのまま吹っ飛んでいった。

ふっ飛ばすつもりはなかったが……「ぬるっ」としていたから手が滑ったんだな、つい。

まあ、あのイワシはどうでもいい。どうせ煮ても焼いても死なない、いや食えないし。

それよか、さっきから俺は気がついてた。

壁のあちこちに隙間があり、そこから光が漏れているのだ。

しかも、このニオイ。

ぷーんと鼻につく、生臭くて磯臭くて何とも言えない「ああ、海のお仕事」系な麗しい香り。

つまり今俺が監禁（にも何もなっていないのだが）されているのがどういふところか、あっけなく見当がついた。

「……とりゃー！」

手探りで壁の一面に目星をつけ、力をこめて溜め蹴り。

案の定、古びた木の扉は一撃で吹っ飛んだ。

そこから出ると、すでに陽は沈む直前。ほとんど暗くなりつつあった。

「はーん。やっぱ、ここだったか……」

ざざーん ざざーん

寄せては返す波の音。

ごっごっとしたでっかい石がごろごろ転がっている浜辺。

波打ち際から少し陸側ですっかり朽ち果てている、小さな漁船。

船のケツにちっこいエンジンがついていて、漁師さんがヒモを引っ張ってエンジンかける、あれね。

んで、俺がぶち込まれていたのは小さな木造の小屋。こついうのが、幾つもある。

そこは 俺の住む街から程近い、かつて小さな漁港があった海沿いの地区だった。

小学生の頃、夏になるとよく泳ぎにきていた浜辺だ。史郎のヤツを沈めようとして、逆に俺が溺れたりしたっけ。そこを、近くの漁師さんが助けてくれ、ついでにヤキまで入れてくれた。

しかし、今は漁師さんもいないし、泳ぎにくる人もほとんどない。なぜなら、理由は目線の先にある。

俺がナーちゃんを釣り上げた日、ふと振り返った先に見えた、あの環境破壊な工場群。その照明が、しつこいくらいに眩しく、水平線を黄色く染めている。ナーちゃんと出会った岸壁は、あの工場の先にある。そういう位置関係。

こういうものが近くに作られれば海が汚れるのは当然だ。港湾整備計画が持ち上がった時、漁師さん達が相当反対運動をしたらしい。しかし、彼等は蹴散らされ、大きな港や工場群がさくさくと作られてしまった。

そして海はカフェオレソーダとなり、魚など獲れる環境ではなくなってしまった。

だから、この地区の漁師さん達は一人残らずいなくなったのだ。

なんだか、ね。

身勝手な人間達は、海の生き物だけじゃなくて同類まで追い詰めておいて、それでも何とも思わないものらしい。

「いたたた……。た、達郎どの！ 横暴にもほどがありますぞ！」
やはり生きていたイワシヤールがぺったぺったと近づいてきた。「このかよわいレディに対して、何という真似を！ それだから、あなたはいつまでたつてもモテ むぎ！」

「……次ほざいたら三枚にオロすぞ」
イワシヤールに一撃入れて黙らせた俺は、海の反対側へと目をやった。

すぐそこに、かつて小さな市場だった建物が残っている。

この辺で水揚げされた魚はここに持ち込まれ、毎日セリにかけられていたのだ。

うつすらぼんやり、明かりらしきものが点いている。

そう、今はもう、人などいないはずなのに。

「達郎どの！ あ、あれ！ どこか、アヤしくありませんかな！？」

「……お前と同じだな。 来い」

「あ、あたたつ！ た、達郎どの！ エラをつかむとは何事ですかっ！ 人間でいうなら、鼻の穴に指を突っ込んでいるのと」
苦情を申し立てているイワシを無言で引き摺って、旧市場の建物へとやってきた俺。

シャッターが降りていて閉鎖されているが、大分朽ちているから忍び込むのに造作はない。それに、以前来たことがあるから中は多少知っている。

確証はなかったものの　ここに何か関係者が潜んでいるような気がしたのだ。

地元の不良とかだったら、最悪な展開が待っているけど……。

「じゃ、ちよつくら中を覗くぞ。誰か、いるかも知れない」

「ほほう。それはウスノ口な達郎どのにしてはご立派なことだ。…

…では、私はここであなたの戻りを　あいたっ！」

「……てめーも来るんだよ」

どうせ、放っておいたら一人で勝手にとんずらするに決まっている。

マジビビリしているイワシをとっつかまえ、俺はそろっと建物の中へ潜入した。

いざとなったら、このバカをいけにえにささげて逃げればいいのだ。

都合のいいことに、プラスチックのケースやら木の枠（鮭とかが入ってそうなヤツ）が山積みしてあって、隠れるのにはもってこいだった。

足音を忍ばせつつ、光源の方へと少しづつ近づいていった俺達。

やっと、あと一息でそれが見える位置までやってきた。

「……」

そろーっと物陰からカメのように首を出し、様子をうかがった俺は　思わず息をのんだ。

その11 助けたお礼に

「達郎どの、何がどうなっているか、このイワシヤー　もがが」
「しっ！　喋るな！」

慌ててイワシの口を塞いだ俺。

物陰からその先の光景を見た瞬間、ついビビッてしまった。

葵さんがいる。

彼女は両手を括られ、天井から吊るされていた。

彼女の周りを、一、二、三……四つの人影が取り囲んでいる。

ライトは葵さんに向けられていたから、はつきりとは見えにくかったものの　イワシヤールがさつき「柄が悪い」と繰り返した意味が、ようやくわかった。

ぶつといウナギみたいなヤツに手足が生えており、一見、ストリートにウナギかと思っただが、違った。

アタマの天辺から尻尾の先まで、バックにびっしりと黒い斑点がついているのだ。

ベースは黄色いような黄緑のような、てらてらしていてよくわからない色をしていて……要するに「柄が悪い」。言われてみれば、確かにそうだな。

しかし、この模様、このおどろおどろしい姿。少なくとも、絶滅したとしても誰も困らないようなヤツら。

俺は最近、テレビで観たぞ。

「……よーよーねーさん、そろそろウチら、巢にもどらないかなのや。ああ？」

連中、縛られて動けない葵さんから何かを聞きだそうとしているらしい。

「ボスが待つてるちゅーて、さつき言ったやろ？　いい加減、大人しゅー吐いたらどうや」

「あんまり強情はつてると、いいコトにならんでえ？　なあ？」

うなだれて目を閉じていた葵さん、ゆっくりと顔を上げ

「あなた達に話すことなど、ありません。好きにしたらいいでしょう。何度同じコトを言わせるのですか？」

毅然と言った。

か、カツコいいです！ 葵おねーさま！

絶体絶命のピンチでも信念を曲げないんですね！ 俺だったら「ああ、えらいすんません。実は」とかって、べらべら喋っちゃいそうだし。

しかし、これは一体どうしたらいいんだ！？

葵さんですら敵わなかったあんな凶暴そうな奴らを、しかも四匹も相手になんか到底できっこない。といって、黙っていたら葵さん、きつとこのあと酷いことをされてしまうだろう。

どうするどうするどうする！ どーしたらいいんだよー！

おい、イワシャール……ル？

「……」

ふと見れば、ヤツはこそっとその場から立ち去ろうとしていた。

「……待てい！」

イワシの尻尾を「がしっ」とつかんだ俺。

イワシャールは「放せ！」とも言わず、その場でじたばたとあがいている。

（最初から思っていたが）このアホイワシに少しでも答えを求めようとした俺がバカだった。

が、迷っている時間は思った以上になかった！

「……じゃあ、ねーさん。そのカラダに訊いてみるよりないのお」

イヤらしいおっさんのそれではない！

ドス全開、ヤクザ映画のノリ！

これはまずいぞ。

下手したら葵さん、殺されてしまうかも知れない。

彼女の前にいる一匹が、葵さんの露わなお腹や太もものあたりを「つーっ」とやって

「このキレイな肌、キズモノになってまうで？ ……残念やのう」
そう言ってヤツは アタマ全体が口になったかと思うくらいに
「ぱっかー」とどでかく口を開いた。

視力一・五の俺には、はっきりと見えた。
ずらーっ！ と口の付け根にまでならんだ、小さくも鋭く尖った
たくさんのキバを！

あんなので「がぶ」とかやられた日には葵さん、ひとたまりもな
いって！

だが、無情にもヤツは、葵さんの太ももにそれをやりかけた。

こうなりや、やむを得まい！

「……とうおりやあーっ！」

渾身の掛け声とともに、俺はその手に握っていた得物、じゃなく
て獲物 でっかい役立たずのイワシだが を、思いつきりぶん
投げた。

「あーれー……」

青と銀色に光るそれは宙を一直線に舞い、葵さんをかじりかけた
ヤツに直撃した。

ごーんっ

「んぬわっ！」

思わぬ狙撃(?)をくらい、ヤツはイワシと共にぶっ飛んでいっ
た。

「んっ！？ 誰かいるぞ！」

当然、気付かれるわな。

俺はすいと物陰から出て行き「……葵さんを、放せ！ さもなく
ば

一丁キメようと思ったのだが、そうは問屋が卸さなかった。いや、
閉店していた。

キラリと光る鋭い目、目、目。合計六つ。

半月型のいわゆる「悪人仕様」の目の奥で、ちっこい点みたいな
瞳孔がイヤらしい。

この力才を見て「かわいいー！」とか「イケメン！」とか言うバカは世界中に三人といやしないだろう。

そう、奴らこそ

「おうおう、人間のにーちゃんかい。俺達が『ウツボ組』だとわかって、ケンカしとるのやるなあ？」

「舐めたマネしくさって。うちの若いの、どないしてくれんじやい！」

どないしてくれんじやいとか言われましてもね……。

これからどないかしようおもてましてんけど。……あれ？

「達郎様！ どうして、こんなところへ」

俺に気付いた葵さん。悲痛な声を上げた。「逃げて！ 逃げてください！ 彼等は海獣組に属する獰猛野蛮な連中。とても達郎様では手に負えません！」

「へへ、残念やったのう、ねーさん。こうなつたからには、生かして帰すワケにはいかんのう」

言うなり、ウツボB（Aはイワシと共に撃沈としよう）が「するするっ」とヘビのような素早いくねくねウォークで俺の背後に回った。

ちっ！ 囲まれたし！

はっと気がつけば、俺の前にいるウツボCが、例のどでかい口を開けて待っていた！

「……！」

新幹線の先頭車みたいな頭を突き出してぱく、とかやってきたのを、間一髪で回避した俺。

が、足場が悪いことに全く気がつかなかった。

「うわっ！」

すてーん

コント的にやってしまった。運命のボケですね。死のツッコミ待ちだよ。

「……終わりや、にーちゃん」

てっ転んでいる俺を、ウツボB、C、Dが取り囲んだ。

シユミの悪い、凶暴そのものな口が開いている。

万事休す、ってヤツだ。

ちくしょー！ 今度生まれ変わったら水族館の飼育員になって、そのキバ全部抜いてから「ウツボにさわって遊ぼう！」とかいうコーナー設置してやる！ 子供達にさんざん小突かれていればいいんだ！ お前らなんか！ 「おかーさん、海の新幹線だよ！」とかつて……。

「やめて！ やめてください！ 殺すなら、私を殺して！ あなた達の目的は私だったはずです！」

葵さん、泣きそうになって必死に叫んでいる。

「だまつてるい！ こいつを殺したら、つぎはねーさん、あんたや」
ああ、もうこれまでか……。

と、さすがに心の中で遺書を書いていた俺。

ところが、だ。

「……ん！？ こっ、これは!？」

ウツボDが何かを発見し、急にずざつと後退りした。

「うっ！ なんで、こんなものがあんなん!？」

「うあーっ！ ワイ、鳥肌立ってきてもうた！ はよ、どっかにやりー！」

???

なんだ？

「い、イヤですわ！ お前、なんとかせい！」

「んなアホな！ 殺生なコト言ったらあきまへん！」

中途半端な関西弁でもめているウツボチーム。

俺はふと、横に視線をやってみた。

ああ。

そーいうことね。

なら、話は早いじゃないか。

これはさっきの小屋にあったヤツだ。万が一の護身用にと、こっ

そり背中に隠し持ってきたのをころりと忘れていた。
がっ

素早くそれを手に取るなり、俺はがばと跳ね起きた。

「……コレ、嫌いらしいね？」

突きつけながら、にーっこりと全開で微笑んでやった。

多少恨みっぽい俺は、ここぞという場面では容赦なく急所を抉る性格である！

「はっ！ に、にーちゃん、ちょおっと、話しあおうや。ん？」

「そ、そーや！ ワイらも、本気やったのとちゃうねん。ちよっと、脅したる思ったださかい……」

ウツボチンピラども、顔面蒼白になりながら弁解。

いいや 許さん。

俺を背後から殴りやがって。その上、葵おねーさまにあんなマネを！

「……かば焼バーガーにして食ってやるから、そう思え！」

さっとそれを構えるや、真ん中のウツボ野郎の「白くてぶにっ」とした腹を目掛け、思いつきり突き出した。

「うっ、うぎゃーっ！」

刺されたと思っいたらしいウツボ野郎、絶叫。

しかし俺は、それよりもさらにでかい声で、

「獲ったどー！！」

そう。

俺が小屋から持ってきた得物、それは「モリ」だった。

モリによる一撃、そして「獲ったどー！」の一声がもたらした効果は絶大だった。

ウツボどもは口から泡を吹いてばたばたと倒れ、びくびく痙攣している。

刺してないんですけどね。刺したマネだつてば。

だいたいさあ、錆びきっていて先が折れてるんだよな。

ま、生理的に恐怖を感じてしまっただろうさ。生き物と戦うには、

こういうやり方もあるんだな。

こうして、魚人どもと戦う方法を学んだ俺。
人間、やればできるんです。

拘束されていた葵さんを無事救助し、ついでに失神しているイワシを引き摺って外へと出た俺。

辺りはもう、闇。

例の工場地帯の照明がやたらと目に痛い。

さて。

やることは、他にもまだある。

「葵さん。ナーちゃんはどこへ連れ去られたか、心当たりは
言いかけた俺に対して、葵さんの答えは
ジャキッ

オーシャンイーグルの銃口だった。

「……？ 葵さん？ 何のマネです？」

「達郎様。どうか、この私の要求を聞いていただきたいのです。そ
うでなかったら、私はこのトリガーを引くしかありません」

声が低い。

しかも、遠くの明かりにほんのり照らされた彼女の表情は マ
ジそのものだった。

「どういうことですか？ まさか、葵さん……」
ぐっ

俺の胸に、二つの銃口が押し当てられた。
「そういうことはありません。私は私の信念があって、姫様にお
仕えしているのです」

「……」

黙って彼女が言う事を聞くしかない。

「達郎様……もう二度と、姫様には会わないと、約束していただき
たいのです」

ナーちゃんに？ 何でまた。

「私は、達郎様が憎くてこんなことを申し上げているのではありません」押し当てられている銃口が、ちよつと緩んだ。「こうやって海獣組の連中が前面に出てきた以上、海の世界では相当大変なことになっているとみて間違いないでしょう。そして彼等はさっきのように、私達ブルーフィッシュに協力する人間の方達をも、容赦なく襲うはずですよ」

「……」

「このままでは、達郎様だけではありません。お父様やお母様、それに学校のみなさんをも巻き添えにしてしまう。ですが……姫様は決してそのようなことを望んではないはずですよ。心の底から達郎様を愛しているからこそ」

愛、か。

あらためて言われれば、とてつもなく重い言葉だな。

好きだからって、一緒にいれればいいということじゃない。

愛していればこそ、離れるしかないっていうケースもまたある。

ナーちゃんと葵さんは、海へと帰っていくのだろう。

そうなれば、もう会うことは多分……ない。

でも、それでいいのか！？

確かに、俺や両親、春香ちゃんとかみんなは、普通の生活が戻ってくる。俺は俺できっと、何の憂いもなく春香ちゃんとお付き合っているかもしれない。

ただどき、ナーちゃんや葵さん、イワシヤールはこの先も苦しい日々が待っていて、それでまかり間違えばさつきみたいに 命を落としてしまうかもしれない。げんに、ナーちゃんは今もどこかでじつと助けを待っているはずだ。

このあと、葵さんが無事に彼女を助けだしたとして、でもナーちゃんがもう俺が傍にいないことを知ったら……本当に心の底から納得できるのか？ 好きだからって言っても。

初夏の夜風がほんのりとぬるい。

葵さんごしに見える夜空には、たくさんの星が瞬いている。
沈黙して久しい俺。

葵さんの悲しい願いが、再び銃口を通じて俺に伝わってきた。

「さあ、達郎様……約束してくださると……言ってください。さも
なくば、さもなくば、私は……」

強い力が押し付けられてくる。

ふと見れば、葵さんは 泣いていた。

そうまでして、ナーちゃんのことを護りたいのか。

今の葵さん、俺達を巻き込まないことが、ナーちゃんのためだと
信じている。

そう思った瞬間、脳裏に親父や母さん、春香ちゃんや史郎、それ
に色んな人たちの顔が過ぎっていった。

俺は俺で、みんなが平和に暮らしていけるように、護る責任があ
る……よな。

俺がナーちゃんに情けをかけたばかりに、みんなにもしものこ
とがあればどうすることもできない。

悲しい選択だけど

「……わかりましたよ、葵さん。俺達はもう、関わりませんから
俺は心のうちでナーちゃんに謝ることしかできなかつた。

ごめん。

勝手に釣り上げて、挙げ句に辛い思いなんかさせちまって。
最低なヤツだな、俺。

「ありがとうございます。達郎様……」

オーシャンイーグルがゆっくりと下ろされていく。

それをガンホルダーに納めた葵さん、そつと手の甲で涙を拭った。

「このご恩、一生忘れません。どうか達郎様、いつまでもお元気で

……」

「……泣くなよ。俺、考えを変えちまうかも知れないよ?」

そう言って笑おうと思ったが、笑えるワケがない。

バカ。

俺のバカ。

いいのか？ それで？

「……そうですよ。最後の最後で、達郎様を困らせてはいけませんもの、ね」

にっこりと泣き笑いした葵さん。

そうして彼女はなおもぶつ倒れているイワシヤールを叩き起こすと「では、達郎様。どうか、お元気で。行きますよ、イワシヤール！」

「あ、あれ？ 葵どの？ どちらへ？」

何が何だかわかっていないイワシヤール。

きよるきよるとしていたが、やがてぺたぺたと葵さんの後を追っていった。

「……葵さん！」

俺は叫んだ。「絶対、絶対、やられちゃダメだぞ！」

つと足を停めた葵さん、こちらを振り返り

「ええ！ 私もいつか 達郎様のような素敵な男性と結ばれたいと思います！」

そうして暗闇に消えていく葵さん、そしてイワシヤールを呆然と見送っている俺。

本当に、本当に、これで 良かったんだろうか？

わからない。

わかるワケがない。

……さよなら、ナーちゃん。

せめて、お別れくらいは言いたかった。こんな終わり方なんて、ありかよ？

どうか、海の世界が一秒も早く、平和になりますように。

俺にはそう、願うことしかできない。

そうしたらまた、会える日がやってくるのだろうか。

気がつけば俺の頬に、すーっと涙が流れていた。

初夏に起こった、ほんの数日だけの不思議な出来事。

俺はきつと、忘れないだろう。

俺のことを心の底から想ってくれた海の世界の美しい姫様と、心優しい従者の女性。

それに 彼女達に何一つしてやることができなかった、臆病で情けなくて不甲斐ない俺自身を。

その12 しよっぱい夏

あの悲しい夜から数日が過ぎた。

もう、不可解な海の連中達が俺の目の前に現れることはなくなっていた。

またいつもの、つまらない毎日に戻った俺。

天然幸子はややしばらく経ってから

「あら？ ナーちゃん達、どこか行ったの？ 最近、家にいないわねえ」

何を今さら。

もう、何日経ってると思ってるんだよ。

俺は何も言わなかった。

ナーちゃん達はもう二度と戻ってこない　なんて、口に出したくもない。

また元通りの生活になったとはいえ、俺の様子が明らかにヘンだと思っただろう。最初に気がついたらしい史郎が

「海藤、なんかあったのか？　ここどころ、全然元気がないじゃないか。大丈夫か？」

そう、声をかけてくれた。

正直、こんなにも友達をありがたく思ったことなんて、一度もなかった。こつちがツライ時に「ん？」って思ってくれるヤツが傍にいることを、当たり前前とか思っっちゃいけないんだ。史郎の一言が、妙に心に沁みだ。

これというの　　ナーちゃんが教えてくれたのだろうか。

ナーちゃんや葵さんは、俺達を巻き込みたくないといって離れていった。そう言われてみて初めて、周りのみんなの存在は決して当たり前にあるものなんじゃないって、わかったから。

あのコは今、どうしているんだろう？

そうして一学期も終わり、夏休みに入った。

結局、俺はあれから春香ちゃんとはほとんど喋っていない。

春香ちゃんも俺に話しかけにくい雰囲気を感じたらしく、近寄りてはこなかった。

せっかく勇気を振り絞って「クライじゃない」って、そこまで言ってくれたのに、ノーリアクションなまま。ここでも俺、最低ぶりを発揮している。

終業式の日、校門を出ようとする

「 達郎くん！」

後ろから、春香ちゃんが追いかけてきた。

彼女はちよつと言いずらそうにしていたが

「ねえ、達郎くん……夏休み、なんか予定とかあるの？」

春香ちゃんの意図に気がついた俺は一瞬詰まったが

「あ、ああ……。しばらく、田舎に行こうと思ってるんだ。だから、次に会うのは二学期かも知れないな」

「そう……わかった。じゃ、また二学期に会おうね」

悲しそうに去っていった春香ちゃん。

ウソ。

そんな予定はないよ。

だけど、そう言うしかない。

もし、夏休みの間に何度か会ってしまえば 俺、どうなるかわからない。

えらく自分の気持ちが悪くなっていったし。

情けないけど、春香ちゃんをシャットアウトする以外にどうしていいのかわからなかった。

命を張って俺達を危険から遠ざけてくれた葵さん、そしてナーちゃんに届けられる、俺の唯一の誓い。

それを破ってしまえば俺は……ただの裏切り者。

だから、春香ちゃんとは距離をおいたんだ。

「……ただいま」

帰宅すると、すぐ自分の部屋へ直行する習慣がある俺。
部屋に入つてすぐ、机の上のケータイが目に入った。

「……」

そつと、手にとつてみた。

ナーちゃんが置いていったもの。

幸子が買ってくれたそれがすつごく嬉しかったらしく、ずっと手
放さずにいたつけ。

彼女はドタバタに巻き込まれて連れ去られ、それきりだ。

最後に会つたのは、どのタイミングだったろう？ 最後に何て会
話したのか、俺には思い出せない。

どさつとベッドに倒れこんだ俺。

今となつては 考えてみても、仕方がない。

自分で決断したことなのに、後悔するのはバカのやることだよな。
それよりも。

そんなことよりも。

もつと強くて、でかい自分になりたい。

周りのヤツとか、それだけじゃなくて、できる限りたくさん
の力になれる自分に。

好きな人を、自分の手で守れる自分に。

いつか、なつてやるさ。

絶対に、絶対に。

ナーちゃんが残したケータイを握り締めたまま、俺は心の底から
思った。

その13 主砲の華麗なる憂鬱

あの夏から月日は流れた。

相変わらず毎日は淡々と過ぎ去っていく。

だけど、俺はちょっとした変化の中に飛び込んでいたから、いつまでも同じままってワケじゃない。

やっぱりね。

なんでもいいから、なんかやるコトないと、人間はダメなんだな。やることを見つけてからというもの、ほんのちょっとだけかも知れないけど、前に進めたような気がする。入学した頃の俺じゃないって、今は思える。

そんなこんなで年が明け、俺の高校生活一年目は終了。

二年生からはクラスが変わるから、今のクラスの連中とはほとんどおさらばだ。

「また一緒だといいなあ、海藤」

史郎はそう言ってくれた。

一緒だといいいけどね。ま、期待しないでいたほうがいいだろう。クラス替えを決めるのは教師達だし。

それに。

俺にはもう、心残りはない。

じゃあね、春香ちゃん。彼氏といつまでも仲良くね。

そーいうことだ。

そうして三月の終わり、俺達が二年生に進級するちょっと前のことだった。

港湾開発地区にあったでっかい工場が爆発事故を起こした。

ちゅどどーん、という爆発音は俺の家にまでモロ飛んできたから、よく覚えている。

あとでニュースを観たら、百人を越える従業員の人が亡くなり、それ以上の数の負傷者が出たとか聞いていた。

世間の事情にうと過ぎる、というか興味あること以外興味のない（当たり前か？）俺はその時初めて知ったのだが　その工場、ちよつど卒業したばかりの「峰山」とかいう男子生徒の親父さんが社長になっている大企業のもので、すつごく儲かっていたらしい。そつういや、峰山たらいうヤツがホテルで大々的に卒業パーティーを独自に開いたとかで、校内ではもちきりの噂だったつげ。あり余る金持ちだったんだな。なんでみんなに配らんのだ？

そつういえば、と思ひ出したのは　この峰山、去年学校祭の実行委員長を努めたヤツだ。俺も実行委員だったけど、委員長の名前なんて学祭が終わつてしばらくしてから聞いた。……俺つてそつう人間なんです。

やああつて、テレビに出てきた彼の親父さんは「典型的に強欲な社長」タイプだった。

「社長！　多くの死傷者が出ているんですよ！　何かコメントは？」

マスコミの記者達にマイクを向けられると

「何なんだ、キミ達は！　私を侮辱するのか！　私だつて、数日寝てないんだぞ！」

とかキレだす有様。

しかし数日後、記者会見の場に出てきたヤツは、涙で顔をぐちゃぐちゃにして

「も、申し訳ありませんでした……。私が、間違つておりました……」

と、おいおい泣き出した。

なんだこの豹変ぶりは。なんか憑いてるんじゃないのか？

それを観ていて正直、俺は「ざまー見ろ」と思った。

なぜなら　その工場はこつそり排水を海に垂れ流していやがつたからだ。警察の現場検証でそれが発覚し、とうとう峰山社長以下

えらい人達がばしばし捕まった。

しかもそれには市とか県の役人もからんでのことだったらしく、事件はとんでもなくてかいものになった。

ま、悪い事はできないようになっていたものさ。いつかはバレる人間だろうと動物だろうと、コミュニティをつくって生きていく以上はね。

そうして五月の連休も過ぎた頃、事故のあった港湾再開発地区は大きく姿を変えることとなった。

排水で汚染された埠頭のあたりを埋め立てると同時に、工場跡地にでっかい水族館が建てられることになったのだ。

「ふーん。なるほどねエ……」

臭いものにはフタをしる、という訳か。

あのあたり、マジ臭かったしな。埋め立てはどうかと思うが、それで少しは海がキレイになるのなら、それもアリか。

「 達郎！ 準備はいいのか！？」

親父の呼ぶ声がした。

「はいよー。今行く」

よっこらしよ、とスポーツバッグを担ぐと、俺は部屋を出た。今日も部活だ。

『よばーん！ ファースト、海藤君』

「おーし達郎！ 一発かましたれ！ かーましたれー！」
言われなくなつて、かましますよ。

おお、今日もボールがよく見えるわ ほい！
カッキー

白球が遠くの彼方へと消えてゆき、墨審の手がぐるぐると宙で回されている。

「ナイスバッティーン！ すごーぞ、たつろー！」
ベンチでメンバーが狂喜している。

すごかねエよ。

こんなユル球、なんでみんな打てないかなあ。俺には停まって見えるんだけど……。

だらだらとベースを回ってホームイン。

「よっしゃあ！ 達郎につづけエ！」

続いたところで、逆立ちしても無理ですな。

スコアボードに表示されている点数は二十一対二。

念のために言っておくと、二がうちのチーム。

それもその二点、俺が二回ホームを踏んだからだ。

今日はまだいい。二回も打順が回ってきたことだし。後攻めで良かった。

「ゲームセット！」

おお。四回までいったか。上出来上出来。

整列して挨拶を終え、ベンチに戻ると

「ご苦労さんご苦労さん！ 二点も入ったなあ、うんうん」

にこにこ顔の監督。

あんた神様か。スコアボードが目に入らぬか。

「くっそーっ！ 今日こそ、失点を二十点までにおさめたかった！」

三年生のキャプテン・清水が悔しがっている。

それでも二十点ですかい。

零封してやるうとか打ち崩してやるとか、そういう野心はおもちではございませんので？

「ってか、根本的な大問題として……監督以下部員全員ストコードツコイだし。」

俺は去年、一年生の夏休みにこの軟式野球部に入部した。

夏休み、することもないので学校へ行って芝生の上で寝転がっていたら、近くで騒いでいる連中がいた。何かと思って盗み聞きしてみると

「泡島が辞めただど！？ なんでだよ！？」

「もう、こんな弱小チームでなんかやってられないってさ。硬式

の方に行くんだと」

「なにーッ!? それじゃ俺達、試合に出られないじゃねエか!」
野球部の奴らしい。それも、軟式野球部。

うちの高校にはそれぞれ硬式と軟式の野球部があり、硬式の方は割と強い。同級生で親友の高波史郎も入部していてセンターで四番を務めている。

逆に、軟式野球部はカス以下で、試合をすれば必ず負けるということまで有名だった。

その軟式野球部に、とうとう裏切り者 いや、物のわかる人間が現れたようだ。

どこの誰だか知らないけど、泡島さん、あんたは正しいよ。
残りの八人がバカなだけだって。

……と、俺は心の中で思ったが

「うつつ……せっかく、せっかく、みんなで野球ができるようになったのに……」

「ちくしょお! ちくしょお! 甲子園へ行くこつって、みんなで誓ったんだあ!」

おい。

基本的に致命的なカン違いだぞ、それ。

あんたら、軟式でしょーが!

とかツツコンでやったほうが親切なのか?

とはいえ。

一人足りないばかりに試合すらできないのは可哀相というものだ。

どんなにクズで使い物にならないプレイヤーだって、試合をする権利くらいはある。

「……あのー」

俺は男鳴き、いやいや男泣きしている連中の傍へ、つかつかと近寄っていくと

「俺、入部したいんですけど?」

途端に、奴らはピタリと泣き止み

「ほ、ほんとうか!? 俺、今ここで喜んでもいいのか!?!」

「ウソついたら、また泣くからな! お前、それでもいいんだろうな!?!」

泣け。勝手に。

「いや……野球、好きだし、それで……」

「うおーっ!」

俺が言い終わるのを待たず、バカナイン（現在八名だが）どもはグラウンドへと全力ダッシュしていき

「ばんざーい! ばんざーい!」

甲子園出場が決まったように喜び始めた。

あー。

バカはバカに変わりないんだろうけど、ともかくも野球が好きなんだろうな。

俺は何となく、声をかけて良かったような気がした。

のは、大間違いだった。

「ちーす。海藤、入りまーす」

それから毎日というもの、俺は真面目に練習へと出かけて行っただが「お! 海藤、ちょうどいいところにきたな! 俺と替わってくれ。

俺はそっちをやる」

部室の中には、輪が三つ。

トランプ、トランプ、コイコイ（花札のことである）。

で、夕陽が辺りを染める頃

「よーし! 今日も頑張った! じゃ、かいさーん!」
ちよつと待て。

野球はどーした! 野球は!?!

せめてファミスタに……じゃなかった、練習をやれ、練習を!

が、このアホ球児どもは監督が滅多に來ないのいいことに、毎日ゲーム三昧。たまに監督はやってきたが、これまたどーしよーもないジジイ。いや、退職間際の現国教師。校内では「ヒツジ」のあ

だ名で通っている。大人しくて温和で、しかし何もしないからだ。ある日、いつものようにメンバー全員で通称「練習」をしていると、急に部室へ入ってきた。

怒られるかと思っただが、ヒツジはにこにこしながら

「……清水君。練習はどうかかな？」

「は、はいっ！ 今、休憩中です！ それで、みんなでレクレーションをしています」

集合してから休憩しかしてないだろうが。しかもその「レク」って、いつの時代の単語だよ。すると

「おお、そうかそうか。それは大事だね。みんなで、仲良くやりなさい」

……行ってしまった。

ダメだこりゃ。

絶対勝てない理由を知ってしまった俺。

それからというもの、腐食しきった先輩達を放置しておいて、勝手に練習を始めた。

露骨にやると何を言われるかわからないので、まず自主トレをやっておいて

「ちーす！」

と、部活に入っていく。

「おー海藤！ 遅かったな！ 練習に遅れるとはなつとらん」

ははは。死ね。

が、別にそれ以上どうということもないので、適当に「レク」に混じって、帰る。

帰宅途中、近くにあるバッティングセンターでひたすらバッティング。

そういうイミがあるようなないような生活を淡々と続けた。

それでも、やらないよりは全然よかった。

何もしないでじっと毎日を送っていたら多分、俺は先輩達以上に

腐っただろう。どうしても、俺の中にあるもやもやを断ち切りたかった。あの日以来、俺に巣食って消え去らないこの「モヤモヤ」を、そうして　俺の地味な努力が報われる日はやってきた。

デビュー戦。

こんなクソバカなチームにも対戦を申し込んでくれる、涙がでるほどありがたい学校がある。

ライパチ（ライトで八番）で試合に出た俺。

二回の表を終わった時点で三十二対ゼロ。途中から退屈で仕方がなかった。

そして裏。うちのチーム、恐らくだが間違いなく最後の攻撃。

相手のピッチャーも大したことがなかったらしく、うちのメンバーに何度かフォアボールとデッドボールをプレゼントしてくれた。

お陰で、俺にまで打順が回ってきた、というワケだ。

「まー海藤、モノは経験だ。思いつきり、空振りしてこい！ あのピッチャー、ノーコンだが球は速いから、三振しても恥にはならん！」

少しも嬉しくない激励、ありがとうございます。

あんたと一緒にやなりたかねエよ。

と、思いつつ俺は打席に立った。

ぺっ、とピッチャーが放った第一球は、腰が抜けるほど遅かった。

「ふんっ！」

元氣一杯のフルスイングでかつ飛んだ打球はそのまま　スタンドを越えて場外へと消えていった。

「……」

味方ベンチ、ぼーぜん。

まさか新入りの俺が打つとは、誰一人見てなかったらしい。いや、夢にも思わなかったらしい。

「おお！　割と飛んだなあ。ま、こんなものかな」

先輩達がかすりもしなかった速球を、俺があっさり打ったのも無理はない。

毎日バッティングセンターで、普通に百二十キロ以上の球を打つてたしな。目と身体が自然に慣れていたという、ただそれだけのことだ。

なお、その試合は三十二対一で（当たり前だが）バカ負けした。それからというもの。

うちのチームは試合に出るたびにクソ負けをこいたが、零封されることは少なくなった。

必ず俺が打つからだ。

あのヒツジ監督も、ついには俺に四番の称号をくれた。

そんなワケで。

「じゃ、引き上げるぞーっ！ 二点取った祝いに、監督が焼肉に連れて行ってくれるぞーだ」

「おーっ！ やったー！」

平和な奴らだ。

その二点を稼いだのはどこの誰だと思ってるやがる。

ま、別にいいけどさ。

試合に勝つとか負けるとか、どーでも良かったんだ。

俺自身がどういう形でもいいから、前に進みたかった。だから、必死にトレーニングを続けた。ホームランはともかく、少しづつ変わっていく自分を眺めているのが楽しかった。

球場を後にしようとしていると

「おーい！ たっっー！」

一人の女子生徒が追っかけてきた。

水瀬めぐみ。おんなじ二年生で、何を血迷ったかこの弱小野球部のマネージャーを買って出た女である。実際、その言動はわりと理解しにくい。唯一のメリットはカオがちまちましていて、そこそこ見られることくらいだろうか。相当失礼だが事実ではある。

「あん？ どーした？」

「あのさ、あのさ……」

彼女は素早く視線を走らせて辺りの様子をつかがうと、急に声を

落として

「……今度の休みさあ、ヒマ？」

「へ？別に、忙しくはないけど」

そう答えてやると、めぐみはむふふ、と不気味な笑いを漏らし

「じゃじゃじゃあさ、一緒に、新しくできた水族館に行ってみない？」

「俺と？何でまた？男ならほかに腐るほどいるだろう」

実際、腐っているヤツも多いが……。

「ちーがうんだって！ やっぱさあ、バリバリに活躍しているスポーツマンと一緒にいいじゃん！ そのほうが、一緒に歩いていて気分いいし」

ヒトのことを何だと思ってやがる。

ブランド品のバッグとかアクセサリーじゃないんだぞ。

「ってか、いい歳こいて水族館かよ。なんでそんな所へ行きたがる？ ガキか、おまいは。」

……とはいいつつも、俺はOKしてやった。

新しくできたという、そのでっかい水族館は俺も気にはなっていた。

あの日以来、一度も足を踏み入れている場所。

「いったい、どんな風が変わったのだろう？ 今なら、行けるような気がする。」

俺の心の中で、ようやくそこまでの余裕が生まれ始めていた。

その14 再会ですか？

二十一対二の惨敗試合から数日後。

俺はめぐみと待ち合わせて、例の新しい水族館へと出かけた。

「たっつーっ！ おまたー！」

とか言いながら俺の前に現れた彼女は、どこのチャラ子かと思まがうような格好だった。

クシャミ一発で脱げるんじゃないかというキワどいキャミに、前屈厳禁超ミニスカ。

「どお？ こうしてみれば、割と見れねエ？ アタシ」

見れねエよ。

そのカツコーでババアになるまで一生マナージャーやってろ。

発情系ナインどもは大奮起するだろうさ。

「今日一日、カノジョのフリしてあげてもいいんだよ？ たっつー、現在ソロでしょ？」

「……やかましい」

と、こんなアホな女と道を歩かねばならない約束をした自分に軽く後悔しつつ、俺達は港湾再開発地区へと向かった。

俺の家から徒歩で十分もないんだけどね。

あの日、カフェオレソーダの海と紅白のタケノコ（＝煙突）に毒されていた港の辺りは、すっかり様相が変わってしまった。

真っ直ぐに敷かれた綺麗なアスファルトの道路、その両脇に規則正しく植えられた街路樹。歩道も茶系のタイルで覆われていて、散策するのにもちょうどいい。何より、あの薄汚い煙を撒き散らす工場そのものが無くなっていて、空気も大分よくなったような気がする。

ただ、海そのものは大分向こう側へいってしまった。埋め立てられたからだ。

歩きながら、俺は頭の中でかつての位置関係を思い出そうとして

いた。

今はもう、かつての面影なんか見当のつけようもなかったが、恐らくはこのあたりだったような気がする。

あの日、俺が釣りをしていた場所。

そして　美しい人魚の女の子、ナーちゃん（本当の名前はナタルシア）を釣ってしまった、忘れられない場所。

彼女は今、どこで何をしているのだろう。

海の世界の抗争に巻き込まれ、さよならも言えないままに別れなければならなかった。

もしかして、今も敵対する奴らに囚われて悲しい思いなんかしているんじゃない……。そんなことは考えたくもなかったが、つつい悪い方向へと考えてしまう。

そうさ。

彼女の傍には、強くて優しく美しい護衛隊長の葵さんがついてるんだもの。大丈夫だよな。

「　　でさあ、キャプテンってはその時に……たっつー？　聞いてる？」

チャラ子、じゃなかったためぐみの声でハツと我に返った。

「あ？　ああ、ごめん。よそ見してた」

「ぶーっ。せつかく面白いハナシだったのに、スルーしやがって！　むくれているめぐみ。

扱いに困るヤツだ。

「まー、そう怒るな。そうだな……」

俺はケータイを開いて画面を見た。

午前十一時を三十分と少し過ぎている。

「昼メシをおごってやる。今日は少しは金に余裕があるんだ」

「マジで！？　ラッキー！　たっつー、かーねもちい！」

ころっと喜びやがった。現金な女だ。

「んじゃ、そーいうことで」

ぱちりと閉じた。

俺の今のケータイ。

ナーちゃんが残していったもの。

俺の家にいた短い間、俺とのつながりだといって彼女が大切にしていたケータイ。母親の幸子が何をカン違いしたのか買って与えたものだが、ナーちゃんはとっっても喜んでいた。

それを今、俺は大切に使っている。

その水族館は「近海マリンミュージアム」と命名されていた。

近海、つてのはきんかい、じゃなくてちかみ、と読み、俺の住んでいる町の名前。

でかい。とにかく、でかい。

俺が小さい頃に幸子に連れられて行った、田舎のコンパクトなそれとは規模がまるで違う。

これは想像以上だった。

「うっわー！ でっけー！ おかしくねえ、コレ？」

はしゃぐのはいいが、はしたなく叫ぶなよなあ。

それに、こどもみたいに飛んで跳ねるのはよしなさいよ。パンツが一般公開中になっても知らんぞ。

めぐみ様はバカ（そのものだが）みたいに興奮しておられる。

まあ、わからいでもないが。

なにしろ、入り口をくぐった途端に「でーん！」と天井がドーム状になっていて、それがいきなり水槽になっている。つまり、下から悠々と泳ぐ魚達を見上げるワケだ。

マリンプルーの明かりが差す天窓のようで、さすが無感動症候群の俺でも度肝を落とさずに、いや抜かれずにはいられなかった。

その先は暗いトンネルのようになっていて、魚類ごとに水槽が続いていく。これはどこの水族館も一緒だろう。ただ、数がやったら多い。

昼メシに高いパスタとデザートを奢ってやった効果なのか、めぐ

みはテンションハイレベルで

「ねーねー、このサカナ、滝沢に似てない？」

「それを言うなら、こいつは江藤だぜ？」

おい、江藤！ こっ

ち向け！」

などと、あーでもないこーでもないと下らない会話をしつつ、俺達はたくさん水槽を見ながら順路を進んでいった。どういうワケか、出会うサカナがどれも知り合いのカオに見えて仕方がなかった。中でも、ジンベエザメが泳ぐ特大の水槽は圧巻である。

ウンメートルもあるまだら模様のサメが「ぬーっ」とのんびり横切っていく。サメというよりはクジラだ。性格はいたって温厚（というより、何も考えていないだけだと思うが）で、他の魚とかを襲ったりすることはないらしい。

その水槽で、一緒に泳いでいる魚達がいる。

銀色のウロコをきらきらと輝かせながら、一団をつくって行動している魚群。

奴らの一匹一匹をじっと見ていた俺は、どこかでそれを見たような気がした。

ああ。

そうか、イワシヤールだ。

とつても忠誠心があるイワシの魚人で、ナーちゃんの護衛。

護衛と呼ぶには値しないヤツで、弱すぎて何の役にも立たない。

しかも空気を読まないし姑息だし口の悪さは救いようがなく、三分以上一緒にいると自然と殴りたくなる存在だった。

ヤツも、あれ以来姿を消した。

ああいう生き物だったから、とつくの昔に三枚にオロされたりうか。いや、フツーに焼かれて大根おろしでも添えられたか、さもなくばチクワの原料になったかも知れない。

に、しても ちよつと、懐かしい気がせぬでもないな。

どでかい水槽の前に突っ立ってそんなことを考えつつ、ついぼんやりとしていると

『ぴんぽーん！ ご来館中のお客様に、お知らせいたします』
はい、なんででしょう？

『午後二時より、アクアスタジアムにて「ドルフィンショー」および「世界・海のびっくり生物ナマ公開ショー」を開催いたします。どうぞ、お越しく下さい』

あー、あるある。こういうやつ。

全国の水族館には大抵イルカ君達が飼われていて、一日に何度か「じゃーんぷっ！」ってやって見せてくれるんだよな。それをおバカな人間達がみてありがたそうに喜ぶワケだ。

早速、そのワンオブおバカであるめぐみがやってきて

「たっつー、行ってみよー！ 海の珍獣ショーだつてさ！ みたいみたい！」

俺はすでに陸の珍獣を連れて歩いてますがね。

さつきから周囲にいる若い男ども、水槽を見ないでお前を見ているよ。

つてか「海の生物ナマ公開ショー」というのはなんだ？

これは聞いたことがない。どういう催しものなのか、ちょっと興味ある。

「ん。いいケド」

ケータイで時間を確認すると一時五十分。間もなくだ。

俺とめぐみはその「アクアスタジアム」たらしい会場へと行ってみた。

屋内施設であるそこは、どでかいプールをぐるりと取り囲むようにして観客席スタンドが設けられていて、確かにスタジアムっぽかった。

開演時間が迫っているせいか、すでにたくさんの客が着席している。

「たっつー、あのへん、よくねえ？」

「おっ」

目ざといめぐみが、正面の中段あたりに空いた席を見つけて俺を

引つ張つていった。近すぎず遠すぎず、真正面だからよく見える。程なくショーは始まった。

まずはイルカのショー。

四頭ものイルカ君達がすごいスピードで泳ぎつつ登場したあと、営業テンションの飼育員お姉さんが繰り出す指示を次々とこなしていく。

賢いよなあ。何であんなにアタマがいいんだろう？

「おー、すげえすげえ。アタシ、いくらなんでもあれはムリ！」隣でぶつぶつ言っているめぐみ。

確かに無理だね。

お前が四メートルもジャンプするなんてのは。ってか、なぜそこで自分とイルカを比較する？

「……はいっ！ とつても元気な、イルカ達のショーでした！ ありがとうございましたあ！」

チャラ子なめぐみにはとてもできないような数々の曲芸を披露しつつ、十五分間のイルカショーは終了。観客達は大喜びしている。

イルカ君達は「がっ、がーっ」と耳障りな声（彼等は大真面目だろうが）を出して挨拶したあと、舞台裏へと去って行った。

そして、すぐである。

『みなさん、本日は近海マリンミュージアムへようこそお越しくございました。……第二部は、世界・海のびっくり生物ナマ公開ショーをお送りいたします。とーっても不思議な海の生き物たちを、ナマでご覧いただきましたましよう！』

今度はうつて変わり、ひどく重低音な男性ボイスのアナウンス。

わーっ！ パチパチパチパチ……観客席からは大拍手。

「へーっ。何が出てくるんだろうねえ。でっかいアワビとか、ホタテとかかな？」

お前の予想は食い物かよ。

ちゅーか、そんなでかい寿司ネタなんか見たくもねえぞ。

『それではまず、この生き物から！』

おおーっ！

どよめきが起こった。

プールと観客席の間にあるスペースがいきなり「ぱっ」と口を開け、舞台下から大きな水槽がせりあがってきたからだ。

その中には　なんと、あり得ないサイズのアワビがいた。

殻を被っているから、まるで大きな岩のよう。間違いない気持ち悪いだろうから、ひっくり返ったところは見たくない。ってか、そこまででかく育っておいで人間に捕まるなよ。思わずツツこみたくなつた。

「ほらほら！　アワビだつて！　たつっー！　あれ、ヤバくねえ？　めぐみ、なぜか大喜び。

うんうん。ヤバいね。何が「ヤバい」のかはまったくわからんが。とまあ、そこまでは良かったが

「あんなん寿司屋、ボロもつけじゃん！　」
「やっぱりそこかよ。」

寿司屋の大将の方が食われてしまうわ！

「はい、沖永良部島で取れた、巨大アワビでした！」　産地の紹介は要りませんから。

そんな具合に、次から次と登場するゲテモノ達。

エビだのイカだのヒラメだの　　しまいには「ホタテ」ときた。

みんな寿司ネタかよ！

冗談抜きで「巨大寿司ネタショー」とかにイベント名を変えた方がいいんじゃないだろうか？

途中からもしや、とは思ったが

「あー。なんか寿司、食いたいなあ……」

隣から、ぼそりと呟く声。　聞かなかつたことにしよう。

げんなりしていると

「……さあ、本日最後の登場です。巨大な生き物達ばかりが登場してきましたが、今度は違います。　世界初公開、世にも珍しい生き物です。心してご覧ください！」

ほお。世界初公開か。

そいつはいいや。食い物の類でないことを祈るよ。

アナウンスが途切れるや、場内の照明が一斉に消えて真っ暗になった。

会場のあるこちらから、予想する声が聞こえてくる。

ちなみに、めぐみの予想。

「……なんだろうね？ 巨大な大トロとかだったりして」

それはマグロっていう魚のことです。

例のスペースのあたりを目掛けて、天井から何かが下ろされてくる気配がある。

真っ暗だから、それが何なのかは全然わからない。

ややあつて

『……それではみなさま、どうぞご覧ください！』

アナウンスと同時に、パパパツとサーチライトが灯った。

いいかげん、目が闇に馴染んだ頃の明かりだったから、眩しくてよくわからない。

が、めぐみはソッコで

「うっわ！ なに、アレ？ マジで!？」

叫んだ。

なにがマジなんだ？ お前みたいなヤツでも驚くことがあるのか？

少したって、ようやく俺の視界がはっきりしてきた。

「……!？」

それが見えた瞬間、俺は思わず我が目を疑っていた。

海底のようにしんと重いアクアブルーのライトの中、まるで宙に

浮いているかのように漂っているその神聖な姿。

上半身は美しい女性、下半身は輝く鱗で覆われた魚の形。

要は……人魚だ。

そしてその顔を、俺はかつて間近で見たことがある。

はつきりと、思い出した。

忘れもしない。

忘れられるワケがない。

あれって ナーちゃんじゃないか！！

何でこんなところにいるんだよ！？

少なくとも、彼女の意味ではないだろう。

でっかい金魚蜂みたいな水槽の中のナーちゃんはそつとつつむき、何ともいえない悲しそうな表情をしていたからだ。俺には、一別以来彼女に降りかかってきたであろう何事かをすぐに想像することができた。

『どうしてこのような人魚が誕生したのか、その理由は解明されていませんが』

男声のアナウンスが、なんじゃかんじゃと解説を加えているが、俺の耳には届いていない。

一体……どこのどいつが？

どうして、ナーちゃんを見世物なんかにするんだ！

ふつつつと煮えたぎってくる最大級の怒り。当たり前のことだが、俺はそれを沈めることなど到底できなかつた。握り締めた拳に震えがきて止まらない。

どうする？

どうすればいいんだ？

このままじゃ、ナーちゃんは

『世にも不思議な、人魚の登場でした。みなさま、いかがだったでしょうか？』

水槽の縁に取り付けられているチェーンが、ぐつと軋んだ。

いかん！ 吊り上げられていつてしまう！

『みなさま、最後にもう一度、美しい人魚の姿を、とくとご覧
ガッシャアン！』

アナウンスがピタリと途切れる。

会場中が瞬時に、シンと水を打ったように静まり返った。

中央のステージでは 金魚蜂のような水槽が木っ端微塵に砕け、水がどくどくと流れ出している。素材は意外ともろかつた。

何が起こったのかわからず、ステージの中央で呆然としているナ
ーちゃん。

「た、たっつー……？」

めぐみもまた、啞然としている。

そりゃあ、そうだろうな。

何でつて、咄嗟に俺が 水槽目掛けてケータイを投げついたり
したから。

「めぐみ！ すぐにここから逃げろ！ いいな！」

「へ……？」

言い捨てておいて、俺は前にいた観客の頭を飛び越えた。

やるしかない！

例え、ここにいる観客全員、いや、海の世界の連中すべてを相手
にしなきゃならなくなったとしても ナーちゃんだけは、俺が助
ける！

その15 再会ですね！

突然のことで誰もリアクションなんかとれやしない。

だから、中央のステージまでたどり着くのは造作もなかった。無我夢中で前に進もうとするあまり、途中でよその親父にケリ入れてしまったけれども。……すまん、オッサン。

前に陣取っていた観客をメロスのように（？）飛び越え掻き分け、俺はステージに飛びついた。

思いがけず、ナーちゃんとの再会を果たした俺。

ほとんど一年ぶりだな。

初めて出会った というよりも、俺が思いっきりナーちゃんを釣ってしまった のが、去年のちょうど今頃だった。一緒にいたのは、ほんの数日の間。間もなく彼女は海の世界の対立する勢力に襲われて拉致られ、助けに行こうとするも俺達を巻き込むまいとする葵さんに止められた。葵さんはイワシ野郎だけを連れて海へと戻っていき それきりだった。

前よりもちよつと、やつれてしまっているのが痛々しい。

彼女は突然目の前に人間が現れたせいか、びっくりした顔をしていた。

が、それが俺だとわかるや、大きく瞳を見開き、そのまま「ふわあぁ……」って泣き出しそうになった。

よかった。ヘンな組織に記憶とか消されたりしてなかったか。

感動のごたいめん とききたいところだが、そうもいかないのは百どころか五千くらい分かっている。

騒ぎ出した観客。

慌てて警備員に通報している係員。

うかうかしていたら、俺がとっ捕まってそれまでだ。

しかし、策はある。

こんな時、素晴らしく悪知恵が冴える（自慢だが）俺なんです！

すうつと大きく一つ、息を吸い込むと

「みなさん！ ダマされちゃダメです！ この人魚は、ニセモノなんです！ 美人飼育員のおねーさんのコスプレですよ！ 人魚なんか、いるワケないでしょう！」

ぶちまけてやった。

ナーちゃん。再会早々、公の場で君の存在を否定するような発言をしてすまん。

だけど この状況から彼女を救い出すには、この手が一番いいと計算していた俺。

案の定、途端に観客席は騒然となった。

そりゃあ、騒ぐはずだ。

入館料とは別に、このショーを観るにはカネとられるんだもの。

俺だって、めぐみの分とあわせて千円も取られた。……あれ？ 何でヤツの分まで払ってるんだ？

「お客様！ 落ち着いてください！ あの人は、ニセモノではありません！」

飼育員のおにいさんが走り出てきて声を限りに叫んだが、おつつくものじゃない。

「おい、あんた！ 本当なのかね？ ウソをついてカネを取っているのかい？」

前の方に座っていた中年の親父が、飼育員のおにいさんにからみ始めた。

「ウソじゃありません！ 本物なんです！」

「本物だつていうなら、証拠はあるのか！？ さっき、きちんとした説明がなかったじゃないか！」

「それは、その……」

泣きそうになっているお兄さん。

彼に罪は（たぶん）ないが、ここはもう一発かましておく必要があると思つた俺は

「俺、見ましたよ！ 間違つて裏方に入っちゃつて、そしたら」ナ

「ーちゃんを指し「あのコが着替えているのが見えたんです！ 誰かと話してましたよ。あたしは今日、人魚役なんだって。あのコ、バイトですよ、バイト！」

我ながら、リアリティたっぷりのウソだこと。

ああ、上出来上出来。

「な……！？」

この世のモノではないものを見たような顔で俺を見たお兄さん。悪いな。あなたの犠牲は無駄にしないよ。

俺が放ったトドメの一言は、アクアスタジアムに激動の嵐を呼んだ。

クレーム親父の傍にやってきて事情を聞こうとする人もいれば、他の係員に詰め寄る人もいる。が、それよりも、さっさと立ち上がって会場を出て行く人がどんどん出始めた。チケット売り場でも、恐らく波乱があるだろう。カネ返せ、とかってね。

イルカショー混乱の計、大成功。

どさくさに紛れ、俺はナーちゃんの傍へ駆け寄った。

なぜ周囲で人間達がすったもんだを始めたのかわからないナーちゃん、ちよつと呆然。

が、寄って来た俺を見ると満面の笑みになって、額をくつつけてきた。

『ああ、達郎さまっ！ またお会いできるなんて……』
そう。

人魚のナーちゃんは人間世界では言葉を発することができない。しかしその代わり、額と額をくつつけることで人間とお話ができるのである。

『ナーちゃん！ 話はあと！ こっから逃げるよ！』
すると、彼女は途端に表情を曇らせた。

『達郎さま……どうか、私を置いて逃げてください！ 私は、私は……』

ん？ なんか、逃げられない理由があるのか？

一見、何ともなさそうだが。以前のように、美しくてセクシーなままじゃないか。

が、俺達はそので会話を中断しなければならなかった。

「おい！ そのキミ！ こっちへ来たまえ！」

おお、きたきた。警備員がわさわさとやってきたぞ。

ナーちゃんをだっこしてとんずらするか？ いや、後を追われるのは面倒くさい。

ここは一つ、奴らを黙らせておくべきだろう。

俺はぐるりと周囲を見回した。

目の前には大勢の人ばかりができているから、迂闊に突っ込むことはできない。かといって、後ろはでっかいプール。これぞ真正正銘「背水の陣」か。……とか何とか、一人で納得している場合じゃない。

が。

時速百二十Kmの球でも打てるこの俺の視力は伊達じゃなかった。意外なところに意外なものを見つけてしまったのだ。

背後のプールの向こう側に、イルカのショーで使われるステージがある。

その舞台袖、ほとんど観客から見えないような位置なのだが、この壁に「客席側」と書かれた張り紙、そしてその下にはなにやらスイッチらしきものが……。

(あれくらいの距離なら……なんとかなりそうだな)

咄嗟に判断した俺。

幸いなことに足元には、さっきナーちゃんが押し込まれた水槽めがけて投げつけた俺のケータイが落っこちている。

さらば、俺のケータイ！ そしてありがとう！ フォーエバー！
内心で最後の別れを惜しみつつ、そいつを思いつきり投げてやった。

俺とナーちゃんの絆を結ぶケータイは、あやしげなスイッチ目掛けて一直線に宙を飛び　まあ、野球部員として当然(強肩でない

俺には苦しいところだ）ではあるが「ガン！」と命中してしまった。誓って言う。

あれが何のスイッチなのか、俺は全く知らなかった。

ってか、ほとんど「なるようになれ」っていう、捨て身の行動。

もし、俺とナーちゃんの縁が「すでにぶつつり！」だったら投げたケータイは外れていたかも知れない。あるいはあたってにせよ、警報の一つでも鳴ったくらいにして、俺は警備員どもにボコられていただろう。しかし、運命の女神は俺達に微笑み、いや……大口を開け、腹を抱えてゲラゲラ笑ってやがったらしい。

俺が遠隔操作（？）で押したスイッチ、それは 悪魔のボタンだった！

不意に、頭上で「ウィーン」という機械音がしたと思った瞬間、ぼてっ

でっかい何かの塊が降ってきた！

「うわーっ！」

「ぎゃあああ！」

中央ステージ付近にいる客達が、次々と完璧な悲鳴を上げた。

いや正直なところ、俺も一瞬マジビリしました。

上からあの「寿司屋の大将も食われるバケモノアワビ」がやってきたとあればね。

だけではなかった。

さきほど観客達にきわめて不愉快な思いをさせた、エビだのヒラメだのホタテだの（全部に「巨大」がつくことは言うまでもない）、オールキャストでアンコール！ 床下からせり上がってきたり、アワビに続けてふって来たり、なんともサプライズな再登場。

しかも、今度は真正銘「ナマ」だ。彼等と俺達を隔てるものは何一つない。

なおも会場に残っていた客達こそ悲惨だった。

怪獣から逃げる市民のごとく、どどどと出口に殺到。

それよりも哀れなのは駆け寄ってきた警備員達だった。

俺をとっ捕まえようとしてステージ上に這い上がった直後に「ナマで巨大な寿司ネタ・サプライズショー」は開演してしまった。

「あーっ!!! あーっ!!! ああーっ!!!」

絶叫しながら逃げ惑っていらっしやる。「愛してます!」と言わんばかりに、なぜかその後を追っていくエビやアワビ達。……言い忘れたがナマコもいました。

中央ステージ上は壮絶な地獄絵図と化した。

うーん。

警備員の皆様方、人間相手に向かっていけても、海の愉快的な仲間達は苦手でしたか。

俺はというと　あとをみんな（海の愉快的な仲間達の方だが）に託し、大勢の観客達に紛れてその場を脱出した。
もちろん、しっかりとナーちゃんを連れて。

とっそこ走って走りまくり、気がつけばまだ地ならしされたばかりの埋立地に入り込んでいた。

何も手がつけられていないから、ただのただっ広い空き地ではない。

当然、そこには人っ子一人いやしなかった。

（ここまでくれば……大丈夫、だろう……）

毎日の自主トレで鍛えているとはいっても、さすがに息がきれた。ナーちゃんをお姫様だっこして何百メートルもダッシュしてきたのだから。

『達郎さま……大丈夫ですか？　とても辛そうですが……』

ぜえぜえやっている俺を見て、心配そうなナーちゃん。

『いや……すぐに、落ち着くさ……それよりも
そう。』

俺のことは別にいい。

ほどほどに呼吸を整えると、

『……いつたい、何があつたんだ？ どうして、あんなことをさせられたんだよ？』

俺が一番訊きたかったこと。

すると、彼女はみるみる悲しそうな顔をした。

『達郎さまとお会いできなくなつてからも、ブルーフィッシュはなんとか海の世界で平和を保とうと、ほかの勢力と話し合いを続けてきました。でも……』

くすん、くすんと泣き出したナーちゃん。

『とても強大になつた海獣組の者達が、暴力をもつて私達を攻めてきたのです。葵さんやイワシヤールが必死に食い止めようとしてましたが、敵いませんでした。それで、ブルーフィッシュは……』
吞まれてしまったのか。

滅ぼされたようなものだな。

『で？ 葵さんとかイワシは？ どうなつたんだ？』

そう尋ねると、ナーちゃんは涙で濡れた顔を上げ

『葵さんは捕えられ、海の世界の総督府に監禁されています。それで、もし私が抵抗するようなことがあれば、葵さんは殺されてしまうのです。それで海獣組の者達は、私がどうすることもできないように、さきほどの建物を作つた人間達に私を売り飛ばしたのです。』

……だから私、折角達郎さまにお会いできたとはいえ、すぐに戻らなくてはならなくて』

それきりナーちゃんは、俺の首にしっかりと抱きついたまま泣き続けた。

よしよし、可哀相に。

辛いよな。

葵さんを救うために、じつと我慢してきたんだもんな。

よくここまで頑張ってきたよ。

でも、もう泣かなくてもいいぞ。

『……ナーちゃんさ』

『はい……』

ひつく、ひつくとしゃくりあげている。

『もう、お別れするのはやめようぜ。お別れしたからって、なんにもいいコト、なかっただろ?』

『……』

ナーちゃんは困った顔をしている。

まあ、それはそうだろう。

俺達のような人間に助けを求めたなんて知られたら、彼女にとつて何よりも大切な人が殺されてしまうんだからな。

だけど　そうと決めるのはまだ早い。

『ナーちゃんさあ』

『はい』

『葵さんを助け出すことができれば、俺達また……一緒に、いられるのか?』

『それは、そうなのですけれども……』

うつむいてしまったナーちゃん。何と答えていいのかわからないようだ。

優しいよなあ。

そうなったらそうなたで、今度は俺達が狙われることを恐れているんだらう。

でも、俺と一緒にいたいっていう気持ち、今ももっててくれていることはわかった。

それだけで十分だ。

ま、襲われたらそんなときやまた考えりゃいいじゃん。今、そのことを考えて勝手に臆病になっていても始まらない。

あれから、俺にはわかったコトがあるよ。

大切に想い合う者同士が、わざわざ離れようなんて思っちゃいけないんだ。

却って、お互いが不幸になるだけさ。

大事なことは　心で分かり合える者が一緒にいて、力を合わせること。

そうすれば、思いもかけない力とかアイデアとか、勇気が生まれる。

『……よし！ そうとなりや、話は早い。 行くぞ、その総督府とやらへ！』

力一杯言つと、ナーちゃんは「えっ!？」という顔をした。

『で、でもでも！ そんなこと、いけません！ 海獣組の者達はとて力が強くて、達郎さま達のような人間の方では、とても……』

『へっへっ、まー任せておけ』
不敵な笑みを浮かべた俺。

海獣組の連中は確かに強いかも知れないが といつて、人間様をなめるなよ？

俺には超強力な秘密兵器がある。

今からそいつを調達しに行く。で、とつとと総督府に乗り込んでやる。今度はこつちから、な。

そういう目論見をやるわりとナーちゃんに伝えてやると
『え……でも、でも』

彼女はどうしても心配で、仕方がないようである。

『だーいじょうぶだって！ 大船に乗ったつもりで安心して見てな。葵さんは絶対に助けてみせるから！ ついでにあのバカイワシも』

つてか、むしろ 海獣組の連中の方があぶないぞ。

あいつが相手となれば。

その16 リーサルウェポン、見参

それから三十分後。

俺は自宅に戻って半裸のナーちゃんにTシャツを着せてやり、海の世界へ乗り込むために必要な準備を整えた。最後に、放置状態にある母親・幸子のケータイをかつぱらって再び家を出る。

歩きながらケータイを取り出し『秘密兵器』に連絡を試みた。

概ねいるだろうとは思ったが やっぱり、いた。

「もしもし？ 俺だよ、俺。海藤だけど」

まだ名乗っている途中だというのに

『 おオ、タツ！！ 生きてんのか、おめエ！！ くらら！！』

ヤンキー丸出しな発音が受話部分からぶつとんできた。

声、でか！

音がフツーに割れてる。思わずケータイを耳から遠ざけてしまったほどだ。

俺に抱っこされているナーちゃんが「びくっ！」とした。

「マサ、今何してんの？」

『なんもしてねエよ！ ヒマなんだよオ！ ちゅーかさあ、い

つつもナニしてんの、おめーよオ！ 最近、俺と遊んでくれねエん

だもんよオ！ 俺、つまんねーじゃん！』

おまいはガキか。

図体でかいくせに、遊んでくれないとかゆーな。

それに、お前の遊びに付き合おうとロクなことが起こらんからな。

まあそれはともかくとして、ヒマとは好都合この上ない。

「じゃあさ、新港一丁目のコンビニまで来てくんない？ 協力して欲しいことがあんだよね」

『はア！？ 俺にイ？ マジかよ！ カネは持ってねエけどオ……

んまあ、いいよ！ マツハで行っからあ、ちよっと待ってて！』

ほとんど叫びつつ、そのまま一方的に電話は切れた。ってか「マ

ツハ」って……。

『……達郎さま？ 今、とても大きな音が……』

『ああ、そういう声の人間なもんでね。 ところで、ナーちゃん』

『はい、達郎さま』

ここで彼女に、あらかじめ伝えておかねばならない注意事項がある！

『もうすぐ、俺の知り合いがここへくるけれども……決して、敵とか悪い奴ではないからね？ 怯えなくてもいいよ』
そう。

ナーちゃんが何の予備知識も持たずにヤツを一目見たならば、きっと混乱のあまり泣き出し、取り乱してしまつてしまつてに違いない！
だが。

あと三分もしないでここへ駆けつけてくるであろうその人間は、見てくれこそ（言い直そう。素行にもだいぶ）問題があるもの。ブルーフィッシュ共和国を救うための、単純すぎる最終兵器なのだ。その破壊力たるや、イワシヤールが一万匹束になっても敵わないといつていい。というか、ヤツを比較の対象にすること自体誤りだが。

……で、それから約一分半後。

「おう、タツウ！ いたのかよオ！」

いや、待ってるって言つたじゃん。

だから待っててやったのに。

それはさておき、現れたそいつを見た途端、案の定ナーちゃんは「ぎゅっ！」と俺に強く抱きついてきた。

まーねえ。

これも人間っていう生き物の一種なんだ。

茶だか金だか分からん色に染まった髪の毛。しかもジェルで固めたライオンみたいにおっ立ててる。全開なごっつい額の下で眉毛の存在はほぼ消滅し、代わりに鋭い目が細く光る。黒いTシャツの袖を肩までめくり上げているのだが、プリントされている『A - 無捨

瑠・D A m!』っていう文字、それに身体がダイナマイトボインで頭部がガイコツっていうイラストの意味がまったく不明。ついでに穿いているズボンの太さたるや、俺とナーちゃんが二人で入ってもまだ余るのではないだろうか。

「よー、マサ。久しぶり。急に呼び出してゴメン」

「お前待たしたらヤベエ思ってたよオ、俺、マジマツハで来た！ ひやひやひや」

キツつくて直視するに耐えないカオとはいえ、笑えばどこか愛嬌がある。

見た目とやること環境破壊そのものだが、付き合えば底の底では悪いヤツじゃない。

こいつはマサ。

鮫島正彦という。

説明を要しないとは思いが、見たまんまである。心身ともに純度の高いヤンキー。

この辺では悪名高い「近海工業」の生徒で、国家権力のお世話になること枚挙に暇なし。ここまで国家をてこずらせた男もそうそういないだろう。ある意味英雄に近い。

俺がなんでこんな野郎と知り合いなのか？

実はこいつも、かつては近海工業の野球部員だった。

それは去年の秋のこと。

運に見放された我がヘッポコ軟式野球部は、こともあろうに近海工業と秋の地区予選一回戦でかち合ってしまった。

試合前からみんなマジビビリしていたが、始まってみれば本当に最悪だった。

試合開始の挨拶どころかメンチ切りまくりだし、まったく聞き取れない悪口雑言を絶えず投げつけてくる。いや、実際に物も飛んできた。

しかもピッチャーはノーコンもいいところで、投球がどこへいくのか誰もわからない。そういうヤツに限って「元気いっぱい！」投

げてくるから、バッターは怖くて打席に立っていることができないのだ。俺はスタメン五番だったが、前の三人までは出塁した。ヤツにデッドボールをお見舞いされたせいであることは言うまでもないで、俺の打順。

まず、ボールよりもガンが飛んでくる。

一球目、俺の背中を速球がかすめた。ボール。

二球目、俺の腕をすごいスピードでかすめてボール。そこで俺は確信した。

ああ、あいつはわざとやっている。

三球目は予想通りのコースへきた。

俺の顔面。

視力が良くなかったら、行き先は一塁ではなく病院だった。

その素晴らしくて涙が出そうなインコースを、髪一筋でよけた俺。ピッチャーはすぐに「ちっ！」という表情をしたが、コンマ数秒後にリリースした。

ヤツの脳天すれすれを　　バットが通過していったからだ。

バットと同時に、俺の罵声も飛んでいた。

「…………どこ投げてやがんだ、このバカ野郎！　引つ込めクソピッチャー！」

味方ベンチもコンクリートしていたことだろう。その名を知られた凶悪校のピッチャーを「クソ」呼ばわりしたからには。

「…………んだとオ！？　コラア！！！」

マジギレしたクソピッチャーが突進してきた。

「こっ、こら！　やめるんだ！」

審判の親父が制止したが、キレているヤンキー野郎が聞き入れられるはずもない。

「死ね、コラア！！！」

間合いを詰めきつたクソピッチャーから、左のストレートが飛んできた。なぜ左だったのか、そして「死ね」だったのかはわからない。

が、ヤツの不幸は、俺を他のボンクラメンバーと一緒に見たことだろう。

きちんと教えてあげるのが親切というものである。

時速百二十Kmを毎日打ち続けると、やがてどういうことになるのかを。

「……………てい！」

やつの左をあっさり流しざま、ほとんど自然な素直さで、グーのパンチを差し上げた俺。

不幸なことに、ほぼ正面でクソピッチャーの左ヅラがから空きだつたからだ。

「ふくおっ！！」

俺の一撃を浴び、奇怪な声を発しながら三メートルも後ろに吹っ飛んでいったクソピッチャー。

両ベンチ、ならびに関係者の皆さま「あー！ やっちまった！ あふえーん！」な空気。

クソピッチャーは深刻なダメージを喰らったのか、少しの間仰向けになってお休みしていた。

やがて

「くっ、くそ……………」

手の甲で口を拭いながらよろよろと起き上がりかけた。が、
「まだまだ……………！俺はこんなへボいパンチで……………」

短くコメントを残したあと、ずしゃりと崩れ落ちてしまった。

ということ、俺を病院送りにしようとしたクソピッチャーは逆に病院へ運ばれた。

近海工業ベンチの連中が報復しようと思いついて飛び出してくるかと思つたが、意外にもそれはなかった。あとからめぐみが仕入れてきた情報によると、俺が叩きのめしたクソピッチャーこそが近海工業をシメているヤツだったらしい。つまり、ボスをやられてビビってしまった、という話だったようである。

うちのヘッポコ野球部、いわゆる反則負け的な処分。一点も取ら

れずに負けたのは創部以来初めてであることは言つまでもない。

俺個人の処分に關してはすつたもんだしたようだが、気が付いたらなかつたことにされていた。

先に手エ出したのが近海工業だったのが大きな理由らしいが、俺も校長から形ばかりの説教を食らつた。校長はもつともらしい顔で「そういう時は逃げなさい」と言つたが、俺は黙つていた。

しかし、一回の表で早くもぐだつてしまつたこの試合は、思わぬ副産物をもたらした。

数日後、街でばつたりと「クソピッチャー」に出会つちまつたのだ。

が、ヤツは気持ち悪いカオ（今思えば、恐らく笑顔だったのだろう）で近づいてきて

「……俺を一撃でのめしたヤツは、おめエだけだつて。気持ち良すぎて、礼する気にもなんねーぜ」

何言つてんの、こいつ？

一瞬思つたが、ヤツは妙にフレンドリーな雰囲気をかもし出している。

仕方がないのでそこにあつたファーストフード店に入って話をすることにした。するとまあ、質問もしないのに一人で勝手に喋る喋る！ しまいには

「オレよオ、近海南洋の波田亜美ちゃんが好きなんだつて！ キスとかしたくねエ！？ キスとか！」

それ、どこのどなた様ですか？

知らない人にキスなんかしたくないし。

つてか、ごつい顔をとりけさせて身をよじるのはやめろつて。

もう一発叩き込みたくなつたが、辛うじて我慢した。

店内にいた女子高生達、ドン引き。

バカ声上げて喋るものだから、店員の女の子があからさまに「ウザッ！」って顔してる。

まあ一つだけわかつたことは 俺が逃げずに真つ向から挑んで

(決してそのつもりはない)きた末にやられたケンカ(これもそのつもりはない)だから、イヤな気がしないのだそうだ。回りくどくてわかりにくい話を総合すると、ヤツはこれまでケンカ負けなしできていたらしく、負けることが怖かったという。が、こういう文句の言いようがない強いヤツ(トドメだが、そういうつもりはない)に出会えて、気分がいいとかいうことのようなのである。

これぞ「拳で語り合った」だ。

マサのヤツ、カネがないらしくカウンターで「オレ、水!」とか言いそうになったので慌ててストップをかけ、仕方がないから「LプラスさらにLセット」をおごってやったせいなのかどうか、別れ際にヤツは

「お前、いいヤツだよな! いいヤツだよな! マジ、いいヤツだつて!」

連呼しつつ去っていった。

以来、どういうワケかこのマサとの腐れ縁が続いている。

ヤツは俺と一緒にいるナーちゃんを見て

「うえっ! なに、そのコ? マジカワイくねエ? タツのカノジヨ? いきなりプリハグ(お姫様抱っこのことらしい)かよ! どこの「コ?」

どこのコって、アンタ……このぴちぴちしている尾ひれが目に入らぬか。

『達郎さま、こちらの方が……』

『そうだよ。ブルーフィッシュに力を貸してくれる助っ人さ。葵さんみたいな強いんだ』

いや、ある意味葵さんより強いかもしれない。

俺の言う事を素直に信じたナーちゃんはマサを見て「にこっ」と微笑んだ。「はじめまして!」的な、超キョートスマイル。

「うっわ! マジ? カノジヨ、マジヤバくねエ? いいな、お前! いいよな!」

ナーちゃんが人魚であることに何ら関心はないらしい。ヤツの中

ではとにかく、かわいければOKなようである！ ……単細胞も時には救いになるんだな。

「でさ、頼みがあつてね」

俺は省略しつつテキストに歪曲してあらましを聞かせた。

このナーちゃんのお姉さんが悪い連中に捕まっついて、これから助けにいきたい。で、マサにも力を貸してほしいのだ、と。

ちよつと端折りすぎたかと思つたが、マサは

「なに、ケンカ？ ケンカ？ つえエの？ そいつら？ 俺も行く！ 行く！」

これで十分だった。

ケンカと聞けば血が騒ぐような仕組みになつていゝのだ。めっちゃ嬉しそうな力オをしている。

マサのテンションを高めた方が後々有利になると思つた俺、

「もう一つ、いいコト教えとくな。 ……警察は絶対に来ないから！」

国家権力の面倒くさを身体全体で知つていゝマサは目玉をでっかく見開き

「えっ！？ マジで！？ ボコつてもサツとかこねエの？」

海の中ですから。管轄は海上保安庁 …… っつて、そういう問題じゃないけどね。

俺だつて正直なところ、行つたことはない。海の世界なんて。

けど、一応ナーちゃんには確認してある。

『俺達みたいな人間でも、海の世界つて行けるのかな？』

『はい …… ずっと前、葵さんのお父様も来たことがあるそうです。最初だけ、ちよつと苦しいかも知れませんが ……』

が、このケンカバカにそういう説明はまったく不要だった。

「こないよ。来れないんだもの」

「うっわ！ マジで！？ やるよ、オレ！ マジ、やるわ！ うわ

ー！ チョーテンション上がるって！」

狂つたように（訂正。そもそも狂つていゝ）喜び始めたマサ。作戦成功。

「そーだ！ ガツとかヒデとか呼んでいい？ あいつら、マジくるつて！ ぜってェー！」

「おーおー、呼べ呼べ。」

「幾らでも呼べ。」

「つてか、どこの誰だか知らないが。」

それから五分ばかり、マサは知り合いに電話しまくっていた。

コンビニの駐車場をぐるぐる歩き回りながら大声で喋っているその様子は、どう見てもチンピラの若衆だが、今はどうでもよい。

「達郎さま？ マサ様は何をなさっているのですか？」

「ナーちゃんが不思議そうな顔で尋ねてきたので。」

「ああ、今仲間を呼んでいるんだ。葵さんを助けに行くのに、少しでも味方が多い方がいいからね。」

説明してやると、たちまち目をうるうるさせたナーちゃん。

「まあっ！ そこまで私達のためにしてくださるなんて……！ 私、感激です！」

彼女の笑顔に、俺はあの時 さっきの近海マリニミュージアムの一件 勇気を奮い起こして本当に良かったと思った。今頃まだ大騒ぎしているだろうが、俺の知ったことではない。奴らがやってきたことは、ガチで人身売買なんだし。

やがてマサは戻ってきたが

「ガツ、今日仕事かよオ。ヒデはつかまんねーし」

「がっかりした顔をしている。」

「戦力アップならずか。」

「ま、それでもマサがいてくれるだけで相当頼りになることは言うまでもない。魚人の十匹や二十匹は朝メシに、じゃなくて朝メシ前だろう。俺のシュートでも軽くお空へ飛んでいく奴らである。」

問題はウツボとか何とか、海獣組とかいうお魚を外れた連中。ま、俺とマサ、二人がかりでたまたみ込めば何とかなるだろう。家に戻って多少の戦闘準備はしてきたし。

「じゃあ早速海へ、と思った時である。」

「……あね？ マサとタジジね？」
「なに？」
「……あね？ マサとタジジね？」

その17 今なら増量中につき

ぶらんぶらんしていたマサの動きが、瞬時に「カキコキ」となった。

「あつ、姐さん！ どっ、どーも、お疲れッス！」
びしっ

見事に直角九十度の礼がキマっている。

「なんだよオ、マサ。その『姐さん』っの、いーかげんヤメてくれよなア。アタシ、極道のなんたらじゃないし」

ケラケラと笑っているその女性。

一之瀬由美。いや、由美さん。

俺達より二つ年上だから、今年十九歳。だから、さんをつけるべきだ。

見てくれはキレーなおねーさま。ぐいんとウェーブのかかった長い長い茶髪に、ちょっと鋭い感じの目、そして小さな鼻と口。白いTシャツに足の付け根ぎりぎりなパンツがほど良くセクシーで似合っている。オフだからなのか化粧なんかほとんどしていないのだが、それでも十分に美しい。

しかし、彼女はかつて 女だてらに近海工業、それに近隣のガッコーをシメていた。

いっつなれば、女番長だったらしい。

わかりやすくいえば、ケンカが強かったってことだ。

マサと友情(?)が芽生えてから少したって、俺は由美さんと出会った。

例によってマサと街をのし歩いていたら(それはヤツだけだが)、道の向こうからやってきて

「おう、マサ！ 元気かア!？」

と、いきなり声をかけてきた。

途端にマサは「ぎっくしゃっく」とロボットの如くアタマを下げ

「姐さん！ お疲れツス！」バカ声を上げて挨拶した。道行く人が振り向いたよ。

「そのバカみたいなお挨拶、ヤメなつて。はずいじゃん」

由美さんは苦笑いしていたが、ふと俺を見て

「……アンタ、潮清にダチなんかいたの？」

潮清つてのは、俺の学校の名前。

「こつ、こいつはその……野球の試合で」

急に汗だらだらになって俺との出会いについて必死に語り始めたマサ。

何をそんなに力説する必要があるのかと思ったが、由美さんの顔から笑みが消えている。

「で、オレ、タツのパンチ一撃でマイっちまいました！ すんません！」

いきなり謝罪しやがった。舎弟の関係でもあるのだろうか。

「ふーん……」

由美さんはしばらく、胡乱臭げにじろじろと俺を眺めていたが

「アンタ、そんなに強いんだ？」と、きた。

微妙に敵意のオーラがある。

どう言ったものかと一瞬考えたが、こういう人に媚びた態度をとるのは十中八九逆効果。飾らない自分のままぶつかってやった方がいいと思い

「強いかどうか知らんですけどね。……やられそうになったから、やっただけですけど？ やられっぱなしは嫌いなもんで」

俺のそういう力の抜けた答えが可笑しかったらしく、由美さんはぷつと吹き出し

「あつはつは……やられそうになったからやった、か。で、一発でしょ？ 一発なら、しゃーないよね。近工シメてるヤツがそれで参つたんじゃあ、キンタマ縮んでるわ。あつはつは」

「す、すんません……」

真っ赤になつて小さくなっているマサ。

由美さんはさんざんに笑ってから

「ま、メチャメチャにボコリ合ってから負けたんなら許さないけど、一発じゃあ、ね。どーみたって、この……ええと」

「達郎です。海藤達郎」

「そう、タツ！ タツね。 タツの方がダンゼン強かったってコトじゃん。なら、しゃーないわ。せいぜい、鍛えてもらいなよ。その一撃必殺の右ストレートをさ」

毎日球速百二十Kmを打っていれば、誰だつてなれますよ？

まあ、彼女の言いたいことは何となくわかった。

競り合ってギリギリならまだ超えようもあるが、本当に超えられないんだつたら違うやり方もある、ってことだな。さり気無く深いこの由美さん、逆に俺も気に入ってしまった。

あとでマサは教えてくれた。

当時、といつても俺が入学する前の年だが 潮清の男子と付き合っていた由美さんは、彼が抱えていた他校生とのいざこざを何とかしてやろうとして、数校を巻き込んだ大乱闘に発展した。その時思わぬなりゆきにビビった彼氏は学校や警察にまるで由美さんが元凶であるかのようなコトを言い、結果的に裏切ったのだという。

「それからさア、姐さん、潮清の奴らなんか、カオ見れば吐き気がするとかつていうくらいキライになつたんだよオ」
なるほど。

進学校の潮清は、何かと他校生から毛嫌いされている。一つには、勉強は出来てもそういう腰抜けみたいな連中も少なくないからだろう。由美さんのような表現でいえば「キンタマ縮んでる」という奴らだ。で、マサと由美さんはどこでどうつながったのか？

それはよくわからない。

まあ、元番長と現役ケンカ部の大将だから、それくらいのつながりはできてもおかしくない。俺は勝手にそう納得した。

以来、由美さんは何かと俺達に良くしてくれた。

聞けば、彼女は結局近海工業を中退したのだという。で、実家の

家業を手伝ったりしているらしい。

見てくれがキラーなくせに妙に男気があるかと思えば、すごく優しかったりする。

そりゃあ、男子も女子も由美さんを慕うワケだ。

「お？ そのコ、タツのカノジヨ？ ずいぶんとまあ、美人じゃん。だからってこんな真昼間から人前で、よくまあ姫抱き（また違う表現だ！）なんて」

言いかけてから、気が付いたらしい。

「うっわ！ アンタそれ、どーしたのオ！？ 水族館からかっばらった？ それともそこで釣った？」

はい。

両方です。釣ったあと、水族館から強奪しました……って、んなワケないでしょうが。

にしても「それ、どーしたの？」はひどい。

「あー、それはつすね……」

俺が簡単に説明しようとする、マサががばつと頭を上げ

「お、俺達、今からこのコのねーちゃん、助けに行くんス！ なん

かア、よそのガッコーの連中に連れて行かれたらしいんスよ！」

……二言で説明しやがった！

ってか、よそのガッコーはまったく関係ねえよ。

「ふーん……」

無言でじつとナーちゃんを眺めている由美さん。

彼女に見つめられているナーちゃんは、さすがに困った顔で俺の方を見た。

『た、達郎さま？ こちらの方は……？』

『ああ、大丈夫。この人も、悪い人じゃないよ』

しばらくして、由美さんの目がきゅつと細くなった。

「……もっかい、タツから聞くわ。マサの説明じゃ、何がなんだかわからんもの」

そうして俺は、いよいよ海の世界に向かおうとしている。
殴りこみだ。

どんな汚い手を使って（すでにその用意はある）でも、葵さんは絶対に助け出してやる。

新しく建設された埠頭の先端までやってきた俺達。

今日は天気がいいから海面も穏やか。足元には波が心地よく寄せ
てきている。かつては臭くてひどかったカフェオレの海も、今はき
ちんと海の色。そうそう、これが海ってモンだ。

佇む俺の傍にはマサ。そして　なんと、由美さんがいる。

約二十分前のこと。

ああじゃこうじゃと俺が詳しく説明するのを「うんうん」と聞いていた彼女。

話が終わるやいなや「ぱーん！」と自分の膝を叩き

「よっしゃ！　一丁、ノった！　アタシも協力する！」

言い切った。

あ、あれ？

いいの？

「人魚も何も関係ねエ。きたねエ奴らが大っキライなんだ、アタシは」

ありがたい。話が早すぎて。

「姐さんも……行くんスか？」

マサもびつくりしている。

すると、はあ？　という力オで由美さん、

「つたりめエだろ！　このコ、大事な人を拉致られて、困ってんじやねーか！　……ってか、マジ許せねエ！　ぎったんぎったんにしてやるよ、そいつら！」

俺は見てしまった。

かつての彼女の別名『武装天女』がちらりと顔を見せた瞬間を！
こりゃあ海獣組の奴ら、不運だったな。

この街きつての最強、いや最狂ヤンキーをこれから二人も相手にしなきゃならないのだから。

でも……よかったよな。

こうやって、力を貸してくれる奴らがいるんだよ。

ナーちゃんに事情を説明してやると、たちまち「うるうる」して

『あ、ありがとうございます！ 私、私、嬉しくて……つい』

泣き笑いした。

そんなナーちゃんを見て、ちょっと表情を緩めたマサ、そして由美さん。

が、彼女はぼそりと

「今日はアツいし……。ちょっとぐれエ泳ぎたかったんだよな」「いやいや、泳ぎに行くワケではないですから。」

といういきさつがあったのだった。

『……で、ナーちゃん。どうすればいい？』

海の世界への行き方を教えていただきたい！

『海に飛び込みましたら、少しの間、息を止めていてください。私につかまっただけでいいから、私にご案内いたします』

ぜび、溺れる前によろしく。

しかし、問題が一つだけある！

一緒に行く人間は三人いる。

どうやってつかまればいい？

『そうですね……じゃあ！』

結論。

マサはナーちゃんの右手、由美さんは左手につかまることに決定した。

で、余った俺は

『あの、あの、達郎さま……どうか、その、その……やさしく、してくださいね？』

頬を染めて恥らっているナーちゃん。

おい。

その誤解を生むような言い回しはいかなものだろう？

ナーちゃんの腰に抱きついていくだけでしょーが。

「……ねえ、タツ」

由美さんがニヤリと笑った。

「いくらアンタ達がデキてるからって、アタシ達の目の前でカノジヨの胸に手エ回さないでよ？ けっこーいいポリウムじゃん。揉んでみたいでしょ？」

するか、ばか者！

俺あマジなんだよ。

そーいうことは、葵さんを助けてから……いやいや、不謹慎な発言を撤回する！

なにはともあれ！

「……じゃ、マサ！ 由美さん！ たのんます！」

「おお、まかしときな！ あたしらがついてつからな！」

「ばっかやるオ！ 今さらヤメンじゃねエぞオ！ 久々のボコリ合
いだぜエ！」

『では、参りますよ？ しっかりつかまっていますか？』

どぼーん

俺達は、夕陽に染まりかけた海へとダイブした。

その18 めんそーれ海の世界

ごぼごぼごぼ

飛び込んでみたものの、実のところ想像以上にキツかった。

ナーちゃん、さすがは人魚。

すすいと泳いでいくのはいいのだが、その分水流が激しく、何度も振り落とされそうになった。きゅっとくびれていて柔らかで抱き心地満点の腰にしがみついている俺はいいとしても、由美さんとマサはひたすら手につかまっていることしかできない。

が、残念ながら二人を心配するだけの余裕は俺にはなかった。

鼻や口から少ない空気が漏れていくのを我慢するだけで精一杯。

ナーちゃん、そろそろ息が……と、思い始めた頃だった。

突然、全身にまとわり付いていた水圧から解放された。

同時に感じる、妙な重力。

「……はい、着きましたよ」

ナーちゃんの声に、ハツとなった俺。

どうやら、多少気が遠くなりかけていたらしい。言い換えれば溺れかけていた。

「……お？ おお？」

霞む目をごしごしこすりつつ飛び込んできた光景は 海の世界
だった。

岩や砂地の地面が広がっていて、当然ながら建物などはどこにもない。

上を見上げれば、水族館のエントランスで見たような、重いスカイブルーとホワイトが入り混じった光が差し込んでいる。そのせいか、空間自体がうつすらと青みがかったようで、そこがまた海の世界っぽい雰囲気をかもし出している。

ふと気がついたのだが 呼吸ができる！

「達郎さま？ だいじょうぶですか？ ちょっと、苦しそうでしたね？」

はい。相当苦しくて、途中からは三途の川を泳いでいるのかと…

…って、あれ？

「ナーちゃん？ なんで……？」

そう。

俺とナーちゃん、今は額&額をやっていないのだ。

彼女のクリアなボイスが耳にフツーに飛び込んでくる。

ナーちゃんは人懐こい笑顔をつくって

「海の世界では私、普通にお話ができるのです。ですから、マサさまと由美さまとも、きちんとお話ができるですよ？」
ここに。

ああ、いつものかわいいナーちゃんだ。

「そつか。そいつはよかった。……ってか、飛び込んでからけっこう距離なかったか？ 俺、溺れちまうかと」

どこかで白い花が咲いていたような。それに、死んだばあちゃんを見かけたような気がする。

「ごめんなさい。一生懸命に泳いだつもりですけど、その……」ナーちゃんはぽつと顔を赤らめ「達郎さまがぎゅーっ！ っ
て抱き締めてくださいるものですから、私、気になってしまっ……」
ぞーっ。

振り落とされまいとしたことが、逆にナーちゃんを刺激して減速
させたってコトか。

あぶなかった……。

次回からは場所を選んで っ、いやいや、何を言っている、俺。

そんなエッチな話をするためにここへ来たワケではないのだ。

岩の上に座り込んでいた俺は、よっこらしよ、と立ち上がった。

「ここは、どの辺なんだ？ 総督府とやらは近いのか？」

「はい。この先へ、進んだところにあります
そうか。」

「んじゃ、一丁お礼参りに……って、あれ？」

「マサと由美さんがいない。」

「まさか、たどり着けなかった？」

「ナーちゃん！ マサと由美さんは」

「お二人でしたら、ここへ着いた途端に手が離れてしまっ
て……話しているその矢先。」

「おおい！ タツー！ ナー！」

「由美さんの呼ぶ声が聞こえてきた。」

「良かった。無事だった。」

「由美さん！ マサがいないんですけど……」

「ああ、マサあ？ あいつだったら ほれ！」

「彼女はあごをしゃくって見せた。」

「その先には 大の字に倒れているマサの姿があった。安心した
が、みつともなくもある。」

「おおい、マサあ！ いつまでも寝てんじゃねえよ！ だっせえな
！」

「武装天女からダサイ呼ばわりされたマサは」

「じつ、じぶん、マジ……くっ、苦しかったっす……」

「半ば、放心していた。」

「ヤツを起こしてやり、これでチーム全員の無事を確認。」

「ナーさあ、ここって、どのヘンなんだ？」

「長い前髪をかき上げながら、質問した由美さん。泳ぎたかっただ
けあって、マサとは違いまったくダメージは受けていないようであ
る。」

「ここは海の世界でも、人間の方達世界にもっとも近い場所なん
です。海の世界のどこからでも人間の方達の世界へ行けるとい
う訳ではないのです」

「ナーちゃんがそう教えてくれた。」

「へー。じゃあ、ここがそれか」

「はい。もつとも、ここは元ブルーフィッシュ共和国があつた区域で、ほかにもレッドバツクだったりアーマーユニオン、十八同盟の区域なんかがあります。そこから人間の方達の世界へ通じる地点はありますけれども、それはまた別のところへとつながっています。達郎さまの住んでいらつしやる街の近くへ行けるのは、ここだけなのですよ？」

嬉しそうな顔をしたナーちゃん。

「で、目的の場所があつちにあるそうだ」俺はその方向を指して示した。

「おオ、じゃつ、いこーぜ！ カノジョのねーちゃん、助けなきやなアー！」

早くも回復して気合い十分のマサだったが、認識に相違がある。助けるのはナーちゃんのお姉さんなどではない。

とはいえ、大した問題でもないのでスルーしつつ先へ進もうとすると

「おい！ その奴ら！」

そこへ、背後から呼びかけてきた声がある。

振り返ると、二匹の魚人がいた。

目玉がやつたらでかくて、身体がワインレッド。

たぶんキンメ、正式には金目鯛と思われる。しゃぶしゃぶがイケるらしいがとてもとても高価なようで、幸子が食わせてくれたためしは一度もない。

キンメAは手に持っていた木の枝みたいなもの俺達につきつけ「さてはお前達、総督閣下に逆らう人間達キン？ 無駄な抵抗は止めキン！」

続けてキンメB「大人しく総督府まで来てもらおうキン！」

「……おい、お前ら」

「何だキン!?」

俺は奴らが持っている得物（と、呼ぶのも忍びない代物だが）を

指さし「それ……なんだ？」

すると、両キンメは「がくり」と膝を付き、でっかい目から大粒の涙を流し始めた。

「そう、そうなんだキン……経費節減とやらで、俺達、これしか支給してもらえなくて」

「うんうん。どーすんだキン、俺っち、家にかあちゃんと子供二人いるってのに……」

あ……どうやら、触れてはいけないところをツツこんでしまったようだ、俺。

レッドバックの奴らも、海獣組にはいいように使われてるんだな。ほとんど下請け状態だ。

何となく、気の毒になってきた。
が。

俺の背後では由美さんが転げまわって爆笑中。

「ひーっひっひっひー！ キンって、キンって……あはははは、腹いてエっての」

マサはマサですっとメンチ切り続けている。そろそろ眼球が疲れしてきたようで「……おい、タツ！ どーする？ どーする？」と小声で催促が。

俺だつて、無駄なケンカは避けたい。本当の相手はこいつらじゃないし。

「じゃあ、そこをどいてくれ。俺達は総督府に用事があるんだ。お前らじゃない」

と、一応好意的な態度を示せば通してくれるかとあっさり甘く考えたのだが

「そ、そーはいかないキン！ セイゾー閣下に逆らう人間どもめ！」「これ以上生活苦になったら一家無理心中キン！ お前らつかまえてポーナスもらうキン！」

ああ、そうかい。拳あるのみか。しゃーないな。

「キーン！」

「メーッ！」

だいたい想定通りの掛け声と共に、キンメ達がぴよーんとかかっ
てきた。俺はナーちゃんをかばいつつ、迎撃すべく身構えた。

しかし。

「うるあ！」

「オラア！」

きらーん！

「キンメーッ」

コンマ数秒後、キンメ二匹は海の世界のお空へと消えていったの
だった。

マサの左ストレート、それに由美さんのタメ蹴りが炸裂したため
である。

「……なんでエ。ハリがねエよ、ハリが」

不満そうなマサ。

それはまあ、お約束だから仕方がない。

『まずはザコから登場！』ってヤツだ。

その19 武装天女、降臨

広い海の底、ならぬ海の世界をてくてくと歩いていくこと、や
やしばらく。

由美さん相手に友達の話さすぺちやくちやくちやっている緊張感ゼロの
マサ。

対照的に、俺に姫ハグされているナーちゃんはすごく不安そう。
ちよつとつつけば崩れてしまいそうで、見てられない。それでも、
俺の視線に気がつく、「にこっ」と嬉しそうに微笑んでくれる。

やっぱり、彼女への誓いを守ってて良かった。

ふと思った俺。

そのうち、意味ありげに大きな岩が二つ並んでいる場所へ到着。

岩と岩の間が門みたいになちよつとだけ開いていて、そこを通れと
いつているようだ。

「みなさん。ここから、先です」

無言だったナーちゃんが口を開いた。

「私達ブルーフィツシユの民が暮らしていた場所なんです。今は虐
げられてしまっています。葵さんはあそこに」指した先に、何やら
大きな建物的なものが見える。「監禁されています。あれがブルー
フィツシユ総督府です」

そう、ハナシはごく簡単。

要はあれをぶつ潰せばいい。

結果、葵さんを助け出すことができる。

……ということさ、マサも由美さんも考えたらしく

「じゃ、いこーぜ。さっさと助けねエとその葵さんとやら、ヤバい
んだろ？」

「おお！ そーっすよね！ ちゃっちやとボコっちまおーぜ、タツ
！」

俺はうん、と頷き、岩の門をくぐった。

一步踏み入れた瞬間、俺の目に飛び込んできたのは摩訶不思議な光景。

道の真ん中が軽くサツカーでもできそうなくらい派手に広く、キレイに整えられている。クリアブルーのタイルか敷石みたいなものがびっしり敷き詰められていて、今しがた通ってきたでこぼこ道とは天と地ほどの差がある。

が その道の両側には、ぼろぼろ、よれよれな魚人たちが、人生ならぬ魚生に疲れ切ったかのようにぺたりと座り込んでいる。その数、多数。

サバにアジ、イワシにサンマやニシン等々メジャーどころに加え、俺の知らない種類のヤツも山ほどいる。言うまでもなく、元々ブルーフィットシユのエリアだけに、いるのはみんな「青魚」なのだ。

「おかーさん、おとーさんは？」

「おとーさんはねえ……海獣組のお館へ、お手伝いに行ってるんだよ」

とかいう会話をしているサバの親子がいるかと思えば

「アジらにはもう、どうすることもできん……ぶつぶつ」

ボロをかぶってぶつぶつ言っているのはアジの爺さんだな。

「ワシら」じゃないのが微妙に笑えるが、悲惨な状況だけに笑ってはいけない。

どいつもこいつも、賞味期限切れ。

なぜなら、目が濁っていてウロコにハリがない。活きが悪くなっちまってる。

まるで難民、ってか貧困街みたいじゃないか。代官の取り立てが苛酷な貧農の村って感じだな。集団まるごとテンション、モチベーションがゼロ。

これもみんな、海獣組の奴らのせいなのか？
ってか、なんで道の端っこにいるんだろう？

疑問に思っていると

「この道は、総督が通るためだけにつくられました。罪もないブル

「フィツシユの民が強制的に駆り出され、動けなくなつたものは家族と引き離され、牢屋に入れられたり、売り飛ばされたり……」
ナーちゃんが教えてくれた。

なるほど。だからみんな、この道に足を踏み入れないワケか。虐げられた悲惨な魚人たち。

しかし、俺達がやってきたことに気付いた途端

「あ！ あれは……姫様！」

「姫様が無事でいらつしやつた！」

両側から一斉に「うお（魚）ーっ！」とか聞こえたのは気のせいだろうか？

が、ナーちゃんが存在がゼロだった彼等のボルテージを一気にハイにしたことは明らかだ。

「姫さまーっ！」

どこからともなく、可愛らしい声がして、大勢の魚人の子供達が駆け寄つてきた。

「こつ、これ！ そこへ踏み入れてはいけません！ そこはセイゾー様が」

親達はマジビビリしているようだが無邪気な子供達、聞いちゃいねえ。

「姫さまっ！ ご無事でしたか！」

「姫さま、人間の方達をお連れになつたのですね？」
うーん。

魚人かつ子供のクセに、敬語がきちんと使えるじゃないか。人間のガキども、少しは見習つた方がいいかもしれない。魚人ができて人間ができないというのは、ちよつと情けないものがある。

「みんな、元気だった？ ごめんなさいね、心配をかけて。でももう、大丈夫ですよ！」

笑顔で対応している気丈なナーちゃん。子供達一人ひとりの頭を撫でてやっている。

するとマサ、

「おいタツう！ こいつら、ぶっ飛ばしていいのかア？」
あのね。

見てわからんか？ この感動の光景が！
背後から現れた目つきの悪い人間を見た子供達、一斉に姫様と俺にしがみつきの

「姫さま！ あれは……」

すっかり怯えさせてしまった。

ナーちゃんはちよつと苦笑しつつ

「あの方達は、私達に力を貸してくださる、とても強い人間の方なのです。安心なさい」

「はい」

魚に手と足が生えた姿ではあるが、なかなか素直でいいコ達じゃないか。

ナーちゃんの一言で安心したらしい彼等は、今度はマサと由美さんにも群がっていった。

「おお、アンタはアジかい。ははーん、ちよーつとサイズがちっけエもんねエ。ははは」

「ちつちやくないもん！ 姫さまをお守りするんだもん！」

由美さんは面白そうに話しかけたり握手したりしているが、マサはいかにも「ヤベエ」って顔で突っ立っている。さすがに魚人の子供相手に手を出したりはしないが、ちよつと迷惑そうではある。それでも見ていて微笑ましく、心和む癒しの光景なのであった。

「おい、ガキども」

と、一匹のイワシの子がいきなりひよいとつまみ上げられた。

「ここはセイゾー様がお通りになる道だつて、とーちゃんかーちゃんから教わらなかつたのか？ あア？」

柄の悪い声、そして背中が悪い柄を背負ったのが三匹ばかり。

俺には見覚えがある。約一年ほど前、葵さんをさらっていたぶるうとした、凶悪な奴ら。

ウツボな連中だ。

「はっ、はなせーっ！ お前らなんか、姫さまが来たからこわくないぞー！」

背ビレをつかまれ、じたばたともがいているイワシの子。

「ほおー。コワくないのか？ じゃあ……ほーらー！」

なんと、ウツボはその子を「ぽいっ」と背後に放り投げた。

「あーっ！」

イワシジュニアは宙に放物線を描いて、うす汚い道端の方へと落ちていった。

ぶん投げたイワシなどには興味なさそうに、ウツボ組はナーちゃんの方を向き

「おいおいおい、姫さんよオ！ アンタ、自分の立場ってモンがわかってるのか？ あア？」

「アンタがそーいう要らんことすれば、ワシらが預かっているあのねーさん、どーなるか知らんワケじゃないと思うがのオ？」

その場にいる子供達をかばいつつ、ナーちゃんは「きっ」とウツボ組をにらみ

「なんて酷いことをするのですか！ あの子がいったい、何をしたいのです！？」

「おーおー、随分と反抗的やのオ！ その人間ともども、どーなってもしらんどー！」

ウツボAがナーちゃんのほっそりした腕をがしっつつかんだ。

その時である。

「……黙って聞いてりやてめエら、女一人に何イキがってやがるんだ？ この腐れチン野郎」

ゆらーり

ゆっくりと、由美さんが立ち上がった。

「アタシやねエ、ヨワイ者イジメが大っキライなんだよ。虫唾が走るっての……」

傍にいた子供達をはじめ、マサやナーちゃんは早くも固まっている。そして俺も。

これはもう、由美さんではない。

柔らかだった目つきは細く鋭く変化し、見られただけですっぱり切れそう。首や肩、指を動かすたびに「ぱきぱき」と快音が轟く。全身から発されている、近寄っただけでノされそうな強烈なプレッシャー。

これって 『武装天女』が降臨した姿か!?

さすがのウツボ組も「じりっじりっ」と後退りしている。

「な、な、なんだア、てめエ!?! お、俺様達が、どっ、どこの誰だか、わっ、わかって」

歯の根が咬み合わなくなっているようだ。

「お前らがどこの誰か、だって?」

ずいっと前に進み出た武装天女。

ウツボ中央の前でピタリと足を止めると、最後の「ぱきっ」を鳴らし

「……知ったコトじゃねーんだよ!」

天女の怒り狂える咆哮が、海の世界をびりびりと揺るがした。

そして一分後。

「……あー、すっきりした。でもちよおっと、物足りないかな」

瞬時に由美さんモードにチェンジした天女は清々しい笑顔で

「おいタツウ! さっさといこーぜ! 葵たらいうねーちゃん、やべエんじゃねエのオ?」

先に立ってすたすたと歩き出している。

「な、ナーちゃん? それじゃ、総督府へ……」

「は、はいっ……」

心なしか、ナーちゃんはすっかり青ざめている。

そりゃそうだろう。

地面にめり込んで煙を上げているウツボ組の悲惨な姿を見れば。

三匹はぴくりとも動かない。

「……」

マサにいたっては、声もない。

俺はこの時、初めて知った。

武装天女という言葉の真の意味を。

「おおい、タツってばー！」

「はっ、はいっ！ 今、行きやっす！」

その20 ナーちゃんの一番長い日(前編)

総督府は一丁前に豪邸なカタチをしていた。サンゴ的な素材でできているらしい。

門前を守っていた「藤堂」「To・Do」の二頭をあつさり壁にぶち込み、総督府の内部へと突入した俺達。……ちなみに藤堂ほか一頭というのはトドの獣人である。

入ってすぐのホールには、生意気にもシャンデリア的なものがぶら下がっていて、よく意味のわからない丁度品がずらり。正面の壁に目をやれば、趣味の悪いデブヌードの絵画が。何で化け物の絵を飾っているのかと思いきや、メスのセイウチだった。そういやこの総督はセイウチだとナーちゃんが言っていたような気がする。

この建物、玄関から入ると左右に階段があり、そいつを昇れば正面二階部分で合流できる構造。

「どーする？ なんとたらしいボスのヤツ、多分この上っばくねエ？」
由美さんが上を見上げて言った。

俺もそんな気がする。しかし、ボスをぶちのめす前に

「由美さん、きましたぜ！」

マサが(嬉しそうに)叫んだ。

言っている間に、二階からぞろぞろと「マッチョ鯛(隊とかけているようだ)」「キンキグループ」「ウツボ組」が出てきて俺達をぐるりと取り囲んだ。その数、およそ三十ほど。

「よオ、ブルーフィッシュの姫さん。こないなことで、わかっとなるんやろなア！」

そう凄んだのは、ちょっと大きめなウツボ野郎。相変わらず、イヤな顔つきをしている。

ナーちゃんが何か言いかけたが、それを抑えるようにして由美さんとマサがずっと前に進み出た。

「……タツ。アンタ、そのコと一緒に、葵たらしいねーさんを探し

な

とか言いつつ、由美さんはTシャツの背中をまくり上げた。

ジャララララッ

どうやって隠し持っていたものやら、なんと長いチェーンが出てきた。

そう。

武装天女の名の由来　由美さんはその全身に得物を隠し持つという大技の持ち主だったのだ。ちなみに、さっきのウツボ組もこのチェーンによって一撃で地面にボコられた。

なお「彼女」はすでに降臨している。とてもではないが、反対意見など述べられたものではない。

マサも俺とナーちゃんの方を見てニヤリと笑い

「サツがこねエってんなら、ハナシは早いぜエ？　久々のボコり合いだからな……止めんなよオ！」

わかってるよ。

頷いてみせた俺。

お言葉に甘えて、俺はナーちゃんと共に葵さんを助けに行かせてもらうよ。

二人とも、くれぐれもやられたりなんか

「どけオラア！！」

「このオレが近工のマサだぜエ！！　ボコられてエヤツからかかって来やがれエ！！」

という以前に、速攻で先制攻撃している二人。

どかばきばこくしゃめり……

あっという間に前衛のキンキを殲滅するや否や、二人の姿は二階へと消えていった。

二人が通り過ぎた後には　魚人どもが壁や階段、そして天井にめり込んでいる。

二階からも「どかつ！ばきっ！」とか音がしたかと思いきや、両方の階段からウツボが転げ落ちてきた。顔中を腫らし、白目をむき

泡を吹いている。三十もいた魚人にウツボ、ほぼ秒殺。

あまりの出来事に、ぼーぜんとしているナーちゃん。

まさか由美さんとマサがここまで強いとは思っていなかっただろ
う。

「……俺達も行こ？ 葵さんを助けに」

「……はいつ！ 達郎さまっ！」

一年前の俺には、できなかつた。

でも、今ならできる。

自分を鍛えて、そして力になってくれる仲間達を見つけたから。

ゲームとか映画とか、囚われている人は大抵施設のすっごい奥に
いる。

奪還されないようにとか、逃げないようにするために。

だが。

「……やる気あんのか？ ここの総督とやらは」

俺は呆れていた。

一階正面奥の扉をぶち破り、一步踏み込んでみればこの通り。

一本の通路を中央に、両側には鉄……いや、サンゴ格子の牢屋が
ずらり。

それぞれ、中には捕まっている奴らがいる。

「多くはブルーフィッシュの民でしょう。総督や海獣組は、何かと
理由をつけては無理矢理連れて行き、こうして牢に入れてしまうの
です。ブルーフィッシュの民に反乱を起こさせないための、見せし
めとして……」

ナーちゃんの説明、以上。

しかし、そんな暗黒時代もこれで終わりだ。

入り口に一番近い牢に近寄ると、中にいたヤツがびっくりして駆
け寄ってきた。

「ひっ、姫様っ！ 姫様ではありませんか！ どうして、このよう

なところへ……?」

ニシンの魚人らしい。

「待っててくださいね。今、ここから出して差し上げますから」と言つてナーちゃん、困つたように俺を見た。

「達郎さま、このカギがなくては開けられないようです……」

「なに、問題ない」

そう言つて俺は背中から隠していたアイテムを取り出した。

こういうシチュエーションもあるうかと、家に戻つた時にハンマーを持ち出してきたのだ。

鉄格子なら歯が立たないが、サンゴ質とあれば造作もない。

「てりゃっ!」

ガシャン

人類が誇る文明の利器の前には、サンゴの牢屋などタマゴの殻も同然である。

「まあっ! 達郎さま、すごい!」

手放して喜んでいるナーちゃん。褒めるほどのことじゃないけれども。

そうして、片っ端から徹底的に脱獄工作を開始した俺。

「ありがとうございます! 人間のお方!」

「このご恩は忘れません!」

助け出すたびに大真面目に礼を言われると、なんだかこつ恥かしい。

つてか、全てはここにいるあんた達の姫様のおかげだよ。

そうして一番奥の牢屋。

まず左側の格子をぶつ壊すと……中から出てきたのは、なんとトビウオのコだった!

ちっちゃくて羽をばたばたさせている姿は、ぶつちゃけアジとかサンマより可愛らしい。

「ありがとう、姫さま! それに人間のおにいちゃん!」

きちんとお礼を言つてアタマを下げているところがまたキュート

である。

「お前……なんで牢屋なんかに入れられたんだ？」

「どうしても外の世界に行つて、宙を飛んでみたかつたんです。それで、鯛とかウツボの目を盗んで行つたら、捕まっちゃった」

こんなに無邪気で可愛いトビウオのコをしょつ引くとは許せん奴らだ。

「さ、早くここからお逃げ」

「うん！」

ぴよんぴよんと軽快に跳ねながら、トビウオ坊やは行つてしまつた。

で、反対側の牢。

ひよいと中を覗いた瞬間、俺はビビつた。

やつたらでつかい何かがいる！ これつてどう見ても、ブルーフィッシュの民じゃあない。こんなに凶体のでかい青魚なんて、凶鑑でも見たことがないぞ。

「ナーちゃん、これ……」

「バランスの方ですわ。海の世界を調整して均衡を保つ者達です。でも、どうして、こんなところに……？」

まあ、捕まつた動機はどうでもいい。

とりあえず、牢をぶつ壊してやった。

すると中からのっそり出てきたのは、俺の背丈の倍近くもある大男だった。

腹のあたりが白く、背中の方はグレー系をベースに白い斑点がある。目がちまちまとちっちゃいくせに、口がにょんと横に広い。

……どこかでこんなヤツ、見たような気がする。

天井にアタマがつつかえそうな彼は、じつと俺とナーちゃんを見下ろしていたが

「……ありがとう。ありがとう。礼を言う」

デカブツ特有の「もーっ、もさーっ」というトーンの声で、礼を言ってきた。

「礼はいいよ。……ってか、アンタ、名前は？」

「……ジンベエ。ジンベエ」

おお、思い出した。今日、水族館でこいつの仲間を見たんだった。「ジンベエさん、あなたほどの方が、どうしてこのようなところへ？」

ナーちゃんの質問。

それは俺も訊きたい。それだけのガタイならあんなチンピラの十匹や二十四匹、相手にもならんと思うのだが。 。
が、ジンベエさんはちよつと首を傾げて

「……俺達は、争うことを知らない。だから、捕まるしかなかった」
なんかよくわからんが、平和運動家ということにしておこう。

争うことの全てが不必要なワケじゃない とか言おうかと思っ
たが、ヤメた。彼等は自然の営みの中で生きている連中。人間の摂
理を適用しなければならぬ必然性はどこにもないのだ。

「そーかい。……じゃ、ジンベエさんも行きなよ。もう、捕まらな
いようにね」

「……うむ」

背中を向け、のっし、のっし、のっしと歩いていくジンベエさん。
ま、ああいうのが彼等なんだろうさ。じれったくなるかもしれな
いけど、あれでいいんじゃないかね？ 俺はそう思う。

「ジンベエさん達のような balanサー族はどこの勢力にも味方する
ことなく、ただずーつと海の調和を保ち続けているんです。きつと、
海獣組の者達がそれを快く思わず、ジンベエさんが争えないのをい
いことに、捕まえたのでしょ」

去り行く巨大な背中を見つめながら、ナーちゃんがそんなことを
言った。

残念ながら、人間はそうはいかない。

争わずに生きていくことはできない。

ただし、争うことと傷つけあう事は違う。争う事は競い合って、
より上を目指す事。傷つけ合うことと一緒になんかじゃない。いつだ

「ったか、由美さんがそんなコトを言ってたっけ。さて。」

「残るは、葵さんのみ。」

「彼女はきつと、この奥につて……あれ？」

「そーだった。」

「牢屋はトビウオ坊やとジンベエさんが一番奥だったんだよな。」

「するつてえと……葵さんは……？」

「そ、そんなはずは！ 葵さんは確かに、この総督府に捕えられているのですから！」

「ナーちゃん、おろおろ。」

「参ったな。」

「そついうことなら、もしかすると上の階とかか？」

「なら、まだいいけど。」

「最悪なのは、どつか別のところへ連れて行かれてしまっている場合だ。」

「今から探して助け出しに行くのも、相当キツイものがある。」

「そこへ。」

「ぴょーんぴょーんと、さっき逃がしてやったトビウオ坊やがやってきた。」

「姫さま、人間のおにいちゃん！ 大変だよ！ 別の人間のおにいちゃんとおねえちゃんが、セイゾー総督にやられちゃいそうなんだ！」

「何だと!？」

「マサと由美さん、じゃなくて武装天女が!？」

「あの最狂コンビをしても、勝てないっていうのか？」

「達郎さま!」

「ナーちゃんの顔色が変わっている。」

「よ、よし！ すぐに行こう!」

「ボク、案内してあげる!」

「俺達はトビウオ坊やの後に続き、セイゾーとやらがいる部屋を目」

指して駆け出した。

その21 ナーちゃんの一番長い日(後編)

階段を駆け上り、部屋という部屋を突破して進んでいく俺、そしてナーちゃん。

「ここだよ！ おにいちゃん！」

「おう！ サンキュー！」

トビウオ坊やが示した部屋へと突入した俺。

そこは、他の部屋とは比べ物にならないくらい大きな部屋だった。飛び込んだ俺が目にしたのは

「くっ！ 放しやがれエ、このクソデブ！」

「くせエんだよ、てめエの体臭はよオ」

でっかい黒茶色の「ぶよん」としたカタマリに胸倉をつかまれ、壁際に押し付けられているマサと武装天女の姿だった。

そのカタマリについているボーズ的形状のヘッド。鼻の辺りからぴっぴつと飛び出ているヒゲ。上唇から、これまた「よーん」と白い、二本のキバが……。

セイウチのバケモノ。セイゾーというらしい。ブルーフィッシュの民を虐げている諸悪の根源。絵に描いたような悪者の姿である。

それはいいとしても、とにかくでかい。これじゃあ、マサと由美さんがいくら強くても敵わないワケだ。

セイゾー、入ってきた俺達をちらりと一瞥し

「おいやまあ、ナタルシアちゃん！ どおーしてこんなところにいるんだろうねエ？ キミは今ごろ、人間達の見世物ショーに出ているハズじゃないのかい？」

声も口調もイラツとくる。

例えるなら、イヤらしい変態オヤジのそれだ。

「達郎さまが助けてくださったのです。私はもう、あなた達の言うなりにはありません。これからはずっと、達郎さまについていくと決めたのです」

するとセイゾー、口の端で「ニヤリ」と笑い

「だーからー、ナタルシアちゃん。キミに決める権利はないんだけどねえ。そういうコトを言っているところの人間達と護衛のおねえちゃん、どうなっても知らないよー？」

二人を押し付けている両腕に力がこもった。

「ぐっ！」

「くっ……そオ！」

マサも由美さんも振り放そうと抵抗するが、びくともしない。

ここへきて、絶体絶命の大ピンチ！

でもなかつたりする。

俺は一度家に戻った時、海獣組と戦うためにありとあらゆる悪知恵を振り絞り、準備を整えてきた。当然、肉体的な戦力差が生じた場合の対処法もちゃんと考えてある。

すかさずポツケをさぐると、隠し持っていたそれをセイゾーの顔を目掛けて投げつけつつ

「由美さん、マサ！ 目エ潰って！ 早く！」

俺の放ったそれはセイゾーの額に命中するなり、ポンと弾け飛んだ。

「ん？ こんなモノ、ワタシには効かな……ぎゃあぁーっ！ ぎゃーっ！」

顔の周りでソレが「ぼふっ」と煙るや否や、セイゾーはのたうって苦しみ始めた。

「目がアーっ！ 目がアーっ！ ぎゃーっ！」

そりゃあ、効くだろう。

なんたって、韓国土産の「赤唐辛子粉末」だ。親父と幸子が俺をおいて勝手に旅行へ行つて来た、その土産なのだが……置いてけぼりにされた俺の恨みも十分に混ざり込んでいる。

「ぎゃーっ！ へつくち！ イツキシ！ ……ぎゃーっ！ イツキショー！ ぎゃーっ！」

言い忘れていたが、唐辛子に加えてコシヨウもブレンドしてある。

つまり、一番顔にかかつてはまずい物の組み合わせというワケだ。食らったが最後、死にはしないが死ぬような地獄を味わうことになる。

暴れ狂っているヤツの巨体をすり抜けるようにして、避難してきた由美さんとマサ。

「おいタツう、やるじゃねエか！ ダテに潮清通ってねエなア！ 見直したぜ」

心底感心したように、俺の背中をばっしばっしと叩いている由美さん。

潮清は関係ありませんよ。

俺の悪知恵ファイルがメニュー豊富なだけですね。

「イツキシ！ イツキシ！ は……ふ……へ……へっ、イツキシ！」
唐辛子胡椒玉を若干浴びてしまったマサ、くしゃみ連発。……申し訳ない。

彼はびろんと鼻水をたらしながら

「いやアア、アツぶなかつたぜエ！ 助かったア！ やるなア、タツ！ やるなア！」

それはわかったから。

まずは鼻水、なんとかしなさいよ。

「それでタツ、葵たらいうねーちゃん、見つかったのか？」

由美さんの問いに、ナーちゃんはふるふると首を振り

「それが……下の牢屋にはいなかったんです！ どこか、別の場所かもしれません」

悲しそうに答えた。

すると、由美さんはガンツ、と壁を蹴っ飛ばし

「ちつくしょオ！ どこまでもセコい奴らだぜ！ そのねーちゃん だけどうにかしようってのかよ！」

こうなると、色々と良くない想像が頭の中を駆け巡ってきてしま
うのだが 悔しがってばかりもいられない。

涙と鼻水で顔中ぐちゃぐちゃにしながらも、ようやく復旧したセ

イゾーは

「こっ、こっ、このオ！ ナタルシア！ 人間ども！ 許さん！
許さんぞォ！」

どすどすどす

巨体を揺らしながら突進してきた。

さてさて。

あれに更なる物理的ダメージを与える術は 残念ながら、俺の
悪知恵フォルダにはない。

「おい、タツウ！ どーする！？ どーする！？ 逃げつかア！？
マサが叫んだ。

不本意だが、この場はそうするしかなさそうだ。
ちっ。

絶対に助け出すとかナーちゃんに大口叩いておいて、このザマか。
俺もまだまだ大したコトないもんだな。ちーつと情けねエ……。

しかし、逃げ出す必要はなかった。

突然部屋に飛び込んでくるなり、クツサイ肉のカタマリをしっか
りとキャッチしたヤツがいる。

黒っぽい背中に白い斑点。どでかいガタイ。
そう。

そいつはさつき、俺達が助けた

「……ジンベエさん！？」

「……トビタローから、聞いた。お前達、やられそう。だから、恩
返し」

予想だにしない、ジンベエザメの恩返し。

目の前でがっぷり組み合っている、巨体と巨体。

ジンベエさんも怪力だが、セイゾーもまた譲らない。

「ジンベエ？ キミイ、人間やナタルシアに協力したら、どおなる
かわかってるのかい？ ん？」

ぐいぐいと身体を押し付けながら、やんわりと脅しをかけるセイ
ゾー。

が、それを食い止めているジンベエさんは表情一つ変えずに
「……俺、恩、返す。お前達、海獣だって、人魚族に恩、ある、は
ず」

一歩も退かない。

すまん、ジンベエさん。ぬぼーって何も考えずに泳いでいるだけ
だとか言ってる。

ジンベエザメなりの思いつてもものがあるんだな。

力はほぼ互角。決着は簡単につきそうもない。

この間に、何とか葵さんの居場所を捜さなくてはならない。

が、捜すといつてもこの総督府、無駄に広い。もしも裏口なんか
から連れ出されたりしたらそれまでだ。

マサは相変わらずくしゃみにやられているが、由美さんは状況が
わかっているから

「どうするよ、タツ!? 誰かほかに葵ってねーちゃんの居場所を
知ってるヤツはいねエのか!？」

訊いてきた。

そうか、その手があった。

わざわざ捜す必要はない。

訊き出せばいいじゃないか。

俺はポツケに手を突っ込み

「……おい、セイウチ野郎。これ、何でしょう?」

「ふお? 石? ……ま、まさか!」

俺の手に握られているモノを見るなり、セイゾーのブサイクな顔
が余計引きつった。

「もっぺん地獄を見たくなけりや、葵さんの居場所を吐いてもらお
うか。拒めばどうなるかわかってるんだらうな?」

そう。

こいつはさっき、セイゾーに灼熱クシャミ地獄を味わわせた「赤
唐辛子胡椒玉」だ。

まだまだ何個もあるから、白状するまで堪能させてやることで

きる。

セイゾーは今、ジンベエさんとがっぷり組み合っている最中。こいつを避けたり防いだりするような余裕はまったくない。

「ひっ、ヒキヨーね、キミ！ そんなコトをして、許されると」

「じゃあ、死ね」

「さつき、一階の隠し牢獄から出して南氷洋まで連れて行くように指示しました、はい」

……あっさりゲロしやがった。

このノリにすぐわれて思わずコケそうになったが、今はコケている場合じゃない。

「よろしい。　じゃ、ご褒美！」

「あっ！ そんなっ！」

何のためらいもなく赤唐辛子胡椒玉をプレゼントしつつ、俺はナーちゃんを連れて部屋を飛び出した。

背後からは

「うっぎゃあああああーっ！　ぎいえええええーっ！」

哀れなセイゾーの絶叫が聞こえてきた。

卑怯なことをした、とはこれっぽっちも思っていない俺。

ナーちゃんと葵さんを苛めた罰だ。

思い知れ。

「達郎さま！　葵さんは、葵さんは」

ナーちゃんはもう、ほとんど泣きそう。

だよな。

南氷洋なんか連れて行かれたら、助けだせる可能性は限りなくゼロに近い。

「……やれるだけのコトはやるう。それから考えるさ」
そうだ。

それしかない。いや、それが大切なことなんだ。

やる前から「あああーっ」って絶望してても、意味はない。何でもいいからぶち当たって突破しようとしてやれば、何とかなるコトだってたくさんあるはず。

俺は元来たルートを駆け抜け、エントランスの階段までやってきた。

すると

「いやっ！ 放して！ 私は南氷洋なんかには行きません！ 放しなさい、このケダモノっ！」

この声……もしかして？

階段の途中から下を覗き込んだ俺は、そこにとつとつ求める姿を見た。

葵さん。

後ろ手にサンゴの手かせをはめられた彼女は、アザラシ的な半獣野郎どもに今まさしく総督府から引き摺り出されようとしていた。

今度ばかりは運命の女神、必死な俺達にとびつきりステキな微笑を向けてくれていたらしい。

「葵さんっ！ 葵さんっ！」

ナーちゃんが声を限りに叫んだ。

「あ？ やべエ！ ナタルシアだ！」

「人間もいるぞ！ 早くしろ！」

焦り出したアザラシ野郎ども。葵さんを無理矢理に引っ張っている。

が、思いがけない俺達の登場に、葵さんは希望をもってくれたらしく

「誰が……行くものですか！ 行くなら……あなた達だけで……行きなさいっ！」

最後の力を振り絞ってそれまで以上の抵抗を始めた。

「こっ、この人魚くずれめっ！」

業を煮やしたアザラシが、葵さんの頬を「ぺちっ」とやった。

「ああっ！」

横倒しに倒れた葵さん。両手を封じられているから、どうするにもできない。

アザラシは葵さんの両脚をつかんで引き摺っていこうとしている。「葵さんっ!」

悲痛な声を上げたナーちゃん。

まずは何とかしてアザラシどもを黙らせなければならぬ。

そう考えた俺は、何かないものかと辺りを見回してみた。

ふと、目に飛び込んできたのは エントランスにこれでもかとはかりに飾られている、数々の調度品。

どれもこれも ぜひ投げてみて、といわんばかりのお手頃な形状だった。

その一つ、花ビンみたいなツボみたいなヤツを手にとった俺は「でえええりやあああっ!」

ナーちゃんを背に回しつつ、全力のオーバースローでぶん投げた。勢いよく宙を走った花ビン（またはツボ）は、葵さんを殴りつけたアザラシの脳天に狙い違わず直撃してくれた。外さなかったのは実力ではなく奇跡だが。

「あふえーん……」

情けない悲鳴を残しつつ、ヤツは沈んだ。

「……!? アザーリン! おい! しっかりしろ!」

一頭のアザラシが、倒れたアザラシ アザーリンとかいう名前らしい に駆け寄ろうとした。

「……よそ見していると保存食にされるぜ?」

階段の途中から手すりを乗り越え、一気に飛び降りた俺。

駆け寄って間合いを詰めるなり、有無をいわさず跳び蹴りをお見舞いしてやった。

仲間思いなアザ野郎は

「ぶごべげべればっ!」

頭から壁に突っ込み、沈黙。

残り、一頭。

「あつあつあつあつ……」
瞬く間に仲間を沈められたアザラシはぶるぶると震えている。
俺だって、何も無駄な殺生は好まない。
大人しく引き下がるなら見逃してやってもいいと思った。

アザラシは基本的にバカらしいが……やっぱりこいつもバカだった。

「……アチョーッ！」

突然何をしたくなったのか、よく聞く中国拳法の掛け声を上げつつ、俺に向かって飛び蹴りをかましてきやがった。

そのまま由美さん命名「一撃必殺の右ストリート」で撃墜してもよかったのだが　ふと見れば、傍にあのキモいメスセイウチのデブヌード画が。

俺はそれを力任せに壁から引っぺがすと

「……ふんっ！！」

渾身の気合と共に、アザ野郎目掛けて振り回した。

「きゃっ！」

ハエみたいに叩き落されたアザラシ、床に転がってぴくぴくしている。

邪魔者は消えた。

俺はすかさず葵さんに駆け寄り

「葵さん！　しっかりしてください！　俺です、達郎ですよ！」
抱き起こした。

ナーちゃんはもう、彼女に抱きつくなり

「葵さん、葵さん、葵さん……！　私、私、もう……」
泣きじゃくっている。

気を失いかけていたらしく、葵さんはややぼーっとしていたが、
ナーちゃんの声に

「姫様……それに、達郎様……。わざわざ……私のために……」
うつすらと微笑んだ。

青く長い髪、よく整った美しい顔。そしてスレンダーで非の打ち所がない均整のとれた身体。あの日別れた時の葵さんと、ちっとも変わっていない。

ただ、ブルーフィッシュを守って戦い、捕まっから手ひどい扱いを受けたのだろう。顔や身体、いたるところにキズやアザがあつて痛々しい。胸と腰を覆っている葵さん独特のコスチュームもぼろぼろになっていた。

俺は最後に隠し持っていた小さいカナヅチを取り出し、手かせを砕いてやった。

葵さんは自由になったその腕でナーちゃんを抱き締めた。

いや 片方の腕を伸ばすと、俺をも抱き寄せた。

「ごめんなさい、姫様、達郎様……。私が、ふがいなかつたばかりに……」

「葵さん葵さん……。もう、どこへも行かないで……。ふええん！」

号泣しているナーちゃん。

葵さんもまた、彼女を強く強く抱き締めながらぼろぼろと涙をこぼしている。

ああ 良かった。

俺、ちよつとは役に立てたんだろうか。

あのクソ野球部で鍛えてきたコト、無駄なんかじゃなかった。自分の力だけのハナシじゃなくて、マサとか由美さんにも出会えたこともある。何のためらいもなく力を貸してくれて、マジ、感謝だな。ようやく俺の中で、大きな充実感と納得とがはっきりしたカタチになるうとしていた。

しかし。

「あーっ！ あーっ！ もーやだー！」

突然起きた振動、そしてあの耳障りでイラツとくる声。

どうやら、セイゾーが最後の逃亡をはかっているらしい。

ドドドドドと、巨体が階段を駆け落ちてくる地響き。すぐ近くまできてやがった。

まずいな。

このままじゃあのバカ、逃げて行ってしまっ。

「……おおい、タツう！ コレ、葵ねーちゃんのじゃねーの？ キモデブ野郎の部屋にあっただぜ」

と、いきなり二階からマサが顔を出した。

その手には、葵さんのトレードマークであり愛用の　オーシャ
ンイーグルが。

「あきやーっ！」

セイゾーの野郎、既に階段から降り、いやほとんど転げ落ちきつて、玄関から出て行くこうとしている。

それを見た葵さん、キツと表情を引き締め

「その銃！ 早く、私へ！」

マサに向かって叫んだ。

「お、おオ！」

マサは葵さん目掛けて二丁のオーシャンイーグルを放り投げた。すつと立ち上がるなり、葵さんは両手でそれぞれ銃をキャッチ、したとも思わせない素早さで

タンツタタタタンツタンツ

速射。

狙ったのは、セイゾーではなかった。

その頭上にぶらんぶらんしている　でっかいシャンデリア。

頼りないその命綱は、葵さんの素晴らしい射撃によって打ち抜かれた。

あとはもう、お約束。

がっしやーん

いかに巨大なセイウチ野郎といえども、脳天にシャンデリアのカタマリを喰らってはひとたまりもない。

「Say……House……がくっ」

House「ウチ、だから「セイウチ」かよ。

海の連中、なぜかやられ際に自分の個体名を言うクセがあるよう

だ。

ま、聞かなかったことにしよう。かなりどうでもいい。両手を交差させて銃を構えたままだった葵さん。

すつと引いて両腰の位置へもっていきや、見事なクイックドロウをキメつつ、俺とナーちゃんに向けてにっこりと素敵な笑顔を見せてくれた。

その上では。

「……おオ、おオ。あの葵っちゅーねーさん、なかなかやるもんだねエ。なかなかのビジンだし、さ」
ぷっかー。

煙が心地よく天に昇っていく。

武装天女を解除した由美さんが、くわえタバコでぼそりと呟いた。その隣で、精根尽き果てたようにへばっているマサ。

「あ、由美さん……今回の奴ら、なかなか……しんどかったツスね

……」

すると由美さんはニヤリと笑って

「……あん？ ヤバかったの、あのデブだけだろオ？ アタシや、なんだか物足りないねエ……」

そう言って煙を吐き出した由美さんの横顔は、武装天女のそれだった。

こうして、ナーちゃんの長い長い一日は終わった。

葵さんの救出、そしてブルーフィッシュ区域総督府をぶっ潰すという大きな成果と共に。

ちなみに。

あのイワシャールは発見されなかったのか？
いることはいた。

片っ端から牢屋をぶっ壊していた際、不覚にも俺達は気がつかなかったのだが、その一画にヤツは入れられていたらしい。

このクソイワシはナーちゃんと俺に知らんぷりをこき、自分だけとつと逃げ出してやがったのだ。トビタローやジンベエさんが進んで協力してくれたにも関わらず、である。

全てが片付いた後、のこのことアホヅラ下げて現れたイワシヤール。

ヤツは悪びれもせずに

「ま、戦略的撤退の必要性ってものですよ。私が逃げるフリをしてオトリになることで、達郎どのが行動しやすくなると計算していたのです。この私の協力があったればこそ、葵どどの救出に成功できたのですぞ。少しは感謝していただきたいものですよ」

ほざきやがった。

何が「戦略的撤退の必要性」だ。

セイゾーの手下どものほとんどは由美さんとマサが潰した。このバカイワシが解放された頃には、アザラシトリオ以外に敵なんか一匹たりともいなかったのだ。初対面の由美さんとマサ、あまりのイワシヤールの厚顔無恥ぶりに唾然としている。

「葵どのも、お礼くらいしたらどうでしょう？ 私がいなければ、

今ごろあなたは南氷洋に」

イワシヤールはまだ何か言い掛けたが、

「……南氷洋にはお前が行け！」

「あーれー……」

渾身の回し蹴りでブルーフィッシュの遙か彼方までぶっ飛ばしておいた。

あんな取るに足らない雑魚をわずかでも心配してやった俺がバカだった。

その22 食後のデザート

セイゾー以下海獣組とその手下、一匹残らず殲滅。

俺達はジンベエさんとブルーフィツシユのみんなの力を借り、奴らをみんな簀巻きにして残らず叩き出した。総督府の建物は残ってしまうが、みんなで有効活用すればいいだろうというテキトーな結論に落ち着いた。雨なんか降らない（海の世界だし）から、建物なんてなくてもいいんだろうけど。

力の要る仕事をあらかた終わると、ジンベエさんは黙ってのっそりと去って行った。

「あのっ！ ジンベエさん！」

その大きな背中に向かって声をかけたのはナーちゃんである。

「……？」

ゆっくりと振り向いた彼に「ジンベエさんはこれから、どのようになるおつもりなのですか？ もしよろしければ、お話ししていただけませんか？」

ジンベエさんは「ぬぼーっ」という表情を変えずに

「……俺達、海の、調整役。ずっと」

それだけ言っつて、また彼はのっしのっしと歩き始めた。

よくわからないけれども、俺はジンベエさんの姿に妙な感動をおぼえた。

あれが 男だ。

男って、ああいうものだよな。上手く言えないけど、男はああいう風でなくちゃ。無理矢理表現すれば……口で語らず背中語る、みたいなの？ ヤツに比べたら俺、まだまだ小さい。

「……ジンベエさん！」

俺は思わず呼びかけていた。

「ありがとう！ またいつか会おう！」

彼はちよっと歩みを止めたが、振り返ることなくまた歩き出した。

言い知れない爽やかな感動に満たされていると

「……………何となく、わかる」

背後で由美さんがぼそりと言った。

そうして俺達もまた、ナーちゃんに送られて人間の世界へと戻ってきた。

帰りは葵さんがマサと由美さんをエスコートしてくれたから、三人とも来る時のように溺れる思いはしないで済んだ。

埠頭の先端に這い上がると、もう日はとっぷりと暮れている。

「じゃあな。ブルーフィッシュが落ち着いたら、また来いよ」

海面を漂っているナーちゃんに、俺は言った。

本当は俺と一緒にこのまま来たかったみたいだけど　ようやく

自由を取り戻したブルーフィッシュのみんなには、気持ちの支えが必要だ。それはナーちゃんと葵さんだから。

『はい……………。私、すぐに達郎さまのお傍へ参りますから……………どうか……………』

以上、葵さんの通訳。人間の世界側だから、ナーちゃんは喋ることができない。

彼女、ちよつと寂しそう。

「姫様。そのように寂しいお顔をするものではありません。達郎様に申し訳ないでしょう?」

葵さんが宥めた。

『そうですよね……………』

思いなおしたように、ナーちゃんは俺ににこつと微笑んで見せた。そうそう。すぐに、会えるよ。

「葵おねーさまっ!　どっ、どーかつ、また来てくださいっ!」

マサはどうやら、すっかり葵さんのとりこになってしまったらしい。

葵さんもまた、にっこりと素敵な笑顔で「ええ、ぜひ」

「マジっスよ！ オレ、オレ、マジ待つてますからっ！ なんなら、オレがそっちに行きますよ！ マジで！」

ここに、ブルーフィッシュの永久なる味方が誕生した。

「……おおい、行くぜエ？ 夜風がちいっと、コタえるからな」

先に歩き出していた由美さんに促された。

一つ忘れていたが、海の世界に着いた時にはなぜか服は濡れていなかった。

が、こうして戻ってくると、当然服がびしょびしょなのである。

「由美様！」 葵さんが叫んだ。

「あん？」

「姫様が、いえ、私からですが……本当に、ありがとございまして、と」

それを聞いた由美さんはふっ、と小さく笑い

「……なんかあつたら、また呼びな。 アンタ達のこたア、嫌いじゃねエからな」

自宅に戻った俺は、夜も大分遅くなって戻ってきたこと、それに基づ濡れになつている理由を幸子からしつこく追及された。

ついでに 一日でケータイを二台もダメにしたことで、罰金を科されるハメになったのであった。

まあ、いいや。

ブルーフィッシュ共和国復興のために寄付したと思えば、な。

また、憂鬱な月曜日がやってきた。

「達郎！ もう行くの？ 朝ごはんは？」

「要らん。 どーせ、つくってないんだろ？」

「そーなのよ。 よくわかったわね」

……お前を親と呼ぶのは百年早かったわ。

「行ってくる！」

勢いよく家から飛び出した俺。

やや遅れ気味。三分と少々。

完全に出遅れたワケではないが、急がないとぎりぎり間に合わない可能性がある。

といって、別に寝坊をした訳じゃない。

テーブルの上に置いてあった新聞に何気なく目をやったところ、驚くべき見出しが載っていたのだ。

『開業間もない近海マリンミュージアム、閉鎖へ』とある。

慌てて記事に詳しく目を通してみると

『シヨーの入場料と称して客から別料金を収受していたが、このシヨーに偽装があることに気付いた客が指摘。同施設側はこれを認め
た』

確証はないが、どうやら俺のことと思って間違いないだろう。

ナーちゃんをああい風に見世物にしたことは許せないが、まさか閉鎖にまで発展するとは。何となく、やり過ぎたようなイヤな気持ちになったが、記事には続きがあった。

『のみならず、展示する魚類の購入などをめぐり、海外の裏組織と売買関係があったと同施設関係者が告発したことから、県警が捜査に乗り出した。同施設館長は当社の取材に対し「誠に申し訳ないことをした。皆様には深くお詫びする」とコメントした』

あー。

こりゃダメだ。俺が悪いとかいう以前のハナシになってしまっている。

ってか、ナーちゃんがあそこでああい扱いをされていたが、それは「売り飛ばされたんです」と彼女は言っていた。すると近海マリンミュージアムの内部に、海獣組とつながっているヤツがいたってということになりはしないだろうか？

憶測だが、この「裏組織」っていうのはもしかすると、海獣組とか、あるいは海の世界の勢力とつながっている連中かも知れない。

一年前に出会った時、ナーちゃんだったか葵さんが言っていた。海の世界で、人間と結託した勢力がある、と。

うーむ。

これはなんだか、事件の二オイがしますなあ、ワトスン君。

「……達郎？ 何、一人でぶつぶつ言っているの？ 朝から熱でもあるの？」

いやいや、ワトスン君なんかどこにもいない。目の前にはただの幸子がいるだけだ。

ヤツは居間で朝の韓ドラを観てやがる。例の勝手に韓国旅行以来、ハマったらしい。

などというイレギュラーがあり、ちよーつとばかり家を出るのが遅くなった。

一年前の運動不足な若者だった俺とは違い、今なら学校まで走るくらい何でもない。

駆けながらも、あの記事の内容が頭に浮かんでくる。

(それにしても……告発した内部の関係者って、誰なんだ？ もしかしたら、海獣組とかそれに手を貸した人間をよく思っていないヤツがいるとか……。だとすれば、そいつはブルーフィッシュにとつて味方じゃなくても敵じゃないってことも)

ああだこうだと考えてしまっていた俺。

だが、少なくとも走りながらはよくなかった。

キキーン！

「ぬおっ！！ しまったっ！！」

赤信号の横断歩道へ飛び出してしまった。

危機一髪。危うく、短い生涯を終えるところだった。

すれすれで急停止した高そうな車。すぐにその後部座席の窓が開いた。

「バカヤロー！ 死にてエのか、コラア！」

とか怒鳴られるかと思いきや

「……誰かと思ったら、二組の海藤君か。いやあ、怒鳴らなくてよ

かったよ」

顔を出してそう言ったのは、俺と同じくらいの歳の男子だった。そいつの顔を表現するのは簡単だ。アニメによくある、長髪でクールなタイプのイケメン男子。たいていは金持ちで勉強と運動神経抜群。以上！

俺はヤツに見覚えがあった。

春先に、経営していた港湾地区の工場が爆発事故を起こし、警察に逮捕された峰山という社長の親類にあたる人間だ。その社長の息子はこの三月に卒業しちまったが、今日の前にいるのはいところで、俺と同じ二年生。で、苗字はやはり「峰山」という。

あの事故は校内に関係者がいたということでかなり話題になったが、その「関係者」であるはずの彼は、同級生に向かってこう言い放った。

「あれはねえ、僕には関係ないんだよ。親父とおじさん（逮捕された峰山社長のコトだ！）は仲が悪いから、ずっと前から付き合いもなかったし。うちの親父も幾つか会社もっていて色々言われるけど、少なくともおじさんみたいなバカな真似はしないしね。家族ひいきするワケじゃないけど」

廊下でそれをやったものだから、ありとあらゆる生徒達が耳にした。

当時、俺は自主トレに燃えていたしあんまり事故に興味もなかったから、スルーしたのだが、その時ちらと見えたのはヤツの顔だった。理由はまったくくないが「なんとなく」ヤなヤツだなと思った記憶がある。

しかし、俺の方はまだしも、峰山の方が俺の顔を知っているとはどういうことだろう？

こいつとは、一年生の時もそうだが、一緒のクラスにはなっていない。

そついう「なんか胡散くせエ、こいつ」的な心の作用が、自然と顔に出ていたのだろう。

「ごめんとも言わずに突っ立っている俺に、峰山は

「でも、本当に良かった。あの低劣な軟式野球部にはもつたいなさ過ぎる唯一のプレーヤーにケガさせたとあれば、残りの八人から刺されてしまっただろうからね」

悪かったな。低劣で。

俺はその「グダグダ軟式野球部」の部員ですよ、どーせ。

それにひとつだけ言っとくが、今は十人いる。

四月に一人、血迷った新入生が入部してきたのだ。ついでにマネージャーだっている。……まあ、どちらかといえばマネージャーの方が血迷っているが。

それはともかく。

軟式野球部経由で俺のことを知っていたらしい。

やや納得した俺は

「す、すまん！ 以後気をつけよう。じゃ、急ぐから！ 苦情

があるなら後で！」

さっさと行こうとした。遅刻寸前だから、金持ちのお喋りに付き合っているヒマはない。

すると！

「待ってくれ！ この車に乗って一緒に行こう！ ここで会ったのも、何かの縁だし」

金持ちはすぐそれだ。

いかにも「自分は誰とでも友人になりたいんだ！」みたいな発言しやがる。金の力で友達できりや苦労しねエよ。他人を見下してるとってホンネが見え見えだぜ？ と言いつつ、乗る！ 乗ります！ まともに走ったら汗だくになってしまっし。立っている者は金持ちでも使うのが俺の主義だ。

「んじゃ、遠慮なく！」

カネの亡者とでも守銭奴とでも、なんとも言う方がいい。遅刻するワケにはいかんだ。

「ああ、乗ってくれよ。どうぞどうぞ。もう一人乗っているから、

ちよつと狭くて申し訳ないけど」

「構わん。助かった」

後部座席のドアを開けて堂々と乗り込んだ俺。

さすがは金持ちの車。後部座席が広い。うちの親父のボロ軽とは比較の対象にもならない。

峰山の隣、というか膝の上には、その「もう一人」がいた。

そいつを一目見た瞬間、俺は固まった。

えらい美人。

ふっさふさのロングヘアに、ぱっちりとした瞳、整った顔立ち。

首以下ほつそりとしていながらも胸がセクシーボンバー。そこだけを派手な模様のスカート布地で覆っている。

だが、俺がビビったのはそれが理由じゃない。

セクシーというだけならナーちゃんや葵さんで十分な免疫がついている。

っていうか、カノジョは

「彼女、フィールシャっていうんだ。俺はフィールって呼んでいるけどね。仲良くしてやってくれ」

よろしく、というようにフィールは俺に向かってウインクした。

ウインクしつつ足先が跳ねて「ぴちっ」と音を立てた。

いや、そこには足なんかありやしない。きゅっとくびれた腰より下はワインレッドにキラキラと輝くウロコで覆われていて、つま先のがあたりが半透明で大きなヒレ。

そう。

カノジョ、フィールは……人魚だった。

その23 セイウチ、愛の仇討ち

峰山のおかげで、俺は遅刻を免れたが。

どうにも授業に集中できーん！

学校までの車中、ヤツは俺に言った。

「海藤君も以前、人魚のコを連れていたよね？ だから、びっくりしないだろうと思ったし、同じ人魚のコを同伴している者同士、色々お付き合いできたら、と思ってね」

びっくりしたっつーの！

俺は一瞬、ナーちゃんが峰山のところに行ってしまったのかと思っただ。

しかし、ファイルはファイルだった。

髪も顔カタチも胸のでかさ……ああ、何でもありません。ウロコの色とか、ことごとくナーちゃんとは違ったからだ。それに今、ナーちゃんは

「あのコ、一緒じゃないのか？」

鋭いところを衝いてきやがった！

「……ああ。色々と、事情があつてな。会おうと思えば会えるけど、今は別々だ」

「そうか。……海に帰っているのか？」

「ああ。里帰り、だ」

葵さんやバカイワシ、それにみんなとこれからどうするか相談でもしているのだろう。

ブルーフィッシュもひとまず落ち着いたし、問題はない。

海獣組だのレッドバックの連中が報復にこなけりゃいいけれども。

『
』

峰山とファイル、隣でなにやら額&額の最中。

誰なの？ この人、とかそんな話でもしているのだろう。

人魚は誰でも丘に上がれば喋れなくなるんだな。

それで思い出した。

事あるごとに、色んな海の奴らが言っていた。人魚「族」というコトバを。

族であるなら、人魚はナーちゃん一人とは限らない。もつというってこつた。すると、ナーちゃんやフィルの他にも、人間の世界にやってきているコがいるのだろうか。

ただ、人魚にもいろいろいるのかも知れない。

人魚つてのは優しくて情が深い生き物だと思っていた。げんに、ナーちゃんはそうだった。

しかし、このフィル。額&額で話もしていないし、さつき出会ったばかりだから何とも言えないが 何となく、お高いカンジがする。俺の方をちらちら見ているかと思えば、峰山に甘えて「チュー」なんかしたりしている。

そついや俺、ナーちゃんとはまだしたことがなかったな。

結局それつきり、俺は車中で峰山と会話をしなかった。

学校に到着し、峰山が車を降りるや否や生徒達の注目の的だ。

とびつきり美人でセクシーな人魚を同伴しているから当たり前のことだが。

しかしよくまあ峰山のヤツ、堂々とフィルを連れてきやがったものだな。学校が騒ぎになることなんて、ちつとも顧慮してないんじゃないか？ これだから、金持ちのボンボンの感覚なんてわからんというんだ。うるさくてアタマ悪そうでも、まだマサの方がわかりやすくて付き合やすいと思うのは俺の偏見だろうか。

ホームルームが始まるまで時間がないから、さつさと先を急いでいた俺。

その後を、フィルを姫ハグした峰山もついてきた。

廊下で別れ際、ヤツはちらりと俺を見て

「まあ、あまりそう敵意をもたないで欲しいな。……僕たちは敵側の勢力じゃないんだし」

意味深な言葉を残し、別の教室へ入って行った。

「……」

その後ろ姿をじつと見つめている俺。

正直、奴らが俺達の側であるとは思えなかった。

初対面の印象を信じた方がいいというが　フィルとかいう人魚の口、どうも怪しい。

同族であるナーちゃんが人間に売り飛ばされ、ブルーフィッシュが滅亡同然の状態にあったというのに、影も形も見せなかった。海獣組が猛威を振るっているのを知っていたなら、ナーちゃんを助けるべく何かしてくれても良かったじゃないかと思う。というか、かなり直感に過ぎないが、ブルーフィッシュが平和になったのを見計らって登場してきたんじゃないか、そんな気がした。彼女にはよく注意しておく必要がある。峰山共々、何を考えているかわかったものじゃない。

ともあれ、ぎりぎり学校に間に合った俺は教室に入った。

何事もなく一時間目を終え、二時間目に突入。授業は日本史。

この潮清高校は進学校の端くれだから、教師達はそれなりにシビア。

だから、俺みたいに授業中にぼんやりしているヤツを目ざとく発見するや、

「……おい、海藤！」

はえ？

「この平治の乱を起こした人物は誰だ？ それとその息子は？」

教師は顔が妙に濃い、海老原という中年親父。こいつはランダムにすばすばと指名してくるといふことで、みんなから恐れられている。

へーじのらん？

あの五円玉を投げる方でしょうか。その息子は……人間かと……。あれ？ さつきまで「なかとみのかたまり」とかいう単語がとんでいなかったっけ？

全然違うことを考えていたから、答えられるワケがない。

「あー……それは……」
やばい。

答えられなかったらまたちくちくと嫌味を言われるぞ。

と、冷や汗たらたらになっていた俺は、ふと目の前をなにかが過ぎっていったのに気がついた。

それは一度机の上を「ひよい」と通り過ぎたと思いきや、巻き戻しみたいにもた戻ってきやがった。

「あ！ たつろーにーちゃん、みーつけた！ ボクだよ！ トビタローだよ！」

お？ 何かと思えばトビタローじゃないか！

相変わらずちっこい身体にでっかい羽。それをぱたぱたさせて俺に挨拶してきた。でっかいバカイワシとはまるで正反対。小さくて幼いくせに、働き者。あの日セイゾーを撃退してからというもの、このコは俺にくっついてきて離れようとしなかった。かわいいヤツ。「おう！ よくここがわかったな。海から来たのか？」

「うん。葵さんから聞いてきたんだけど、ここは同じ服を着た人間のおにいちゃんとおねえちゃんがいっぱいいるんだね！ ボク、あちこち探しちゃった！」

そーかそーか。ご苦労さん！

……ん？

気がつけば、海老原は口を「ぱっかー」って開けきったままフリーズしている。

周りの生徒達「なんだ、アレ？」と言わんばかりにどよめいているし。

「か、海藤くん？ それ、そのコ……」

隣の席の女子生徒・貝田理美が訊いてきた。彼女は一年生の時も

同じクラスで、セミロングが似合う可愛い系なコ。しかし、襲撃してきた「マツチヨ鯛」に人質にされかかるも、逆にボコボコにしてゴミ捨て場に放り出したというツワモノである。

そういう経緯があるから、貝田は大して驚きもしていない。

「こんにちは、人間のおねえちゃん。トビタローです！」

トビちゃんがぴよこつと挨拶するなり、貝田の瞳はたちまち「キラキラ星」となり

「……かっつわいー！！ チョーかわいーじゃん！！」

鯛のときは真逆なりアクション。

バカ声で褒められたトビちゃんは

「えへへ……」

羽をばたばたして照れている

その一声を機に、女子ども殺到。

「やった！ こーんなにちっちゃいんだ！」

「ボク、トビタローちゃんっていの？」

突如俺を襲った大ピンチは、奇跡的に粉碎された。ついでに日本史の授業もな。口の部分が故障した食い倒れ人形みたいな顔のまま、海老原はふらふらと教室から去って行ってしまったからだ。

トビちゃんは抱っこされたりなでられたり、もう大人気！ つか、もみくちやにされてしまっている。

「……あははは、くすぐりたいよー！！」
「ころころ。」

幼い子供をそのようにいじり倒してはいかん。ぬいぐるみじゃないのだぞ。

色んな女子生徒たちにパスされハグされまくったあと、ようやく再び貝田の胸に戻ってきたトビタロー。キュート系キャラが大好きな貝田は、ほとんど私物のようにしてトビちゃんを抱き締めている。

一通りのフィーバーが収束したところで俺は

「ところで、なんで学校なんかに来たんだ？ ブルーフィッシュの方はもういいのか？」

「あ！ そーそー、たつろーにいちちゃんに大事なコトをお話しにきたんだった！ ボク、忘れるところだったよ」
「だろうな。」

さんざんにシェイクされてたんだからな。

「大事なコト？ 姫様のことか？」

すると、トビタローは羽をばたばたさせて

「うっん、ちがうんだ。ブルーフィッシュのお国の方はだいじょうぶだって、葵さんが言っていたよ。……そうじゃなくて」

「そうじゃなくて？」

ズドガツシャアン

突然、教室入り口のドアが吹っ飛んだ。

「ブルーフィッシュと手を組んだ人間、出ておいで！ あたしの愛しいセイゾー様を、あんな目に遭わせたりして！ 許さないんだから！」

俺はついさつき失踪した海老原のごとく口が「ぱっかん」となったまま、塞がらなくなった。

集団でかたまっている女子達、それにクラス中も唾然としている。破壊された入り口のところadenaにやら咆えていたのは でっかくてぶよんとした黒茶色のカタマリだった。

いや、違う。

俺には見覚えがあった。

今や魚人達の住居と化したブルーフィッシュ総督府の一階、そこに掛けられていた一葉の絵画。

ヌード画。

それも、薄汚くて弛みきったブヨ腹をだらしなくさらけ出し、今どきオカマでもやらないような「うっふーん（はーと）」的な面つきで転がって（いや、横転かも知れない）している、最高にブサイクなメスセイウチの獣人のものである。

葵さんを救う際、俺は何のためらいもなくそいつを壁から引っぺがし、アザラシ野郎をぶん殴ってやった。その後、ニシン達の手

よってブルーフィッシュ区域の外れに埋められた末、その上に『ブサイク撲滅の碑』が建立されたのであった。二度とこういう気持ちの悪いモノがブルーフィッシュに持ち込まれないようにとの祈りをこめて、だ。

が。

たった今、この教室までやってきているあのデブは 紛れもなく、例の絵画のモデルである。

画ですら気持ち悪いのに、実物ははるかにひどかった。直視に耐えない。

ヤツは泣いているらしく、青いアイシャドーがのびて「お化粧メイクのクマ（目の下にできるアレである！）」状態。真っ赤な口紅なんかは口の周り全体に広がって「私、生肉食いました」的なザマである。

そういうツラでハンカチをかみかみ

「くやしーっ！ 人間達もあのナタルシアも！ セイゾー様の代わりにハタキを討ってやるわ！ セイウチ界に輝ける美貌ありと言われた、この」

ペーんっ！

薄汚いハラを相撲取りのように叩き「ハーレム・Say・子がねっ！！」

しーん……。

教室中、ドン引き。

誰もが「うわ！ なにこの腐った肉ダンゴ！」みたいな目で、顔を引きつらせている。

仇を討つのは結構だが、その前にてめーのハラ打ってんじゃねーよ。ってか、その見るに耐えないツラとハラのどこが「輝ける美貌」だ。

しかも名前に「ハーレム」って、アンタ……。

呆れて物を言う気にもならない。

ウザイ。かつキモイ。最悪。

もはや雰囲気は完全に「空気読めよ」。

口を開こうとする者は誰もいない。

ところが

「たつろーにいちゃん！ あのキモデブオバンだよ！ あのきたないおばさんのカタマリがセイゾーのうらみを晴らしに人間の世界に来るかもしれないって聞いたから、ボク、たつろーにいちゃんに教えにきたんだ！」

るー（涙が滝のように流れる音である）。

うんうん。

ありがとね、トビちゃん。

でも、言うのがちょおーっと遅かったね。そいつ、もう来ちゃった。

それに　いくら「キモデブオバンかつきたないおばさんのカタマリ」だからって、そういうことを本人の前で口に出しちゃいけないよ？　人間の世界ではね、そういうの「KY」っていうんだよ？　とはいえ、トビちゃんは幼いしねえ……KYなんてわからないか。

しかし、この状況で（誰もが思ったことを）彼がストレートに言うてしまったものだから

「どっ！」

クラス中、大爆笑。

ただし一頭ばかり、わなわなふるぶると震えているカタマリがあった。

やがて

ぶちっ

その音を、全員が聞いたはずだ。

「……ブッコロスぞ！！　このクソガキヤアー！！」

とうとうキレたハーレム・Say・子がおたけびを上げた。

途端に爆笑の嵐がぴたりと止んだ。

「だーれが『崩れ年増のしし肥満メタボババア』じゃコラー！！」

黙れそこー!!」

……言ってねえよ、誰も。

ブルーフィッシュのごたごたがやっと落ち着いたと思ったのに、さらに面倒くさい事態が起こりそうな、そんな気がした俺。このデブといい朝のフィルといい、どうしてこう次から次と俺の目の前に現れてくるのだろう。

なお。

「ハーレム・Say・子」なんて長い源氏名（かどうか定かではないが）はいちいち呼んでられないため、以後「S子」に短縮しておこう。

その24 海の天秤たち

「むつきー！ うつきー！ どすこーい！」

肉がつかえて教室に入れられないものだから、廊下で勝手に暴れ始めたS子。

まあ、ヤツがやってきたこと自体なかったことにしてしまおうかと思ったのだが、壁を壊すはガラスを割るわ、多少迷惑ではある。それにうるさい。

いつだったかテレビの動物番組で観たことがあるが、発情期の海獣どもはオスメス入り乱れて「んごー！ んごー！」とか咆えまくるのだ。それと何ら変わるところはない。

さすがにあちこちの教室から教師が顔を出し

「うるさいぞ、コラ！ 今、授業ちゅー」

言いかけるのだが、それを目にするなり「あ、やべー」みたいな顔をして引っ込んでいく。

「……どーする、海藤君？ アレ、近所迷惑じゃない？」

貝田があごをしゃくって俺に訊いてきた。

俺に訊くな。

水族館にでも連絡するか？ ……あ。閉鎖になっちまったんだっけ。

やっぱりなかったことにしよう。

みな、暗黙の了解であるかのように目でコンタクトを取り始めた。ところが

「なんであんたがいるのよ!？」

廊下の向こう側から、別のオバサン声が飛んできた。

そちらの方へと視線を向けると……なんと、別のセイウチババアが。

ドタンバタンと独り荒れ狂っていたS子の動きが止まった。

「……出たわね、Say・羅！ あんたなんか、セイゾー様に捨て

られたクセに！」

「なんですつて！？ あんたみたいな『一生愛人上等』の泥棒ネコばーさんに言われる筋合いはないわよ！ セイゾーの本妻はアタシだけよ！」

言うのが早い、Say・羅はどすんどすんと猛スピードで突進してきた。

「本妻が何よ！ 愛されるから愛人なのよ！ セイゾー様の愛はアタシのものよ！」

S子も叫びながら迎撃する体勢をとった。

どすうん！

たちまち両者激突。

なんだかよくわからんが、勝手に「本妻VS愛人 セイウチ・愛と憎しみの争い」が始まってしまった。本妻はどうやらSay・羅というらしいが、こちらもただのぶよぶよしたカタマリであることは言うまでもない。

「アンタなんか！ アンタなんか！」

「セイゾー様は渡さないわ！ このっ！ このっ！」

互いに繰り返し罵声、そしてハラをぶつけ合っている。

その度に学校の建物が「ズン、ズン」と揺れた。今ごろ、テレビで地震速報が流れているかもしれない。

しかし、だ。

まったく必要のない「脂肪」を叩きつけあっているだけだから、勝負なんかつきようがないのだ。

ホントーに、ただのクソ迷惑。

「 実に醜い争いだな。みんなが迷惑している。やるなら、表でやりたまえ」

そこへ現れたのは、あの峰山だった。

彼の胸にはフィル。

その彼女は二つのカタマリを冷ややかな目で眺めている。すると、S子とSay・羅はハラのぶつけ合いを停止し

「フィールシャ！　なんでアンタが人間の世界にいるのよ！？」
「じよ」によ……フィールと峰山、額&額中。

「君達のようにオスだメスだと繁殖しか頭にならないような下品な海獣はもううんざりだと、彼女は言っている。理知共に備わった人間の方のお傍にいたいから、君達とは手を切るそうだ」

おー言う言う。

確かにその通りではあるな。　　といって、それが自然界のごく当たり前な営みではあるのだが。

「こつ、この裏切り人魚がっ！　人間の男に媚びてるアンタに言われたくないわよ！　それによくも、よくもうちの主人を利用してくれたわね！」

「そーよ！　あんなんかがいるから『ハーレム・THE・セイウチ』はメチャクチャになったのよ！」

セイウチババアどもの怒りの声が届いたのか、どうか。

フィルは「ふん」という力才をしてから急に峰山に甘え始めた。「原因は君らじゃないのかな？　オスの奪い合いで内輪もめばかりしているから、セイウチの勢力は衰退したんだろう？　フィルはそう言っているが？」

再び聞こえてきた「ぷちっ」の音。

「きーっ！　あの憎たらしいクソ人魚め！」

「こつなりやナタルシアよりも腹立つわあ！　やっちまいますよ！」
共通の敵ということで見解が一致したらしいS子とSay・羅。

互いに頷きあうと、峰山目掛けて迫っていた。

見る見る黒茶色のカタマリが押し寄せてくるといいうのに表情一つ変えず、逃げようともしない峰山。

おいおい。潰されても知らんぞ？

さもなくば、いきなり「必殺！　土下座っ！」とか……ないよな。
どうすうっ

峰山のほとんどギリギリ手前で、急にS子とSay・羅の動きが停まった。

「アンタは　！」

「邪魔すんじゃないよオ！」

セイウチババア二頭は前に進もうともがくが、びくともしない。奴らと峰山の間には、巨大な何者かが。

そしてさらに

「はいはいはい！　ケンカはそこまでにしてねー！」

窓からひよいと入り込んでくるなり、そう仲裁に入った者がいる。男子生徒が一斉に唸った。

ムリもないか。

年の頃は俺達と同じくらい。

長い髪を束ね上げていて、瞳が生き活きと輝いている。細っこい身体を包んでいるのはブルーのようなグレーのような衣装。胸から上と片足が露わで、イブニングドレスに見えなくもない。ともかくも明るい雰囲気の可愛らしいコである。強いて言えば、テレビでたまに出てくるキャバ嬢に見えなくもないけれど。

ただし　その手にはクリアブルーのショットガンらしきものが。葵さんのオーシャンイーグルみたいな銃なのだろうか、よくわからない。

彼女が登場するなり、そこで初めてフィルが不愉快そうな表情を見せた。

額&額で峰山と何やら通じ合っていたが

「君らはバランサー、か？　何をしにきた？」

女の子はさつと表情を消して峰山に一瞥をくれながら

「ええ。そのバランサーですよ。　こっちの世界でちょおつとミヨーナ気配、感じちゃったんですよねえ？」

言い捨てておいて

「ジーナさーん！　そのお二方、ここから出しちゃってくださいね。人間の皆さまがご迷惑していますから」

「はいよ！　任せておおき！」

元気のいいおばちゃんの声が轟いた。

ジーナさんなるおばちゃんは、じたばたしているセイウチババアを押さえ込もうとしたが、

「ふんぎゃー！ きーっ！」

「がーっ！ がふーっ！」

あんまりにも暴れるので

「……いい加減にしな！ 人間さん達が迷惑してるだろうに！」

一喝するなり、ゴン、ゴン、と頭突きを連発。

喰らったセイウチババアはたちまち白目を剥いて大人しくなった。

「手間をかけさせるんじゃないよ、まったく。困った年増たちだねえ」

ジーナさんは圧倒的に強かった。

しかも、片腕に一頭づつ「よいしょ」と担いでいる。恐るべき馬鹿力。

こうして我が高校は発情したセイウチババアの襲撃から救われることになった。

……それにしても、気になる。

セイウチババアのあの一言。裏切り人魚。

間違はなくフィールーシャを指しているだろう。どう考えてもナーちゃんじゃないよな。

「いったい、海の世界で何が起きているというんだ？ ドタバタは何もブルーフィッシュだけに限ったコトじゃないんだな。」

「ところで」

捕獲したメスセイウチを窓から外にぽいと放り出したジーナさんは「こないだ、うちのダンナを助けてくれた人間のお方がいらっしやるんだらう？ ここのどこかにいないのかい？」

ダンナ？

ジンベエザメの？ って……ああ、ジンベエさんのことか？

すると、この元気で馬鹿力なおばちゃんって

「それって、ジンベエさんのことか？ ジンベエさんなら、俺が助けたけど？」

手を上げて前に進み出た俺。

するとジーナさんは「につっこおー！」と横に裂けてしまいそんな笑顔になって

「ああ！ アンタだったのかい！ いやー、うちのダンナが世話になったねえ！ どこかへ連れて行かれたのかと思って、アタシや気がじゃなかつたんだよ！ あんなにグズでノロマな亭主でも、いないとそれはそれで心配でねえ……」

そつと目頭を拭った。

ジンベエさんも男だったが、俺はこのジーナさんも一発で気に入った。

こういう夫婦漫才みたいだけど心の底でしつかりつながっている夫婦、とつてもイイ！

「世話なんて、とんでもない！ そのあと、俺達が助けてもらったんすよ！」

「いやいやいや、うちのダンナも喜んでいたんだよ？ ぬぼーっとしているから何考えているのかわからないヒトなのよ、まったく！ でしょお？」

ってか、ダンナのジンベエさんはほとんど無口だったのに、奥さんのほうは喋る喋る！ ジンベエザメってみんな無口なのかと思っただが、まったくそういうコトはないらしい。

げららははと談笑している俺とジーナさんの周囲では

「ねえねえ、名前、何ていうの？」

「どっからきたの？」

野郎ども、寄ってたかつてナンパを始めやがった。

セイウチのコト言えないなあ。逆ハーレムだろう、これじゃ。

「はい！ ドルファです！ あたし、元タイルカなんです！」

「ドルファちゃん！ メアド交換しない？ ねえ？」

が、ドルファさんはこつと千分の一秒スマイルを見せた後

「それはひ・み・つ、です！」

ガードは限りなく固かった。

その25 招かれざる客ども

「ゲームセット!」

三番バッターの清水先輩が空振り三振に倒れ、あっけなく試合は終わった。

いや、あつけないという表現は正しくない。

三十七対ゼロ。一回コールド。

あつけなかったのはうちの攻撃だ。

せめて俺まで回してくれば、一点くらいは入ったろうに。

「いやーご苦労さんご苦労さん。よく頑張ったなあ、うんうん」

今日もにこにこ、ヒツジ監督。

そりゃあ頑張りましたよ。

炎天下に外野で延々と突っ立っているのはどんなにツライことか。打球なんか飛んできやしない。それというのも、うちのアホピッチヤーの投げる球が一球たりともストライクゾーンに入らないからなのだが。プロ野球の始球式とかでやってくるアイドルの方がまだマシな玉を投げてるような気がする。

だからだとベンチに戻っていくと、他の連中はすっかり帰り支度完了。

おまえら、最初からやる気あったのか!?

怒りとも諦めともつかない気持ちで荷物を片付けていると、不意にめぐみと目が合った。

しかし彼女は

「ぷいっ」

あつちを向いて、そっちに行ってしまった。

へーへー、すみませんでしたね。

あの水族館の日以来、ずっとこうだ。

原因ははっきりしている。

彼女はしっかりと目撃していたのだ。

俺がナーちゃんを抱っこして、水族館から一目散にとんずら
するところを。

真っ赤な夕陽が目にも痛い。

試合後、俺は例のバッティングセンターで一人黙々と百三十km
のボールを打ちまくり、それから家路についた。他のバカナインど
もは今ごろ、アホマネージャーめぐみとプールで散々騒いでから焼
肉でも食っているだろう。俺も誘われることは誘われたが、あつさ
り遠慮した。

でかいスポーツバックを担いで大通りをてくてく歩いていると、
向こうの歩道に知った顔が。

春香ちゃん、そしてその彼氏。

笑いあいながら歩いていく。楽しそうだな。

去年の今ごろはちょうど彼女と一緒に学校祭の準備で毎日夜遅く
まで作業をしていたっけ。で、へとへとになって帰る途中、いつも
春香ちゃんとお茶していく。学校祭本番は本番で、彼女と見回りし
たりイベントの準備をしたり。

あの時は楽しかった。

その学校祭が、また今年もやってくる。週が明けたら水・木・金
と三日間。で、それが済んだらイヤーな期末試験があつて、夏休み
に突入。

今年の実行委員なんかやってないから、完全フリー。

いや、ヘツポコ野球部でなんか出店をやるとか聞いた記憶がある。
確か、お好み焼きだったような……。

「はーいっ！ あたし、バニーのカッコで客引きやるー！」

ミーティングの際、そういう発言をしたバカが約一名。どのど
いつであるかは言うまでもない。

「おおーっ！ いいねえ！ 校内売り上げナンバーワンはもらった
も同然だ！」

ほざけ。

単にめぐみのバニー姿を見ただけだろう。エロキャプテンに率いられた結果、部員達にも悪癖が伝染しつつあるようだ。

食った客にもその変態症が伝染しなければいいのだが。

まあそれはともかくとして、学校祭の最中は鬱陶しい授業がなくていい。

ただ 何となく、胸の内にはぽっかりと穴が開いているような気分。

その原因がなんなのか、よくわからないんだけども お祭り騒ぎで一緒にはしゃぐ相手がいないっていうことかも知れない。マサヤ由美さんと呼んでもいいのだが、どんなトラブルが発生するかわかったものじゃないから呼ばないでおくとして……やっぱり俺は一人。

いや、まったくの一人ぼっちという訳でもない。
ただし

「達郎どの！ 私には重くて仕方がありませんよ。今少し、負担の軽減を要求します！」

さつきから、俺の後ろでぶつぶつ言う声が。

同時にぺったぺったとイラつく足音がもつずっと耳をついてくる。俺はくるつと振り返り

「ああ？ 何抜かしてやがる！ そんなものも持てないで、姫様をお守りできるものか。シャキッとせい、シャキッと！」

怒鳴りつけ、また歩き出す。

負担軽減要求は却下。

「まったく、もう。これだから、達郎どのレディに好かれないのですぞ。少しは優しくすることを覚えないと、そのうち姫様にだって愛想を尽かされ」

またなんか文句言ってやがる。懲りない野郎だな。
そう。

何を隠そう、ブルーフィッシュ共和国雑用見習いに全会一致で推

薦された自称「ブルーフィッシュ」の青い閃光「イワシャルが、昨日から俺にまわりついてきやがったのだ。なぜ「青い閃光」なのかはまったく意味不明である。

要はあまりの腰抜けっぷり、使えなさに業を煮やしたブルーフィッシュの民がみんなで相談し、「イワシャルはぜび、達郎様の下でバシバシ鍛えていただくよりほかはない！」という結論に達したらしい（バカイワシ本人は真逆のことを言っているが）。

正直にいう。クソ迷惑でしかない。

とにかくこの野郎、幸子と仲がいいから家の中では

「達郎どの！ お茶がなくなっているのですよ？ そういうことに、少しは気がつかないと」

「達郎どの！ 幸子どのがお出かけなのですよ？ お見送りとか、そういう心遣いがないと」

もちろん、そういうふざけた発言のあとには「きらーん！」「あれー！」が続く。

いい加減に蹴り飽きた。なので最近は殴ることにしている。

次回からは簞巻きにして近所の野良猫の住処に放り込んでやってもいいかもしれない。

ただ、この真正銘使えないバカイワシはたった一つ、重要な情報を持ち込んできた。

「総督府が陥落してセイゾーが追放されたことで、ブルーフィッシュに對する他勢力の評価が大きく変わりつつあるのですよ。その大きな成果として、今回「ヤツは愛用する聖なるポセイドンのヤリ（木の枝＋石ころ）をトン、と床に突き「どうやら海の世界でも強力な存在であるランサー達が、我々に接近しつつあるのです。元々敵対してはいなかったのですが、海獣組の横暴に手を焼いたと見え、この際協同しようとしているらしいのです」

確かに、ランサーの連中とは接触があった。

総督府から助けてやったジンベエさん、その奥さんジーナさんにドルファちゃん。みんな、俺達に好意的かつ協力してくれた。

そうか。それなら少しは安心のしようもあるというものだ。
ナーちゃんや葵さんのこれまでの苦労もようやく報われてきているのかも知れない。

などということ、とつこうつ考えつつ歩いていると
「シャキーン！ 見つけたぞお！ ブルーフィッシュの手先、悪
の人間め！」

行く手に立ち塞がった影がある。

逆光で姿がよく見えない。

「この俺様を忘れたとは言わせないぜ？」 続けて「色褪せないぜ？」

ああ、思い出した。

バカ丸出しのラップもどき、一度聞いたらなかなか耳から離れない。
い。

「美しいこの背ビレ！ 赤く輝くこのウロコ！ そう！ 俺様こそ
が『THE・鯛・チヨ』さ！ チヨはロングじゃない、スーパ
ーな方だ！ そのほうが、この俺様にはふさわしいからな！ だろ
！？」

はいはい。わかったわかった。

あの凶悪なウツボだのセイウチとやりあっているから、こうい
うバカにはなんとなく愛嬌というものを感じるようになってきたこの
頃の俺。

「……おい、鯛野郎」

「ん！？ 鯛野郎だとお！？ 失礼だな！ 無礼だな！ 部屋の天
井、一家に一台、それは神棚！ チェキラ！」

さらに「YOYOYOYOYOYO」と続くのだが、俺はそれ
以上相手にせず、無言でくるりと振り返った。

「……」

予想にたがわぬその光景。

「……おい」

「あ……え……？ な、なにか……？」

早くもイワシヤールは逃走を企てていた。

「何、してる？」

「あ、いや、その……せ、戦略的な撤退の必要性を……」
ヤツの目は泳いでいる。

「ほう……大した戦略だな、アホイワシ」

静かに呟きながら、俺はヤツに預けていたバットを取り上げた。
イワシヤールは俺がそれで「THE・鯛・チヨ」と戦うものだと踏んだらしく

「さっ、さすがは達郎どの！ どんなにヘタレでチヨーチンプー（意味不明）でも、ブルーフィッシュのために戦う志だけはチヨモランマですな！ いや、誠にあっばれ！」
なるほど。

チヨモランマ、ね。

「おい、バカイワシ」

「な、なにか？」

俺はむんずとヤツの尻尾をつかんで引き摺りあげると

「ぜひ、行って来るといいさ。チヨモランマへ」

「あ、え？ 達郎どの、何を？ ま、まさか」

まだ何か言っているイワシをぽいと宙に放り上げ、フルスイング。

「……冷凍されてこい！」

カッキーン

当然「THE・鯛・チヨ」を外す俺ではない。

「あーれー」

「なんてこつ・鯛」

アンポンタン魚が二匹ばかり、叫びながら赤い夕陽に向かって消えていった。

帰ったら、さっそくブルーフィッシュのみんなに手紙を書かなくちゃ。

イワシヤール殿はチヨモランマへ修行の旅へ出かけました、とな。

追伸をつけよう。

二度とヤツを俺の元へ派遣してくるな。

あ。

海中に向かってどうやって手紙を書きゃいいんだ？

その次の日の夜。

うつつとしい邪魔者（バカイワシヤール）が消えてくれたことでいつもの平穏な日曜日を過ごすことができた俺は、居間でバラエティ番組を観てから風呂に入り

「じゃ、寝るわ」

「寝るの？ おやすみなさい」

幸子は今夜、韓ドラ三昧だろう。何やら大量にレンタルしてきてあつたのを目撃した。

明日の朝もメシはないな。

どうせヤツは寝不足で起きられないだろうから。

早めに家を出て、コンビニでパンでも調達するか。

などというスケジュールを立てつつ、部屋に入った俺。

ベッドにもぐりこむだけだから、照明なんかはつけない。

と、俺は異変に気がついた。

そよそよと、風が吹き込んできている。

「……………」

ふと窓の方に目をやれば、ガラスがしっかりと割られている。

泥棒か！？

咄嗟に警察に通報することを思ったが、その必要はなかった。

ベッドの上に、来客の存在。

よくよく目を凝らしてみても、俺は仰天した。

「……………！！」

そのお客様は俺のベッドに横たわっていたが、俺の気配に気がついて目を開けた。

「あ……………達郎様！ 良かった……………お会い、できて……………」

ふらりとベッドから転げ落ちそうになった。

俺は慌ててその身体を受け止め

「ドルファちゃん！ どうした！ 何があった！？」
そう。

ドルファちゃんだった。

しかし、あの日の快活で元気な彼女ではない。

衣装はボロボロ、体中にアザやキズができている。意識はほとんどもうろうとしていた。

抱きとめてやると、ドルファちゃんは俺の身体にぎゅっと抱きついて

「……ポイズングループの者達が、急に襲ってきたんです。彼等だけだったらまだなんとかしのげたんですけれども、その中に……」
「その中に？」

ドルファちゃんはゆっくりと顔をあげ、その美しい瞳で俺を見てから

「人間の方達が混じっていたのです。私達は人間の方達とは戦えないのを知っている誰かが、人間の方を……」

咄嗟に俺は思った。

もしかして、ドルファを襲わせたのは フィルーシャのヤツか？

その26 学校祭ですけど(一日目)

結局、ドルファちゃんを襲った連中の特定はできなかった。

彼女は二日間というもの、高熱を出して寝込んでしまったからだ。ほとんど意識はなく、時々うわ言を言った。

「やれやれ、だな。よやく熱、下がってきたぜ？ 一時はどオなるかと思つたよ。苦しそうに呻くんだもんさ」

彼女を助けてから三日目、この日は水曜日。学校祭初日。

ホームルームなどが一切ないのをこれ幸いと、俺は早々に学校をフケて家に戻ってきた。

ドルファちゃんは俺のベッドに横たわっている。

その傍で胡坐をかいて座っているのは、くわえタバコの由美さん。ドルファちゃんは海の世界の者とはいえ、人間の女の子の姿力タチをしている。さすがに俺が着替えをさせたりするのは忍びないから、やむなく由美さんに相談したのだ。

見た目はコワくても人情篤い由美さん、速攻で飛んできた。

「おーおーおー、こんないたいけな女の子つかまえてボコつたか。どこのどいつだ、あア!? アタシがぶつ潰してやるよ!!」

傷ついたドルファちゃんを一目見るなり武装天女に変身しかけたのを必死になだめ

「由美さん！ それはともかく、まずは彼女の手当てを」

「お？ おオ、そオだな」

意外にも由美さんは器用だった。てきばきと鮮やかに手当てを施しつ

「……に、してもタツう。おまえ、律儀だよなア」

後ろを向いて座っている俺に言った。

「何がです？」

「よくアタシを呼んだよなア。このコ、脱いたらチョーナイスバディだぜエ。胸なんか特にムッチリだよ。フツの男だったら、真つ

先に襲いたくなるって！……ま、アタシほどセクシーじゃないけどな」

ケラケラと笑っている。

ケガした女の口を襲うなんて、ガチ鬼畜じゃないか。

「ま、そこが」つと笑いをやめ「おまえのいいトコだよな。だから、信用できる」

それからというもの、由美さんは泊り込みでドルファちゃんを看病してくれた。

彼女に任せっぱなしというのも申し訳ない気がした俺は学校を休んでしまおうと思ったが

「いいって。行けよ、ガッコー」

「でも……」

「それがお前の務めなんだから、とりあえずやるコトやっときな。アタシやこのとーりプーだからな。ヒマだけは腐るほどある」

そう言ってくれる由美さんが、涙が出るほどありがたかった。

ただ、一つだけ苦情を言われた。

「おまえのかーちゃん、なんだアありやア？ 一日ずーっと、テレビの前から動かんぞオ？ アタシがハダカで風呂から上がってきても気付かねエんだもの」

あの……お年頃なんですから、由美さんも。スツポンポンで他人の家の中歩かないほうがいいですよ？

「そのうち泥棒にやられるんじゃないやねエ？」と、言うてから「……おまえも苦労してんなア、タツ」

はい。幸子にはもう、気絶するような苦労をかけられっぱなしで……。

それはさておき。

おでこを冷やしたりキズの様子を診たりと、昼夜を問わず由美さんはまめまめしく看病してくれた。あんまり眠らないので心配になったが、どうやら缶ビールとタバコさえあれば苦にならないらしい（彼女はまだ十九歳である）。

三日目も昼を過ぎた頃、ようやくドルファちゃんはうつすらと目を開けた。

俺と由美さんが隣でもしやもしやとお好み焼きと焼きそばなんか食っていたから、ニオイで刺激してしまったかも知れない。ちなみに学校祭の出店で買ってきたヤツだから、さっぱり美味くない。

「……あ、達郎様？ あたし……」

由美さんは食っていたお好み焼きを放り出してベッドに駆け寄り「おう！ 気がついたか、ねエちゃん！ 熱は大分ひいたぜ！ 焼きそば食うか？」

やめなさいよ。ケガ人なんだから。

見慣れぬ人間がいたことにドルファちゃんはちょっと驚いた様子だったが

「お水が、飲みたいです……」

それを聞くなり由美さんは

「おう、タツウ！ カキ氷買って来い！ メロンとイチゴとブルーハワイな！」

だから、水だって言ってるでしょーが。

しかもケガ人に合成着色料なんか食わす気ですか。

カキ氷はおいといて、ミネラルウォーターを飲ませてあげたら少しは心地がついたらしく、ドルファちゃんはゆっくりと起き上がった。

「すみません、達郎様。あたし、何日も寝込んでしまったんですね

……」

「いいって！ こいつはんなコト気にしねエよ。それよか、何があつたんだ？」

由美さんを知らないドルファちゃんはちょっと戸惑っている。見た目もコワイしな。

俺は苦笑しながら

「あ、ドルファちゃんね、この人は由美さん。ドルファちゃんをずっと看病してくれていたんだ。俺が一番頼りにしている人さ」

と、紹介してやった。

「まあ！ ありがとうございます！ お二人がいなかったら、今ごろあたしはダメだったかもしれないですね？」

ようやく笑顔になったドルファちゃん。

「で、いったいどうしたっていうんだ？ ポイズンとやらいう連中と人間に襲われたって、言ってたよな？」

「人間！？ なんだアそりゃ？ ナンだって、海の奴らを襲ったりするんだ？」

「それが」

ドルファちゃんは俺達に事情を話して聞かせた。

ついこの前まで、海の世界をほとんど牛耳る勢いだった海獣組の勢力は、セイゾーがやられたのをきっかけにあちこちで抵抗されるようになった。すると、海獣組の中でも内輪もめが始まり、ついには分裂の様相を呈し始めた。同じ海獣組であっても、下つ端扱いされてきた連中が真つ先に反抗するようになり、セイゾーらのような上の者達を次第に圧迫していつているという。

そんな中、海獣組ともっとも近い立場にいた一人の人魚族が、突然海の世界から姿を消した。

「それって、あのフィールシャのことか？」

「いえ……。フィールシャも元々はハーレム・THE・セイウチというグループの中心にいましたが、欲望と脂肪のかたまりみたいなセイゾーがセイウチを仕切るようになってからは離れていきました。まさか、人間の方のところへ身を寄せていようとは思いませんでしたが」

「ちょっと待った。人魚族ってのは、海の世界じゃそんなにエライものなのか？」

ドルファちゃんはこっくりとうなずき

「魚人や海獣人などよりもずっと気高くて知性を備えた生き物ですから、どの種族も争って人魚族を中心者に迎えようとします。そして、それ以上に大切な理由なのですが……」

「ちょっと上目に俺を見た。」 海の世界では唯一、人間の方と結ばれることができるのが人魚族なのです。私みたいに完全に人間の方の姿をしていても、魚人や海獣人は人間の方と結ばれることは許されません。ですからナタルシアの従者の葵さんも、人魚の血を引いているとはいっても人魚ではありませんから、人間の方と結ばれることはできないのです」

ん？

わかったようなわからないような。

イワシャールとかハーレムSay子みたいなゲテゲテのバケモノは論外だとして、ドルファちゃんや葵さんなら、人間でないといつても人間の男どもは放っておかないだろう。美人で気立てがよくて聡明なんだし。おまけに強い。

なんで人間と結ばれたらダメなんだ？ いいじゃん別に。

俺がそう質問すると、ドルファちゃんは悲しげな顔をして

「ダメなんです。海の世界では、人間の方達というのはもっとも知性があつて、力があつて畏怖すべき存在。その人間の方達と海の者達が簡単に結ばれてしまつては、海の世界の均衡を保つことができなくなるからです。ですから、人間の方と結ばれることができる人魚族を、どの種族も大切に扱っているのですよ」

「んー？ じゃじゃじゃあ、さ。どーして人魚だけは人間と恋をしてもいいのさ？」

「それは、人魚族が本来、何よりも愛情の深い生き物だからです」
ぷっかー。

三枚あつたお好み焼きを残さず平らげた由美さん、食後の一服。
粉っぽいだのソースが薄いだのさんざん文句をぶちまけていたのに。なんだかんだで飢えていたんだな。

「あん？ それとこれと、どーいうカンケーがあるんだ？」

「人魚族はどうしても、素敵な人間の男性と結ばれたかったです。それでその権利と引替えに、自分達の大切なものを一つ犠牲にしたのです。それがなんだか、お分かりになりますか？」

人魚のたいせつなもの？

思いつかないな。

足？ いや、それは最初から持っていない。

正体を見られたらその男を殺す。……ではないな。

そういや昔、俺が小さいころ、幸子が人魚姫の絵本を読んでくれたことがあった。人魚姫が海の泡になつてしまつところでボロ泣きして、いきなり俺の布団で鼻水をふきやがった。幸子のせいで、それ以来人魚姫の絵本を敬遠するようになった俺。

それはともかく、あれも壮絶なお話で、愛ゆえに自分の命を捨ててしまふという、現代社会ではマジあり得ないストーリーだ。陸に上がるために人間の姿になつたのはいいが魔女からもらつたクスリのせいで声を失い、声が出ないためにバカ王子に誤解されてしまう。しかも、そのバカはよりによって他の女に手を出すのだが、何を血迷つたか人魚姫はバカに遠慮して身を引き、最後に泡と化する。

登場人物が全部イタ過ぎて、まったく救いようのない腐つた童話である。

ん！？ 喋る？

そうか。そうなのか？

葵さんやドルファちゃんにあつて、ナーちゃんにないもの。

それは

「……声、か」

ドルファちゃんはこつくりと頷き

「さすがは達郎様。ナタルシアを深く愛していらつしやるからすぐお分かりになりましたね。その通り、人魚族は陸に上がつて人間の男性を愛することを許されている一方で、陸では愛する人の名を呼ぶことができないのです。唯一お話ができるのは、愛する人と触れている時だけ……。それでもまだましかも知れませんが、彼女達にとつては、それはとても辛いことでもあるのです」

「げーっという力オをした由美さん。」

「そこまでするかよ？ フツー……。声がなかつたらよオ、カラオ

ケできねエんだぜ？」

ツッコミ方がおかしいですよ、由美さん。

ドルファちゃんはくすりと笑って

「ですから、人魚族は海の世界ではずば抜けて特別な存在だということなのです。　あら、あたしったら！　つついハナシがずれてしまいました」

　　ってことで、話は元に戻る。

「海の世界から姿を消したのは、リーネという人魚です。彼女はどこでどう人魚族としての美しい心を失ってしまったのか、海獣組の連中を動かして海の世界をその手に握ろうとしていたのです」

「そのリーネってのは、人魚族の中でも力があるヤツなのか？」

人魚族とはいえ、人間のようにそれぞれ姿形が違うだけで特殊な能力などはもっていないという。だから、海の世界を支配しようとしても、彼女や海獣組だけではどうにもならないらしい。

　　が、ドルファちゃんは続けてこんなことを言った。

「つい最近、海獣組の支配から逃れたアザラッシュ（どうやらアザラシらしい）やラッコチームの者達が教えてくれたんですよ。人間の方と手を組みたがったリーネがブルーフィッシュを征服してナタルシアを捕らえ、人間の方の世界にある魚達を見せる水族館とかいう建物へ彼女を渡した、って」

　　おいおいおい。

　　そいつは穏やかじゃねエなあ。

　　人魚が自分と同じ種族の人魚を売った、ってのかい。

　　自分に都合のいい条件を手に入れるために。

　　最悪なヤツだな。

「……で？」

　　リーネの謀略は上手く進んだかのように見えた。ドルファちゃんが聞いた話では、リーネはとも力ネと力のある人間と知り合うことに成功したらしい。

　　だけど、失敗の時はあっけなくやってきた。

　　たまたまショー

に出されていたナーちゃんを目にした俺がショーをぶち壊して彼女を助け出し、その足でマサヤ由美さんともどもセイゾーを潰したからだ。

しかも、セイゾーがやられたことで海獣組を恨んでいた連中がこそつて立ち上がり、逆襲を始めた。たちまち海の世界で居場所を失ったリーネ。

海獣組に圧迫されていた海の調整役・ balanサー達はこれをチャンスと、あちこちの勢力と協力関係を結んでいったという。イワシヤールが言っていたのはこのことらしい。

が、話はそれで終わりではなかった。

「リーネにしてやられていたのは、何も魚人達や海獣人達だけではありません。人魚族の中にも、彼女を快く思わない者達がいるのです」

その一人が フィルーシヤなのだという。

「ハーレム・THE・セイウチがリーネ率いる勢力に併呑されるや、その中心だったフィルーシヤは追い出されてしまったのです。彼女はそれをひどく恨み、機会があればリーネに復讐しようと狙っていたと聞きます。そしてこの前、達郎様達がナタルシアを助けてセイゾーを退治したという話を聞いた彼女もまた、海の世界からいなくなりました。結局、人間の方の傍にいましたけど、いったい何を企んだことやら……」

……あれ？

由美さん？

「ぐう……」

転がって寝てるよ。

テトリスと新聞が大嫌いだという彼女は、複雑な話を五分以上聞くと眠くなるのだという。

まあいいだろう。

夜中も寝ないでドルファちゃんの看病してくれたんだし。

いくら缶ビールとタバコでエネルギー補給十分だって（本人がそ

う主張しているだけであって、何ら根拠はない) といっても、やっぱり寝ないとツライよ。

いろんな話を聞かせてもらったが、肝心のところがつながっていない。

「それでさ、ドルファちゃんがポイズンと人間に襲われたっていうのは、今のハナシとどうつながってくるんだろ? 黒幕はリーネかフィールシャ、ってことなのか?」

ドルファちゃんはうーんと首をかしげ

「リーネかフィールシャが背後にいる可能性はあると思いますが、どちらなのかは正直、よくわかりません。ポイズングループは普段、海の世界で悪さを働くような連中ではありませんし。ただ一ついえることは、私達バランサーの存在が気に入らない者の仕業だということです。あの晩、襲われたのは私だけじゃなくて、ジーナさんも襲われたんです。ジーナさんと一緒に身を守っていたんですが、お互いに離れちゃって……。大きくて力持ちなジーナさんのコトだから、まずやられたりなんかしてないと思いますケド」

つまり、犯人の手がかりはナシ、と思っただ方がいい。

これじゃあどうしようもない。

とはいえ、ドルファちゃんはガチで襲われたのだ。逃げるのに必死だった以上、犯人を記憶していなくても仕方がない。

床にごろりと転がり、天井を睨んでいる俺。

このあと、どうしたものだろう。

ドルファちゃんが元気になったのはいいが、放っておけばまた襲われないとも限らない。

と、そこでふと気付いた。

ひとつだけ聞き忘れていたことがある。

「人間が混じっていた、って言ったよな? どういう奴らだったんだ?」

「若い男性でした。そうですね……達郎様と同じくらいの歳の方ばかり、十人もいたでしょうか」

若い？ ヤクザの若い衆とか？

それにしても、俺くらいの歳でヤクザはないだろう。
首をひねっていると

「ああ、そうそう」

ドルフアちゃんがぽんと手をたたいた。

「この前に見た、達郎様が着ていた服と似たようなのを着ていましたよ。色は青くて、前に五つばかり、きらつと光る金色の玉がついていて」

はい、よくできました。

それだけわかれば十分です。

青い学ランを着た連中。

そういう趣味の悪い制服を生徒に強いるような学校は、この街にはたった一校しかない。

近海水産高校。

その奴らだ。

その27 学校祭ですけど(二日目・午前)

学校祭二日目。

今日も校内は盛大に大騒ぎだ。

「水泳部のカキ氷はいかがですかーっ！」

「チヨコバナナといえば三年E組！ さあみんな、食ってみろ！

これを食べずに潮清祭を終われるかーっ！」

「一年F組でバザーやってまーす。みなさんきてくださーい」

「サッカー部の男メイド喫茶！ 男メイドだ！ どうだ！ ネコ耳

メイドもいるぜ！」

各クラス、クラブの出店やイベントの熾烈な呼び込み合戦が展開
されているかと思えば

『ぴんぽーん！ 潮清祭実行委員会からのお知らせです！ 十時
二十分から体育館にて演劇部による劇「ロミ男がジュリエッタ」開
演です。みなさん、お誘い合わせの上体育館へゴーツ！ よろし
くっー！』

……どんな劇だよ。

生徒やら近所の方々でごった返している校内をぶらついている俺
うちのクラスでも企画はやっているのだが、なにせ「コーラをタ
ダで飲もう！ 早ゲツプ大会」という女子全員から総スカンを食っ
た潮清祭史上最低なバカ企画である。優勝者にはコーラー・五リッ
トルケーキがあたるとのことだが まったくもって、俺が手伝
う必要も手伝う意欲もゼロである。知らないうちにタイムキーパー
の役割を振られていたらしいが、とんずらしてきた。

ってか、別に俺はヒマなワケじゃない。

きのう、ドルフアちゃんを襲った連中がどうやら近海水産の奴ら
だという話を(起きたあとに俺から聞いた)由美さんが

「じゃ、ちよつくら探り入れてきてやるよ。あとでそっち行くから、
なんか美味そうなモンでも見つけといて」

と言が残し、朝から近水へ出向いて行ったのだ。

たかが学校祭の出店ごときに美味しいモンなんかある訳がない。それに、ほんっとーに探りを入れるだけのつもりだろうか？

校門から一步踏みこむなり「出て来いコラア！」とかつて武装天女が降臨して近水生を片っ端からばったばったと 彼女の通った後には死山血河死屍累々、か。やりかねない……。

ドルファちゃんを襲った奴らはさすがに許せないが、かといって見つけてボコればいいって話じゃあないと俺は思っている。リーネかフィールシャかわからないが、ろくでもないコトを企んでいる黒幕を特定して、そいつをやめさせなければならぬ。さもなければ、ナーちゃん達ブルーフィッシュをはじめドルファちゃん達バランサー、その他海の世界の住人達が安心して暮らしていけないからだ。そついや昨日から峰山&フィールシャの姿を見ていないな。

何か悪事の相談でもしているのか？ あるいは朝から陰でいちゃついているのか……そつちは別に構わないけどさ。やりたいたいだけやりによ。

なーんて思ってみたりするケド。
むー。

やっぱり俺だって、ナーちゃんと一緒に学校祭を楽しみたい気持ちはずげエある。あのコがいたらきつと、見るもの何でも面白そうに『達郎さまっ！ あれは何でしょうっか？』
『行ってみませんか？ 達郎さまっ』

とか、なるんだろっうなあ……。男はそうやって女の子に甘えられるのに憧れるんだ！

だけどもあ、仕方がない。

ナーちゃんはブルーフィッシュの民のために頑張っているんだもの。来いとは言えない。

……お？

あれは春香ちゃん。

彼氏と一緒に歩いていく。

今年も実行委員を引き受けたんだな。
そうか。

あの男子も実行委員か。それで仲良くなったのか。

「おいっ、海藤っ！」

突然、俺は横から腕をつかまれた。

「あ？ 清水先輩？ ナニやってんすか？ こんなトコで」

「ナニじゃない！ お前、少しはクラブのために働いたらどうなんだ！ 昨日からずっとサボリやがって！」

貢献してるでしょーが。

試合のたびに点数とってやっているのは誰だと思っているんですか？ 一番働いてないのは連続三振&エラー記録更新中のアンタでしょーが！

お好み焼きの二枚や三枚、自分で焼きなさいよ、焼きなさいよ！

「いや、俺、今呼ばれていて」

「ちょっとでいいから働いていけ！ タダでさえ誰も来ないっていうのに……」

要は部員ども、揃いも揃ってサボリやがったんですね？

「じゃ、一時間経ったら来るから、それまで店番している！」

結局、清水先輩は俺に焼き&販売という重労働を押し付けてとんずらしやがった。

ちくしょー。

俺一人でどうしろって……あ！

一人じゃなかった。

出店の裏側でふくれっ面をしてパイプ椅子に座っているバニーガールが約一名。

「……」

じろりと俺を見たが、何も言わなかった。

おい、めぐみ。お前の魅力で校内売り上げナンバーワンにするんじゃないかったのか？

呼び込みもしないでサボるとはいい度胸

いや、ちょっと違う。

何気なく焼き台の下を見た俺は、めぐみが立ち働いていない理由を知った。

失敗したお好み焼き、もとい黒い円盤のヤマ。無造作に捨てられているが、いったい何枚ミスればこれだけになるんだらう？

清水先輩、お好み焼きのセンスなし！ ついでに野球のセンスもナシ！ 付き合う彼女もナシ！

客なんかいるハズがないよな。商品がないんだから。

「仕方がないなあ……」

俺は制服の上着を脱いで腕まくりをし、エプロンをしてお好み焼きを焼き始めた。

ぶつちやけ、食通を唸らせるような絶品は死んでもムリだが、そこら中の味覚オンチどもを黙らせるものくらいは作れる自信がある。

早速焼きあがったヤツを、両隣の店の連中に無料進呈してやると

「あ！ コレ、うまいっスね！ フツーに食べますよ！」

「おいしー！ お昼にまた食べたいから、取り置きしといてもらえる？」

「そーでしょうそーでしょう！」

マヨネーズと激辛に毒されたお前らの舌をダメすくらいは朝メシ前なんですよ。

「……」

その様子をぼへつと眺めていためぐみがすつくと立ち上がった。

焼き台の傍へくるなり、残っていたヤツを一口ぱくり。

「……あ、イケる」

大して胸のないバニーガールは呟いた。

それを聞いた俺は一言。

「売れ」

かくして二時間後。

「ななななな、なにイ！？ なんだコリヤ！？」

店の前で仰天してフリーズしている清水先輩。

「なんたつて、とんずらする前には人っ子一人いなかったのに、今や長蛇の列！」

「はい、ありがとー！ …… お次は？ 二枚ね！ たっつー、二枚だよ！」

「あいよ」

もはやセクシーなバニー（そんなものは最初からどこにもいないが）の呼び込みなどはこれっぽっちも必要なかった。

めぐみはウサギの耳を捨て、バニーの衣装だけを着たまま俺の隣で大汗かいて接客している。

「気をつけなさいね。激しく動いたらずり落ちるぞ？ タダでさえその衣装、お前の胸のサイズには不都合なんだから。 …… ってか、すでに胸元背中、目一杯露出状態だけだ。」

そのことにすら気がつかないほど、めぐみは接客に忙しいのだ。幸いにして胸はないが愛想はあるから、何とかなっている。それ以上に、焼いている俺、試合の時の十倍以上忙しい。どうということだろっ。

ほとんど奇跡だが、このヘッポコ軟式野球部のお好み焼きは売れていた。

「こういうものは上級生による強引な客引きか、さもなければ口コミでなければ売れない。」

最初に両隣に食わせたのがそもそも正解で、人数の多い合唱部と権勢のある三年生だから口コミを流すには事欠かない。交代にやってきた連中に「おい、軟式のお好み、フツーに美味いっつて！」とか言っているのが聞こえた。そうしてどんどん情報が流れたのだから、気がついたらこの有様だ。

もしかしたら、本当に売り上げナンバーワンに輝くかも……と言いたいところだが、何せ清水先輩作「黒い円盤と賽の河原」がまじりかかった。材料は底を尽きかけている。

「先輩！ 最後尾の人で締め切つて！ もう材料ないから！」

こうなりや先輩もへちまもない。

俺が次々とひっくり返ししながら命令を下すと

「お、おう！」

清水先輩は手にしていたフラツペを放り出し、客の整理に乗り出した。

こうして、学内に「謎の名物あり！」という噂を広めたまま、軟式野球部のお好み焼き屋はどこよりも早く店じまいした。

まだ昼になつたばかり。

新記録だな。長く潮清史に語り継がれることだろう。

「あーっ！ 売った売った……」

汗だけで、しかし充実した表情でうーんと背伸びしためぐみ。

あと数センチずれていたら、お前は大切なところを公開するハメになっていたぞ。もはやバーニーではなく、半裸の売り子っていう姿ですな。

清水先輩は何を感動したのか、普段全くおごったりしないクセに、俺とめぐみのために飲み物やら何やら買いに行っている。

俺達は閉めた店の奥で汗を拭っていた。

「たっつー、やるねえ！ 意外な才能だよオ」

上気した顔で、めぐみが言った。

数日前には完全シカトこいていたのに。勤労の喜びは人間を変え
るものだな。

「別に。母親が料理下手くそだから、自分で作らなきゃならないことが多かっただけさ。……特に、お好み焼きはな」

幸子の作るそれは黒い円盤ではない。が、見た目にフツで食って悶絶だからよほど性質が悪いのだ。

「ふーん。そーなんだ……」

タオルでごしごしと顔やら首を拭いているめぐみ。

俺は俺で強いて会話をする必要がないから隣の店の悪戦苦闘ぶりをぼーっと眺めている。

ミニテントの中に流れる、なんだかよくわからない空気。

清水先輩はどこまで行きやがったのか、なかなか戻ってこない。

「……あのさア」

しばらく沈黙が続いたと思われた頃、不意にめぐみが口を開いた。

「あ？」

「あのコ……どーしてるの？」

あのコ？ どのコだろう？

……ああ。もしかして、ナーちゃんのことか？

「あの日、俺が姫ハグしてダッシュしてた、あのコか？」

「そう」

「あのコなら、今は……」俺はちよつと考えてから「傍にいないけど、遠くにはいない。その距離のまま、お互いにやらなきゃいけないことをしようって、あがいているところだな」

思ったままを言った。

間違っていない。

会いたいけどそれぞれが抱えている責任のために会えなくて、でも会おうと思えば会える距離。これはとても幸せなことだ。その先にはいつも「会える」っていう物理的に裏打ちされた希望だけがあるから。抱き締めあっても十分後に最終列車で離れ離れになる遠距離恋愛のカップルなんかより、ずっとずっと幸せな状態じゃないかと思う。

「そっか……」

めぐみはうつむいて、両手でタオルをぐじぐじとやっている。

こうやってみると、アホはアホだけどやっぱり素直な女の子だよなあ。

なんか言いたい気持ちがあるのに、上手に言えなくて困っているところが、な。これを変に強がったり見栄張ったりすると、もうダメになる。言いたいことも言えず、だけど強がることも出来ない。だから素直っていうんだ。

そもそも、妙だなとは思っていた。

あの時、なんでこっそり俺だけを誘ったりしたのか。

俺がナーちゃんと一緒にいるのを見て、つむじ曲げたりして。学校祭だからって、きわどい格好で変にはしゃいでみたり。その答えは今、目の前の彼女の姿にある。

何を言っているのかわからなくなっただけで、ただ黙って手に触れているものをいじっているしかない。泣きそうとかじゃないけど、困っているってカンジ。

すごく、かわいそう。

もし許されるなら、彼女の気持ちに応えるような声をかけてやりたい。幾つかパターンはあるけど、そのどれでもきつと彼女は喜ぶだろう。

でも どうにもならない。

かといって、気休めなんか言いたくないし、都合のいい台詞もゴメンだ。

「……めぐみ、さあ」

「へ？」

声をかけると、ふやけた顔で俺を見た。

俺はゆっくりとエプロンを外しながら「……俺、そろそろヤメようと思ってる」

口には出さねど「あえ？」っていう感じのめぐみ。

「感謝しているんだ、このヘッポコ野球部には。何がって、自分の鍛え方を見つけてさしてもらったコトが一番でかい。どうしていいのかわからなくてヨタついてた俺にディレクションをつけてくれたのは、本当に感謝している」

そう。

ナーちゃんや葵さんと不本意な別れをしなくちゃならなかった去年の夏。

かといって春香ちゃんにも嫌な思いをさせてしまった自分がマジで嫌だった。激弱い自分に、死にたいほど腹が立った。

でもどうしていいのかわからなくて、ただふらついているしかなかった俺は、偶然この野球部に出会った。先輩方も監督もヘッポ

コそのもので話にも何もならなかったけど　しかし俺は、自分で自分を鍛えるっていう新しい道、そしてその方法を見つけることができた。

で、今の俺がいる。

今の俺になれたおかげでマサとか由美さんに出会えたし、何よりもナーちゃんや葵さんの力になることができた。

だけど、新しい状況を創り出したからには、また新しいやり方に変えていかなくちゃならない。いや、変えようって決めたんだ。

マサや由美さん、ドルファちゃんに葵さん、そしてナーちゃんっていう大切な人たちのために、時間とか労力をかけたい。いつまでもヘッポコ野球部の中で自主トレにのめりこんでいていいワケじゃない。

そういうことをめぐみに、けっこう長い言い方で伝えたあと

「大切な仲間がいるんだ。連中のために少しでもなんかしてやりたいから、俺はためらうことなくそっちを向きたい。だから、ここらで仕切りをつけようと思うんだ」

「……」

俺のコトバを聞いて、ちょっと泣きそうになったためぐみ。

その意味が伝わったのだろう。

でも、卑怯だったのかな。

堂々と真っ向から言うべきだったんだろうか。あんまりにも遠まわしし過ぎたかも知れない。でも、ストレートで勝負できなかった。ストライクゾーンはあまりにも小さすぎたから。

後悔はいつだって、終わった後にじわじわとやってくる。

それから少しばかり、めぐみはうつむいていたが、やがて

「……そっか」

顔を上げて、小さく笑って見せた。

今までに見せたことのない、とっても可愛い笑顔。

「……じゃ、あたしもそうするね？　この野球部にいる理由、なくなるから」

ただ一言だけそう言った彼女は、すごくイイ女だと思う。
すまねエな。

お前の気持ちに伝えてやれない俺で。

だけど、口が裂けてもそんな気休めは言えない。

言ったが最後　ダサすぎる。KY。空気が読めないじゃなくて、
気持ちを読めないKY。

昼時を迎え、イベントも何もかも休憩だから前庭は生徒の数がや
つたら増えて騒がしい。学校祭も半分を過ぎた。そろそろみんなが
調子付いてくるタイミングだし、明日のファイナルに向かってテン
ションが上がっていくのだろう。

でもこいつ、このあとどうするんだろう。

ここまで素直なヤツが、フツーに「よいしょ」って立ち上がって
歩き出せるだろうか。

心配なんかしてやれる立場じゃないけど　無性に気になって仕
方がなかった。

出店の後片付けを終えると、俺はその足で職員室へ行き、ヒツジ
の机の上に退部届を置いておいた。

ありがとう、ヘッポコ軟式野球部。

弱すぎてだらしなくてまるで話にならない部だけど、俺自身が変わ
るためのチャンスをくれたことにすごく感謝している。この野球
部に出会わなかったら俺、いつまでもぐじぐじして情けないヤツの
ままだったと思う。

俺を抜いた九人の力で、いつかは一勝くらいしてくれよ。

その28 学校祭ですけど(二日目・午後)

「おお！ うめエじゃん！ うめエ！ コレ、マジでタツが焼いたんか？」

「俺ですよ？ 俺以外に誰も焼く人間いなかったんですから」

いや、他にも焼く人はいました。

ただしそいつは必要以上に焼いてしまうので食い物にならなかつたんですけどね。黒いフリスビーみたいなのが大量生産されちゃってるってカンジで。

午後、校舎の裏側にて。

由美さんはコンクリートのステップに腰掛けて、俺の焼いたお好み焼きを「もふもふ」と頬張っている。飲み下すたびに「うめエ」の一言。

そりやどーも。光荣でござんす。

結局働きっぱなしで美味いモンなんか探しているヒマなかったから、隠しておいた俺の作品を提供したのだ。喜んでくれているからいいんだけどさ。

ってか彼女、昨日から五枚以上食ってるような気が……。よくまあそんなにお好み焼きばかり食えるなあ。

「ところで……」

よほど腹が減っていたのか、えらいスピードで食い終わってペットボトルのコーラを一気に飲み干した由美さん。一息つくなり、ぐいっと首を俺に向け

「……タツ、お前、近水の魚住ってヤツ、知ってるか？」

「いえ、知らない人ですねエ」

かぶりを振ると

「アタシ、近水のヤツを一人とっ捕まえてシメてきた。そしたら、そいつの名前が出てきた」

ぎゃーっ！！

やっぱりやりましたか！

一人とはいえ、一人とはいえ……シメちゃいましたか……。死山血河を築かなかただけでも上出来なのか？

仰天している俺とは対照的に、つらつと事も無げな由美さん。「べごとっ！」とペットボトルを一撃で握りつぶして

「そいつ、今の近水をシメているヤツらしいんだ。つっても大分前に、マサのヤツにいつペンボコられてるらしいから大したヤローでもなさそうだけどな」

いや……その評価はどうでしょう？

マサが強すぎるだけだから、その魚住には何の罪もないかと。

「その魚住ってヤツのところ、妙なサカナの連中が出入りしているらしい。ドジョーみたいなツラして、黒っぽい背中に黄色いセンが入ってるんだと。なんだそりゃ？ って訊いたらそいつ『いや、なんていうサカナかわかんないつすよ！ 俺、ベンキョーしてないんで』だってさ。サカナいっぴきの名前も知らねえんじゃ、水産の名が廃るってな」

へへへ、と可笑しそうに笑った。

ドジョー、ね。いや、ドジョーみたいなツラ。

背中が黒いんなら、ドジョウそのものじゃないのか？

っていつても、黄色いセンはないよなあ。昔、田舎のじいちゃんの家で近くでドジョウ獲りやったことがあるから、どういいう見てもれとスペックを備えたサカナかは俺でもわかる。それに海でドジョウは獲れない。

あれ？ 待てよ？

ドルファちゃんは確か、ポイズンとか言っていたよな。

ポイズン＝毒。

毒があつて、ドジョーみたいなツラして黄色いセンをもったサカナ。

ずっと前に、夏休みの自由研究やるのに図鑑で見た記憶がある。

「……ああ。わかりました。そいつら『ゴンズイ』ってヤツですね」

「ゴonzイい？ なんだアそりゃ？ どっかのジジイみてエな名前だなア」

そんな感じもしますね。

漢字に直せば権爺、ってところでしょうか。まったく意味はありませんが。

「ご縁のなかった由美さんのために、説明を加えた俺。

「子供向けな魚の図鑑には大体登場するんです。海で泳ぐ時には気をつける、って。どうしてって、そいつ、身体のとっかに毒をもっていて、刺されると大変なんですよ。ドルファちゃんが襲われたのはポイズンっていうサカナのグループですから、その話と一致します」

由美さんのカオがへえっ、と驚いている。

「タツ！ オマエ、アタマいいなア！ そしたらサカナのことまでわかるのか！ だったら近水なんか要らねエじゃん！ タツ一人いりゃアよオ」

いやいや、そーいうモンじゃないでしょーが。

「そこまでわかりゃ、ハナシははえエな。犯人がわかってんだ。魚住って野郎とその、なんだ、権爺とやらをボコれば終わりじゃねエ？」

「気ぜわしく立ち上がりかけた由美さん。ボコり合いになると血が騒ぐんだもんなー」。

しかし、ちよ、ちよおーっと待った！

そうはイカゲソ天。

「由美さんですね、ザコを何匹ボコったところで、ハナシは解決しないんですよ。またドルファちゃんとかナーちゃんが狙われて、イタチごっこですって」

「あん？ なんで？」

「ちゅーのはですよ」

テトリスと複雑なハナシが苦手な由美さんのために、俺はそこで十分を費やした。

要は、黒幕を特定しない限り、ザコをいくら叩きのめしても次から次と新手がやってくるだけだということ。それに、近水の連中がからんでいるように、海の世界のゴタゴタには人間も関係しているからそつちも抑えないことには、ドルファちゃん達をまた危険な目に遭わせてしまう。ウツボみたいな下等な連中はそうでもないみたのだが、バランサー達のような高等な種族は人間に手出しができないっていうし。

底引き網漁よろしく根こそぎやってしまわないと、バカは何度でもやってくる。

と、いつようなことを懇々と解いた俺。

すると

「……タツよ」

由美さんはどっかと腰を下ろし、身体ごと俺の方を向いた。

「おめエの言うコトはわからないでもねエ。……だけど、その前に」

きゅつと目を細め「あのコを寄ってたかってボコリやがった。

そーいう卑怯なマネをした連中を、アタシは許せねエ！ だから、

カタキは討つ！ 一匹残らずボコボコにしてやる！」

やれやれ。

オトシマエはオトシマエ、か。

いつだってストレートと真ん中で勝負ですかい。

ま、それが由美さんとかマサのいいところだと思っただけだね。峰山の野郎みたいに壁の向こう側からモノ言ってくるようになったら、ツツ張る意味なんてどこにもない。

「……わかりましたよ」

俺は頷いて見せ

「だったら、今度はこっちからおびき出してやろうじゃないですか。

俺に、考えがあります」

そう言っただけで、由美さんはニツと笑って

「そーこなくっちゃ！ さっすがタツ！ ハナシがわかるって！」

その大声で、向こう側にいたカップルがこっちを見た。

こっからは反撃だ。

その29 学校祭ですけど(二日目・夕刻)

学校祭も、あっという間に二日目が終了。

夕方から天気もぐずつきだし、気がつけば雨がアスファルトを濡らし始めていた。

各クラスやクラブの出店も早々に閉められ、ヒマになった生徒達は体育館のイベントを観にいたり教室の展示なんかで時間を潰していたようだ。

クライマックスに全精力を傾けるといふ発想は誰もがするらしく、中日なんかは適当にお茶を濁して済まされることが多い。今日はまさしくその典型かも知れない。

だから、五時を過ぎた頃には校内にいる生徒達の数もまばらになっっていた。

残っているのはせいぜい実行委員会の連中と、明日の出店やイベントの準備に忙しい奴らだけらしい。体育館の方からは、リハをやっているバンドの曲が聞こえてきている。

(それにしても、よく振る雨だ……)

暗い玄関。

下足箱の足元に敷かれたスノコの上に腰を下ろしている俺。

かれこれ、三十分は経っただろうか。

その間、ガラスの向こう側で落ちていく雨粒をぼんやりと眺めていた。

だいぶ待ちくたびれていたが、ここで帰る訳にはいかなない。

どうしても確かめておかなくちゃいけないことがあったから。

そして、体育館から漏れてくる騒音がぱったりと止んだと思った

頃

「……おや？ 海藤君じゃないか。何をしているんだ？」

よーやくお出ましか。

俺は無言でゆっくりと立ち上がって振り返った。

峰山、それにフィールーシャ。

彼女は俺に向かつて、ちよつと微笑んで見せた。大して温かみのない、冷めたスマイル。ピザとポテトフライとスマイルは、冷たくなつたら何の価値もない。

にべもない面つきでそれを受けた俺は

「探していたよ、峰山。……お前に、訊きたい事がある」

「はて、なんだろう？ 思い当たる節はないけど、その顔じゃあ楽しい話ではなさそうだね」

「その俺を、楽しくなくさせたのがお前とそのコなのか、どうか。コレが質問だ」

どうやらマサや由美さんと付き合つうちに、妙な殺気の発し方を覚えてしまったようだ。

峰山に抱かれていているフィールが、ヤツの首に回している両腕に力をこめた。怯えているらしい。

よしよし、というように優しく彼女を抱き締めてから峰山は微笑して

「やだなあ。そんなに怖い顔をするから、フィールがすっかり怖がっているじゃないか。彼女には何の罪もないんだぜ？」

「罪はない、か」

俺はきゅつと（これも由美さんのクセだ）両眼を細めて「……どうやら、バカがいる。海の世界と、この人間の世界に。そういうバカ同士が結託して、ロクでもねエコトを企んでやがるようだ。ぶつちやけて、訊こう。そのバカは貴様じゃないのか？ 峰山。それにフィール」

つと視線を落とし、口元でふつと笑つた峰山。

「なるほど。海藤君も、いろいろと情報は得ているみたいだね。このフィールの話も、それにリーネとかいうバカな人魚のコトも」

ほお。

バカはリーネだと言いたいのか。

峰山は表情を消して俺を見た。

「聞いていると思うが……海藤君が連れていたナタルシアという人魚のコ、彼女を近海マリンミュージアムに引き渡したのは誰でもない、リーネの差し金だよ。彼女は魚住興業の者と手を結ぶことを条件に、同族のナタルシアを売った、という訳さ」

ちよつと待った。

なんか、聞き知っている単語が混じっていないかったか？

「魚住……？ そいつはもしかして」

「そうだ。魚住興業はここと近隣の街でいくつか観光施設を営んでいる会社さ。それなりに上手くいっているみたいだが、何せやり方が荒い。だから、あちこちでトラブルなんか起こしたりすることも多くてね。峰山グループも、魚住とは何度か面倒なことになったよ」

さすがは会社のお偉いさんのボンボン。

一般の高校生が興味もなさそうなことをよく知っている。

近水をシメている魚住っていう野郎の実家は魚住興業。そいつらとリーネは結託している。そうすると ドルフアちゃんを襲った連中の背後についているのは、リーネということになる。これで点と点はつながった。

権爺、じゃなくてゴンズイ達ポイズンはリーネの犬だ。

「なるほど、な。バカはこのどいつなのかはわかった。……だけど峰山、だからって俺達にとってお前がシロだとか味方だっていう証拠にはならねえよ。それだけじゃ」

「ふつ、なかなか鋭いね、海藤君も。さすがはあの弱小軟式野球部唯一の優秀なプレイヤーだね」

だから、それはもういいって。

今日でヤメたんだよ、俺は。

「なら、とっておきの情報を教えてあげよう。だからといって、僕たちが君たちから信頼を得られるかどうかは別の話だけれども」

そう言っただけ峰山は上履きから下足にはき替え、俺に近寄ってくる
と小声で

「……近海マリンミュージアム不正疑惑の一件、リークしたのは峰山だ」

言い残し、フィルと共に雨の中へと消えていった。

ふーん。

そついうコトかい。

夜。

俺は自分の部屋でチェアにもたれて足を机にのせ、踏ん反り返っている。

横ではすっかり元気になったドルファちゃんが由美さんにあれこれと服をコーディネートしてもらって楽しそう。とりあえず、復活できて良かったよ。

夕飯の時、俺は親父（海藤舟一、今年四十五歳）に訊いてみた。

「親父。魚住興業って、この辺じゃ評判はどうなんだ？」

舟一は大手印刷会社の社員で、この街の支店に勤務している。

俺の問いかけに、親父は箸を持つ手を停めて

「……よくはないな。値段とか納期をめぐって、何かとうるさい会社だからな。うちも近海マリンのパンフレットを受注していたんだが、さんざんにタタいてくるわ無茶な納期を要求してくるわ、ほとんど困ったよ。挙げ句の果てに潰れただろう？ だからその分の支払いを踏み倒されるんじゃないかって、支店長も心配していたところなんだ」

「まあ。それじゃ、お魚で支払えばいいのにねえ。お魚だけはたくさんあるんだから。……あ、イルカちゃんでもいいじゃないのよ。

カワイイしねえ」

うるさい。

韓ドラ幸子は黙ってる。

だいたい、この天ぷらはなんだ！ 見てくれもさることながら、奇抜な風味と歯ごたえがするじゃないか。もしかして、天ぷら粉じ

やなくてホットケーキミックスとか入れてないだろうな？

俺は幸子の発言をスルーして

「じゃあさ、峰山グループは？ あそこって、確か峰山グループとMCG（ミネヤマコーポレーショングループの略らしい）と二つに分かれているんだよね？」

うむ、と舟一はうなずき

「あれはな、兄弟でそれぞれやっているんだ。兄が峰山グループで、弟がMCGだった、と思う。先代の会長が亡くなった時に資産をめぐって大ゲンカをして、それで二つに割れたんだ。兄の方はいろいろ悪い事をして春に逮捕されたろう？ 弟の方はそれなりにやっているみたいだな。達郎の学校にも確か、その息子が通っていたのかな？」

「ああ、いる」

ついさつきも喋ってきたよ。

親父はまた箸を動かし始めたが、ふと

「そういえば、事故のあった峰山の工場跡地をめぐって、魚住と峰山で大分もめたらしいんだ。結局は魚住がさらっていったが、峰山としては跡地を継続して使いたかったらしいんだよな。知り合いのメディア記者がいつだったか教えてくれたんだよ」

はっはっは。

こりゃあ、面白い話を聞いたぞ。

峰山が魚住を快く思わない具体的な理由じゃないか。

近海マリンミュージアムの不正を垂れ込んだ動機が立派に成立する。

集めた話を整理すると リーネとフィルーシャは海獣組もといハイレム・THE・セイウチの仕切りから対立し、いがみ合っている。一方、陸上ではあの工場跡地をめぐって峰山さんとこと魚住がケンカになった。峰山はしてやられたかのように思われたが、近海M（面倒くさいので省略だ）の不正を握り、警察に垂れ込んだ。新聞では「内部告発」って書かれていたけど、実際はそういう感じな

んだろう。買収でもしたのかどうか、それはわからないけれどもさて。

リーネの支配下にあったセイゾーやら、そのつながりにあった魚住興業が経営していた近海MMを潰した（正確には、その発端をつくったのだが）のは俺達だ。当然、彼女は面白く思っていないだろう。

そして今、タイミングをみて海の世界の調整に乗り出したバランスー達を潰しにかかっている。ドルファちゃんやジーナさんを襲ったことからみて、間違いない。バランスーを潰して海獣組か別の勢力を動かし、海の世界を牛耳るつもりだろう。

今回の一件、まずは峰山はおいしておく。いずれどうなるかはわからないが。

とりあえず、リーネの意思を受けて動いている近水の魚住、そしてポイズンどもをボコつてもう二度と手出しさせないようにしなければならぬ。それからのはそれからにしよう。あるいは、峰山といったん手を握らなくちゃならないかも知れないし。

「……由美さん、ドルファちゃん！」

「あん？ どーした？」

「なんですかあ、達郎様」

Tシャツに短パンというラフなスタイルになったドルファちゃん。すごくカワイイ。

ってそれはさておき、今から真面目な話をしなければならぬ。

「あのさ」

俺は頭の中で整理した内容を話して聞かせてから

「やっぱり、由美さんの言う通りです。近水の連中とポイズングループ、こいつらはボコつておくべきです！」

彼女のテンションを高めるように仕向けたつもりだったが 由美さんは平然として缶ビールをぐいっとやっている。

一気に飲み干してから、缶を「ぐしゃ」っとやって

「へっへっへ、タツう。アタシ、もう手を打っちゃったんだよね」

「え？ 何、やったんです？」
ぷしっ

新しい缶ビールが開けられた。もう何本目だろう。
由美さんはぐびーっと半分くらい咽喉に流し込んだあと

「……マサに言っつて、近水のナンバーツ、ボコらせた。返礼する
なら明日の夕方いきやがれつて伝言つきで、さ。……ああ、そうそ
う」

きゅっと目を細くした。

「権三とかいうジジイも連れて来いっつて。全部まとめて
あつちやーっ……」。

宣戦布告済みっすか。

いや、すでに先制攻撃食らわせちまつてるよ。

こりやもう、アフターカーニバルだ。……後の祭り、ね。
違うな。

これじゃ「祭りのあと」か。

夕方から降り出した雨はいつの間にかやみ、夜空には美しい
満月が昇っていた。

その30 学校祭ですけど(最終日)

いよいよ潮清祭も最終日。

朝、玄関を出た俺はイワシヤールのバカとすれ違った。

ヤツはドロボーみたいにでっかい風呂敷を背負ってぺったぺったと歩いている。

「お、クソイワシか。チヨモランマから帰ってくるなり盗みは良くないなあ。今のうちに警察でも自首しておけ。刑が軽くなるぜ?」

軽く冗談を言ったのだが、クソイワシは

「……レディをつかまえて泥棒などは、達郎どのも万年独身決定ですな。私はそれどころではないのです。忙しいのですから! まったく」

ぶつぶつ言いながら、行ってしまった。

振り返って見てみると、俺の家に入っていた。

居候のつもりか?

まあいいや。

またなんか仕出かすなら、アルプスにでも旅に行かせるまでのことだ。キリマンジャロの方がいいだろうか?

そんなことより。

今日は戦争が待ち受けている。

近水の悪たれども&ポイズングループVS俺&近工最狂コンビ連合軍。

ドルファちゃんには来ないように言っている。

「でも、でもオ……」

彼女は悲しそうにしていたが、俺と由美さんで押し止めてきた。

人間が混じっている以上、彼女じゃ戦えないし。

こつちが少数という見込みだからいろいろと悪知恵は絞ってきたけれども、果たして勝てるだろうか?

今夜は後夜祭。

てめーの足で立って後夜祭でうんと騒げるか、それとも。
考えながら歩いていると、ポケットでケータイが鳴り出した。や
つと手に入れた最新機種。

「あいよ」

「おお、タツウ！ オレ！」朝からマサ、バカ声。「近水の奴らよ
オ、間違いなくそつち行くぜエ！ キのオナンバーツィをボコつと
いたからなア。ひやはははは」
来るんですかい。

うちの学校を戦場にして欲しくなかつたんですがねエ……。

が、マサは続けて

「でもよオ、あいつらがおめェントコのガッコーに行ったら、おめ
エ、困るだろオ？ 途中で見つけたらよオ、そこでボコつとつから
そしたら行かねエかも！ ひやはははは」

できればその方が助かる。途中で見つけ次第、殲滅しておいてい
ただきたい。

「ん。頼むわ」

ケータイを切った。

やるしかねエ。

これは悪党との戦い。

俺達が負けるワケにはいかないんだ。

今日の校内はいつも増して人が多い！

最終日だっというせいか、どの生徒も朝からテンション上げまく
りだ。

しかし、俺は一緒になって騒いでいる訳にはいかない。

近水の連中とのバトルにみんなを巻き込まないように、戦場予定
地を検討しておかねば。

だが。

「あ、いた！ かつ、海藤君！ ちょ、ちょっと、いいかな？」

「……!？」

その声に振り返らず、全力ダッシュで逃げしておくべきだったと、俺は後悔した。

背後には、ヒツジがいたからだ。

「ちょ、ちよつとだけ、せ、先生と話をしよう。職員室まで、来てもらえるかな？」

ノーッ!!

今そんなコトしている場合じゃないのにーっ!!

結局、俺は軽く一時間ヒツジにつかまっていた。

ヤツはぬるーい語調で、俺が退部するといかにみんなが困るかということをめんめんと喋り、引きとめをはかりやがった。話の途中からは眠くて仕方がなかった。

埒が開かないので、俺はヒツジの話を強引に遮ると「受験に備えて、今から準備することのどこが悪いんですか!? 先生は俺から勉強の時間を奪おうって言うんですか!？」

キレてやった。まったくの言いがかりに過ぎないのだが。

すると、俺がぶちキレたものだから、他の教師達が振り向いてこっちを見た。

「あ、う、え……い、いや、先生はなにも、そ、そこまでは……」

ヒツジ、口ごもった末に沈黙。

勝負あった。

「じゃあ、あとはよろしくお願いします。一年間、ありがとうございました!」

さっさと職員室を出るなり、ケータイを取り出して見た。

由美さんからのメールが一通。

『もー少ししたらそっち行く 早めにきやがったらアタシの分も残しておけ』

はいはい。

残すも何も、俺一人じゃとても応対しきれない。

ってか、奴らはいつたい何人＋何匹できやがるんだらう？

まさか全校生徒で押しかけてきたりしないだらうな？

ともかくも、他の生徒達を巻き込んだりいけな。

職員室を出た俺は、校門の近くに陣取って敵の襲来に備えた。

そうしてじーっと人の流れを注視していると

「……………どうしたの、達郎くん？　こんなところで」

振り返ると、そこには春香ちゃんとその彼氏である実行委員のヤツがいた。

「あ、ああ……………待ち、合わせ。ちゅ、中学の同級生がくるハズなんだ。はは……………」

「そっかー。なんか、すごいコワイカオして校門の方を睨んでいるから、どうしたんだらうと思って。なら、良かった！」

すみませんでした。

何も、やってくるお客さんを威嚇していたワケじゃないんです。

いや、半分威嚇か……………。

「今年の潮清祭、どうだったかその人にも感想聞いておいてくれる？　あとで参考にしたいの」

彼氏もにこにこして頷いている。

草食動物みたいなヤツだな。まあ、人は悪くなさそうだ。

反対に、俺は今や、他校生と乱闘までやりかねない勢いですけどね。もしここでマジに起こっちゃったら、この彼氏はショックのあまり憤死してしまうかも知れない。

「わ、わかった……………」

「よろしくね？」

春香ちゃんと彼氏は行ってしまった。

それから程なく、由美さん登場。

「よオ、タツ！　まだ奴ら、来ないか？」

ノースリーブに長めのスカートという彼女は、これから大ゲンカを仕出かそうとしている人にはとても見えない。見ようによっては

ラフな格好のヤンキーだが、見方を変えれば清楚な若い女性。由美さんの体内には、その両方が同居しているんだけども。

「まだ、来ないですよ。ずっと見張ってるんですけど」

「そっか。そのうち来るだろ」

友達でも待つているかのように、平然としている由美さん。さすがに慣れていらっしやる。

俺は正直、そうでもない。

ブルーフィッシュ総督府に殴りこんだ時は違った。相手に人間がいなかったからだ。

しかし、今回は相手のうちの幾らかは人間。平気な顔をして殴る蹴ることができるとは、実は思っていなかった。できれば、権三ジジイじゃなくてゴンズイの方と戦いたい。

しばらく堀にもたれて賑やかな様子を眺めていた由美さんは

「……………なア、タツ。お前、野球部、ヤメんのか？」

へ？

由美さん、どうしてそれを？

昨日の夜、俺は一言も喋ってないのに。

「近工軟式野球部のマネージャーに河野ってのがいて、アタシの後輩なんだ。カノジョ、潮清のマネージャーと中学校からの友達なんだ。その潮清のマネージャーのコが昨日の晩に泣きながら電話してきて、野球部のマネージャーやめるから、って。河野が話を聞いたら、何でも好きだった部員にフラれて、でもその部員はオトシマエつけるために自分で野球部ヤメるって言って云々、だそうだけ。河野からアタシントコに夜中に電話きたさ。名前は聞いてないけど、何となくタツのことじゃねエかと思った」

「……………」

「とんだ色男、だなア。お前って、そんなにモテたっけ？」

ケラケラと笑っている。

めぐみ、泣いていた、か。

でも　　しゃあねエよ。

俺は強くなるために野球部に入って今の俺になって、それでナーちゃんと巡り会えたんだから。ナーちゃんに出会わなかったらきつと、春香ちゃんと一緒にいただろう。どう転んでも、めぐみとは…
…な。

由美さんも、それ以上ツツこむつもりはないらしく

「……泣いてくれねエような別れなら、それこそ虚しいぜ？ タツにゃあのナーがいるんだからよオ。お互い一途なんだし、いーんじやねエの？ そのコも納得してるみてエだし」
ありがとう。

そう言ってもらえると、気持ちがホツとする。

これからは俺、仲間を守りたいんです。

マジで。

ところが。

陽は傾きかけ、グラウンドでは後夜祭の準備が大分進んでいた。

装飾は実行委員達の手で取り外されていき、あれほどあった前庭の出店も次々たたまれていった。校内はまた元の状態に戻っていきつつある。

来ない。

近水の連中も、ポイズンの奴らも。

「……ヘンじゃないっすか？ 近水の先生方に止められたんですかねエ」

「あア。にしても、せめて権三ジジイくらいは来ても良さそうだけどな」

すっかり待ちぼうけしている由美さん。

待っている間、いったいどれだけの好み焼きやら焼きそばやら、その他もろもろ平らげたことか。さすがに「カラダが鈍るからなア」と言っつて、ビールだけは飲まなかったけれども。

「……おい、タツ」

頑丈な車止めに腰掛けていた由美さんが立ち上がった。

「ちよつくら見てくるわ。しばらく経つても戻らんかったら、どこかでボコリ合ってると思ってくれ」

「わかりました。……でも、その前に連絡くださいよ？」

「あア。余裕があれば、な」

由美さんは片手を振りながら、校門から出て行った。

「……」

とりあえず、することがなくなった俺。

教室に戻って、後片付けでも手伝っていようかと思ったその時である。

ケータイが鳴った。

マサからだ。

「もしっ！ マサか！？ どーした？」

「ひゃひゃひゃ、おおいタツう！ こっちはオツケーだぜエ！ さつきだけどオ、近水の連中、おまえんとこ行こうとしてんの見つけたからボコつといた！ 弱いつて、マジ！ ウケる」

「お、おオ……そっか。サンキュー」

内心、ちよつと安堵した俺。

マサは笑いながら

「なんかよオ、もつとヤベエかと思ったんだけどよオ、全然シヨボいの！ 権三とかいうジジイがいるって由美さんに聞いてたケドお、そんなヤツいねエし」

「……なに？」

「ゴズイがいない？」

「おい、マサ！」

「あん？ どオした？」

「そこに、魚住ってヤツはいるのか！？」

「あ？ あア、寝てるケド？ オレのパンチ一発で寝ちまった」

「そいつ起こして訊いてくれ！ ゴズイはどこに行ったかって！」

「あア、ちよつち待って……」少しして、電話の向こうから「オイ

コリア！ 権三つてジジイ、どこに行きやがった！？ …… あア！
？ 知らねエ！？ フザけんよオ、てめエ！』
やり取りがまる聞こえ。

それにしても魚住達が知らないっていうのは、どういう？
が、その事情は調べるまでもなかった。

「……………！」

俺は踵を返すや否や、空いている左腕を振り上げていた。

ガン……………

左腕に衝撃が響いていく。振り下ろされてきた鉄の棒を受け止めたからだ。

だけど、痛くはない。

良かった……………制服の袖に大きな釘抜きを仕込んでおいて。

俺は力任せにその鉄棒を押しつけ、左を向きざま右足に力をこめた。

「電話の邪魔だ！！」

ばこっ！

「みーのーかーさーごーってかあ……………」きらーん。

あ、あれ？

力いっぱい夕暮れの空へ蹴り飛ばしてしまったのはいいが……………権三ジジイ、じゃなくてゴンズイ、じゃなくてミノカサゴではないかが、ゆっくり考えている余裕はない。

「おい、マサ！」

『あアン？ 魚住のヤローよオ、知らねエって言ってるケドよオ……………』

「また連絡する！」切ろうとして……………生きていたら、な「ぶちっマサは何か言いかけていたが、一方的に切ってしまった。

そりゃそうだ。喋ってなんかいられるハズがない。

なにせ俺の周りには、ずらりと　ゴンズイにミノカサゴ、ついでにフグもいる！

その中に一匹だけ、ウツボっぽい野郎がいる。

今まで見たウツボとはちょーつとばかり柄が違う。

なんか地味なデザインで、ストライプなミノカサゴとかコントラスト全開のフグに比べると、はるかに目立たない。

しかしそんなヤツがボスらしく、ずいっと進み出てきて

「……おめエか。リーネ様の邪魔をした人間とやらは」

あのイヤらしい目で、ぎらりと俺を睨みつけた。声が小さくて低くて、聞き取りにくい。ホントに目立たないヤツだな。

俺は体勢を立て直すと、真っ向からその視線を受け返し

「おい……人間の連中はどうした？ 一緒にくるんじゃないヤツだったのか？」

「あんなガキども、いてもいなくても知ったコトじゃあねエ。だから、お前の仲間の足止めにしておいた。今ごろ、どうなっているかねエ……」

おーおーおー。

魚住たち、ウツボのような下等な連中にも罔程度にしか扱われてないよ。哀れな。

さて、それはともかく。

俺一人、VSポイズンな方々、その数五十以上。

援軍？

マサと由美さんが駆けつけてくれればいけれども。

遅かったら俺、多分十七年の人生おしまい。

親父、幸子、ナーちゃんにみんな、先立つ不幸をお許してください

……。

お許しいただきたいですが、その前に。

「……おい、ウツボ野郎」

「ウツボじゃねエ！ ドクウツボだ！」

「どっちでもいいんだ、てめーの種類なんかは」俺は空を指差し「

……アレが見えるか？」

「あん？」

バカみたいに、空を見上げたウツボ、もといドクウツボ。

そのでつかい口が「ぱつかーん」。

ほれ。

俺はすかさず、ポッケから出したそれをヤツの口の中めがけてぶん投げた。

ウツボの口である。外れるような可愛らしい大きさの口じゃない。い。

ぱくっ

「あ？ 今、何をしゃが……どひーっ！ ぎゃーっ！ ぐわーっ！ むひよーっ！」

口からドラゴンよろしく炎を吐き散らしながら、悶絶し始めたドクウツボ。

効くだろうさ。ハバネ口だもの。

機を逃さず、俺はヤツを目掛けて駆け寄るや否や

「……あつちでやつとれ！」

ぼっこん！

素早く袖から取り出した釘抜きを力いっぱい振り抜いてやった。

「ぶでばべればればびぼっ！！」

ドクウツボは綺麗な弧を描きながら、敷地の外へとふっ飛んでいった。

とりあえず、ボスをしばらく戦闘不能にすることに成功。海鮮、じゃなくって海戦の戦術にあるんだな。真っ先に旗艦を狙え、っていうのが。

「ど、ドツボっち様がやられた！」

「バカ！ ドツボゆうーな！ ドクウツボ様だ！ シバかれるぞ！」

「どーするどーする！？ あの人間、強いぞ」

あっけなく親分を撃破された大勢の残党どもはおろおろしていたが「えい！ このままおめおめ引き下がって帰れば、リーネ様の逆鱗に触れて恐ろしい地獄鍋行きだぞ！」

「こうなりゃヤケだ！ やっちまえ！」

リーネを恐れているポイズンの連中、鶴の一声で攻撃開始。

仕方がないな。力尽きるまで戦うしかねエ。

「Goo! (そのあと小さく) んズイ」

「麩・Gooーツ!」

「Meの傘……Go!」

今ようやく気がついたが　ミノカサゴが持っていたのは傘だったのか。

どーりでヤワな鉄棒だと思ったよ。

フグの得物はなんと「麩」。味噌汁に入っているアレだ。これはどうでも良い。

ゴンスイだけがよくわからない。

押し寄せてくるなり、飛び上がって俺の背後から蹴りを入れてくる。どうやら、延髄蹴りのことらしい。もしかして、延髄とゴンスイをかけているのか？　だとすれば、救えないバカだ。

長い胴体に手足が生えただけの魚人だからたかが知れているが、こつも数が多いと持て余しそうになる。いちいちかわすのが鬱陶しいのだ。

俺も黙ってはいない。

量産した赤唐辛子胡椒玉を投げまくって目潰し・クシヤミの嵐を巻き起こし、釘抜きではリーチが短いので懐に隠し持っていたフライパンに持ち替えて応戦。

そう。

ポイズン＝毒ということであつとコワい気がしていたのだが、実はそうでもない。

彼等のスペックにある毒てはないがというのは、外敵に接近された時に初めて有効となるように設計されている。だから、普段はそれ自体を用いて攻撃などはしないのだ。

フライパンを的確に打ち込み、次々とポイズンどもを沈めていく俺。

しかし　やはり数は絶対だった。

いくら自主トレで鍛えているとはいえ、不規則な動きに翻弄され

ると疲労すること甚だしい。

そして疲労がピークに達してきた頃、ゴンスイをぶん殴った勢い余って、迂闊にもミノカサゴのトゲに触ってしまった。

「……！」

途端に襲ってきた、強烈なめまい。

立っていることができなくなり、俺は膝から崩れ落ちた。

「チャーンズ！ よくわからんが、人間が倒れたぞー！」

「今だ！ やっちまえ！」

これまでか……。

つてか、こいつら 自分らが毒持ちな事実気付いてねエ。真性のアホだ。

そのアホ相手にこれ、か。俺もまだまだだったな。

軽く納得いかない気持ちになりながら、最期の時を待っていた俺しかし

どかつ！ ばきっ！ くしゃっ！ めっっ！ ぼっっ！

いきなり包囲の二画が崩れだした。

「……てめエら、一人を相手に数頼みか。どいつもこいつもシケてんなア、おい！」

きた。

「またもや運命の女神は俺に向かって、いや 「武装」の「天女」だな。」

「な、なんだお前は！？ Meの傘をうけ ばごおん！」

最後までセリフを言うことなく、そのミノカサゴはアスファルトにめりこんでいた。

煙を上げているそいつをげしつと踏んづけ、手にしたチェーンをだらりと垂らしながら

「てめエらまとめてぶっ潰す！ アタシの大事なダチに手エ出しやがって！」

由美さん、否「武装天女」が咆えた。

あ、いや、その……俺がすっかり、ミノカサゴのトゲにさわっちゃまっただけです。

ってか、もう始まってしまっている。

愛用のチェーンを自在に振り回し、さんざんに荒れ狂っている武装天女。

多勢に無勢だったミノカサゴにフグ、ゴンズイが次々にふっ飛ばされ、あるいは地面にめり込まされていく。

だけど、数が数だ。

このままじゃ、いずれ武装天女も疲労していくのは目に見えている。

「くっそオ……」

ふらつく頭をこつこつと殴りつけながら、俺はゆっくりと立ち上がった。

「おおい、タツう！ 大丈夫かア！ しっかりしろオ！ アタシがついてるからなア！」

武装天女のエールが飛んできた。

すいませんね、心配かけて。

俺も倒れているワケにはいかない。

もうひと働きくらい、しとかねエとな。カツコ悪いって。

「ずーい！」

立ち上がった俺の後頭部を目掛け、ゴンズイが飛んできた。

「……てりやつ！」

べっちーん！

「Go！ ン髓、ってかー」

あえなくお空へと消えていったゴンズイ。

俺の手には、ぶつとい革のベルト。

以前由美さんが仕込んでいたのを見て使いやすそうだと思い、隠し持っていたのだ。

「おお、タツ！ 生きてつかア！ オイ！」

「由美さん！ やつらのトゲにだけは気をつけてください！ 毒が

ありますから！」

「わかって」「チェーンが唸った。「るって!!」
びしっばしっばこっ……

「ぎゃっ！」

「ぐべっ！」

もはや、各種族別のキメセリフを吐く余裕なんかあるはずがない。
一般的な悲鳴を上げながら沈んでいくポイズンども。

武装天女の加勢によって、相当の数が脱落した。

残りはもう、三分の一もないな。

安心しかけたところへ

「うおい、貴様等！わ、わかってんだろオナ！そいつらを
潰さなかったら、リーネ様の目の前で鍋にされんだぞ！」

校門の方から声がした。

その31 学校祭ですけど(後夜祭)

ちっ。

あらかじめぶっ飛ばしておいたドツボが戻ってきやがった。

ヤツは俺が放り込んだハバネロによってかなりのダメージを食らったらしく、よろよろしながらも

「鍋にされてエか！ てめエら！」
怒鳴った。

すると、ぶっ飛ばされたりアスファルトに埋められていたポイズン達が

「な、鍋はイヤだーっ！」

「煮られたくねえよぉ！」

「せ、せめて刺身に……。俺達はそっちの方が美味しいんだよ……」
はい、そこ。

刺身を希望する意味がわからん。
しかし、これはマズいぞ。

俺も武装天女も、たださえパワーダウンしてるっていうのに、また増えられてしまっちゃあ、いよいよ勝ち目が無いってこった。

「クソ野郎どもが……！」

肩で息をしている武装天女。かなりツラそうだ。そうだよな。あんなに長いチエーンを振り回し続けていたんだから。

だが、ポイズンどもは待つてはくれない。

「P・O・I・Z・O・N、ポイズン！」

「ポイズンバンザイ！」

「ドクってサイコー！」

口々に叫びながら、一斉に突撃してきやがった。

まるで特攻兵じゃねエか。

捨て身でこられちゃ、なすすべもない。

あー。

今度こそ、今度こそ……か？

一瞬、これ以上戦う意欲を失いかけた。

そんな俺達の耳に、どこからともなく懐かしい響きが
タンッ！

タタタタ、タンッ！ タタンッ！

！？

この音……！

幻聴かと思つたが、それははつきり、そしてしつかりと、ぼやけ
かかった俺達の意識を呼び覚ましてくれた。

そう。

奇跡はやってきた。

「達郎様っ！ 由美さまっ！ 葵が援護いたします！ しつかりな
さつて！」

タタタタンッタンッタタタンッ

「ふごっ！」

「げぎゃっ！」

凄腕ガンナー葵さんの射撃には、一発の無駄弾もない。

悲鳴を上げながら次々と倒れていくポイズン達。

葵さんの声が届いた途端、疲労困憊していた武装天女の目に「ギ
ラリ！」と光が宿った。

「……おっせエよ、来んのがよオ」

とか言いながらも、嬉しそう。

しぼっ

タバコをくわえ、火をつけた。

「ぷーっ」

煙を吐き出した由美さんからは、さつきまでのオーバーヒート感
がなくなっている。すっぱり切れそうな視線で、周囲に群れるポイ
ズン達にガンを飛ばした。

その凄まじい迫力に、捨て身の特攻を試みた連中もさすがに足を
竦ませている。

「さて、と。……ケリ、つけっかねエ」

ぷつとタバコを吐き捨てた。

巧みな連射で包囲の一部を一掃した葵さん、さっと駆け寄って背中を合わせ

「……半分は私へ。この前のお礼、まださせていただいてませんもの」

にこつと微笑んだ。

「ああ、好きにしな。こつも数が多いと」

手にしたチェーンを放り投げてスカートの裾をめくった武装天女。そこからなんと、ぶつとい革のベルトが！ やっぱり仕込んでいたようだ。

「めんどくせエんだよ」

復活した武装天女&葵さん、猛攻開始。

瞬く間にポイズンどもを殲滅していく。

じゃあ、俺も そう思った瞬間だった。

それは確かに、聞こえたような気がした。

『 達郎さまっ！ 』

あの聞きなれた、涼やかで潤いがあつてクリアで、そして慈愛に溢れたボイス。

そして、ふと宙を仰いだ俺の目には

「……!?!」

何をどうしたものか、なんと、ナーちゃんが宙を舞っていた！

そのまましつかり受け止めて と言いたいところだが、ちよお

つとばかり向こう側。

ずいぶんと無茶なダイブを試みたようだ。

「ナーちゃん！」

慌てて地面を蹴った俺。

全力スライディングギャツチで飛び込んだ俺の腕の中、そこにいたのは間違いなく彼女だった。

美しいその相貌に柔らかな笑みを浮かべ、ちよつと潤んだ瞳で俺

を見つめている。

頭突きの勢いで額をくつつけてやると

「ナーちゃん!!」

「ああっ、達郎さまっ!! すぐくすぐくすぐく、お会いしとっ!」
「ざいました!!」

ぎゅーっ

力いっぱい、俺の首に抱きついてるナーちゃん。

「どうしてここに来たんだ!? ブルーフィッシュにいたんじゃないのか?」

そう尋ねると、ナーちゃんはふわっと微笑んで

「ブルーフィッシュは落ち着きを取り戻しましたの。ですから私、今度こそ達郎さまのお傍へ行きたいって、葵さんをお願いしたのです!」

そこへ

「……よっ、と!」

俺達の傍へ、ドルファちゃん着地。

「まったく、ナタルシアってば無茶するんだからあ! 達郎様を見

つけた途端に、あたしから離れちゃうんですもの!」

ぶーたれている。

「すまなかつたな、ドルファちゃん。ナーちゃんを連れてきてくれたのか」

「そおでえす! 今会いたいすぐ会いたいってダダこねるんですよ? この姫様は」

笑っている。

よしよし。そーかそーか。

だったら、ナーちゃんにカツコ悪い姿を見せるワケにはいかないな。

「もうちよっとの辛抱だぞ。すぐに終わるからな」

「はいっ! 達郎さまっ!」

まだまだ、ポイズンどもの残数は多い。

しかし、懸念するまでもなかった。

さらに強力な援軍が姿を見せたからだ。

「 コラ、タツ！ なんでオレを呼ばねェんだよオ！ ボコリ合
いなら任せとけつつってんだろオがよオ！」

ブルーフィツシユ専属のバーサーカー・マサ見参。

ヤツはそのあたりにいるポイズン達を手当たり次第「ばき、どか、
ごすっ」と有無を言わせず立て続けにのめしてから

「うおい、タツう！ エモノ忘れてくんじゃねエ！ おらよっ

」！

叫ぶなり、俺に何かを放り投げて寄越した。

「……………！？」

宙を流れるそれを見た瞬間、俺は思わず笑ってしまった。
ふっ。

あいつ、氣イ利かせたつもりなのか？

俺は片手を突き出してそれを受け取り「……………サンキュー、マサ！
恩に着るぜ！」

下段斜めに構えつつ、突進した。

行く手には、さつき一度ぶっ飛ばしたドツボ野郎が。

「う、うわっ！ こ、こつち来るな！ おいつ！ 誰かつ！」

慌てて飛んできた数匹のポイズンをバタバタと叩き落しつつ、俺
はダツシユを緩めない。

「きやーっ！ ヤメてーっ！」

背中を見せて逃げようとしたドツボ。

もうおせーよ。

「……………リーネとやらに伝えておけ！ 俺の前にツラ見せやがったら
俺は愛用のバットを振りかぶった。

「 鼻からハバネ口食わせてやる！」

ばっつこおおん……………

フルスイング。

「ぶごげべばぼべっ！ー！」

ドクウツボは意味不明な叫び声を発しつつ一直線に宙を吹っ飛んでいったかと思うと「べきやっ!!」壁にめり込んでいた。

今度こそ、完全に戦闘不能。

数を誇っていたザコポイズン達も、葵さん、武装天女、マサ、ドルファちゃんという最強チームの前ではもはや敵ではなかった。

「な、なべ……キライ……がくっ」

最後のフグが倒れ、戦いは終わった。

一時、というか二時くらいどうなるかと思ったが 駆けつけてきてくれたみんなのお陰で、悪しきポイズン達を残らず撃破することができた。ってか、どうやらこいつらも、ホントのホントは敵ではないような気もするが。まあ、立ち向かって来られた以上は戦うしかなかったんだよな。

奴らの背後にいる、真の黒幕。

残念ながらそいつはその姿を一瞬たりとも見せてはいない。

と、思ったが

「……？」

校門のすぐそばに停まっていた一台の車。

その車が慌てたように走り去っていくのが見えた。

ヤツか。

案に相違してポイズンどもが残らずやられたから、尻尾を巻いて逃げやがったようだ。

だけど、な。

いつかは覚悟しておけ。

鼻からハバネロ。死ぬまで泣かせてやる。

「うおい！ 次いくぞー！」

「おおーっ！」

すっかり夜の帳は降り、辺りは暗い。

音割れのひどいスピーカーカーから流れる音楽に合わせて、グラウンド

で輪になってフォークダンスを踊りまくっている生徒達。もう何曲目かわかったものじゃないが、テンションがおかしくなっている彼等には何の問題もないらしい。

『皆さん、楽しそうですね？ 達郎さまっ』

少し離れた位置でその光景を眺めている俺、そしてナーちゃん。彼女は俺の首にしっかりと抱きついたまま。

『そうだな。少しテンションがおかしいみたいだけど』

『てんしょん？ テンションって、何ですか、達郎さま？』
『ってか、質問の本身はどうでもいいんだろ？』

要するにナーちゃんはびったりくっついていたいんだもの。顔と顔すれすれなまま、嬉しそうに笑っている。

甘え放題のナーちゃんに俺は軽く苦笑しながら

『ブルーフィッシュの方はもう……大丈夫なのか？』

『ここが肝心だ。』

さつきも訊いたけど、もう一度確認しておきたかった。

『はいっ！ ジーナさん達バランスの皆さんと力を合わせていくことで、話がついたのです。これというのも、達郎さまやマサさま、由美さまが私達を支えてくださったからです。海獣組の中でも特に力のあつたセイゾーを追い出したことは、海の世界で大変な話題になっっているのですよ』

『ああ、その話は聞いたよ。』

だからこうやって、ドルファちゃんも手助けしてくれてるんだろっ？

『ですから、これからはもう、私はずっと』

ナーちゃんが言いかけた時だった。

どーんどーん

ぱーんぱぱぱーん

突然、夜空に美しい花が咲き乱れた。

おー、そうだった。

今年の学校祭、トリは花火だったっけ。

『まあっ！』

とつても嬉しそうなナーちゃん。

『人間の方達の世界には、こんなにも美しいものがあるのですね…』

…』

いやいや。

色とりどりの光に照らされているナーちゃんの横顔も、すごくキレイだぜ。

きゅっ

俺の首にまわされているナーちゃんの腕に力がこもった。

『……ナーちゃん』

『はい、達郎さま？』

額&額、密着中。

だから、すぐそこにある。

『あのさ……』

『はいっ、達郎さ』

ナーちゃんの声はそこで途切れた。

俺が唇を奪ってしまったから。

彼女は嫌がりも驚きもしなかった。

『あっ……達郎さまっ……んっ！』

ぎゅーっ

ナーちゃんの両腕に力がこもる。

次々と打ち上げられる花火の下
俺とナーちゃん、長い長いキ

ス。

『……うおい、おめエら！』

その声で、俺達はハツとなった。

振り向けば、由美さんやマサ、葵さんにドルファちゃん達みんながいた。

いつの間にやら花火は終わってるし。

俺とナーちゃん、ちょっと恥かしい。

「学校祭は終わりだぜ？　まずは帰ってひとつ風呂浴びて、一杯やるうぜ？　ナーと葵とドルファの復帰祝いだ！」

みんなは一部始終見ていたハズだが、誰もツツコンではこなかった。

ただ、妙にニヤニヤしているけれども。

おーし、帰ろうか。

ナーちゃんと一緒に。

『あいつ、達郎さまっ！』

『ん？』

『やっつとやっつとやっつと、こつやっつとお傍にこれたのですもの。私、もうずっと達郎さまのお傍を離れません！　ナタルシアは達郎さまの……妻ですもの！』

ああ。

今夜も明日も明後日も、そしてずっと　一緒にいよう。

途中でなんだかんだあったけど。

今年は最高の学校祭だったな。

またナーちゃんと一緒になれたから。

その32 親父の災難

俺の生活の中に再び飛び込んできたナーちゃんと葵さん、それにドルファちゃんの美女三人。

ああ、忘れていたが ついでにバカ一尾。

もっとも、こいつはほとんど俺の家にはいない。

「このクソイワシ！ 外から帰ったら足を拭けと、あれだけ言ってもわからないのか？ あア！？」

廊下についている見事な足跡を指しながらイワシを罵倒している俺。

が、アホイワシはそれがどうした、と言わんばかりの態度で

「ですから達郎どの。私はいつも言っているではないですか。姫様の用事でいつもいそがしいのですよ？ それをいちいち、足を拭いて上げななどと……。それはつまり、姫様の御用などしなくてもよいと言うのと同じではないのですか？」

しゃあしゃあと開き直ってやがる。

ヤツには、俺の頭上に刻一刻拡大していく「怒」マークがまったく見えないらしい。

続けて

「そんなに言うなら達郎どの、姫様のためにあなたが床を拭けばよいでしょう。 まったく、レディを労わる気持ちというものがナマコの涙ほどもないこんなムサイ男性のどこがいいというのか、姫様ときたらお戯れもそろそろほどほどに……」

「……おい、バカイワシ。これ、何だろうなあ？」

俺は背後に隠し持っていたそいつを突き出した。

「にや。にやー……にや？ にやーっ！ にやーっ！」

「はッ！ そ、それは……！」上から目線でぶーたれていたイワシヤールが突如として顔色を変え、じりじりと後退りしていく。

「たっ、達郎どのっ！！ そ、それはジョーダン喫煙室！ この私

「がいったい、何をしたと!？」

「お前、玄関のドアを開けっ放しにしていたよな? それでこの、入ってきたんだわ。ってゆーかあ、じごうじとく?」

ぱっ

手を離した。

「にゃーっ! ふぎゃーっ!」

「ぎいいえええーっ!! たすけてえええーっ!!」

近所のネコ・ミーちゃんにエサとしてロックオンされたイワシヤールは家から飛び出して行ったまま、戻ってこなかった。

そう。

貴様にはネコのエサこそふさわしい。

突然我が家にやってきた三人もの美女。

これが親父・舟一にとっては災難のタネになった。

「あー、気持ちよかったあ! おとーさまあ、次お風呂どーぞ

お!」

「あ? ああ、そっだ……なっ!？」

ぱりっ

上がってきたドルファちゃんを一目見るなり、読んでいた新聞を思わず二つに裂いてしまった親父。

「ドルファさんったら! お風呂から上がったら服を着なくちゃいけませんよ? 人間の方の世界では、そういう決まりなのですから」

「あ? あはは、すみませーん! 暑かったから、ついっい………てへっ!」

すっ飛んできた葵さんに注意されて舌を出したドルファちゃん。

うーん。

いきなり若い女の子にナイスバディ全開スッポンポンで出てこられたらねえ。

カタめなうちの親父にはキツイよな。

俺は構わずテレビを観ていたが

「達郎様っ！ お父様が大変ですわ！」

葵さんが慌てている。

「ん？」

食卓の椅子に仰け反ってびくびくと痙攣している親父。

二つの鼻の穴から、赤い血がたらーっ。

あー。

四十五歳にはシゲキが強すぎたか。

そういや昔、幸子と新婚の頃、幸子のハダカでもやったらしいしな。よくまあ、俺がデキたものだ。

だけではない。

『達郎さまっ！ 何をご覧になっていらっしやいますの？』

『ん？ これか？ 夏休みになったら、どこか行きたいなあと思っ
てさ』

『あの、あのっ、私も達郎さまと……ご一緒させていただいてもよ
ろしいですか？』

『当たり前だろ。ナーちゃんと思うって、さ』

居間でそんな会話を交わしていた俺とナーちゃん。一緒に旅行雑
誌を眺めていた。

彼女は当然、俺の膝の上。首に腕を回してがっちり抱きついてい
る。会話は額&額。

すぐそばでは、親父がテレビを観ている。

が、俺とナーちゃんの密着ぶりが気になって仕方がないらしく、
しきりと「えへん」「おほん」咳払いをしてやがる。

ええと……席を外した方がいいのか？

なんて思ったが、ナーちゃんは俺の方しか見ていない。

さらに熱っぽくくっついてきて

『達郎さまっ たら……！ そんなにも私のことを……』

ちゅー

唇と唇を重ねてきた。

愛情深い人魚のキス。

一度始めたら気が済むまで止まらない。

『……達郎さま……んっ』

どんだん情熱的になっていくナーちゃん。

ところが！

「ぶばっ！ げほっ、げほっ！ げへっ！」

湯飲み茶碗と唇を重ねていた親父、吹き出し、かつむせている。

ナーちゃんはびっくりして

『……まあっ！ 達郎さま、お父様が苦しそうになさっていますわ。

「病気でしょ？」

ある意味、病気かも知れない。半径三メートル以内の若い女性が

苦手症候群。

まあ、ほっとこう。

キスの一つや二つ、今どき珍しくもなんともない。

そこへ、ばたばたと葵さんが布巾をもってやってきて

「姫様っ。達郎様も、お二人で仲良くするのはよろしいですが、場

所をわきまえませんと。お父様の前でそのようになさっては、お父

様の心地がよろしくないではありませんか」

『はい……』

彼女に諭されると、いつもナーちゃんはしゅんとなる。

こうしてみると、葵さんだけが立派な常識人のようではある。

しかし、そんな葵さんにもお色気な仕出かしの一つや二つ、ない

訳ではなかった。

三人がやってきてから間もなくのこと。

幸子が子供がよくやる花火を買ってきた。

何気なくナーちゃんが花火を見て喜んでいた、という話をしたと

ころ よりによってこのアホ幸子は、段ボール箱（大きさは中く

らいたが、一杯に花火が詰まれば尋常な量ではない）で購入してき

やがった。

「みんなであれば楽しいでしょー？ 子供に戻った気分だねー！」

お前の脳みそは常に子供以下だろうが。

俺は対して興味を示さなかったが、ナーちゃんはもちろん、ドルファちゃんも喜んだ。

「わーっ！　こんなの、海の世界にはないですもんねー。やりたーい！」

確かに、水中で花火は難しいだろう。

その昔、両親と共にやったことのある葵さんにもここにこしている。てめーの企てに圧倒的な賛同を得た幸子は得意そうに胸を張り

「よーし、じゃあ、ごはん食べたらみんなでやりましょーね！」

つてな感じでその日の夕食後、美女三人と海藤一家は近所の小公園へと出かけた。

親父を除くみんなは、なんだかんだ言いながら花火を楽しみ始めた。

「わあ！　達郎さまっ！　きれいですね……とつても素敵！」

「まー、こないだの花火とは比べものにはならないけど……」

「いいえ！　達郎さまのお傍で見られるのですもの、小さくても私にはとても美しく見えますわ」

嬉しそうなナーちゃん。

そうだな。

花火のでかい小さいは問題じゃないな。

好きな人と一緒に見て、一緒に綺麗だと思えることが大事だもん
な。

俺達は勝手に二人の世界に没入していた。

その背後では。

「……あれ？　これ、なんだろう？　ちょっとカタチが違うみたい」
段ボール箱を「ごそごそとやってたドルファちゃん、何かを発見
したらしい。」

「これも、はなび、かな？　ちょっと細いみたいだけど……あ、ど
ーかせんがついてる。はなびだ！　やってみよー！」

言い忘れていたが、何せアホ幸子はあり得ない量の花火を仕入れ

てきている。

ちやつちやと消費するため、俺が何本もまとめてやっているのを見ていたドルファちゃんは、それを真似るようになっていた。数が多いほうが明るくて綺麗だったし。

「……よっ！」

ローソクの火で点火を試みたドルファちゃん。

ぷしゅーっ

導火線に火がついた。

が、激しい火花が出てこない。

「あれ？ これ、ヘンだな……あ！」

ひゅうううっ！ ひゅうんっ！ ひゅうう！

そう。

彼女が手にしていたのは……ロケット花火だった。

それがいかなるものか知る由もないドルファちゃんは、水平に持っていたのである。

そしてその先には 少し離れた位置で一人、ぼーっとタバコを吸っている親父の姿が！

発射されたロケット花火達は、親父目掛けて一直線に飛んでいく。しかし幸いなことに、彼の近くにはたまたま葵さんがいた。

「……あぶないっ！」

さすがは護衛隊長の葵さん。

危険を察知するや、咄嗟に駆け寄って親父の前で我が身を盾にし、Tシャツの背中をめくった。短パンのウエストのところに、オーシヤンイーグルを挟んでいたのだ。

素早く両腕を背中に回して抜き取るや

タタタタタンツタタンツ……

得意の両腕交差ショットでロケット花火を全て撃ち落して見せた。

「……」

あまりの凄技に、親父ぼーぜん。

銃口を空に向けて動きを止めると、葵さんは背後を振り返り

「お父様、もう大丈夫ですよ！ お怪我はございませんか？」
にっこり。

そこまでは良かった。
が。

すとん。

絶妙のタイミングで、葵さんの短パンが脱げてしまった。

どうやら、オーシャンイーグルを抜いた瞬間にウエストを締め
ているゴムが切れたらしい。

しゃがんだ体勢でタバコを吸っていた親父。

当然、目の前には 葵さんの引き締まった美しいお尻、それ
に見事な美脚が。

「あらやだ！ 私ったら！ …… もぉ、恥かしい！」

あられもない格好で恥らっている葵さん。Ｔシャツの裾を引っ張
って隠そうとしている姿は、なかなかカワイイものがある。

しかし、一呼吸ののち

「ぶばっ！」

その後ろで、親父が鼻血を撒き散らしながら卒倒した。

「あら？ おとーさん？ どうしたの？ こんなところで寝たら力
ゼ引くわよ」

「あー！ おとーさまぁ、血だらけになってるうー！ 葵さん、な
んかしたでしょお？」

「あの、あの、ドルファさん！ すみませんが、代わりに穿くもの
を」

めいめい勝手にやっているのを尻目に、俺とナーちゃんは

「達郎さま？ 今、ドルファさんがやっていたのも花火なのですか
？」

「ああ。あれはロケット花火っていうんだ。ほかの人に向けたら危
ないんだよ」

「まあ！ るけつとはなびって、とても怖いものなのですね、達郎
さまー！」

だろうね。

あの無敵の葵さんがパンチラになってしまっくらいなもの。

とまあこんな具合に、俺とナーちゃん、それに葵さんやドルファちゃん達との暮らしが始まったワケなのだが。

もう一人、忘れてはいけない。

ドルファちゃんの看病を頼んで以来俺の家に入出入りするようになった、由美さんという偉大かつ強烈な存在を。

その33 静かにしてくれ

学校祭が終了した翌週。

祭りのあとには何とやら、期末試験が待ち構えていた。

成績が悪いと親父に申し訳がないから、それなりにテスト勉強はしていたのだが 何せ、直前になってナーちゃんとの再会である。彼女は一秒たりとも俺から離れたくないといって、学校とトイレに行く以外はびったりくっついていてる。

そのせいと言ってはバチが当たって地獄に堕ちて不幸になるだろうが、ともかくも勉強にならない！

『達郎さまぁ……何をなさっているのですか？』

『達郎さま？ 達郎さまは、ここに書かれてあることは全てお分かりになるのですか？』

『達郎さまっ！ あの、あの……一緒に、お風呂に入っていただけませんか？』

あーっ！

教科書を読んでいるより、ナーちゃんの顔を見ている時間の方がながーいっ！

俺のしていることがわかってる葵さん、さすがに見かねて

「姫様？ 達郎様は今、どうしてもしなくてはいけないことがありなのでしょ？ いつでもお傍にいられるのですから、少し静かにして差し上げなくては『

』はい……』

しゅん。

しょんぼりしているナーちゃん。

葵さんは彼女を抱っこして

「すみません、達郎様。姫様がわがままばかり言って……」

「あ、いや。あと二、三日もすれば終わるから、それまでは一時間だけ……」

「わかりました。では、それまでは私が、姫様とお話していますわ」
葵さんの優しい心遣いで僅かな学習時間を獲得できた俺。
ようやく、黙々と机に向かって
ぶるるるるるるっ

「……はい？」

『おおう、タツう！ オレ！ 起きてつかア！？ 今よオ
……カンベンしてくれ。』

今電車に乗っていると何か何とか、ごく一般的な通話拒否の理由を
並べたて、やっとマサの長電話から逃れた。

ささっ、勉強に集中しなくては！

次の英文の誤りを指摘しなさい？ なになに
ばんっ！

「達郎さまあー！ あたしのパンツ、こっちにありませんでしたか
あ？」

「ドルファさんっ！ ハダカでお風呂から上がったちゃいけませんっ
て、昨日も言ったでしょお！？」

「えー……。だってだって、パンツがなかったんだもん。……あ！

葵さんの貸して！ あのほっそーいやッ、あたし穿いてみたーい」
「ドルファさん！ いいから服を着なさい！」

今ごろ階下は血の海だろう。

そっいや、親父が呟いていたな。

「どうもこのところ、頭がくらくらする……」

そりゃ間違いなく貧血だろう。身体中の血液が全部鼻から出てい
ってるせいであることは確かだ。

ああ、いやいや。

親父の鼻血などはどーでもいい。今に始まったことでもないし。

誰か、一時間でいいから俺に勉強をさせろーっ！

で、三分後。

スッポンポンであーだこーだ言っているドルファちゃんを葵さん
が隣の部屋へ連行していき、ようやく静けさが戻ってきた。

『…………』

背中に刺さるナーちゃんの悲しげな視線がイタ過ぎるが……ゴメン、少しだけ、ガマンしてくれ。これが終わったら風呂でもなんでも、一緒にいてやるから。

やっと、俺の時間が来たぞ。

ふむふむ、これは「であるといえども」、それでこつちが「ならば でない」か。

つまり、これを和訳すると
がらっ！

「いよオ、タツウ！ 近くまできたから寄ったぜエ！ 美味しいタコ焼き見つけてよオ、買ってきてやったぞオ」

ゆ、由美さん……………！

なんだって窓から入ってくるんすか？

イワシャルじゃないんだから……………。

結局、俺には家での静かな学習時間など許されなかったのだ
った。

ま、次の日からは学校に居残りして図書室で勉強することにした
んだけども。

その34 バカは死んでも

すったもんだで、期末試験は過ぎていった。

まあ、良くも悪くもないだろう。俺はいつも中間だし。

ってことで、明日は終業式。

二年生になつてはや四ヶ月。

いろいろあつたなあ。

なんといつても……またナーちゃんと暮らせるようになったのが一番でかいよな。

折角戻ってきてくれたんだから、大切にしておかないとな。

ここ数日、テスト勉強がたくてあまり構ってあげていなかったから、寂しそうにしていた。夏休みの宿題などという面倒事はとつととケリつけて、色々連れていってあげたいものだ。海獣組とかりーネのバカに襲われるのはゴメンだが。

などと考えながら、帰り道を歩いていると

「……あれ？」

「あ、達郎。学校は終わったの？」

幸子。

見りゃわかるでしょ。帰るんだよ。

「どこ行くんだ？ 買い物か？」

そう尋ねると、幸子はちよつと心配そうな力オになつて

「遠海市のおじいちゃんが、調子悪いんだって。だから、様子見に行ってくるわね。お父さんも会社終わったら来てくれるって。……

もしかしたら今晚、帰れないかも知れないの」

そうか。

そりゃなんとかしないとな。

「わかった。こっちは上手くやつとくよ。じいちゃんによるしく」

「ごめんね。夕飯、作る時間なかったのよ。テーブルの上に五百円置いておいたから、それで何か食べてね」

おい。

五百円って、子供のお駄賃か！

今どき、コンビニの弁当だってそれ以上するわ！ 葵さんとかドルファちゃんもいるってのに、何も考えとらんのか、このアホ幸子は。

「いいよ……何とかするよ……」

「ごめんねー。行ってきまーす！」

去ってゆくアホ幸子の背中を見つめながら、つくづく情けなくなつた。

仕方がねエなあ。

自分でなんか作るとするか。

『……達郎さま？ どうかなさいましたか？』

『いや、夕飯をどうしようかと思ってね』
帰宅してキッチンの前に立った俺。

佇むこと三十分。

ただ立ち尽くしている俺を不思議に思ったナーちゃんが尋ねてきた。

……ない。

冷蔵庫の中、チヨー空っぽ。

あのバカ幸子、普段どうやって料理しているんだ！？

『あの、あの、達郎さま？ 私は、お水があれば大丈夫ですから…』

うん、わかっている。

でも、葵さんとか瘦せの大食い・ドルファちゃんもいるしねえ。

こりゃ困った。

「達郎様？ 私、お買い物へ行つてまいりましょうか？ お母様からお金をお預かりいたしましたの」

へえ。

葵さんにも渡しでいったのか。

……待て待て。俺と同様、どーせ五百円玉一個なんじゃないのか？
あのバカ幸子ならやりかねん。

「いくら置いてったの？」

「ええ、これだけいただいたのですが……」

葵さんはポケットから茶色い封筒を取り出した。

！？

中を覗いた俺は、開いた口が塞がらなくなった。

おいおい……福沢先生、いったい何人いらっしやるんだ！？

ざっと見ても十諭吉（この単位はおかしいが）以上いるじゃねー
かよ！

驚くと同時に、なんだか腹が立ってきた。

「あのバカ親……そんなにてめーの子供が信用できねえのか？」

「これ、どうしましょう？ 達郎さまのご指示をいただきたいと思
うのですが……」

葵さんもまた、困っているらしい。

そうだろう。

海の世界の住人に札束だけ渡して「自分でなんとかしろ」という
発想は、乱暴にも程がある。これがまだ葵さんだったからいいが、
海の世界には基本的に「カネ」なるものは存在しないのだ。

なんだって、こつたら大金を置いていく！？ あの天然幸子の考
える事は常にわからん！ いい歳こいて金勘定もできないのかよ。
が、しかし。

これだけあれば何でも食えるじゃないか。

ってか、フランス料理フルコースだろうが高級中華だろうが寿司
屋だろうが、おとといきやがれたよ。……別に行くつもりはないが
そこへ

「あー、おなかすいたー！ ……あれ？ おかーさま、お出かけで
すかあ？」

てけてけとドルファちゃんがやってきた。

彼女は食う。

イルカという生き物が大食いかどうかは知らないが、とにかく、食う。

いつも軽く五杯くらいおかわりしたあと、「うーん。もうちょっといけるかなあ」とかぶつぶつ言い、結局は八杯程度食ってしまう。それでも彼女の美しい体型には何の変化も起こらないのだから、海の世界というのは不思議なものである。

俺は考えた。

葵さんに買出しに行ってもらい、俺が夕飯をこしらえることはできる。

しかし よく考えてみれば、悪戦苦闘の末に期末試験を乗り越えたこの俺が、わざわざ幸子に気を遣ってケチケチやる筋合いはどこにもないというものである。

ヤツが葵さんにそれだけの金額を渡したという事は、俺達がそれを使いきってしまうこともまた可、といえなくはないだろうか（かなり強引だが）！？ そして今夜は、これから夏休みに突入しようかといういわば前夜祭、カーニバルビフォー。

ちよつとぐらい、いいじゃないか！

と、いうことで

「よーし。みんなで晩メシを食いに出かけよう！ たまにゃあ、いいだろ」

「わーい！ みんなでお出かけー！」

喜んでいるドルファちゃん。

葵さんも

「達郎様がそうおっしゃるのですしたら、そのようにいたしましょう」
異論はないようだ。

俺はナーちゃんに、かくかくしかじかと説明してやった。

『はい、達郎さま。お出かけですのね？』

はい。お出かけですよ、姫様。

歩いて十分くらいのところにあるファミレスに入ってささやかな晚餐を始めた俺達。

「なんだか、周囲から妙に注目を浴びているようだ。」

「そりゃまあ、なんだってとびつきりのセクシー美女が三人もいるわけだし、しかもうち一人は人魚である。目立たないハズがない！ ナーちゃんは海藤家へ戻ってきて以来ほとんど外出なんかしたことがないから、こういう場所がもの珍しいらしく」

『達郎さまっ！ ここはどのようなところなのですか？』

『達郎さまっ！ これは何に使うものなのですか？』

「これはねえ……あ！ むやみやたらと押しちゃダメ！」

「ぴんぽーん」

「はい」

「店員のおねーさんがやってきちゃったよ。」

『まあ！ 音がなるのですね！ それに人間の女性の方を呼ぶためのものなのですね！』

『うん、音を鳴らしてね、この店の係員を呼ぶためのものだよ』

「それに、ナーちゃん。女性だけがくるとは限らないんだよ。ムサいおっさんとかアタマ悪そうなおにーさんが来ることもあるよ？」

「呼びつけておきながら俺とナーちゃんが額と額をくっつけていちゃいちゃしているものだから、店員のおねーさんはさすがにイヤな力才をした。」

「すると、すかさず葵さん」

「あの、お水を少し、多めにいただけませんか？」

「彼女の知性と気品溢れる美しいスマイルを向けられて、心を動かされない人間などいないに違いない。おねーさんは」

「はい！ かしこまりました！ 少々お待ちくださいませ！」

「つられてたちまち笑顔になり、水を取りに駆け出して行った。」

「その後もナーちゃんの無邪気な質問攻めは続いたが、俺は根気よ」

く相手していた。

テスト勉強の最中、僅かな時間とはいえ寂しい思いをさせてしまったからな。

冷たくしちゃあ、血も涙も汗もないというものだろう。……あれ、違ったか？

そうして食い物がきて晩メシになったのだが　そこでまた、俺達は周囲の視線を一齐に浴びるハメになる。

ドルファちゃん、えらい食いつぶり！

ぱくぱくぱくと大盛りのライスを三口ほどで平らげるや

「おかわりー！」

あー、教えてなかった。

ここは俺の家じゃないから、おかわりって叫んでもごはんはやってこないんだよ？

俺の膝の上でちまちまと水を飲んでいたナーちゃん、すつと手を伸ばして「ぴんぽーん」。

「　はい、おきやくさまー！」

『……このようにするのですね？　達郎さまっ！』にこっつ。

はい、よくできました。

その後も、ドルファちゃんが「おかわりー」と叫ぶたびにナーちゃんが「ぴんぽーん」は続き　気がつけば、回転寿司を食ったがごとく皿が重ねられていた。

言い忘れていたが、彼女はあくまで普通は普通に一人前しか食べない。

なにがって、俺の家でもそうだが「ごはんが美味しい！」とかいって白米をオニのよーに平らげるのである。

この間、葵さんは小さな丼ものを注文していたが、その三分の一も食べ終わっていない。

「ドルファさん。ここは海の世界ではないのですから、少し遠慮しないといけませんよ？　達郎様にご迷惑をおかけしてしまうのではありませんか」

「えー。だって、おいしいんだもん」

こどもみたいにくくれているドルファちゃん。

なんちゃらステーキとか単価が高いものをアホみたいに食われたら無難に即死だが、ライスくらいは……ねえ。

「あー葵さん、いいよいいよ。コメくらい、安いもんだし」

「でも、達郎様……」

「わー！ たつろーさま、やさしいっ！」

ドルファちゃんは喜び、また食い始めた。

そうしてメシを食い終わった俺達。

なんとなく甘いモノが欲しくなったので

「……デザートはどうする？」三人にそう質問すると

「あたし、超ジャンボパフェ！」別腹ドルファちゃん、予想通りの回答。

「それでは私、アイスコーヒーをいただきますわ」さすが大人の食後、葵さん。

『私はお水を……』ナーちゃんは……な。

で、高さ五十センチもあるパフェと格闘しているドルファちゃんを除き、俺達はまったりとした食後のひと時を過ごしていた。

「達郎様、試験の方は、その……大丈夫でしたでしょうか？ 姫様がだいぶ無理ばかり申し上げて、お勉強にさしつかえがでたのではないかと、案じておりましたの」

葵さんは優しい！ とにかく優しい！

実は俺、放課後に図書室で勉強してから帰宅していたのだが、やはりそれだけでは足りなくなっていた。で、深夜にナーちゃんが眠っているのを見計らい、こっそり起きては試験勉強をしていたのである。

すると、気配を悟った葵さんが

「達郎様、こんな深夜まで……。あまり無理をなさらないでくださいね？ 私、心配で……」

とか言いながら、冷たい麦茶なんか運んできてくれるのだ。

これは経験した者にしかわからないだろう。

美しくも優しい人に温かく励まされると人間、どれだけテンションとエネルギー出力を高められることか！ おかげで、俺は少ない日数ながらも素晴らしく密度の濃い学習時間を確保しつつ試験に臨むことができたのである！

ひとえに葵さん、あなたのおかげですっ！

……で、あるのに「申し訳ないフェイス」をされては俺が「申し訳ないっす」。

「いや、逆に助かったんだ。葵さんが支えてくれたから、ラストまでしつかりネバれたよ。まったく問題ない」

「達郎様にそう仰っていただけと……私、とても嬉しく思いますわ」

天使のように微笑んだ葵さん。

素敵だ！

あの日、由美さんやマサに助けてもらいながら葵さんを救い出せて本当に良かったな、と俺は心の底からしみじみと思った。

ナーちゃんも号泣して喜んでいたし。

何となく満ち足りたような幸福な気分になって天然アップルジュースをちゅーちゅーやっていた。

すると。

「まったく！ この店は何一つなっていないではありませんか！ 最高級牛フィレプレミアムステーキとかいっておきながら、ソースの味は濃すぎるし肉は焼きすぎて硬いし。特上フカヒレスープにいたっては、顕微鏡でなければ見えないようなのがちよつと入っていたでしょう！ これは詐欺ではありませんか！？ 店員にいたってはどれも気品のない低劣な庶民の娘ばかり雇っていて。私みたいなエレガントで魅力に溢れた店員なんか一人も目に入りませんでしたわ。それなのに……ぐだぐだ」

おおっと。

クレームですか。

大声で騒ぎ立てているものだから、店内の客が一齐にそちらを見

た。

出口付近のレジかららしい。

「大変申し訳ございません、お客様。しかしですね」

「しかしもクソもありませんよ！ 責任者を出しなさい、責任者を！」

「まったく、イヤなヤツだな。」

「気に食わないとすぐ「責任者」か。」

案外そういうバカ客に限って、ケチだったり文句つけてなんか得しようとか考えているヤツばかりだぜ？ クレーマーなんてものは、この世には一円の価値だつてないんだつーの。

「達郎さま？ 大きな声でお話している方がいるようですが……どうなさったのでしょうか？」

「ん？ 人間にはね、いろんなヤツがいてね。中にはとんでもない野郎もいるのさ」

「そう言っただけで何気なくそちらの方をひょいと見やった俺は フリ―ズした。」

「……達郎さま？」

「ナーちゃん。すぐに戻るからね」

俺は席を立った。

そのまま、レジの方へ

「責任者はどうしたのです！？ 責任者は！」

「いや、ですから、お客様。全て食べ終えられてから申されましても、当店としては……」

「もう、結構ですわ！ そんなにはした金が欲しいのなら、海藤達郎という私の召使がいますから、その者に支払ってもらいなさい！

明日でも、その使えない召使を」

「……誰が、使えない召使だつて？」
「……誰が、使えない召使だつて？」

「いやあ、今日は骨が痛い具合に鳴っている。」

数日勉強勉強で、体が鈍っていたようだ。

「た、達郎、どの……?」

俺の声に、ゆっくりと振り返ったボケイワシ。

「ふーん……。俺、いつからお前の召使になっただっけ? あア?」

「あ、いや、その、これは……コトバのしりとり、じゃなくってあやとり、とでもいいでしょうか。はははは……」

乾いた笑いは要らねエよ。

レジの機械に目をやると「一万六千九百八十三円」の表示。ほづ。

さぞかし、いいモノばかり食ったんだろうなあ。

俺達のテーブルの伝票、四人分で八千三百二十二円だった。ドルファちゃんがライスをおかわりしまくったにも関わらず、イワシ一匹の食事代金の半分以上だ。

「……で、さんざん食っておきながらよりによって無銭飲食、か。いい度胸してるなあ、カスイワシよ」

イワシヤールはぶんぶんと手を振り

「とつ、とんでもない! このエレガントな私が無銭飲食などと、人聞きの悪いコトを! ただ、姫様のためを思っただけで意見していただきですよ! いつかは、その、姫様がお越しになる日のために、この私がわざわざ下見にきてやった、と。これが真実です!」

「そーかそーか。……で、経費を俺に払え、と?」

「達郎どのはペッペケプー（意味不明）とはいえ、姫様にお仕えする者ではありませんか。たかがこれしきの経費くらい、まさかケチケチするようなことはないでしょう? そう思ってますね、この私が気を遣い」

「……貴様にかかる経費などないわ!」

「がっしやああん!

「あーれ!……」

「きらーん!

俺は後悔していた。

早いうちに、さつさとヤツの息の根を止めておくんだつた。

「申し訳ございません、達郎様……」

学校へ行こうとしている俺に、葵さんが謝ってきた。

もうずっと平謝りの葵さん。

「いいって。葵さんはまったく悪くないし。全部あのクズイワシとバカ幸子のせいだし」

結局、ヤツの無銭飲食分と俺がヤツを蹴り飛ばした際に破壊したガラスの弁償で、幸子が残っていたアヤしい金の半分が消えてしまった。

しかも。

翌朝帰ってきた幸子は

「達郎っ！ あなた、私が葵さんに預けていったへそくり、半分無駄使いたでしょお！」

はあっ！？

へそくり！？

バカか、お前は！

いや、バカだ！ 大バカだ！ 世界バカデミー大賞受賞決定だ！
なんで葵さんにてめーのへそくりなんか預けるんだよ！？ ってか、へそくりならへそくりだって言っつけ！
朝っぱらから大ゲンカをこいた幸子と俺。

よくわかったよ。

人間の世界にも海の世界にも、どーもならんヤツの一人は絶対にいるものなのだ、と。

しかも、そういう奴らに限って仲良しこよしだったりするもので

「達郎どの！ 幸子どのに向かって何という口の利き方をするのです！ 少しはこのエレガントな私の物言いを見習っていただ」

「……エレガントな食材にされてこい！」

ガシヤーン

「あーれー……」

昨夜全力でぶっ飛ばしておいたにも関わらず、いつの間にやら帰還していたバカイワシ。

今度、水産加工場を持って行って「これ、原材料です」って提供してやったほうがいいのだろうか。

しかし、昔の人は言ったものだ。

バカは死んでも治らない。

幸子とイワシヤール、生まれ変わってもやっぱりバカなんだろうか。

その35 イワシの冷しゃぶ

じりじりと照りつけてくる日差しがムカつくほどウザい。

部屋の中にも、熱気が容赦なく窓から飛び込んでくるのだ。

夏だからってこれみよがしに暑いってのはどうだろう。年間通じて平均的に照ってくれりゃあいいものを。太陽ってヤツは気が利かないものだ。

「……」

扇風機の前にぺたりと座っているナーちゃん。ちょっと辛そう。

さすがに暑いのが苦手らしく、そこから動こうとしない。というか、人魚だから自分で自由に移動できないんだけども。

俺は机に向かってる。

夏休みはまだほんの初日だが、ここで宿題に立ち向かえるかどうか重要なトコだ。

などとカツコつけてみたが、とどのつまり宿題みたいになんか後々崇るような厄介ごとにはさっさとトドメを刺す主義だからだが　うーむ、こっちは暑いとねえ。宿題と戦うためのモチベーションに激しく影響してくる。

「……ただいま戻りました」

コンビニへ買い物に行っていた葵さんが戻ってきた。

涼しい顔をしつつも

「外はさすがに暑いですねえ。私がこちらで暮らしていた頃は、こんなに暑くなかったような気がします」

そうなんですよ、葵さん。

地球は今、温暖化とやらにやられてしまってます。あと百年もすれば、地球上は全て海の世界になってしまっただけですよ。困ったものです。

「達郎様は力キ氷ですね。姫様はお水、と。……あらやだ！　氷がみな解けてしまってますわ」

水道水の氷なんか美味くないから、ついでに氷も買ってくるよう

にお願いしておいたのだ。ナーちゃんの飲む水に入れてあげたいと思っただけでも……予想通りなコトになったか。

「あー、冷凍庫に新しい氷をたくさん作っておいたから、ナーちゃんにはそれをあげたら？」

「まあ、達郎様はお優しいですものね。では、それを姫様に」

葵さんは下へ降りていったがすぐに戻ってきて

「大変！ 冷凍庫の中の氷がみな無くなっていますの！ どなたか、お使いになったのかしら？」

「全部ないって！？ そんなバカな」

家には他に誰もいないハズ。だから幸子が使い果たしたとかいうセンはない。

念のため、俺も台所へ行って冷凍庫を開けてみた。

……ない。きれいさっぱり。

ほんの一時前にセットしたはずなのに。

「おつかしいなあ。冷凍庫、壊れたかな？」

独り怪しんでいると、俺は妙なコトに気がついた。

台所から風呂に向かって、足跡がついている。

明らかに、汚れた足で歩いた跡。

(もしかして……)

俺はイヤな予感がした。

風呂の方へ近寄ってみると、中から気配がする。

「おー、いつつゆあおーしゃん！ ああなたとおお、わあたしだけのおおっ！ らららら、すいーとっ！ ……おおしゃあん！」

どこかで聞いたことのあるオスカルボイスだな。

声は悪くないのだが、だからといって歌が上手いかどうかは別の問題だ。

早くも俺は頭に怒りマークを点滅させつつ、風呂の戸を開けた。

「……貴様か。バカイワシ」

「おや、達郎どのですか。レディの入浴中に侵入するとは、なんと破廉恥な！」

イワシに破廉恥呼ばわりされたかないわ！

それよりも、俺の目を釘付けにしたのは 浴槽一杯に浮かんだ氷。

バカイワシはその浴槽に浸かって涼しそうなのをやっていやがった。

「おい……その氷、どっから盗んできたんだ？ え？」

「盗んだなどは人間きの悪い。この家があまりにも暑苦しくて仕方がないから、こうして水風呂でガマンしてあげているのです」

何が悪いと言わんばかりのバカイワシ。

すでに俺の右手にはバットが握られている。

そのことに気付いていないヤツは、さらに続けて

「それにしても達郎どの。どうしてこの家はこう暑いのですか？

もっと、居住性にすぐれた設計をしなければいけませんよ。エアコ

ンもないなんて、これだから庶民は困りますね。人間というのは、

なぜこうも

「……そんなに暑けりゃヒマラヤでも登って来い！」

ばごおん！

「あーれー」

風呂の壁を魚型にぶち抜きながら、クソイワシは再び旅立ってしまった。

朝からバツティングなんかさせんじゃねえ。

クソ暑いつてのに。

その35 イワシの冷しゃぶ(後書き)

注)イワシヤールの歌はオリジナルです。

その36 美女達の本音

その晩、俺はナーちゃんや葵さん、それにドルファちゃんをつれて近くのレンタルビデオ店へと出かけていた。

俺が観たいものを借りるためということもあつたが、それ以前にバカ幸子が大量の韓ドラを返却しないまま、またどっかへ旅行へ出ちまったのだ。青くなつた俺は、即刻返しにいったワケなのだが……確か延滞料は軽く五千円を超えていた。

あいつのへそくりから持ち出し決定だな。

どこに隠していったか、俺はちゃんと知っているんだぞ。

「おおい！ タツう！」

夜道で後ろから呼び止められた。

このイントネーションは言うまでもなく、由美さんである。

「そろつてなんだア？ なんかあつたのか？」

「ああ、レンタルビデオへ。今日はうちの親父も母親もいないんで、なんかゆつくり観ようかと」

親父は出張。三日くらい戻らないらしい。

俺が何気なく答えると

「おオ、そつか！」

彼女は嬉しそうに、手にぶら下げていたひよる長いビニール袋を上げ下げして見せ

「んじゃ、これ、みんなでどオだ？ さっきもらったンだけどよオ、アタシー人じゃ、な」

「……？」

由美さんが合流して五人で家に戻ってきた俺達。

「タツ！ グラス五つと氷な！ ナーのぶんもだぞ！」

上がりこむなり由美さんはそう要求してきた。

「ナーちゃんも？ いったい、何を飲まそうってんです？」

この時点で、俺はイヤな予感がしていた。

先日の学校祭最終日、後夜祭を終えて俺の家に転がり込んできた由美さんは、マサを含む俺達一同にいきなりビールを飲ませようとしてきた。

「ナーと葵とドルファの復帰にカンパニー！」

何もビールでやらなくなつて……。

「げほつげほつ！ わ、私、これはちよつと……」

真つ先にむせた葵さん、一抜け。

ナーちゃんもまた、コップに鼻を近づけてくんくんやっていたが眉をしかめて

『達郎さま？ これ、とつてもヘンなニオイがしますが…… 由美さまはこの飲み物がお好きなのですか？』

好きどころか、飲まないと生きていけないらしい（本人談）。

つてか逆に、そのヘンなニオイの飲み物さえあれば生きていけると主張しているが……。

当然ではあるが、ナーちゃん二抜け。

俺もまた、こんな最悪なシロモノは一口たりとも飲みたくなどないのだが 由美さんの手前、あからさまに「要らん！」とは言えない。仕方がないので、コップに口をつけて飲んでいるフリだけしていた。

ところが。

「……あ。なんか、不思議な水ですねえ」

とかなんとか言いながら、ドルファちゃんが次々とコップをカラにしているではないか。

「おお！ ドルファ、お前、イケるなア！」

大喜びの由美さん。

マサはマサで「かーっ」と（この男の辞書に法律という文字は生まれたときから存在しないらしい）やりながら

「うひゃひゃひゃ！ ボコリ合いのあとのビールはタマンねエなア

！ だろオ、タツウ！」

なにが「だろオ？」だ。

少しは国家権力に対して畏まったらどうなんだ。

三十分後。

『すやすや……』

今日一日いろいろあつて、とても疲れていたのだろう。ナーちゃん
は俺の胸で静かな寝息を立てている。

葵さんもまた、俺の肩にもたれるようにして居眠りを始めた。

一方。

「ぎやはははっ！ ドルファちゃん、おもしれエな！ おもしれエ
な！ おもしれエな！」

「そおんらころ、らいれすよほおだ！ まははまるほうら、おもひ
ろひろおもひまふ！」

あーあーあー。

ドルファちゃん、完全にろれつがイっちゃってます。

マサはテンションマックスでカオスが崩れるくらい笑いつぱなしだ
し。

さすがにアルコール免疫絶対の由美さんだけは狂うことなく、二
人のやり取りを面白そうに眺めながら黙々と缶ビールを空け続けて
いる。

さらに十五分経過。

「じゃーまははま！ しょーぶひまほう！ まけらほうら、ぬふん
れするれ？」

「おオ、そオだちゃられ × (何を喋っているかまったく

不明)。おへ、ほるははんろふうろへっはいり、ひれは ×

(同じく意味不明)「

誰だおまえら……」。

二人の間でどういふ意思疎通が行われていたのか全くわからな
かったのだが、とにかく何かが通じ合っていたらしい。勢いよくそう
言い合うなりマサとドルファちゃんは「へろへろっ」と立ち上がった

た。

すると、それまで沈黙していた由美さんも

「……それ、アタシもやる！」

宣言して立ち上がった。

泥酔している二人の会話を聞いて理解していたのか……！

(……?)

一人醒めている俺としては、呆然と眺めているよりない。

そして、突然俺の目の前で繰り広げられたのは

「いっくぜエ！ じゃんけん、ポン！」

「オラア！」

「はひっ！」

ドルファちゃんが負けた。

「ぎゃははーっ！ るるはらん、まへらろー！ ふへーっ！」

「しょーららいつすれへ……」

ぼそつと呟くなり「ぬぎっ！」

野球拳かよ。

っていうか、ショートカットしすぎだろ……。

思い出すのも忌まわしいが、三つ巴のこの勝負、結局はマサが一糸纏わぬスツポンポンになったところで終了。

「うえっ！ まへりまつらっす！ もほ、ぬふもろらいれすはら、

はんへんひれふらはい！」

「ケケケケ、だらしがねエなア！ お前、丸出しじゃねエか！ ち

やんとついてんのかア？」

「わーひ！ まははま、はらはーっ！ あははははっ」

笑っている場合か。

そうやって冷やかしているドルファちゃんと由美さんだつて、あと一回負ければアブナイところまでできてるじゃないか。

などという実にバカバカしい事件があったのだが、そもそもは由美さんだ。

未成年ばかりつかまえて、ビールなんか飲ますなよな……。

そんなワケで、また由美さんが酒でももってきたのではないかと俺は内心疑っていた。

「これでよろしいでしょうか？」

葵さんが下からコップと氷を持ってきてくれた。

「よし。じゃあ、みんなで味見しよーぜ」

そう言っただけで由美さんはビニール袋から一本のビンを取り出した。
一升瓶。

透明なそれに、なにやら薄い紫色の液体が詰まっている。

「……なんスか、コレ？」

ふふん、と由美さんは笑って

「近所のおっちゃんがかくれたんだよ。自家製ぶどうジュースらしい。これならナーでも飲めるだろうと思っただけさ」

おお。

由美さんってば、そんな心遣いを。

どうせ酒だろうとか疑ってすみませんでした。

『達郎さまっ。由美さんがお持ちになったこれは、なんですか？』

かくかくしかじかと説明してやると、ナーちゃんは嬉しそうに

『まあっ！ 私のために、わざわざお持ちくださったのですね！

ありがとうございます！』

俺、通訳。

「おお、いいってコトよ！ 人魚じゃあ、酒飲めねエしさア」

そーっすよ。

やっと理解してただけでしたでしょうか。

氷の入った五つのグラスに紫色の液体を注ぎ分けた。

一升ビンものだから、まだまだぜんぜん残っている。

「じゃ、いただきまーす」

みんなでぐびっ。

俺もぐびっ。

お？ ……ちゃんとぶどうっぱい。

酸味と甘さがしっかり天然していて、ちょっと酸っぱいけど市販

の甘ったるーいやツよりは好きだな。時々ぶどうのタネとか皮が舌にひっかかってくるのが、いかにも自家製ってカンジでよろしい。そういや、田舎のじいちゃんが秋になると山ぶどうを採ってきて作ってたっけ。……あれは果実酒か。

「あら。とても美味しい！」

葵さんもイケるようだ。

「うまーい！ 海ぶどうジュースって、美味しいんですねえ」

いや、海ぶどうじゃないよ、ドルファちゃんってば。

「達郎さま、とっても美味しいですね！ これなら、私も飲めますわ」

ナーちゃんからもG.Oサイン。

「おオ、良かった。あと二、三本、おっちゃんからもらってやるかなア」

いやいや、おっちゃんに無理言わなくていいです。

これで十分ですから。

で、みんなはなんとーなく二杯目へ。

ビンの中身は約半分ほど残っている。

「あーおいしい！ あたし、もう一杯もらってもいいですかあ？」

ドルファちゃん、三杯目へ。

俺も二杯目がほとんどカラになりそうだった。

その時である。

「……………」

一瞬、体全体が「ふわっ」と浮くような感覚に襲われた。で、目の前が軽く霞んだ。

あれれ？

どーかしたかな？ 俺。

と、思っていると

「達郎さまっ……………このお部屋、少し暑くありませんか……………」

ナーちゃんがそんなことを言い出した。

Tシャツの胸元をばさばさとやっている。

『ん。じゃ、扇風機でも……』 立ち上がるつとすると

『いやですわ、達郎さまっ！ そうじゃないんですってば！』

俺を見るナーちゃんの目つきは明らかに「女」だった。

いきなり彼女は着ていたＴシャツをがばつと脱ぎ捨ててハダカになり

『今宵はもう、眠らせませんからお覚悟なさいませ！ 達郎さまっ！』

ベッドに俺を押し倒すなり「ちゅーっ……」

『な、ナーちゃん……ってば……ちよ……』

何の前触れもなくエツチな状況下におかれた俺。だが、記憶はそこでぶつとりと途切れている。情熱きわまるナーちゃんのディープで長いキスで、どうやら酸欠を起こしたらしい。

以下、後日由美さんが教えてくれた模様である。

突然女に豹変したナーちゃんを見て葵さんは目を丸くしていたが「そう、ですよね……。姫様だって女ですもの、愛する男性と夜を共にしたいですよね……」

少し寂しそうにつぶやいた。

片手でグラスを揺さぶって弄んでいる。

「葵……？」

この時点で由美さんは妙な予感がしたらしい。

すると、葵さんはぐつと由美さんの方を向いて

「私だって、人間の姿をしていますし、人魚の血だって受け継いでます！ なのに、なのに、人間の男性と結ばれちゃいけないなんて、おかしいと思いませんか！？ 人魚と人間が結ばれたら、生まれてくる子は絶対に女の子なんですよ！ 陸上で普通に生活だってできるのに……」

ぐわつと迫った。

目がマジ。据わっている。

その迫力に思わず仰け反った由美さんは

「お、落ち着けよ……。不満があるなら、聞いてやるからさア……」
言った途端、隣でケタケタと笑い続けていたドルファちゃんがおもむろに立ち上がり

「そおですよ！ あたしだってイルカの血が混じっていて突然変異で生まれたかも知れないですケドお、ニンゲンのかつこーしてるんですよ！？」
このとーり」彼女は着ていた服を脱いでスツポンポンになると「こおんなにないすばいでえ、かわいーのにい、どーして人間の男性とけっこんしたらダメなんですかあ！？ しんじらぬない！」

「……………」
あれだけ大勢の魚人に囲まれても顔色一つ変えなかった由美さんだったが、これには参ったらしい。

「そうですわ！ 私だって、できることなら姫様とセットで達郎様の元へお嫁に参りたいですわ！」

「あー！ あたしもです！ こおんなにカワイイんだから、達郎様、きつとあたしを愛してくれますって！」

望むような恋愛も結婚も禁じられているフラストレーション大爆発の葵さんとドルファちゃんは彼女を取り囲んでなんじゃかんじゃと不平不満をぶちまけていたが、ふと

「……………そおいえば由美さま？ 男性と結ばれたコト、ありますの？」
「ぶっ！！！」

普段そついう卑猥な話など一言も口にしない葵さんからそんな質問をされた由美さん。

思わずぶどうジュースを嘔き出していた。

「な、なんだよ藪から棒に！ それとこれと、どーいうカンケーが……………」

葵さんの目が鋭く光り

「だって、聞いてみたいじゃありませんか。私達には死ぬまで許されないんですもの、せめて、人間の女性の方のお話を聞くくらい……………」

「そおでえす！ ドルファもきいてみたーい！」

「う……」

曖昧な返答は許さないといった顔で左右から迫られた由美さん。
返答に窮した末、仕方なく

「そ、それは、だな……」

かくかくしかじか。

「……なんだけど、さア」

聞き終わるなり

「いやーっ！ 海の世界の、ばかーっ！！ だいつキライ！！」

タタタタタタタタタタツタタタタタタタタタツ！ タタタタ

タタタタタタ

叫びながら窓から空に向けてオーシャンイーグルを狂ったように
乱射し始めた葵さん。

さんざんに撃ちまくったあと、ぐしゃつとへたり込んで

「私だつて……私だつて……」

しくしくと泣き始めた。

ドルファちゃんはそこにあつた一升瓶を「がしっ！」とつかむや

「……へん！ どーせ、あたし達はいつしよーしんぐるがーるです

よおーだ！」

ぐび、ぐび、ぐび、ぐび……

ラツパ飲みし始めた。

若い女の子が全裸で一升瓶を傾けている姿は、壮絶なものがあつ
たらしい。

すっかり飲み干すと

「ぶはーっ！ ばーか……」

ばてっ

大の字に倒れてしまった。

「……」

なんとも言えないイヤーな、しかし悲しい気持ちになったまま、
由美さんは残っていたぶどうジュースをちびちびと飲んでいるより

なかつたそうなの。

なお、ベッドの上ではエッチな姿のナーちゃんが
『……達郎さま？ あ、眠ってしまったのね！ 眠らせませ
んって、申し上げたのに！ 達郎さまったら！』
気を失ってぶっ倒れている俺に抱きつくくと、自分もまたすやすや
と幸せそうに眠り始めたのだった。

数日後。

由美さんがやってきて一同に謝った。

「いやーすまねエ。おっちゃんがぶどうジュースだと思って寄越し
たビン、果実酒と間違ってたらしいんだよな。どーりでおかしいと
思ったぜ」

「はあ……」

要はぶどうジュースだと思ってみんながぐいぐい飲んだアレは、
なんとアルコールだった。酔ったナーちゃんは姫様から女になり、
葵さんとドルファちゃんは日頃から溜め込んでいた欲求不満をぶち
まけたのであった。俺だけ気絶していたが、まあその方が幸せだっ
たかも知れないな。
が。

俺をはじめ、ナーちゃん、葵さん、ドルファちゃん、いずれも当
夜の記憶がまったく残っていなかった。

しかし。

思わぬなりゆきから、彼女達の本性やホンネを知ってしまった由
美さん。

それ以来、発言とアルコールには気をつけようと思ったそうなの。

その37 ヘッポコ主将の恋

今日もとにかく、暑い！

この夏は一体全体どーなっているんだ！？

雨なんか一滴も降りやしない。

そついやテレビのニュースで水不足になりそうだとか言っていたな。

にしても、このアスファルトの照り返しと叫びたら……蒸し焼きになってしまいそうだよ。

夏休みの課題に必要な本を借りに、朝から街の図書館へと出かけた俺達。

エアコンガンガンの館内はさすがに快適だったが、一步外に出れば灼熱地獄が待ち受けていた。

『ふあ……』

あまりの暑さにナーちゃん、ぐったり。

気がつけばメタリックブルーに輝く彼女の尾ひれや鱗がカサカサに乾いている。

『ほら、水、水！ ちょおっと、ぬるくなってるけどぬるいどころじゃない。』

これだけ熱されれば、もうちょいで沸騰してしまうだろう。

ペットボトルだからどういいう保温性もないのだ。

『はい……ありがとうございます……』

『ぎゅぎゅぎゅ……とても美味しいとはいえないであろうこのぬるーい水を、ナーちゃんはぐいぐい飲んだ。』

どうやら、陸上で生活できるとはいっても、身体が乾燥してはよくないらしい。

だから、彼女と外出するときには常に飲料水を携帯する俺。

しかしながら、たった五百ミリリットルのペットボトルはすでにカラ。

これはいかん。

すぐに調達しなくてはならない。

辺りを見回せば、幸いなことにすぐ目の前にコンビニ。

俺はナーちゃんを抱っこして猛ダッシュし、店内に飛び込んだ。

飲料売り場へ直行して冷蔵棚から二リットルのミネラルウォーターを取り出すと

『ほら、ナーちゃん！ 冷たい水だぞ！』

金も払ってないのに勝手に飲ませてしまった。

やむを得まい。

このコは水を飲まないと死んでしまうんだから。

『わあ！ ありがとうございます、達郎さまっ！』

冷たい「どこだか山の天然水」を、美味しそうにラップ飲みしているナーちゃん。

瞬く間に、二リットルはカラになった。

『もう一本、飲む？』

『はいっ！』

なんか、居酒屋のサラリーマンみたいだな。

「あ、あの……」

さすがに店員さんに声をかけられてしまった。

「……はい、これ！ あと、二本くらいもらいますから！」

ぴっと千円札を差し出した俺。

金さえ払えば、さすがにそれ以上何も言われはしなかった。

結局三本、計六リットルもの水を息もつかずに飲み干したナーち

ゃんは

『ありがとうございます、達郎さまっ！ 私、元気になりました！』
嬉しそうにぴちぴちと跳ねている。

念のためになんたら山の水をもう数本とロックアイスを購入し、俺達はコンビニを出ようとした。

「ありがとうございます」

ウィーン……

自動ドアが開き、一步外に出ようとすると、そこには人影がぶつかりそうになったので

「あ、すみませ」

「……お！ おいつ！ 海藤じゃないか！ 探していたぞ！」
ちっ。

妙なところでイヤーなヤツに会っちまった。

ヘッポコ軟式野球部主将、清水先輩。

三十分後。

俺達はファミレスにいた。

ナーちゃんは相変わらずアル中ならぬ水中のようにでっかいペットボトルを抱っこしながらぐびぐびとやっている。

ほとんど氷しか入っていないアイスコーヒーをストローでぐるぐる回しまくっている俺。

卓を挟んだ向かい側では、清水先輩が熱弁中。

俺はてつきり、ヘッポコ軟式野球部をやめたことについてぐちぐち言われるものだと思っていた。

が。

どうもそういうコトではないらしい。

「かいどお！ お前、知っていたんじゃないのか!？」

ばしーん！

着席するなり、清水先輩は叫びながら卓をバシバシと叩き始めた。水とおしぼりを運んできたかわいらしい店員さんがびっくりしてフリーズしている。

「あ、す、すみません……」

なんで俺が謝らなくちゃならないんだ。

周りにいるおばちゃんグループとかカップルがこっち見てるし。

店員のおねえちゃんにアイスコーヒーとチョコバナナサンデー特大サイズ（清水先輩はなぜかそれを選びやった!）、さらにグラ

又に氷を頼んだあと

「……何がっすか？ 八月の大会で近工と当たったことですか？」

「ちがーうっ！」

「ばーん！」

叩くな叩くな。テールが割れたらどーするんだ。

さすがにこのやかましさはありえないと思ったのか、ナーちゃんが困った顔で清水先輩を見た。

このコの「そんなのイヤですう」「フェイスを向けられて心が動かない男はこの世に一人としない。うるうるした瞳が五つ星キュートなのだ。」

「あ……っ、ごめん……」

途端に畏まった清水先輩。よろしい。

が、ヤツはそのままうつむいて沈黙してしまった。

喋りたくなければ聞かないまでである。俺は知らん振りしたまま、運ばれてきた氷に水をだばだばと注ぎ、ナーちゃんに飲ませてあげていると

「……海藤、お前が退部した直後のことだ」

上目遣いになって清水先輩が口を開いた。

「はあ。この間っすね」

やる気ゼロ感剥き出しに返事をした俺。

すると、いきなり清水先輩は「がばっ」と身を乗り出してきて

「その後だよ、その後！ 何が起こったと思う！？」

さあ？

もしかして、試合で一点も取れなくなりましたか？

さもなければ、他に誰かがやめて九人揃わなくなったとか。

「水瀬だよ！ 水瀬めぐみ！ 我が野球部のマネージャーでありマスコットでありセクシーエンジェルでもある水瀬めぐみが突然ヤメたんだ！」

ああ、そのことですか。

で？

「わかるか、かいどお！ これは我が部にとって最大の痛手なんだ！ 主砲であるお前がやめたことより おい、どこへ行く？」
「……じゃ、さいなら」

あー、貴重な時間を損した。

何かと思えば、めぐみがやめたグチかよ。

俺という主砲を失ったことへの悲しみを語るならまだしも、セクシーマスコットに去られた悔恨を俺にぶつけてどーする。

このアホ先輩に言っても仕方がないが めぐみがヘッポコ野球部に所属していた理由は、俺がやめたことで消滅している。あんたが今さら咆えたところで、彼女は戻らねえよ。せめてあんたが主砲かエースだったらまだしもねえ……。

ってか、あれは見てくれ以上にいい女だったし。

正直 あいつが万が一「清水先輩ってステキ！」とか認めたらせよ、あまりにももつたいなさ過ぎる。トランプとコイコイだけが特技のヘッポコプレイヤーごときと付き合わなかったって、他にいい男は山ほどいると思う。

席を立ちかけると、急にヤツは慌てて

「ま、ま、待て！ まずは、落ち着いて話を聞け！ お前の分くらい、おごつてやるから！ な！」すがりついてきた。

もとよりそのつもりですよ。

何が悲しくて、あんたのグチを聞かされた挙げ句に金を払わにやならんのだ？

それから三十分間。

清水先輩は延々と「水瀬めぐみがどれだけいい女なのか」について語り続けた。

が、話の九割以上は「彼女の格好は露出が多い」というカテゴリーに分類されているとって過言ではない。

スカートが短いだの、胸元がどうの学祭のバニーがああだこうだ。退屈すぎて思わずナーちゃんと一緒に居眠りするところだった。

そんなに女の子の露出が見たければ、今すぐ海水浴でも行けばいい

いでしょーが。

話がどうでもよすぎていい加減にイラッとしてきた頃、急に清水先輩は居住まいを正し

「……と、言いつつ、やっぱり俺は、彼女を諦めきれないんだ」

めぐみのミニスカートが？ それともバニー姿が？

よほどツツこんでやるうかと思っただが、ヤツの眼差しはかつてないくらい真剣だった。

「俺は、俺は……水瀬めぐみが、好きだったんだ。だから、なんて言うか、その……」

最初からそう言えばいいものを。

なんだって彼女の身体的特徴ばかり長すぎる前フリで語るんだよ。だるさ全開ウザさ百%な態度をとっていた俺は、ここでやっと姿勢を改め

「……で？ 気持ちを伝えたい、と？」

清水先輩は顔を赤くして

「ま、そ、そう……いうことになるのかな？ うん、そうだな、うん」

一人で勝手に何度も頷いている。

「じゃあ、そうするまでじゃないですか。何をためらうことやありますか？」

そう答えた俺の認識には、重大な一点が欠落していたらしい。

「し、しかしだな、俺は……」清水先輩は悲しそうに「水瀬めぐみのケータイもメアドも、知らんだ。だから、どうすることも……」

あっちゃー！

接点が多かった割には、意外と抜けていたんですねえ。

幸い、俺は何かの折に彼女と交換していた。

だから、清水先輩に教えてやるうかと思っただが……それはそれで、めぐみの許可がいる。黙って教えたら個人情報の漏洩じゃないか。

「じゃあないなあ……」

俺はケータイを取り出すと「めぐみに、清水先輩にメアド教えて

いいか訊いてみますわ。黙って教えるワケにはいかないんで」
すると、清水先輩はギリリと目を光らせて

「な、なにっ!?! 海藤、お前、水瀬めぐみのメアドを知っているのか!?!」

「知ってますよ、交換したもので。……ちょっと待っててください。今、確認を」

俺がめぐみにメールを打っている前で、清水先輩は

「うおーっ! なんて、うらやましいんだあっ!」

一人悶絶している。

恥かしいからやめてくれい。

五分後。

ブルルルルと俺のケータイにメールの着信があった。

水瀬めぐみ。

返信をくれたようだ。

どれどれ

『やつほー! たっつーげんきー? 夏休みだねー!』

おお。元気そうで良かった。

『宿題多すぎだよー(怒) 今度いつしよにやるーよー! たっつーのカワイイ人魚のカノジヨにもあいたいし(はーと)』

そーかそーか。

そーいうコトなら、な。

そのカノジヨは今、エアコンの効いたファミレスですやすやとお休み中ですけどね。

『で、なに? 清水先輩が? アタシのメアド知りたい?』
肝心なのはここだ。

めぐみの返事は

『ダメ!!! ぜったいやダ!!! ありえない!!!』
ははは。

たった三文にビックリマークが六つもついてるよ。

こりゃあ、とりつくシマなんかありませんな。

「どっ、どっだった……？」

清水先輩の顔はえらく緊張している。

俺はぱたとケータイを閉じ、ふっつと溜息を一つ。「……………」
「傷様」

「え……？　じゃ、じゃあ……ダメ、なの……？」

そのように、申し上げたつもりかと。

こっくりと一度、頷いて見せると

「……………んノーツ！！　そんなアーっ！！」

両腕でアタマを抱えて悶絶し始めた清水先輩。

どっかの動物園にいるクマみたいだな。

「じゃ。そーいうコトで」

じたばたしているヤツをほっというて、俺はさっさとファミレスを後にした。

「……………ふあ？　達郎さま？　あの方はひどく悲しそうでしたけど。

よろしいのですか？」

「ああ、ほっとけ。そのうち治るさ」

教えてやった方が良かったのだろうか。

誰かの愛を得たければ、必要なのは捨て身の行動だけである。

上手いことを言ったな、俺。

ま、今のヤツには無理だろうケド。

チョコバナナサンデー特大サイズのヤケ食いでもしてやがれ。

その38 召しませ山の幸（一日目）

『わあ！ 山というのは、とても清らかなところなのですね、達郎さまっ！』

純白なノースリーブのワンピースをまとい、つばが薄くて大きい帽子をかぶっているナーちゃんは、清楚な少女そのもの。まあ、こんな格好をしなくとも彼女はフツーに清楚なお姫様である。

『……ああ、そうだな』

俺の住む近海の街から電車に乗ること二時間半。

車窓から海が消えて久しい。

ビルの群れはやがて住宅街へ、住宅街は畑へ、そして畑の景色は森や山へと変化していく。

山というところが物珍しい（当たり前のことだが）ナーちゃんは、ずっと飽きることなく窓の外を眺め続けている。そもそも、電車という乗り物自体が初めてなのだから、街を出る時から活き活きとしていたのだけでも。

いかにも楽しそうな彼女を抱っこしていると、俺もまたどこか心の奥底がわくわくとなってくるようだ。

『えー、ご乗車お疲れ様でした。間もなく、終点山北、山北です。お忘れ物のございませんよう、身の回りをお確かめください』

終点への到着を告げる車内放送が流れた。

電車はゆるゆると速度を落とし、がたごとと揺れながらポイントを通過して行く。

俺は足元に置いたでかいスポーツバッグのバンドを握ると

『さ、降りるよ、ナーちゃん。バスに乗り換えるからね』

『はいっ、達郎さまっ！』

にっこりして俺の首に抱きついたナーちゃん。

きつと、着いたらびっくりされるかも知れない。

こんなに美しくてカワイくて、そして人魚な女の子を連れていっ

たりしたら。しかも彼女は俺の 奥さんになる女性。

婚前旅行かね。

それも悪くない。

夏休みに入って一週間。

俺はナーちゃんを連れ、山奥にあるじいちゃんの家へと向かって
いる。

「お、お、お、お、おじいさん！ た、たつ、たつ、達郎ちゃんが
！」

「……あア」

案の定、出迎えてくれたばあちゃんは玄関先で腰を抜かしかけた。
基本的に表情の変化が少ないじいちゃんは、同じ面つきのままで
いる。

山北の駅からバスに乗り換え、さらに一時間。

ようやくたどり着いたその村は、四方を山に囲まれていて、ジジ
イとババアしか住んでいない農家オンリーな地区である。こういう
土地を買い占めて開発しようとか考えるアホタレな業者はさすがに
いないらしく、俺が生まれて初めてやってきた頃と景色はほとんど
変わっていない。住民の数は多少減ったらしいが、主な年寄りは今
存しているというから、まったくもって長生きな土地であるといえ
るだろう。

「たつ、た、た、た、達郎ちゃん！ そ、そ、その、その女性の方
は……？」

「初めまして、達郎さまのお爺さま、お婆さま！ 私はブルーフィ
ツシュ共和国から参りましたナタルシアと申します。達郎さまの妻
でございます！ ……あ！ 今はまだ婚約者でしょうか？ 婚姻の
儀式の日程はまだ決まっておりますけれども、その節はぜひ、太
平洋で」

ゆったりとお辞儀をしてにっこり。拳措振舞、さすがは姫様だ。

俺は「ブルーフィッシュ云々」を省略しつつ、通訳してやった。
ついでに「婚姻の」「以下も省略。ハナシがデカすぎだよ。
が、ばあちゃんがビビる理由はそついうコトではないらしい。
ぴちっ

ワンピースのひらひらなスカートの下で跳ねている、青く輝く鱗
と尾ひれ。

こつたら山奥に長年住んでりゃ、サカナなんてなかなか……じゃ
なくって、人魚なんて見るワケないもんな、フツ！。

「あー……ばあちゃんさあ、このコも一緒に来たから、その……よ
ろしく」

がくがく、がくがく。

壊れたロボットみたいに首を縦に振りまくっているばあちゃんとは
真逆に、じいちゃんは小さく笑みを見せて「……ああ。よく、き
たさな」

ミーン、ミーン、ミーン

開け放たれた窓や庭の方からセミの超合唱が届いてきて止むこと
がない。山という山がセミの声で振動しているようだ。

三分後。

床の間があるタタミの部屋で、俺達とじいちゃんは卓をはさんで
向かい合っていた。

ばあちゃんはどうと、ひっきりなしに台所とこつちを往復しては

「た、たっ、達郎ちゃん。こっ、これ、これ、ね！ お、奥さんに、

たっ、食べてもらいなさい！ ねっ！」

「ああ、ありがとう、ばあちゃん」

つつてもねえ。

折角だけど、ナーちゃんは人魚だから食べねえんだわ。

とかいう以前にさあ……なんだよ、オイ。

テーブル中とこ狭しと並べられまくっている食い物の数々。

一体全体、誰が食うのだろう？

茹で上げたとうもろこしに始まり、トマトにきゅうりに枝豆にぶどうにその他フルーツ。のみならず、お菓子にまんじゅうに煮物に天ぷらやら諸々、枚挙に暇なし。それでもまだ何か出そうというのか、ばあちゃんはまた台所へと行きかけた。

「あ、あのさ、ばあちゃん」

「うえ？ なんだね、達郎ちゃん？」

「水、もらえるかな？ 水」

「あ、ああ、水ね。わかったよ。水ね、水、水……」

自分の脳みそにインプットするかのようにつぶつと繰り返しながら、ばあちゃんはいなくなった。

その背中を眺めていたナーちゃん、ニコニコしながら

『とてもいい方達ですね、達郎さまのお爺さまとお婆さま。きつと、ドルファさんがいたらとつても喜ぶでしょうね』

確かに、喜び勇んで全部食ってしまっただろうな。

まあ、こういうものなんだよ、人間の年寄りというのは。

孫をみれば、目先が見えなくなってしまふものらしい。その表現のひとつが、この膨大な量の食い物ということになるんだろうけど。じいちゃんは落ちていてたばこをぷかーっとしながら外を見ている。

今時珍しく、縁側的なスペースがあつて、風鈴が下がっている。

吹き込んでくる微風が時々「ちりりん」と心地よい音を奏でた。

さて、そろそろこの老夫婦が何者かに触れねばなるまい。

ぶつちやけ、幸子の両親である。じいちゃんは川上流蔵、ばあちゃんはヌマという。

そう、幸子はセミがうるさい山奥のこの村で生まれ育った。

俺は毎年一年に何回は連れられて来ていたが、中学生くらいからは一人でくるようになっていた。じいちゃんもばあちゃんも可愛がってくれるし、一方で親父・舟一の仕事が忙しく、夏休みになったからといってなかなか来るタイミングがとれなくなっただからだ。

ここに来たからといって、特に何かすることがあるワケではない。ただ、この溢れかえっている爽やかな天然の緑を目にしていれば、どんなにやべえ気持ちになっても自然と落ち着くってもので。あと、小学校の頃なんかは、自由研究とか図画工作の宿題をやるのに困らなかつたな。

昔はそういう目的もあつてやってきていたものだが、いつの間にもやら自由研究という課題は俺と無縁になっていき、それと同時にただゴロゴロするためだけにくるようになったような気がせぬでもない。

穏やかな面つきで思い出したようにタバコの煙を吐き出しているじいちゃん。

「……」

俺は黙っている。

今まではのんびりするただけに遊びに来ていたが、今回ばかりはノープランじゃない。

とある目的をもって、この山奥まで出向いてきた。ぐりぐりっ

タバコを吸い終えた流蔵、灰皿でもみ消している。

ちりり、と風鈴が小さくもクリアな音色を部屋に響かせた。

「……じいちゃん」

頃を見計らったように、俺は口を開いた。

「ん？ どーした？」

まったりした口調で反応したじいちゃん。

俺はちらとナーちゃんの顔に視線を送りつつ、すぐじいちゃんの方を見て

「頼みがある。どうか、アレを俺に教えて欲しいんだ」

「アレか……」

じいちゃんはふわっと笑って

「……四、五日、泊まっていけ。思い出すのに、少し時間がかかる」

その39 召しませ山の幸（二日目）

とんでもない山奥だから、街にいれば普通に聞こえてくる筈の喧騒なんて何一つない。

陽が落ちれば、セミ達も合唱を翌朝まで控えてくれる。そういう意味では、自然というものはなかなか上手くできているものだ。夜の夜中までミンミンとうるさかったら、人間はとても生活できないに違いない。ってか、キレルよな。

年寄り二人暮らしにはでかすぎるんでないかというサイズの浴槽に浸かりつつ、そんなことを思っていると

『達郎さま？ お爺さまと、真剣に何をお話しされていたのですか？』

ナーちゃんが尋ねてきた。

こうして一緒に風呂に入るのも、最初はえらい照れた。

なんたって、彼女のナイスなボディが絶えず視界に入ってくるだけじゃなくて、直に触れてくるのだから。下半身は尾ひれだからいいとしても、上半身は普通に人間のそれ。しかも普通の人間以上に「たゆん」としてすごいボリュームなのだ。ナーちゃんは一向に気にせずくつついてくるのだが、若く健康な男子なら、興味はあっても気恥かしく思うのが所定の心情というものだろう。

『……知りたい？』

『はいっ』

俺はほんのり色づいたナーちゃんの顔を眺めていたが

『帰る頃には、わかるよ。きつと』

『まあ。今は、お話できないことなのですね？』

ちよつと「ぶっ」とふくれたような、甘えたような表情をしたナーちゃん。

そうだな。

でも、端的に言えば、今回の俺の目的は ナーちゃんを守るた

めなんだ。

なんとなく俺の気持ちの在り処がわかるのか、彼女はそれ以上ツツこんでこなかった。

ただ、しきりに「ごろにゃん」って甘えたがっているけれども。

風呂から上がると、ばあちゃんが畑から採ったばかりのスイカを出してくれた。

風鈴、蚊取り線香、スイカに団扇^{うちわ}。

古きよき日本の夏の夜は、現代にもこうしてちゃんと残っている。折り目正しい葵さんなんか、すごく喜ぶかもしれない。彼女は今、ドルファちゃんとともに留守番しているけれども。

スイカを「がぶっ」とやった俺を、じーっと見つめているナーちゃん。
ん？

そうか。

スイカはほとんど水分みたいなモンだ。ナーちゃんが口にしても問題なさそうだな。

『……食べる？ 水っぽいから、ナーちゃんも食べられると思うケ』

『ト』

『じゃあ、達郎さま！ 一口、かじっていただけませんか……？』

かじれ？ はいはい。

しゃくっ

『かじったけ……ど……？』

俺がかじって口にふくみかけたスイカ片を、ナーちゃんは口移しにもっていつてしまった。

『スイカって、甘いですねえ！ 冷たくて、とっても美味しい！』

『そこはあんまり甘くないんだぞ？ どうせなら、この真ん中あたりが……』

『達郎さまったら！ ほっぺにタネがついていますわ！』

そんな感じで、一つのスイカを仲良く食っている俺達。

じいちゃんのもとより、ばあちゃんも慣れてきたのか、にこにこ

しながら見ている。

「おとーさん。孫が楽しみですねえ」

「……あア」

孫？

孫、ねえ……。

翌朝。

早くに起床すると、朝もやの中をじいちゃんについて畑へ出た。

ゆっくり寝ていなさいとは言われたものの、この山の中じゃバツティングセンターもないし、せめて何かして身体を動かしたかった。何も植わっていない、草ボーボの畑のところへ来ると

「秋時きの畑だ。これおこすのなら、身体動かすのに丁度いいんでねエか？ ムリしなくていいから、達郎の調子でやればいい」

「わかった」

クワ一つ借りた俺は、黙々と作業を始めた。

春先から手が入っていない畑は表面の土が固くなっていて、なかなかの重労働。

本当なら機械を借りて一気にやってしまつらしい。これは年寄りの人力じゃあムリだ。

俺がざつくざつくとクワを振るっている様子を、あぜ道に座って眺めているナーちゃん。

海の世界には畑なんかから、人間の世界独特の営みを見ていと楽しいようだ。視界に入る位置とはいえ、いきなり襲われたりしないか心配してみたが、こんなところまでリーネの手先がやってきたりはしないだろうと思ひ返した。現れたとしたら、逆に褒めてやってもいいくらいだ。即刻、畑の肥料にしてくれるけどさ。

「ふんっ！ ふんっ！ くくっ……よっ！ ふんっ！」

幾らバツティングや自主トレで鍛えていたとはいっても、農作業となるとまた別らしく、しばらく続けていると手の平やら腕、腰に

響いてきた。

(うーむ。これはどうも、俺の動きに無駄があるらしいな)

頭の中でぶつぶつと考えながら、試行錯誤している俺。

一振り一振りのスイング(?)を手直ししながらやっていくと、なかなか進むものじゃない。

そうして朝もやが薄れ、少しずつ太陽の光りが一帯を照らし始めた頃。

「おーい、達郎や！ 朝メシに戻るべー！」
じいちゃんの呼ぶ声がした。

畑から採ったばかりの野菜を中心とした朝メシは、格別のものだった。

消費期限切れや腐りかけの食材を堂々と使つてのける幸子の料理とは天地雲泥の差がある。

朝メシを食つて一息つくくと、また俺はナーちゃんを連れてさっきの畑へ出た。

今日も暑い。

今度はナーちゃん、日傘つき。

西洋絵画でよくある貴婦人みたいになっている。

彼女に見守られながら、土と格闘し続けている俺。

固い大地は、意外と思ひ通りにはなつてくれないものだ。

汗だくになつてクワを振り下ろしていると、脳裏にいろんな光景が浮かび上がってくる。

初めてナーちゃんと出会った日のこと、マッチョ鯛や桜エビに襲われたこと、ウツボにさらわれた葵さんを助けに行った後の別れのシーン、そして由美さんやマサと共にセイゾーやリーネの手先・ポイズン達と乱闘している場面 などなど。

どうにかなる、はやがて「どうにもならない」に変わり、その「どうにもならない」は「強くならなきゃ」へとグレードアップした。

強くなることで仲間の存在を得ることができ、仲間の力を借りて悪い連中をぶちのめしてきた。悪知恵もたくさん駆使したけどね。

でも、まだ何か足りないような気がする。

由美さんやマサ、葵さんにドルフアちゃんがいればいいってものじゃあない。

助けてもらった分、今度は俺も彼等の力になりたい。

そうしなきゃ、とかいう義務とか責任じゃなくって「なりたい」っていう、望み。

どうすればいいんだろう？

ようわからん。

もっと身体を鍛えるとか、今度はムエタイを習いにいくとか、そういうコトではないような気がする。力で力を押し返すのは限界がある。例えば、セイゾーみたいなブヨデカ野郎と一対一で戦ったところで、物理的に対抗できないのは明らかだ。

敵ですら「……いや、ムリ！ お前とは戦えんわ！」ってなるよ。うな、これはつまり「ハート」の部分のあり方かも知れない。ジンベエさんみたいなごついヤツになって「戦い、無益」とか言うなら説得力あるのだろうけど。

俺はいつたい、ここから何を目指せばいいのか。

そういう自問自答を繰り返しているうちに、ざっと端から端まで掘り返し終わっていた。

「……？」

ふと気がつけば、いつやってきたのか、ナーちゃんの傍にじいちゃんがいる。

「達郎！ 今日は暑いから、それくらいにしとけ！ 倒れちまうぞ

」！

「ん。わかった」

Tシャツは汗でびっしょり濡れていた。

無意識のうちに、俺は一人でぶつぶつと呟くようになっていたらしい。

『達郎さま……？　どうかなさいましたか？』

ナーちゃんの心配そうな声にハツとしたりした。

そんな俺を、じいちゃんはじつと見ていたが

「……達郎。明日は天女の滝でも行つてこいや。少しは、気持ちが悪く着くべ」

翌日の午後、俺はナーちゃんを連れて少し山を登っていったところにある滝へ行つてみた。

この辺りの人たちはみんな「天女の滝」と呼んでいる。

俺も小さい頃は親とかじいちゃんに何度か連れられてきたことがあるが、一度一人できたらこっぴどく叱られた。滝つぼに落っこちて溺れたらどうするんだ、ということだ。

ただだばと流れ落ちる滝が豪快で、何よりも涼しい。

おお、これがマイナスイオンとかいうものか。俺の心と身体を癒してくれ。

火照ったカラダと脳みそに冷氣とマイナスイオンを吸収しようと勝手にイメージしていると

ばしゃばしゃ　音がした。

「……あれ？」

見れば、ナーちゃんが服を脱ぎ捨てて滝つぼで泳いでいた。

やっぱり、清流とみれば条件反射で泳ぎたくなってしまうのだから。

やたらと涼しそうでいいのだが、なんか妙なエロさを感じられるのは気のせいでもないようだ。ハダカで泳がれると、な。

ま、人魚だから溺れる心配はないだろうし、こんな山奥まで誰も来ないに決まっている。

水面に浮かび上がってきては俺の方に手を振り、また潜つたりを繰り返しているナーちゃん。たまにはどこかで泳がせてあげた方がいいのだろうか？

俺も靴を脱いでジーパンの裾をめくり、すね下だけ水に浸かってぼんやりとしていた。

ドドドド、という滝の音に混じって、鳥のさえずりが聞こえてくる。

周囲は森に囲まれていて、どういつ人工的なニオイもない。

ちゅん、ちゅちゅん……

鳥の声を聞いているうちに、なんだか眠気がしてきた。

そついや今日はとんでもなく早起きしているんだっけ。目をつむってうとうとし始めた俺。

すると、背後から

「涼しそうですね、あのコ」女性の声か！

！？

ぎよつとして一発で眠気が吹き飛んだ。

近くには誰もいないと思っていたのに。

振り返り見ると、確かに一人の女性が立っていた。

年の頃は葵さん、あるいは由美さんくらい。つまり、俺よか年上ではあるが、若い。

腰まで届く長い黒髪を垂らし、皮膚は透けるように白というか青白い。一瞬、幽霊か雪女かと思ったが、温和そうな顔立ちをしていてほんわかと微笑んでいる様子を見れば、悪い人ではなさそうである。

ただし、格好がタダ者じゃない。

ほっそりとした体に、一本のながーい布のようなものを巻きつけている。胸と腰のあたりだけを隠していて、あとはだらーり。

……以上。

週刊誌のグラビア的にエッチな状態ではあるものの、女性の存在感があんまりにも透明すぎているから、どうもそついうしつこさが感じられない。例えるなら、ファッションショーに出てくる外人のモデルさんに近いかも知れない。肉体に性的な自己主張をちりばめていないから、露出は大きいがごく自然な感じに留まっている。

それはともかく、見てくれからしてフツーの人間だとは思われ
ない。

「……どちら様で？」

胡乱臭げにそう訊いた俺に、女性はちよつと苦笑して

「あら、そんな力才をしなくても。私は怪しいものではありません
わ。ここに棲んでいる者ですもの、たまには姿を見せてもよろしい
んじゃないくて？」

住んでいる、じゃなくて棲んでいる？

やっぱり人間じゃあない。

それに「たまには」って……。

「ふーん……じゃあ、さしづめ『山の神』とか？」

「ふふ。私、そこまで偉くはありませんわ」

彼女は静かに近寄ってくる、俺の隣に腰を下ろした。

「私は滝の女と書いてたきめ、といます。もつとも」

ゆつたりと笑いながら

「人間の皆さんがそう呼ぶので、何となくそう思っているだけです
けど。本当は何というのでしょうか？ ふふ、自分でもよくわかりま
せん」

その40 召ませ山の幸(三日目)

ひよいと潜ったナーちゃんは、なかなか水面に顔を出さない。

ずどどどと激しく流れ落ちる水の動きをぼんやりと見ている俺。

「……彼女は海の方、でしょう？ 人魚ですものね？」

少しの間黙っていた滝女さん、不意にそんなことを訊いてきた。

「ああ、俺が釣ってしまったね……。すぐ海に返そうとしたんだけど彼女、帰ろうとしなくて。 なんだかんだで、一緒にいるようになってたんだ」

「でしょうね。……なんとなくわかりますわ、彼女の気持ち。出会って間もなかったにせよ、あなたに強く魅かれてしまったのですよ」

「なんだか、まるで傍目から何もかも見ていたような言い草じゃないか。」

「どうしてそんなコトがわかるんだ？」

「内心でいぶかしんでいる俺。」

すると、滝女さんはその答えを示すように

「海の世界、山の世界に生きる者達にとって、目の前にいる人間の方がどういう方なのか、うすうすとわかるものなのです。 あのコはただ単純にあなたが若くて健康な男性だったからではなく、強くて優しい心をもった方なのだと、出会った瞬間に悟ったのですわ。もし、仮に私があのコだったとしても「ふわりと微笑んで「同じように、あなたを慕ったことでしょうか」」

海の世界と同じように、山の世界も存在するのか。

まあ、おかしくはないよな。

「するつてえと、今海の世界で起こっているような勢力争いの揉め事が、山の世界でも起こりうるのだろうか。」

それはともかく。

「この不思議な感覚は一体、なんなのだろうか？」

滝女さんには、俺の過去も心の中も、何もかもがスケルトンで見えているような感じがする。

といて、覗き見られているとかいうイヤな感覚なんかじゃない。まるで、なにもかもわかってくれて、かつ受け止めてくれてい
るような。

「じゃあ……滝女さんは、俺がそういうヤツだって思ったから、俺の前に現れたの？」

「ええ、その通りです。それに……」

滝女さんは悪戯っぽい笑みを浮かべた。「ずっと昔、まだ若かった頃のあなたのお爺さんにも会ったことがあるのです」

「俺の……じいちゃんに!？」

これには驚いた。

そんな話は今まで一度も聞いたことがないって。

顔だけでびっくりしていると、滝女さんはそんな俺が可笑しかったらしく「ふっ」と笑った。

でも、すぐ真面目に戻って

「あなたのお爺さんは、心が真っ直ぐで正しい人間の方ですわ。だから、山の民の姿が見えたのでしょうかね。転んで怪我を負った山の民の子供を、この滝まで連れてきて、手当てしてあげていたのです。とても珍しい人間の方がきたものだと思って私、ついつい姿を見せ
てしまいましたの」

「じいちゃん、びっくりしていなかった？」

フツ―はビビるだろ。

山奥を歩いていて、いきなり目の前にこんなセクシー美女とか、いかにも「人間じゃないもん!」的な子供なんかいたら、な。

が、滝女さんはふるふるとゆったり首を横に振った。

「いいえ。現れた私に驚く風でもなくて、それよりもとても悲しそうな顔をしていました。これから戦争へ行かなくてはいけないんだって。でも、自分は人を殺したりなんかしたくないんだって、強い言葉で私に訴えていたのです」

「……」

だいぶ前に、聞いたことがあったのを思い出した。

戦争も末期で敗戦になる少し前、じいちゃんは兵隊に召集された。はるか南方の戦線まで動員され、食べる物も救援もなく、死ぬような思いをしたらしい。どころか、ちよつと油断すれば殺されてしまふようなきわどい状況下で、気が狂いそうになったのだそうだ。幸いなことに、戦争はそこから長くは続かなかつたものの、後で聞けばその地域ではたくさんの方士達が命を落としたのだという。そのことを痛ましく思ったじいちゃんは復員後、先祖代々の墓の隣にもう一つ墓石をつくって異国で倒れた兵士達の供養をしているのだ。

村の人たちはずいぶん変わったことをする、と最初は奇異な目で見たようだが、今ではみんなが交代交代でその墓石の掃除をしたり、花を供えたりしている。

しかし そうだったのか。

じいちゃん、自分が死ぬかもしれないという恐怖と背中合わせになっっているながら、一方で他の人を傷つけたくないって、強く思っていたんだな。

「私は言いました。『あなたには強く正しい心があるのだから、その心はきつと、みんなを幸せにする知恵をも具えているはず。絶対に誰も殺さないんだって強い心を持ってお行きなさい。必ず、その心が素晴らしい知恵を導き出しますよ』と」

「……」

じつと滝女さんの形のいい唇の動きを見つめている俺。

この展開はなんだろう？

まるで、俺が欲している答えをそのまま教えてくれているような強い心は、みんなを幸せにする知恵を具えている。

そうか？

そうなのか？

そういうことなのか？

話はまだ途中だから、最後まで聞かなくちゃツボがわからないけれども。

「それから一年くらい経って、あなたのお爺さんはまたここへやってきました。私を見るなりたった一言『ありがとうございました』って、それだけを言っただけで帰って行きましたわ」

「何も詳しいことは言わずに？」

「ええ、何も。……ただ、とてもいい表情をしていましたね。きっと、それが答えなのでしょうよ」

懐かしそうな遠い目をしつつも、ちよつと愉快そうな滝女さん。

つまり、じいちゃんは戦争へと駆り出されはしたものの、誰も殺さずに戻ってきたのだろう。戦争＝強制的に殺し合いをさせられるという悲惨な状況におかれていながら、じいちゃんはどつやって「不殺」を貫いたのか、俺は不思議に思った。

ただ単純に幸運だったとかいうレベルの話じゃなくって、きつとじいちゃんなりに「何か」をしたのだろう。訊いても教えてくれるかどうかわからないけど、すごく興味がある。

「そっか」

ついつい引き込まれるような感じになって、気がつけばうんうんと頷いていた。

催眠療法みたいだな。

……だが、待て待て！

じいちゃんの話は、それはそれでいいけれども 俺は俺なんだ。俺は俺の答えをつかみとらなくちゃいけないんだよ。

どういう訊き方をしたらいいのかわからない俺は、しばらく頭の中で言葉を選んでいたが

「……滝女さん、だっけ？ さっき、ナーちゃんは俺に優しくして強い心があるから魅かれたんだって、言ったよね？」

「ええ。そのように言いましたわ」

「でも、俺はある時期、彼女を守ることができなかつた。だから、強くなりたいと思って自主トレして、なんとかここまで来たんだ」

俺はぐつと押し込むような視線を滝女さんに向けた。

「でも、まだ、何かが足りない。このままじゃ、いけない思っている。思っているんだけど、その……何をしたらいいのか、わからないんだ。ただ、ナーちゃんはもちろん、みんなのことを守りたいっていう、気持ちだけはあるんだけど」

「何も足りないものなど、ありませんよ?」

滝女さんから、間髪容れず即答がはね返ってきた。

「はえ?」

九十Kmの変化球を予想していたら、百四十Kmのど真ん中ストリートがきた、みたいな感じ。

見逃しで三振したような顔の俺に、滝女さんは

「あなたはあなたそのままではありませんか」
にっこりと微笑んだ。

「これ以上力など求めてはいけません。かえって彼女が戸惑い、恐れるだけです? あなたはもう気付いているのでしょうか? 力は所詮、力のぶつかり合いしか生まないということに」

はい。

おっしゃる通りです。

できることならもう、レッドバックの連中もポイズンの連中も、ついでに言えば海獣組の奴らだって傷つけたりなんかしたくはない。力でねじ伏せたって、少しもいい気はしない。

「……強いていうなら、力を求めたりせず、あなたに具わっているその強い心を、皆に示していくのです。あなたのお爺さんがやったように。そうすれば、海の世界の者達はあなたに対して敵意を抱いたりすることはなくなるでしょう。むしろ、あなたを慕って、より多くの者達が寄り集まってくることでしょう」

「……」

俺は滝に打たれたあのような顔で、滝女さんを見つめている。

これって……これって……!!

過去に似たようなことがあった気がした。

野球の試合で、俺のデビュー戦。

独り黙々と自主トレに励んでいたものの、きっと俺の実力なんかは大したレベルじゃないと思っていたのに、いきなりホームランをかましてしまったんだよな。三振だけはしたくなかったけど、まさかホームランになるなんて、日本のエネルギー自給率ほど思わなかった。

でも、あの時俺は　ボールが停まって見えた。

知らず知らずのうちに、それだけの力をつけていたんだな。

人は誰でも、自分で自分の評価をしたくなるけれども、案外自分のことなんかちつとも見えていないものだ。

自分で下す自分の重さなんていうものは、重すぎたり軽すぎたりしてしまう。

だから……たくさんの人たちと、一緒にいることが大切なんだ。

たくさんの人達の中にいるから、自分の価値や重みがふわつとナチュラルに理解できるようになる。まあ、ネット相手だけじゃ生きていけないのという意味的に一緒かも知れないけど。結局は直接会っていいこともイヤなこと話し合うから分かり合えるんだ。

「でも、でも、俺は　」
そう。

とはいっても、俺はすでにたくさんの人たちを傷つけてきてしまった。

あの日、勇気をもって傍に来てくれた春香ちゃんを傷つけてしまった俺。

窮地に追い込まれたナーちゃんや葵さんの力になることができなかった俺。

めぐみの気持ちに伝えてやれなかった俺。

そして、力任せにぶっ飛ばしてきた、鯛や桜エビ、ウツボにポイズン等々、海の連中。

やっぱり、それは俺の心が弱かった証拠じゃねえ？

これから先だって、誰かを傷つけてしまわないとも限らない。誰

かを傷つけてしまうということは、自分の心に弱さがあるから。っていうような不安を、めんめんとかつたるい言葉で表現した俺すると

「確かに、過去の一つ一つ、その時のあなたにできなかったことはたくさんあるでしょう。弱い自分だって、思いたくなるのは無理はないかも知れません。でも、そうではないのです。だからこそ、取り返していこうとあがいて、強くなろうと願って努力しているあなたがいるじゃありませんか。これ以上に強いあなたがいると思いませんか？」

「……」

そっか。

過ぎてしまったことは取り戻せないけど、これからのことなら幾らでも変えていける。

そういうことが。

俺の心が強ければ　これからは傷つけることもぶっ飛ばすことも、助けてやれないこともない。みんなで笑って暮らせるようになることが、絶対にできるはず。

「あなたはもう、本当はわかっていると思います。わかっている自分に気がつかなかっただけ。だから……自信をもってやりなさい。絶対に、大丈夫ですから」

「うん……」

頷いて見せた俺。

滝女さんが言ったコトの意味、正直俺はわかりきっていないかもしれない。でも、ここへ来る前よりもずっと大きな何かが間違いなく俺の心の中にあるのがわかる。

自分には何もないって、ただむやみやたらとその先へ先へ求めてばかりじゃいけない。今そこにあるものをきちんと見つめてその価値を大切にすること。そうすれば、自分には何もないんじゃない。なんて実はとてもすげえものを持っていたんだって、気がつけるはず。今の自分を大事にできないと、決して将来の自分を大切になんかで

きない。

俺達人間は決して弱い生き物じゃないんだよね。

自分の中にすごい強さがあるっていう真実からみんな、目を背けているだけ。

ありがとう、滝女さん。

ここにくるまで、とんでもない遠回りをかましてしまったけど、もう、大丈夫。これからいろいろなヤバめな事件が起こったりするだろうけど、負けるコトはないよ。

絶対にみんなを守ってみせるから。

大事な何かをつかめたという充実感が、俺の顔にも現れていたのだろう。

じっとこっちを見つめていた滝女さんは

「……どうやら、何かをつかめたみたいですね？」

ゆっくりと立ち上がった。

「心の強い人間の方に会えるのが、私にとっての楽しみでもあるのですよ。その分だけ、人間の世界が良くなっていくということですからね」

「……」

彼女はすいっと滝つぼにむかって足を踏み出した。

なんと、滝女さんの身体は沈むことなく、アメンボのように

水面に浮かんでいる！

イリユージョンを見たようにびっくりしている俺に

「では、私はそろそろ失礼しますわ。ほんの少しの間でしたけど、あなたに会えて良かったと思います。あなたの妻となる海の方にも、よろしく伝えてくださいね？」

行ってしまおうとした。

慌てて俺は立ち上がり

「たっ、滝女さん……！」

「はい？」

「あ、ありがとう……」ございました」

何をしているのか自分でもよくわからなかったが、がばつと頭を下げていた。

滝女さんはもう一度、にっこりと透き通った美しい笑顔を見せて「こちらこそ。また、お会いしましょうね？」

そういつて彼女は、流れ落ちる滝の飛沫の中へと溶け込むように消えていった。

「……………」

滝女さんが姿を消して間もなく、さんざんに泳ぎ回ったナーちゃんに戻ってきた。

まるで、彼女が戻ってくるタイミングを見計らっていなくなったような感じた。

浅瀬までやってきた彼女は、ぼんやりと佇んでいる俺を見て不思議そうな顔をしている。

『達郎さま……………？　どうか、なさいましたか？』

『いや、なんでも、ないんだ。　気が済むまで泳いだかい？』

『はいっ、ありがとうございます！　美しい水のあるところで泳ぐと、とつてもすつきりするんです。……………勝手に泳ぎまわったりして、ごめんなさい』

『いいんだ。それより、陽が落ちれば山は冷えてくる。身体が冷え

てしまうといけないから、戻ろうか』

『はいっ、達郎さま』

ナーちゃんに服を着せて抱っこし、その場から立ち去ろうとした。陽が傾きかけているようで、辺りはさつきよりも暗くなってきたようだ。

ふと振り返ると、滝のところには滝女さん、それに森のあちこちに山の民が立っていて、俺達を見送ってくれていた。

ありがとっ、滝女さん。それに、山みんな。

俺は絶対、俺ができることをやってみせるから。じいちゃんのようにっ。

さようなら。

またいつの日か、会ってくれるように。
それから　じいちゃんとはあちゃんのコト、よろしく頼みます。

夏のある日、山奥で遭遇した、ほんの僅かな時間の不思議な体験。
しかしそれははつきりくつきりと、確かなカタチとずしりとした
重さをもって俺の心の中に刻まれた。

もう、物理的な力は要らない。

ここから先、大切なのは「心の力」。

滝女さんが気付かせてくれたその力で、このコを守ってあげたい。
山道を下りながら、俺は強く思った。

そのナーちゃんは　久しぶりにのびのび泳いで疲れたのか、俺
にぴったりとくっついたまま幸せそうな顔をしてうとうととしていた。

その41 召しませ山の幸（おあいそ）

『 ご乗車いただきましてありがとうございます。近海岸辺行き
の普通列車です。次は山南、山南に停まります』

俺とナーちゃんは、じいちゃんの家には四泊ばかりしてから帰路に
ついた。

ワケのわからん修行びた自主トレなどこれっぽっちも必要なくな
った俺はその後、ナーちゃんを連れて山里をあちこちと歩き回って
過ごした。畑と山と森しかないけれども、何もないとところが田舎の
いいところだ。ヘンに都会の建物なんか出来てしまつたら、それは
もう田舎とは呼べないじゃないか。

海もいいが、山もいい！

夕方になつて帰れば帰つたで、ばあちゃんが俺達のことを近所の
じつちやばつちやに触れ回っているせいか、しきりと村の人たちが
やってきては

「川上さんとお孫さんとお嫁さんに、これ、食べてもらつてや
とか言つて、ごっそりと色んなものをくれたりした。

「達郎が帰るとき、これみんな持つてつてもらわんとね」
さらりとばあちゃんは言った。

……待てい。

年末のお歳暮状態で部屋の隅に積み上げられている諸々の品々を、
どーやって持ち帰れというんだ？ 気持ちだけはきちんとしてい
くから、モノは適当にどうにかしてくれい。

で、俺達が明日帰るといふ前の日の晩。

何となく集まってきた近所の人たちと、気がつけば大晩餐会にな
っていた。

お誕生席にまつりあげられている俺とナーちゃん。

じいちゃんとはあちゃんははじめ、みんなは酒を酌み交わしながら
「そっかあ。タツのポーズもーとー結婚か。昔はいろいろ悪さば

「つかりしてなあ」

「いやいや、流蔵さんとこのボンズも、こないいいヨメさんもらってエー！ 山北なんかじゃ、こんな美人はおめエ、いないっけよ！」
「やだね、瀬川のとーさんてば。ここにいっぱい美人がいるべ！」
「そりゃかーさん、やっぱり若い方がいいって！ かーさん方もうみんな、枯れちまったべよ」

げらはははは。爆笑の嵐。

にこにこしながら年寄りの宴会を眺めていたナーちゃんは

『達郎さま？ みなさま、とても温かい方達ですね。すごく心がほっとしますわ』

『そうだね。みんな、俺達のことを祝福してくれているんだ』

ありがたいことだ。

多少騒々しくはあったが、楽しい夜は更けていった。

やがてみんな帰って行き、座敷には俺とじいちゃんだけが残っている。
いる。

ばあちゃんは台所で後片付け、ナーちゃんは俺の胸にもたれてやすやと眠っている。

開け放たれた縁側に向かって、タバコの煙を吐き出しているじいちゃん。
少しひんやりとした風。

闇の中から、虫の音が聞こえてくる。

もう少し経って盆が過ぎれば、この山里はあっという間に秋がきて、そして長く寒い冬となる。夏はびっくりするくらい短いのだ。

「……なあ、達郎」

黙っていたじいちゃんが、不意に口を開いた。

「……あれ、教えておいたほうが、いいのか？ 知りたいなら、教えてやるけれども」

ああ、アレね。

俺は微笑して首を横に振り

「いや、いいんだ。必要がなくなったよ」

「そうか。なら、よかつたな」
じいちゃんもふつと笑った。
あれ。

俺とじいちゃんの間で「あれ」と呼んでいるのは、自然の中にあるものを活用した護身のためのワザである。

実は滝女さんと山奥で出会い、戻ってきた俺は初めてじいちゃんから聞いた。

戦争中、激戦地に飛ばされながらもじいちゃんが一人殺すことなく帰ってこれたのは、実は「あれ」のおかげだったのだ。

かといって、何か大げさな仕掛けとかじゃあない。

幾つかの野草を配合して火にくべることで強烈な眠気を催させたりとか、樹木の幹にちよつとした仕掛けを施して位置の感覚を狂わせて知らないうちに元来た方向へ歩かせてしまうとか、そういうワザだ。簡単ではあるけれども効果は抜群で、じいちゃんが幼少の頃近所の年長の悪ガキ達から伝授された奥義らしい。

じいちゃんが行かされたのは南方にある密林地帯だったらしく、ほとんど部隊は全滅の危機に瀕していてみんなは戦うことよりも「生きて帰りたい」という心境になっていた。とてもじゃないが、殺し合いなどやっているような状況ではなかった。

そこでじいちゃんは生き残っている仲間達にあれこれと知恵を授け、ダメもとでトラップを仕掛けるといふ作戦にうって出た。

こういっちゃんだが、子供の悪知恵は単純だが極めて巧妙なものがある。

流蔵部隊の仕掛けたいくつものトラップによって敵国の兵士たちは見事にかく乱され、あるいは戦闘意欲を削がれていき、そのうち上手い具合に終戦の日がやってきた。

じいちゃん達は投降して収容所に連れて行かれ、あれこれと尋問された。みんなはここぞとばかりに得意げにトラップの手の内を明かすと、敵国の兵士たちは感心して

「お前達がいたあそこのエリアを我々はとても恐れていた。誰も怪

我をしたり死んだりしていいのに、戦う意欲だけをなくして戻ってきていたからだ。いったい、何があるのだろうと不思議に思っていたところだ。それにしても、お前達にそれだけのアイデアがあったとは、恐れ入った」

人殺しなどしてないじいちゃん達はあんまりにも堂々としていたから、敵国側でも裁くに裁けなくなったらしい。結局、数ヶ月間土木作業みたいな労働をさせられていたが、早いうちに帰国させてもらえることになったのだった。

帰国間際、敵国の上官が笑いながら言ったという。

「もう、二度とお前達と戦う日が来ないように祈るよ」と。

俺が今までに用いてきたいくつかの悪知恵は、実は昔じいちゃんから直々に伝授されたものだ。

しかし、さらに強力なくつかの「あれ」については、じいちゃんには

「達郎が大きくなって、もし必要ができればその時に教えてやる」とだけ言って、教えてくれなかった。

当時小学生だった俺は「なんで？ 教えてよ！」とせがんだが「……人を傷つけたりしないための技術だが、それでも人を困らせるための技術であることに変わりはない。誰かを困らせないで済むなら、それに越したことはない」

じいちゃんは言った。

今ならわかる。その言葉の意味が。

マサや由美さんと違って俺は「ボコリ合わずして戦闘不能にする」ワザを駆使してきて、さらにそれをレベルアップさせるべく今回ここへやってきた。そして、それを教えてくれと最初の日にじいちゃんに頼んだ。

正直なところ、滝女さんに会いじいちゃんから事の真相を知らされるまでは「あれ」がそんなにも重たい価値をもっていたなんて、夢にも思わなかった。きつと「あれ」を教えてもらえば、俺はこの先襲ってくる海の連中やそいつらと結託した人間達をばったばった

となぎ倒すことも不可能ではないだろう。

でも……必要はなくなった。

滝女さんが教えてくれた、本当の強さってヤツ。

力でもワザでもない。

強い心を示すこと。

殺し合いの戦争中ならそういうキレイごとは通用しないだろうが、今の世の中は殺し合いじゃない。じいちゃん達の苦労があつて平和な世の中になつたんだから、それに相応しいやり方があるってものだ。

大きくて美しい海の世界。

ナーちゃんや葵さん、ジンベエさんやジーナさんみたいに優しく強い心をもつた者達がたくさんいるんだから、人間の俺が強い心を示せば、変えていけないことはないハズ。

だから 「あれ」は要らない。

電車は次第に速度を上げていく。

そろそろ、葵さんやドルファちゃんが寂しがっているらしくて、

電話で

『はやく帰ってきてくださいよお！ ドルファのコト、キラいなんですかあ！？』

続いて電話を代わつた葵さんは

『ごめんなさい、達郎様。ドルファさんがもう、だだをこねていますの。 由美さまやマサさまも毎日いらっしゃっていますわ』

そうか。みんな、待っていてくれてるんだな。

『うん、もうすぐ帰るよ。ナーちゃんも元気だから』

『はい。お待ち申し上げてますわ。どうか、姫様のことをよろしくお願いいたします』

最後までグチめいたことは言わなかったが、それでも葵さんもちよつと寂しいみたいだ。声のトーンでわかった。

これから、帰ります。

たくさんのお土産をもって、ね。

それから 大切なことに気がつけた俺になって。

窓の外を流れていく畑や水田の景色をぼんやりと眺めていると

『……達郎さま』

ナーちゃんが話しかけてきた。

『ん？』

『なんだか、来る前よりもゆったりとされましたね？ どうなさったのですか？』

ほづ。

そんな感じがするかね。

俺は何も言っていないし、普通に振舞っているつもりだったけど。

ま、本当に俺が自分の心の強さに気づけたのかどうか、そいつはこれからわかるだろう。

『……どうも、しないよ。俺は俺のままさ』

笑って見せた。

その42 その心、大事にし鯛

夕方、近海の街に戻ってきた俺達。

駅を出てから家に向かっててくてく歩いていると

ぴょん

突然、何者かが俺達の行く手に立ち塞がった。

「その人間！ それにナタルシア！ ちょーっと待ちやがれ！

秋はたそがれ！」

「……ん？」

そう。

下手くそもいいところなラップもどきが大好きな、赤くてでっかいこの魚人は

「美しいこの背ビレ！ 赤く輝くこのウロコ！ そう！ 俺様こそが『THE・鯛・チョー』さ！ チョーはロングじゃない、スーパ一な方だ！ そのほうが、この俺様にはふさわしいからな！ だろ！？」シャキーン！

こいつ、確かイワシャールと一緒にチョモランマまでぶっ飛ばしたんだよな。

はるばる帰ってきたのか。

ナーちゃんは「あっ！」という顔をしたが、俺は表情を動かさずに黙ってTHE・鯛・チョーを眺めている。

ヤツは「シャキーン！」でポーズをキメたまま、フリーズしている。

二十秒経過。

細いガードレールの上につま先だけで乗っているTHE・鯛・チョー。

さすがに「ぷるぷる」してきたようだ。

「……」

それでも云ともなんとも言わない俺。

やがて

「あ……あ！ ああっ！」

ガードレールから転げ落ちやがった。

ポーズをキメている間、脚に相当な力をこめていたらしく、鯛野郎はすぐには起てないでいる。

ようやくガードレールにつかまりながら立ち上がるとびしっとこちを指差して

「おいっ！ お前ら！ せっかく俺様がポーズをキメてやっているのに！ シカトするとは何事だ！？ 嫉妬するのは愛ゆえだ！ チエキラ！」

YO・YO・YOYO・YO・……

一人で勝手にノッている。

キリマンジャロへ直送するなら今がチャンスだろう。

だが、俺は 自分がサカナになつたかのごとく、無表情無言でいる。

ぶっ飛ばすのは造作もない。

それよか、なぜこいつはここまでラップにこだわるのだろう。

面白いからとことん黙ってみてみようという心境になっている俺。

「YO・YO・YOYO・、YO・YO・……YO……」

ヨーヨーとノった風を装いながらも、鯛野郎はちらちらとこっちを見てくる。

それでも俺達がノーリアクションなものだから、しまいには

「おいっ！ お前ら！」

詰め寄ってきた。

「俺様をぶっ飛ばすならぶっ飛ばす、ラップを聴くなら聴く、はっきりしろよ！ 気になって仕方がねえんだよ！ そうやってリアクション薄いとさあ」

ふーん。

こいつ、覚悟はしていたんだ。

「……おい、THE・鯛・チヨー」

「!?!? おつ、お前……今、俺様のことを、正式名称で呼びやがったな!?!? そんなヤツは初めてだ! 俺様を驚かせやがったな! 図書館行けばそこには本棚! 一家に一台、天井にある、それは神棚!」

なんだ。

今の今まで正式名称で呼ばれたためしなかったのかよ。

ずざつと後退りしているヤツに、俺は

「そんなにラップが得意だっていうなら、最後までやってみろよ。

それから日本アルプスまでお届けしてやるさ」

でっかい目ん玉をさらにでっかく見開いたTHE・鯛・チヨー。

えっ、やっていいの? っていう顔をしている。

「早くしろ」

家では葵さんやドルファちゃんが待っている。

時間ももつたいたので催促すると、THE・鯛・チヨーはえへ

んおほんと何度が咳払いをしてから

「じゃあ、仕方がないな。リクエストにお応えして、リスナーのみ

んなにとびつきりのナンバーをお届けだ!」

誰がリスナーだ。

ツツこみたくなつたが、あえてガマンしよう。

「ツツツツツ、ツクツクツ、ツツツツツ、ツクツクツ……」

通りのど真ん中で、鯛野郎はとびつきりのナンバーとやらを始めた。

道行く人たちが「なんだアレ?」みたいな顔をして見ているが、

あえて俺はナーちゃんを抱っこしたまま、ヤツのラップに耳を傾け

ている。俺が完全に落ち着いているものだから、彼女も静かに成り

行きを見守っている。

正直、鯛野郎のそれはラップでも何でもない。

節をつけた言葉遊びといったところだろう。

こんなものをラジオで流したら苦情が殺到し、聞いている運転中のドライバー達がハンドル操作を誤って日本中で交通事故が多発す

ることは間違いない。なんたら高速は事故のため何十Kmの渋滞、とかいう道路情報が割り込まれるはずだ。

この間までの俺なら、とっくのとうに日本アルプスどころかロッキーマウンテン山脈送りになっていただろう。

ただ

俺を優しく包み込むようなふるさとの街

黄昏の海を見ながら俺は君を待ち

今日は君と食べたい 寿司屋でハマチ

ゆるく流れていく時間 俺はマジ恋の予感 君は遠慮して五カ

一緒に食べようぜウニ 二人幸せになるように

まったくもって意味は不明。

ではあるのだが、どことなくほっとするような詞。

さりげなく前向きな印象を受けるのは、気のせいだろうか。

いや、気のせいではない。

この詞は前向きなだけじゃなくて、すごく優しい。

そしてこの下手くそきわまりなくて、しかし優しいラップはこんな風にシメられていく。

肩で風きって歩きたくなるような

俺に勇気をくれる君 そして仲間達

俺はただの鯛 だけど絆は強い

一心同体でハピネスだぜ絶対 いつかみんなで夢を見たい 請うご期待！

L a L a - L a L a - L a L a

自称「とびっきりのナンバー」を終えたTHE・鯛・チヨ！。

ど、どーすか？ 的な感じでこっちを見ている。

「……………ふむ」

俺はうなずき「正直、ラップかと言われるれば、相当キビしいものがある」

思わぬ酷評を受けたTHE・鯛・チヨーは

「そ、そうか……。そうだよな……」

素直に落ち込みかけた。

待て待て。

話は終わっていない。

「しかしながら」俺は言った。「いい詞じゃないか。それ、お前が自分で考えたのか？」

「えっ……！？」

ヤツの目が「きらーん！」と輝いた。

「とっ、トーゼンだろ！ パクツたりなんかするかよ！ これでも俺は鯛だぜ？ 腐っても鯛なんだ！ それで、その……やっぱり、パーツと元気になるようなヤツの方がいいじゃねエかよ！ だから、俺、一生懸命に考えて」

ははは。

腐っても鯛、か。

こいつらはいくらなりにプライドをもってやっているんだな。いいだろう。

「……わかった。詞がいいんだから、もっと自己主張しろよ。遠慮しながらやるから、良さが伝わってこないんだよ。お前がパーツと聞いているヤツを元気にしたいんなら、そういうソウルでやんなくちや。少し、練習してからまたこい」

「……」

THE・鯛・チヨー、固まっている。

「どうした？ まだ、なんかあるのか？」

「い、いや……お前、俺をアルプスに直送するって言ってたし……」
なんだなんだ。

ぶっ飛ばされるのを待ってやがったのか。

意外に律儀な野郎だな。

「お前な、アルプスでラップの練習するつもりなのか？ エコーはかかるかも知らんが、山相手じゃ遠すぎだろう。アルプスまで行かなくとも、そのへんのカラオケ屋でもいいじゃねエかよ」

「え……今日は、ぶっ飛ばさないの？」

「いいから、帰ってラップの練習しろよ」

そう言っでやると、ヤツは途端にだらだらと大粒の涙を流し

「おっ、お前……はじめて俺のラップを最後まで聞いてくれた！

今まで、誰も聞いてくれなかったっていうのに……！俺、感動

！グレープはぶどう！お前、いいヤツだおお！」感動のあま

り、最後はメチャクチャか。

違うだろうがよ。

「お前、海藤！」ってこなくちゃ……あ、それはどうでもいい？

通りの真ん中で男泣きしているTHE・鯛・チヨーをおいとして、俺は家路を急ぐことにした。葵さんやドルファちゃんが待っているし。

「達郎さま？あのレッドバックの者は、どうなさったのでしょうか？急に泣き出したりして」

成り行きがよくわかっていないナーちゃんが尋ねてきた。

一匹のラッパーを励ました、とか言ってもわからないだろうから「……どんなヤツにだって、好きなことの一つや二つ、あるのさ。

それをしっかりやれって、言っでやったんだ。ぶっ飛ばしてしまっなのはカンタンだけど、それやったらできなくなるから、今日はぶっ飛ばさなかった」

「まあ！レッドバックの者にも優しくなさるなんて、達郎さまはとっても強くなられたのですね！」

へへ。

強くなっちゃいないのかも。

もともと持っている「強い心」を引き出そうって、しているだけ。

なんとなくすっきりした気分になりつつ、俺はナーちゃんと一緒に

に家へと急いだ。

その42 その心、大事にし鯛（後書き）

注）THE・鯛・チヨ一のラップはオリジナルです。

その43 毒も転じて味方になる？

翌朝のこと。

俺は庭に出て日課の素振りをやっていた。野球部はやめたものの、身体が鈍るといけないので素振りだけは続けるようにしている。

「おはようございます、達郎様！」

いつも早起きの葵さん登場。

彼女は毎朝、庭の花に水をやるのが習慣になっている。

「おはよう。ナーちゃんとドルファちゃん、まだ寝てる？」

「ええ。姫様もドルファさんも、朝が苦手みたいなんですよね」

葵さんは苦笑している。

ドルファちゃんはそうでもないが、ナーちゃんはとにかくよく眠る。昼間はほとんど俺に抱っこされているけど、気がついたら「すやすや……」って眠っている。

まあ、しょうがないかもな。

今の今まで、さんざんに苦労していたんだし。その分の疲れを発散すべく眠りまくっているんだろうな。とりあえず、よしとしよう。バットをぶんぶん振り回している俺の傍で、花の一本一本に丁寧に水をやってている葵さん。

「……そうそう、そうでした」

葵さんが振り返った。

「由美さまとマサさまは、達郎様のご都合に合わせてとのことでしたよ？ 伝言を頼まれておりましたの」

俺はバットを下ろして

「りょーかい。じゃ、そうしようかね。今日あたり由美さんが来ると思うから、ナーちゃんとドルファちゃんを連れて行ってきたら？」

「はい。……達郎様は、行かれないのですか？」

「ちよつとね……。男一人一緒じゃあ、恥かしいんだよね」

すると、葵さんはちよつともじもじしながら

「よろしいではありませんか。私、どんなのが似合っているか達郎様のご意見を伺いたいですわ。それに、姫様だって……」

はいはい。

葵さんの頼みとあっちゃ、仕方がないな。

「わかった。じゃ、朝のうちに出かけよう。昼過ぎたら暑くなつて、またナーちゃんがぐったりしちゃうから」

「はい！ では私、姫様とドルファさんを起こしてまいりますわ」
家の中に戻りかけた葵さん。

ふと脚を停め、すつと背中からオーシャンイーグルを抜いた。

その理由は俺にもわかつている。

妙な一団が近づきつつあるようだ。

「達郎様。私が、様子を……」

葵さんが出て行こうとしたが、俺は手で制して

「待った。どうやら、数がいる」

俺達は家の門の脇に身を潜めてあたりの様子をうかがうことにした。

俺の家の前には、住宅街の通りが走っている。

そつと顔を出してみれば 向こう側からやってくるのは、どうやらポイズンの連中らしい。ドジョウみたいなツラをしたゴンズイとか、トゲトゲしいミノカサゴ、それにフグがいる。合計、ざつと五十くらいか。

「……達郎様、ドルファさんを起こしてまいりますようか？」

小声の葵さん。

身を寄せ合うようにしているから、彼女の顔がすぐ間近にある。

「いや、待って。……どうも、ヘンだな」

相変わらず視力のいい俺だから、まだ遠くにいるポイズン達の様子が見える。

これはどうも、俺達を襲いに来たという感じではない。

のろのろぐずぐずしていて、やる気ゼロ感たっぷり。

ってか、ほとんど敗残兵の有様。

なんかどいつもこいつもキズだらけだし、足を引き摺っているのもいる。いったいぜんたい、どうしたっていうんだ？

気になった俺は、奴らがやってくるのを待たずして飛び出していた。

「あつ！ 達郎様っ！」

「おい！ お前ら！」

いきなり目の前に現れた俺の姿を一目見るなり、ポイズンの一団は「きゃーっ！ に、人間だーっ！」

「もうダメだーっ！」

「やめてーっ！ ふぐちりはイヤーっ！ せめて、てんぷらに……」
めいめい悲鳴を上げている。

いちいちうるさいよ。

それにこの間から、そのフグ！

煮られるのだけがダメで、何で刺身と天ぷらはOKなんだ？

「おい、そのミノカサゴ！」

「はっ、はいっ！ み、ミノカサゴでございます。正しくは、ハナ

ミノカサゴですが……」

俺が指したそいつは、堀に張り付くようにしてぶるぶると震えている。

目線の位置まで屈んだ俺は

「……いったい、どうしたっていうんだ？ まずは、話してみるよ」

「へ……？」

それから三十分後。

朝っぱらだというのに、海藤家は大騒ぎになっていた。

「ほれ、終わり！ はい次！」

「よ、よろしくお願いします……」

ここは海の野戦病院か。

二階にある俺の部屋から廊下、階段、玄関、庭、さらに家の周り

を一周する勢いで、ポイズンどもが行列をつくっている。無傷なポイズンは一匹もない。どれもこれも、満身創痍。

俺と葵さん、それに急遽呼ばれてやってきた由美さんがフル稼働で一匹づつキズの手当てに忙しい。

ただし、ドルファちゃんはあれこれ雑用係。彼女はキズの処置とかそういう作業が苦手らしく、最初に彼女から手当てを受けたゴンズイは「しっ、死ぬかも……がくっ」と気絶してしまった。

「あれ？ ゴンズイさん、動かなくなっちゃった」
「可愛らしく「あれ？」じゃないよ。」

包帯を締め上げすぎて、ほとんどハムみたいになっちゃってるし。なにせ、ポイズンどもは五十匹もいる。

救急箱にあった包帯なんかじゃ足らず、仕方がないので古いシーツを割いて代用。俺の背後でナーちゃんが量産している。

「ひっ！ しっ、しみるう！」

「だーっ！ 男がいちいちうっせえんだよ！ シャキツとしねエか！」

「はっ、はい……」

「動くんじゃねエよ！ 巻きずれエンだからよオ！」

バイトの明けで眠気MAXの由美さん、機嫌が激悪い。仕方がないなあ。

「由美さん、これ」

「……お？ ラッキー！ 気が利くなア、タツ！」
ぷしゅっ。

「じゅっじゅっ……」

「あーっ！ やる気出てきた！ あと五本くらい、用意しといてくれ！」

はいはい。冷蔵庫でキンキンに冷やしてありますから。

由美さんの処理速度が格段にアップした。くわえタバコでできばきと片付けていく。

なんで朝からこんなコトになっているのか。

俺がさつき、ハナミノカサゴから聞いた話である。

二週間ばかり前、学校祭の最終日に俺達の襲撃に失敗して全滅したポイズン達。

彼等が大ボス・リーネの元に逃げ帰ると

「今日はまあ、大目に見ましよう。まさか、ナタルシアがあんなに強力な護衛部隊を手なずけているなんて、私としても想定外でしたから。ただし」

冷酷な視線をポイズン達に投げ

「……次はこのような失態、許しませんことよ？ もし次回、私の命令を果たせなかったならばどうなるか、わかってまして？」

「は、はい！ リーネ様！」

幸い、鍋の刑は免れたらしい。
それで昨晩。

彼等は海の世界でもずっと独立を保ち続けている勢力「殻の組織（つまりはホタテにサザエにアワビといった連中らしい）」への襲撃をリーネから命じられた。ところが、奴らはハンパなく硬かった！ ポイズン達のよれよれな攻撃などではびくともせず、しかもシヤコ貝（よく人間が挟まれて溺れ死ぬというあのバカでかいヤツだ）が援軍にやってきたからさあ大変。ポイズン達はバタバタとなぎ倒され、ほうほうの体で逃げ帰った。

が、そんな悲惨な彼等を待っていたのは ずらりと並べられた平底の鍋。

鍋の中では、醤油と砂糖とみりんを混ぜたダシが煮えたぎっている。

「あなた達……私、次の失敗は許さないと、言いましたよね？」

「り、リーネ様っ！ ど、どうか、それだけはお許しを あーっ！」

屈強なシャーク達の手で、ポイズン達は次々とダシの中へと投げ込まれ しかも上からとき卵をまねなくかけられたという。

「ひどい扱いですよ。リーネは俺達を、よりによって『柳川鍋』に

したんですよ？ ドジョウみたいな顔したゴンズイならともかく、ミノカサゴの柳川なんて……」

「そ、それをいうなら私なんかフグですよ！ やっぱり、まずはてっさじゃないですか！ せめて天ぷらがイケるっつのに、何が悲しくてまるごと柳川鍋にされなきゃならんのですか……しくしく」

ドジョウの柳川鍋だって、食うところで食ったら高いんだけどな。まあ、それはさておき、リーネがいかに残虐非道なヤツかはよくわかった。

俺は立ち上がり

「おい、お前ら」

「は、はい……」

「全員、俺の家に来い。手当てしてやるよ」

「へ……？ な、なぜですか？ 俺達はみんな、この前あなたを襲ったのですよ？」

「知るか、んな昔のハナシは」俺は鼻で笑い「……キズついてるヤツがいるっつのに、放っておけるか。しのこの言わずに来い！」
と、いうワケだった。

結局、全部の手当てを終えたのは昼も近くなってからで、俺も由美さんも葵さんも、すでにへとへとになっていた。

「よオ、やっと、終わった、な……」

すっかり疲労しきった由美さんは、缶ビールを立て続けに三本飲み干し「でもまあ、生き物助けてやったのは悪くねエ。ビールが美味いっつて。へへへへ……」

眠気のピークをとくに乗り越し、テンションが狂ってしまったている。

『達郎さまっ！ お疲れ様でした！ お優しい達郎さま、とっても素敵ですわ！』

ナーちゃん、背後から抱きついてくるなり「ちゅーっ」。
さて。

包帯やらガーゼやらで痛々しい姿のポイズンども。

なぜか立ち去ろうとはせず、ずらりと神妙に座っている。

廊下から階段から玄関、果ては庭にまで、ところ狭しかったらありやしない。

俺はトイレに行きたいのだが……。

それはともかく、何事かと思つていると

「……お優しい人間の皆さん、それにナタルシア様に葵様、どうか、聞いていただきたい」

ずずいっと、ドクウツボが代表して前に進み出てきた。

言い忘れていたが、こいつももれなく柳川鍋にされた挙げ句タマゴがエラから入って呼吸困難に陥り気絶したらしい。ミノカサゴ達が仕方なく重そうに担いできていたのである。

きちんと正座しつっ

「このたびは、こんな我々ポイズングループに優しくしていただいて、本当にありがたかった。リーネの元を叩き出されている上に海では殻の組織から追われている我々。もはや行き場所もなく、このうちは遠くの街の水族館にそろって身売りしようとしていたところです」

ほっ。

水族館に身売りが。それも壮絶だな。

「が、しかし！」

相変わらず目つきはイヤな感じだが、それでも精一杯の誠意をみなぎらせて

「このご恩だけは、一同絶対に忘れません！ 例え遠くの水族館でこき使われようとも、皆さんが危機に陥ったならば、全員で助けにまいります！ これだけは、固くお誓いいたします」

ぐいっと頭をさげると、以下に控えている連中もドミノ式に「ぐいっ」。

「……だとよ」

缶ビールを空け続けている由美さん。

ナーちゃんを抱っこしている俺の隣に座っている葵さんも

「姫様、達郎様。このポイズンの者達はもはや、達郎様やブルーフィッシュに対して敵意を抱くことはないでしょう。もともとは、リーネの命令に従わざるを得なかっただけなのですし」
まあ、そんな感じだろうね。

そもそも、俺達がボコリ合う理由なんかなかったんだよな。
俺はしばらく考えていたが

「…………ドクウツボさん」

「へっ！ ドツボと呼んでやってくださいまし」
なんだか、ヤクザの世界みたいでイヤだな。

「リーネに見つかったら、まずいんだろ？」

「へっ。お恥かしい話ですが…………」

「じゃあ、ひとまずブルーフィッシュに行ってればいいだろう。水族館に身売りなんて、やめなよ。んなコトされたら俺達だって、寝覚めが悪いしさ」

葵さんや由美さん、ドルファちゃんがそこで頷いて見せた。

「そんなことより、これから先、手を貸して欲しい。俺達はリーネとフィルーシャっていう二人の人魚がそれぞれ何を仕出かすかわからんから、それを止めにならん。ここにいる葵さんも由美さんも一騎当千のツワモノだけど、最後に必要なのは力じゃない」

ぐつとドツボに視線を打ち込んだ俺。

「…………みんなの協力だよ。そうすれば、海の世界は平和になる。だろっ？」

「わっ、我々にそんなにも優しいコトバを…………うっっ」

よくわからんが、ドツボが感激のあまり突っ伏して泣き始めた。

その背後では、こっぱポイズンどもが小躍りしながら

「ブルーフィッシュ、ばんざーい！ ばんざーい！」

「俺達、自由だーっ！」

狂喜してるし。

外にいるポイズン達も「ナタルシアさまーっ！ ばんざーい！」
とかやっている。

「こりゃ、近所から苦情がくるかもな。」

『……これでいいかい？ ナーちゃん』

『はいっ。お見事でございました、達郎さまっ。ポイズン達をも味方になさるなんて……』

その後、ドツボ率いるポイズングループ一行様は、ガイド役のドルファちゃんに連れられてブルーフィッシュへと旅立っていった。

自宅の前で彼等を見送っている俺にナーちゃん、葵さんと由美さん。

「……うおい、タツウ」

「ん？ なんすか？」

「お前……なんか、変わったな」

由美さんが不思議そうな力才をしている。

「ヤバいくらいのオーラがある。……お前、田舎に行って何やってきたんだ？」

「なんもしてませんよ。まあ、歩き回ったりしてましたけど」

事も無げに答えると、由美さんはさも感心したように

「へえ。歩き回ったくらいで、そつたらオーラが身につくのか。

アタシも少し、あるっかなア。最近ちょっと、腹回りが気になるし」

歩く以前にビールをやめた方がいいんじゃないですかねえ。

とても本人には直で言えないけれども。

その44 夏のお約束

八月に入った。

相変わらずギンギンに暑い。

そんなある日の朝。

「たつろーさまっ！ はーやーくー！ 起きてくださいよー！」

『達郎さまっ！ 由美さまとマサさま、もうお越しになっていますわ。起きて準備なさいませんと』

「ん……わかつたよ」

美女に二人がかりで起こされ、ぐずぐずと起き上がった俺。

いつもは俺よりも遅起きなはずのナーちゃん、とドルファちゃん、今日ばかりは早くも起きて活動している。

まあ、はやる気持ちはわからないでもない。

今日は前々から予定していた旅行の日。

なんだけど。

俺が就寝できたのは夜中も三時を回ってからだった。

何がつて、ポイズン達を助けてやって以来、海の世界の連中が引きもきらずに俺のところへやってくるようになったのだ。どうやらドツボ達はブルーフィッシュへ引き上げたものの興奮冷めやらなかつたらしく、近場にいる連中をとっつかまえては

「お前！ 達郎サンというお方のところへ行け！ あの方こそが、海の世界を救ってくださる英雄だ！」

とか吹き込みまわっているようで

「お初でございます。ワタシ、カマスと申します」

「クエです。デカくてすみません」

「僕らはハゼなんです。なぜ？ って言われてもハゼ……なんて」と、俺の家はほとんど海の駆け込み寺、海の悩み相談所になりつつある。

昼間ならまだしも、生き物の世界にはなにせ「夜行性」っていう

奴らも多くいる。

そういう連中は夜中に窓を「コツコツ」と叩いてやってくる。追いつ返すワケにもいかないから、仕方なく応対するんだけれども……おかげ様で俺は寝不足だ。

それでも、時々大物が引つかかってくることもある。両手足の先が茶色いふさふさした毛で覆われた女の子がやってきた。

顔もちまちまとしていて可愛らしい。

どこかで見えたことがあるなと思っていると

「あたし、マコっていいいます！ ラッコなんですよ？」

これには驚いた。

ドルファちゃんから、ラッコやアシカみたいな連中も、バランサーとは別に独立した勢力をもっていると聞いたことがあったからだ。その彼等が、わざわざ俺を尋ねてくるとは。

マコちゃんは南氷洋の話をいろいろしたあと

「あたしは暑いのが苦手なんです。でも、冬になったらまた達郎様のところへお邪魔しますね？ ラッコ達は、ブルーフィッシュ

ユとかバランサーのみなさんと仲良くしたいと思っていますから！」
彼女はそう言って帰っていった。

仲良くしたいと思ってくれているのはありがたいことだ。

まずはポイズン達を助けて良かったことだよ。

それはそれとしても 眠い。

ふらふらと下へ降りると、すでに由美さんやマサが来ている。

「うおい、タツう！ 早く行くぞオ！ アタシや、ひさびさに泳ぎてエんだ」

泳ぐの好きですねエ……。

でも、さんざんビールを飲んだ後に海に入るのはいかがなものかと。朝だというのに、すでに数本空けているし。

「いよオ、タツ！ オレ、ウニ食いてエ、ウニ！ 食べっかなア！」
俺に訊くな。ナーちゃんかドルファちゃんに獲ってきてもらえば

いいだろう。 いや、密漁はいかん。

「達郎様、お顔を洗う支度ができてますわ。こちらへどうぞ」
すっかり身支度が整っている葵さん。

長い髪をアップにまとめ、肩や背中が大胆に露出したファッションがとつてもオトナ。これはつい先日、由美さん達と出かけて購入してきた服である。

「あ、ああ、どうも……」

ざぶざぶと顔を洗って着替えを済ませ、ようやく出発。

「……じゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい。今晚はいないから、夕飯は自分でなんとかしてね？」

だから、泊りがけだって言ってるだろうが。

アホ幸子に見送られて家を出た俺達。

俺にナーちゃん、葵さんに由美さん、そしてドルファちゃんにマサという六人の旅行。

どうも、由美さんの知り合いに海辺の町で民宿を営んでいる人がいるらしく、そこへ行かないかという話になったのだ。最初はここが静かな高原のペンションでも、とか言っていたのだが「オレ、カネがないっすよ！」というマサの悲痛な訴えでその案はフェードアウト。結局は安上がりになりそうな由美さんの知り合いのところまで落ち着いたのだった。

温泉地かつ夏は海水浴客で賑わうというその町へは、特急の電車に乗って二時間ほど。

電車に乗り込みシートに座った俺は睡眠不足を取り戻そうとしたが……テンション上がりっぱなしのみんながそれを許してくれるはずもない。

「うおい！ 売店でなんか売ってるから買ってきたぞオ！ ドルファ、食え！」

「はいい！ いただきます！」

「お？ 由美さん、それ、美味そっすね！ 美味そっすね！」

「ちーつとだけ、やるよ。ちーつとだけな」

通路を挟んだ隣のボックス席でいきなり騒いでいる三人。

俺の膝の上でちまちまと水を飲んでいたナーちゃんは

『達郎さま？ お顔の色がよろしくないようですが……大丈夫ですか？』

「達郎様、その足元のお荷物はこちらへ。そうすれば、少しは楽になりますわ」

葵さんも気を遣ってくれている。

すみませんねえ。何がって……眠いんです、俺。

うとうとしかけていますと

「……タツう！ 元気ねエなア！ これでも食いな！」

由美さんから回されてきたのは「トンカツ&牛ステーキ弁当」という朝から食うべからざる代物だった。

「あ！ あたしのも、達郎様に半分あげちゃいまーす！」

ありがとう、ドルファちゃん。

でもね。「鶏唐・ハンバーグミックス弁当」って……。

ほとんど泣きながら、彼女達の好意を（無理矢理）受けた俺。

胃の中ではさぞかし不思議な状態になっていることだろう。油がぐちゃぐちゃして、吐きそうだったらない。

ゾンビみたいな顔でげっそりしていると

『達郎さま？ 具合がよくなさそうです。かわいそうに……少し横になつてくださいな！』

と言つてナーちゃん、隣の席に移りつつ俺の頭をそつと自分の膝の上に乗せてくれた。

ナーちゃんの膝枕。意外にもふかふかとしていて心地がよい。目を開ければ彼女が優しく微笑んでくれている。女の子の膝枕は男にとって永遠の憧れだ。

などと二人でやっている。

「よっし、トランプやるーぜ、トランプ！ うおい、タツう！

何寝てんだよオ！」

るー。

少しでもいいから……俺を眠らせてくれ。

そうして電車から降り立ったその町は灼熱というような生易しい暑さじゃなかった。

自動じゃない駅員さんのいる改札口を抜けた俺達は、みんな口をそろえて

「あつー！ なんじゃコリヤー！」

ナーちゃんはペットボトルの水をがぶ飲みし、俺やマサ、ドルフアちゃんはお茶やコーラをがぶ飲み。由美さん一人、キヨスクで缶ビールを購入して一気飲み。

「あらあら。みなさん、そんなに一度に水分を取ると、お腹をこわしてしまいますわ」

たった一人、平然としている葵さん。汗一滴かいていない。

「……にしても、たくさん人がいますねえ。みなさん、泳ぎにきたんですよねえ」

ドルフアちゃん、しきりと感心している。

目の前がすぐに海というロケーションだから、俺達のほかにもたくさんの人たちが降りてきていた。駅の前では露店的なお店がずらりと並んでいて、浮き輪とかシュノーケルみたいな「海水浴には欠かせないアイテム」がこれみよがしに売られていた。

「で？ お出迎えがあるんですってっけ？」

由美さんに確認してみると

「ああ、そのハズなんだけどよオ。こっも暑いと、探すのもだりいよなあ……」

いやいや。

そんなこと言わないで探してくださいよ。

このまま放置されたら俺達、たちまち日干しになっちまいますか
ら。

が、そんな心配は杞憂だった。

「由美ちゃん！ こっちこっちっ！」

駅前の端っこに止められたワゴン車から、由美さんと呼ぶ声が。そこには、真っ黒に日焼けした、三十歳くらいのシヨートカットで健康的な女性がいた。

「お！ 清美さんみっけ！ ちゃんと迎えに来てくれてたぜ！」

ワゴン車のところまでずると歩いて行って一同で挨拶すると、清美さんとかいう女性は満面さわやかスマイルで

「わあ、美男美女ばかりじゃないのよ！ こりゃあ、いい客寄せになるわあ！」

……それは固く辞退申し上げます。

迎えの車の中で聞いた話によると、斉藤清美さんというその人は、由美さんの遠い親戚にあたる方らしい。俺達と同じくらいの歳の頃は色々とやんちゃなコトもしていたらしいが、さわやかスポーツマンな今のダンナと出会って結婚し、この町へきて民宿を開いたとのこと。

彼女はハンドルを握りながら

「由美ちゃんてば、まだ近海でシマ張ってるのオ？ 前に会った時は、ほとんどのガッコー制覇してたよねえ？」

「やだなア、清美さん。アタシや、もう現役引退したんだってば。

今はこのマサとタツに任せてんだからさア」

ちよつと待てい！

任された覚えはありません！

「あはは、由美ちゃんももう二十歳になるんだものねえ。いつまでも番長やってられないものね？ いいじゃない。彼氏達、とつても頼りになりそうだし。美女を四人もエスコートしてくるくらいだもの」

キーッ

いきなり急ブレーキ。

前方で若者達の乗った車が堂々と道の真ん中で停車して、ぐずぐ

ずと荷物を下ろしたりしている。道幅は狭く、向こうからも車が途切れることなく来ているから、追い越していくこともできない。

「ちっ！ くっだらねエコトしやがって……」

そう呟くが早いか、清美さんは窓から顔を出し

「バカ野郎！ こつたら道の真ん中に停めくさってんじゃねエよ！

ハジに寄んねエか！ さっさとどけ、コラア！」

怒鳴った。

武装天女も黙るようなハイパープレッシャー。

カッコつけていたおバカっぽい若者達も度肝を抜かれたらしい。

これには抗えないとみたのか

「す、すみません！ 今、どけますんで……」

そそくさと車を移動させ始めた。

「気をつけるい！」

トドメの一撃を残し、清美さんは運転再開。

くるりと後部座席の俺達を振り返り

「……いやー、ごめんねえ！ 最近、ああいうバカが多くてねえ」

何事もなかったかのような、満面のさわやかな笑み。

「……」

一同、フリーズ。

マサはあんぐりと口を開けたまま閉めることを忘れているようで、ドルファちゃんにいたっては泣きそうになっている。ナーちゃんは俺に固く抱きついて「達郎さま……今、とっても強い邪気が……」

以降、大した会話も弾まないまま、清美さん夫妻が営む民宿へ到着。

「さ！ 着いたよー！ ゆっくりして行ってねー！」

送迎車から降りた俺達は、照りつけるクソ暑さも忘れて呆然とした。

「……」

これは……期間限定掘っ立て小屋ですか？

思わずそう尋ねたくなっただくらい、古びた昭和初期級なアンティ

「クハウスだった。」

江戸時代の時代劇に出てくる遊郭みたいな建物が朽ち果てた感じ、
といえればいいのだろうか。隣の民家が高級旅館に見えてきたよ。

ところどころ適当に板が打ち付けてある。それらをじっと見ていると

「ああ、あれはね、台風がきた時にどっかの看板が刺さっちゃったのよ。あつちは吹っ飛んでどこいったかわからなくなったから、補修しておいたの」

さも当然のように、清美さんは説明してくれた。

そりゃー刺さったり飛んでつたりしそうな建物だもの。

「はあ……いろいろ、大変ですね……」

葵さん一人、にこにこして「とっても趣がありますわ！ やっぱり、大勢で泊まるならこうでなくっちゃ！」

すると、清美さんが嬉しそうに

「でしょお、でしょお!? こーいのが、海の民宿なのよ! 近代的な鉄筋コンクリートなんて、何の味気も情緒もないじゃない! お客さんはみんな、最初はびっくりするけど一晩泊まればみんな喜んでくれるの!」

それはきつと、お客様がみんな神様だったのではないだろうか。

「ささ、入って入って! 向こう側が海だから、荷物を置いたらすぐに泳げるわよ!」

「はい……」

促されて中へ入ると、これまた真っ黒に焼けたというより焦げた
ナイスガイが玄関フロアを掃除していた。

「お、いらっしやい! 由美ちゃん、よく来たね!」

「こんにちは! 鮎彦さん、ちつとも変わらねエなア!」

清美さんのダンナさんである鮎彦さん。

笑うと白い歯が「きらりーん!」と光る。マリンスポーツ全般に
長けているようで、民宿だというのに本人のものらしいアイテムが
あれこれと無造作に置かれている。

「部屋は二階の海側を空けてあるからね！ 広いから、みんなで好きに使うといい」

「ありがとうございます」

ぞろぞろと二階へ。

木造だけに、やったらと階段や廊下がきしんでいる。壁や天井も「板です！」感全開。マサの突きならどこでも穴くらい開くだろう。しかし、障子戸を開けて部屋に入った俺達は一斉に

「おおーっ！」
唸った。

でろーんと横長の畳敷きな部屋の窓からは、見渡す限りの海が！ 真下から先は砂浜になっていて、面倒くさければここで服を脱いで飛び降りればいい。

『達郎さまっ！ とつても素敵ですわね！ 私、達郎さまと一緒にこのようなところへ来ることができて幸せですっ！』

『おお。俺も良かったよ』

感激しているナーちゃん和二人、窓際に佇んでいると清美さんがやってきて

「みんな、お昼まででしょう？ 今、用意したげるからね！ テーブルだしといて！」

そうだった。

今正午だから、昼メシを食っていない。

「おおい、マサ！」

「うす！」

由美さんの命令一過、マサが頑丈そうなテーブルを担いで持ってきた。

みんなでそれを囲んで座り、食事待ち。

と、由美さんがふと気がついたように

「そーいえばよオ……これ、一間、だよなア？」

「そのようですわね。仕切りはないみたいですわ」

葵さんの言葉に、由美さん、マサ、ドルファちゃんの視線が一斉

にこちらへ向けられた。

「え……なに？ 俺達が、何か？」

「おめエら、夜中にいちゃつくのはいいけどよオ……ヘンな声とか、出すなよオ？」

おい。

俺達をそこらのどーぶつと一緒にしてるんじゃない！

「そつすよ！ オレまでもんもんしちゃったら……あいたつ！」

「マサ、お前は廊下。寝相悪そうだし」

「待つてくださいよオ！ せめて、ドルファちゃんの隣で」

「ぶー！ ダメでえす！ なんかひどいことされちゃいそうだし！」

なんか、ハナシが勝手にあっちへ反れていったな。

そういう具合であーでもないこーでもないとやっている

「お待たせっ！ 大した素晴らしい料理なんか出せないけど、せめてお腹いっぱい食べてね！」

言いつつ、清美さんがテーブルの上にどすっ！ とやったのは

山盛りのウニ、ウニ、ウニ。いや、とにかくウニ。

ってか、これ……今しがた海から獲ったそのままなんじゃ？ ト

ゲトゲがそのまんまついている。

「いやったあーっ！ ウニだーっ！ オレの時代だーっ！ バカヤ

ロー！」

マサが狂喜乱舞したことは言うまでもない。

こうして よくわからない夏のひとときは始まったのだった。

その45 葵さんの涙（前編）

いきなりのウニ定食、もといウニオンリーで腹を満たした俺達は、早速砂浜へと飛び出した。

「よっしゃあ！ ちょーつち、アメリカまで泳いでくるわア！」

人類史上誰もなし得なかった豪快な宣言を残し、由美さんは速攻で海へと消えた。

『由美さまつたら、まるで海の世界の方みたいですね！』

ナーちゃんがぐすりと笑った。

真っ白い水着をつけた彼女は、天使のようにキュート。

腰下はさすがに不要のだが、ファッションセンスのある由美さんが「胸だけじゃあちーつと、エロくさくねエ？」とか言っつて、同じ色のパレオだかなんとかいう布を巻いてくれた。

「まあ！ 大変な暑さですわね！ 姫様のお体に気をつけなくては」「あたしはだいじょーぶでえす！ 日焼け止め塗ってきました！」

葵さんとドルファちゃんが姿を現すなり、ビーチにいる男どもの視線が一斉に動いたことは言うまでもない。パーフェクトボディの美女がビキニだけになってやってくれば、まあ当然の結果ではある。ただし……葵さんは太ももにガンホルダーをつけ、オーシャンイーグルを挿している。

「ちょつと場違いかも知れませんが」葵さんは苦笑しながら「もし敵対する勢力が現れたら姫様をお守りしないといけませんから」

その心配はなくもない。

ここは海そのもの。いつ、どこからどんなヤツがやってくるかわかったものじゃない。

念のため、このあたりはどの勢力のシマなのかナーちゃんに訊いてみると

『こここのあたりでは、きつと……レッドバックの勢力地域かも知れませんが。それにアーマーユニオン、といったところでしょうか』

レッドバック。鯛とかキンメな連中。

しかし、ナーちゃんは大して恐れる風もなく

『バランサーのみなさんが警戒してくださっているみたいですし、それに』

それに？

『……この前、達郎さまは戦わずして鯛の者を退けてくださいました。あの者に達郎さまを襲うつもりがあるとは思えません。レッドバックの者達にも、きつとあるがままを伝えていることでしょう。ですから、新たな争いになるとは思っておりませんの』

だな。

実際、俺もあまり深く考えていない。

ケンカをこいてもバカバカしい気持ちがあつて、そんなことはせんでもいいじゃないかと思う。

万が一、どつかのどいつが襲ってきたにせよ、こっちは

「うっし、タツう！ オレも泳ぐぜエ！」

マサがいる……し！？

いったい何ですか、そのカツコー？

海パンなどというものではない。囚人が着るみたいなしましまのアレである。

「マサ……なに、ソレ？」

「おオ、コレかア？ フィット感がよくなってよオ、泳ぎやすいじゃん！」

たいそう気に入っているらしい。

マサはいつたい、その妙な水着をどこから仕入れてきたのだろう。つてな具合にマサとドルファちゃんも海へダイブ。

残った俺とナーちゃんに葵さん、ビーチパラソルを借りて砂浜でのんびり。

「……あ、しまった！」

「どうなさいました、達郎様？」

ナーちゃんのための水を持ってくるのを忘れていた。

いや、持ってきたやつはここへ来るまでに全部飲んでしまったんだっけ。

買わなくちゃ。

そう思っていると

「えー、冷たいドリンクはいかがですかー！ 冷たいドリンクですー……」

おあつらえ。売り子のお兄さんが通りかかろうとしている。

「あ、おにーさん！ 冷たいミネラルウォーターは……！」
振り返った俺は固まっていた。

売り子の兄ちゃんだと思っていたそいつは、なんとマッチョ鯛だった！ 去年学校へ襲撃してきたヤツ、いや総督府にいたヤツだったろうか？

葵さんの両手が咄嗟にオーシャンイーグルに伸びかけたが、ヤツはまったりとした調子で

「お、ナタルシアちゃんにそのダンナと護衛のねーちゃんか。よくまあ、こんな暑いトコまで来たな。 なんか、飲むか？」

どこからしよ、とクーラーボックスを砂の上に下ろした。

あれ？

妙に友好的だ。

「な、なに……やってんの？」

「見てのとーり、バイトよ。海獣組の連中がぐっちゃぐっちゃになっちゃっただろー？ だから俺達、晴れてフリーダムよ。せつかくの夏だし、一丁人間の世界で勤労の喜びでも味わおうと思つてさア、海から上がってきたのよ。にしても人間の世界ってのは暑いなア」

鯛の連中、意外と勤労意欲旺盛らしい。

「じゃ、じゃあ、その水を四本と、コーラ」

「あいよ！」

財布から金を出して払おうとすると

「ああ、いいって！ 鯛・チヨーから聞いてるぜ？ アンタあ、鯛・チヨーのラップを最後まで聞いてやったそうじゃないか。えらい感

動してたぜ？ 別に金が欲しくてやってるワケじゃないしな。これくらい、安いモンよ。……ほれ、これがよく冷えてるぜ？」

「あ、ありがと……」

マツチヨ鯛はクーラーボックスを担ぐと、鼻歌を歌いながら行ってしまった。

毒気に当てられたような顔で呆然としている俺と葵さん。

ナーちゃんは一人、嬉しそうにごきゅごきゅと水を飲み

『あー！ おいしいー！』

ビーチでバレーをやるとかなんとか予定されていたようだが、結局は由美さん、マサ、ドルファちゃんが腹いっぱい泳ぎまくったために時間切れ。

「あーっ！ アメリカは遠いなア……ちよーっち、届かんかったぜ」
ケラケラと笑っている由美さん。

男の視線を浴びるようなビキニ姿でいきなりアメリカ本土はマズいでしょう？

それにそっちの方角は南米です。

みんなでぞろぞろと宿へ戻っていくと

「お風呂、沸いてるわよー！ みんながお風呂から上がる頃を見計らって、晚ごはんの用意をするわね？ お風呂場の脇に物干しがあるから、水着はそこで干すといいわ。部屋の手すりにかけておくと、風で飛んじゃうから」

清美さんから今後のスケジュールについて提示あり。

「はい」

男風呂の方は小さいから一人づつ入るらしく、マサとじゃんけんで勝った俺が先。

「俺は早いから、すぐあがるよ」

「おオ！ あがったら呼んでくれよオ！」

ばたばたと下へ降りていくと

「ですから、姫様！ それは……」

風呂場の前で葵さんとナーちゃん、なにやら喧々譁々とやっている。

「どーしたの？」

「あ、達郎様！ 姫様が」

彼女に抱っこされていたナーちゃんは俺を見るなりがばつと抱きついてきて

『私、達郎さまと一緒にいいんです！ 達郎さまとお風呂に入ります！』

てこでも動きません、というカンジ。

それで葵さんともめていたのか。

「ここは達郎様のご自宅ではないのですからそういう勝手は、と申し上げたのですが、姫様はどうしても聞き入れてくださらなくて……」

「うーん……」

で、結論。

『……せまくない？』

『いいえ、達郎さまと一緒にですもの！ せまければせまい方がいいですわ！』

男風呂の入り口には、どっかから破りとってきたダンボール片に油性マジックで書かれた「貸切」の札。

一メートル四方もないちっこい浴槽に無理矢理入っている俺とナーちゃん。しかし彼女にとって湯船のでかさなどどうでもいらしい。

機嫌が直ったようで、にこにこしている。

しかし。

その後でマサから苦情が

「タツう！ 湯がほとんどなかったぞオ！」「ぎざざーっ」「てやりたかったのによオ！ やりたかったのによオ！」

ごめんね。

明日は近場の温泉でも連れて行ってやるからさ。

すっかりと陽は落ち、海の町に夜の帳が降りた。

夕食は「でーん！」と豪快に海の幸やら山の幸やら。ほんとに「でーん！」なんだけど。マサとドルファちゃんが競い合うように平らげていったのは言うまでもない。

食後。

花火でもやるうかというアイデアが誰かから出されたが、売っているコンビニまでは歩いてざっと片道二十分かかるらしい。面倒くさいのでフェードアウト。

で、俺達は敷き詰められた布団に寝転がりつつ、ぼへーっとテレビを観ていた。

俺の横では、すっかり疲れたナーちゃんが例によってすやすやと可愛く寝息を立てている。

肘枕で缶ビールを傾けていた由美さん、不意にがばっと起き上がり「なんか、ただ寝てるのもヒマだなア。ランプでもやるうぜ」

それは昼間、電車の中でさんざんやってたじゃないですか。

言っと、彼女はニヤリと笑って

「たーだやるのもつまんねエ。……どーだ？ 負けた二人が肝試しに行くつてのは？ そっちの山側の方に」海と反対の方向を指し「墓があるんだつてよオ。あんまりにも気味が悪いらしくつて、このヘンの人も近寄らねエんだと。そこに行つてくるつて罰ゲーム付き」

ほお。

そんな恐怖のスポットがありましたか。

「おお、いいっすねエ！ なんかア、おもしれエかもオ！」マサ賛成。

「はい！ あたしもやりまーす！」ドルファちゃんも一票。

「……やりますか。寝てても退屈だし」

そう言つて俺も加わろうとすると、横から俺の腕が「がしっ！」

とつかまれた。

「た、達郎様は……参加されるのですか？」

葵さんの顔色が冴えない。

「うん。ナーちゃんは寝てるから、そのまま寝かせておいてあげようと思うけど？」

「そ、そうですか……」

やるともなるとも言わず、葵さんは困った顔をしている。

「うおい！ ナーはともかく、一抜けはナシだぜ？ 勝ちやあいんだからよオ」

カードをシャッフルしている由美さん。不参加は許さんというこ
とらしい。

「わ、わかりましたわ……」葵さん、しぶしぶ参加表明。

「うっし！ んじゃあ、やつぞオ！ ケツから二人、罰ゲームな！
で、結果。」

ビリ、葵さん。ビリツ、マサと競った末に俺に決定。

「うひゃひゃ、タツかよオ！ お前、弱いんだなア！ 悪知恵は利
くつてのに、ゲームはダメか」

大喜びしている由美さん。

「オラア！ タツに勝ったぜエ！ うしゃしゃしゃ」
マサ、勝利の踊りを披露中。

ドルファちゃんだけは

「あーっ！ 葵さん、いーなー！ たつろーさまとデートだもん！
あたしが変わってもいーんですよお？」

すると、葵さんは不敵な笑みを浮かべて

「いーえ！ 達郎様とは、私が参ります！ 何かあったら、達郎様
をお守りするのは私ですから！」妙に強気な発言。

「……じゃ、仕方がない。行ってこようか、葵さん」
「はいっ！」

三人に見送られ、民宿を出た俺と葵さん。

言い忘れていたが、この民宿は「民宿斉藤」という。そのまんま

です。

玄関先で靴を履いていると、鮎彦さんに出くわした。

「こんな時間にどうしたんだい？ 買い物？」

「いえ、それが」

事情を話すと、途端に鮎彦さんは眉をしかめ

「あの墓地に行こうってのかい。噂に過ぎないから、なんとも言えないけどねエ……いろいろ、なくはないんだよ？」

まあ、あるでしょうな。

といって、俺は別にどっちでもよかった。海の世界も山の世界も体験しちまった以上、他にどんな世界があっても知ったことではない。幽霊の一つや二つ、現れたところで何の問題もないだろう。

が。

「た、達郎様……い、いろいろなくはないとは、ど、どのような意味なのでしょう？」

あれ？ 葵さん、えらく気になってますか？

俺は先に立つてすたすたと歩きながら

「ギヤーツ！ なハナシじゃないの？ どうしてもダメなら、ドルファちゃんかナーちゃんでも」

「ああっもう！ 達郎様ったら！ 私、行かないとは申しておりませんわ！ 姫様に行かせるワケにはいかないじゃありませんか！

私が達郎様と参りますから！」

ばたばたと追っかけてきた。

道路を渡った海の反対側には舗装されていない駐車場があり、その片隅に山へと通じる入り口がある。その奥にはずっと、デコボコ道が。

入り口に立って懐中電灯を点けた俺。

「道が悪いなア……。こりゃ、気をつけて歩かないと足くじいてしまつかも」

歩き出そうとすると、葵さんがそそくさとやってきて俺の左腕に「しっかり！」しがみついた。

「葵さん？」

「く、暗いんですもの。た、達郎様と離れてはいけませんから、こうしておりますの！」

それはいいんですけど。

ぴったり密着されると、葵さんの豊かな胸の感触がこつ、ダイレクトに……。ナーちゃんも富んでいるが、葵さんもまた負けず劣らず富んでいらつしやるのだ。人魚はもちろん、人魚の血を引く女性 はみんな胸の発育がいいつてコトなんだろうか？ 考えても仕方がないが。

ざつざつざつ

真つ暗な山道を、懐中電灯の灯りだけを頼りに歩いていく俺達。

虫の聲がかすかに聞こえてきたりするが、物音はほとんどない。

強いていうなら、風に揺れる草木のさざめく音がするくらいなものだろうか。

時折、海から吹き上げてくる風に木々が「がさつ」というたびに葵さんの身体が「びくっ」とするのが伝わってくる。次第に密着度はアップし、山道を歩き始めて十分後にはほとんど背後から抱き締められていた。こんなところをナーちゃんに見られたら、泣いて抗議されるかも知れない。

ともかくも、空気が生ぬるい。

「……そーいえば、思い出したけど」

「は、はいっ！ なんですしょう、達郎様？」

俺の右肩に葵さんの顔があるから、言葉と吐息がダイレクトに耳に飛び込んでくる。

「こつという空気が湿った場所で墓なんかがあると、ヒトダマとか見えたりするんだって」

「ひっ、ひとだまつ！？ ですか？」

彼女は何を想像したのだろう。

もの凄い勢いで動揺しているらしい。一瞬、俺の肋骨がきしむほどに締め上げられ、呼吸が止まりそうになった。

別に怖がらせるハナシじゃないんだけどな。学術的なネタなんです。……。

「人間の骨の中にあるリンとかなんとかって物質が、地中から出てきて色々条件が整った時に空中でぽつと燃えたように見えるんだと海の中じゃありえないと思うケド、陸上じゃあそういうこともあるらしい。……えらい学者様達が、あるとかないとかもめているみたいけど」

葵さんはほつとしたらしく「そ、そうでしたか。達郎様は、見たことがおありですか？」

「いや、ない。だから、見えたら面白いなあ、と」

そこで会話は終了。何のオチもない。

またそれから黙々と十分徒歩。

大分登ってきたかなと思つた時だった。

ぱかぱかぱか……手持ちの懐中電灯が、いきなり点灯しだした。

「たつ、達郎様っ！ 懐中電灯が……！」

「ああ。電池が切れちまつたな」

ほどなく、俺達は闇に包まれてしまった。

同時にぐつと俺の背中に重みが。

葵さんが全身で「もう帰りましょう」と主張しているようである。

しかし、こんなところで引き返したとあつては、由美さんやマサに笑われるではないか。

「ま、星明りに月明かりもあるから、なんとかなるだろ。もうちょっとで着くんじゃねえ？」

無責任に適当なコトを言つて歩き出そうとすると

「た、たた、達郎様っ！ こ、これでは、もう……」

気がつけば、葵さんが俺の斜め前からぴつたりくつついている。

普段は冷静でどんな状況でも慌てない凄腕ガンナーの彼女だが、どうやら暗闇とオバケだけは苦手らしい。ま、そのギャップが可愛らしくもあるのだが。

「だーいじょーぶだって！　ここで引っ返して戻ったら、ドルファちゃんに笑われちゃうって。少しづつ開けてきたみたいだし、墓場はすぐそこなんじゃないの？」

「達郎様……」

密着するほど近い葵さんの顔。ほとんど半泣きになっているようだ。

で、また歩き出して間もなくのこと。

「……あれ？」

ふと左手に広がる闇の中。

遠くに白い人影が。

なんか、着物のようにも見える。それがあたかも、闇の中をふよふよと漂っているみたいなのだが。

「た、達郎様っ？　ど、どうかなさいましたか？」

「いや……何事もないよ」

やめよう。

事実を知らせたならば葵さん、気絶するか号泣するかしてしまっただろう。

その46 葵さんの涙（後編）

それにしても、あれはいつたい……何だったのだろうか？

もしかしてモノホンのユーレイを見てしまったのか、俺？

が、万が一ユーレイだったにせよ、背中を見せるヤツがいたものだろうか。だとすればスキだらけではないか。写真に撮られて投稿されたらどうするつもりだ。

まあ、逃げた幽霊のことはいい。

そんなコトよりも、どうやらここは

「……さて。着いたようだな」

山はもう少し高いのだが、そこは中腹あたりを無理矢理削って作ったと思われるような広場で、同時に墓場でもある。

墓石はどれも汚れ朽ちていて雑草がぼうぼう。盆だというのに誰も掃除に来ていないようだ。

っていうか、俺はふと思った。

ここはもう墓地ではなく、墓地の跡地なのではないだろうか。現在使用中だったとして、こうも放置されまくる筈がない。だとすればここにはもう、その道の方々はいらっしやらないように思われる。

高台だから少しは眺めがいいかと思っただが、樹木に邪魔されていて眼下の風景を見ることができない。仕方がないからとつと指令を遂行して下山するしよう。別に怖くもなんともないが、跡地とはいえ遊びで足を踏み入れるのは不遜な気がしてあまりいい感じはしない。それ以上に、虫に食われたらイヤだし。

敗者に対する指令。

墓地の一番奥まで行って、写真を一枚撮れ。

ひどい話だ。

俺はケータイを取り出してカメラの設定をしながら奥へ進んでいく。

「ああつ、達郎様っ！ 私も参りますう！」
悲痛な叫びを発しながら追ってきた葵さん。
あ、すまん。

俺はカメラの夜景モードをどうやって設定するのかに気をとられていた。買ってからのというもの、カメラ機能なんかほとんど使っていなかったからよくわからん。

「たた、達郎様っ！ どど、どうして人間の方達は、このように薄気味悪い設備を、お、お作りになったのでしょうか？」

葵さん、すっかり震えまくっている。震えるあまり

「きやつ！」

朽ち果ててでこぼこになった石畳につまづいたらしい。

「んー？ 人間の死体を人間が生きているすぐ近くに埋めるってのはよくないっていう思想があったかららしいよ。ニンゲンの死体なんてモノは外国じゃあ、フツーにモノ扱いされるんだけど、この国ではいろいろと想像力が豊かだったみたいだね。住宅地の近くはマズイでしょーって。だから、こうやってヘンなところに埋葬されたりするワケ」

ぶっっちゃけ、言っていることの半分はいい加減。

ま、怯えきつている葵さんが俺の説明をきっちり理解してくれているとも思えないけど。

「そ、そうなのですか……」

それにしても、荒れ放題朽ち放題ひどい墓地。

海風に吹きさらされているせいかも知れないが、なんでここまでボロボロになるかな？

俺と葵さんは墓地の一番奥と思われるところへやってきた。

その先はうつそうと茂る森が続いていて、完全に行き止まりと思っただ方がいい。

「よっし。ここで一枚、撮ってやればいいんだな？」

どういうアングルで撮ったらいいかと思ったが、まあ、ちょっと墓石が写っていればそれでわかるだろう。

ぴんこーん！

フラッシュと共に、撮影完了。

何となく、それらしい光景が撮れた。念のため画像を見たが、アヤシイものは写っていない。

「じゃ、戻ろうか」

「はは、はいっ！ 早く、戻りましょう！ かか、身体が冷えてもいけませんし！」

葵さんが俺の腕をとった。

そうしてもと来た道を引き返そうとした時である。

サツ

目の前を、何か白いものが横切っていった。

「ひっ！ た、達郎様っ！ い、今、な、何か……」

それははつきりと、俺にも見えた。

見えたのはいんだけど

「……葵さん？ ちょおっと、放してもらってもいいだろうか？」
白い影にビビッた葵さん、反射的に俺を抱き枕のように抱きすくめていたのだ。

彼女の全身の温もりが容赦なくストレートに伝わってきて、オバケどころではない。

しかも、この怪奇現象は次の段階がセッティングされていた。

「……ううう、ううううう」

突然、どこからともなく苦しげな呻き声。

「ひいーっ！ いやあああーっ！」

葵さん、速攻で半狂乱。

がっ！ と俺の腕をつかむなり、飛ぶように駆け出し始めた。

「ちょちょちょ、ちょっと！ 葵さんてば！」

てくてくと登ってきた山道をものすごいスピードで飛ぶように駆け下っていく。

ほとんど引き摺られている俺。

アニメでよく、こういうシーンがあるかもしれない。後ろで引き

摺られている人が、鯉のぼりみたいに「ばさばさ」って風になびいているヤツ。あんなカンジ。

そのまま一気に海沿いの道路まで逃げ切るかと思われた。と、右側の藪からすつと白い人影が。

「またつしゅれ……」

「きゃあああああああーっ！ いやあああああーっ！」

完全に腰が抜けたらしく、葵さんはその場へたりこんだ。

「……大丈夫？ 葵さん」

俺が寄つていくと

「ふええん！ 達郎様ーっ！」

すがりついて号泣。

哀れな葵さんをよしよしと慰めつつ、俺は目の前で突っ立っている白いオバケを見た。

ヤマンバみたいな白い婆さん。闇夜で出くわせば確かに怖い。

が、何をするでもなく、呆然と俺達を眺めている。

何となく、気がついてはいた。

これみよがしに怪奇現象が連発するなんて、まずありえん。夏休みでこの町に大勢の人が来ているという状況と合わせて考えると、きつとこういうオチなんだろうと見当をつけていたんだな。

「……俺達、別の人間だから」

「ですよね……。もっと数人のグループでやってくるハズだったのに二人だけだから、なんかヘンだとは思ってたんですけど……すみませんでした」

白い婆さんだと思っていたそいつからは、若い男の声がした。

コスプレ。

すっかり立てなくなった葵さんをおんぶして山を下りた俺は、砂浜へ行って彼女が落ち着くのを待った。このまま民宿へ戻ろうものなら、みんなに笑いものにされてそれまでだ。さすがにそれは忍び

ない。

よほど怖かったのか、思い出したようにまた泣き出した葵さん。結局はややしばらく、俺の胸の中で泣いていた。

「ひっく、ひっく……私、とっても怖かったです……」
ようやく収まってきたようで、うるうるした目で俺を見た。

か、かわいい……！

あのクールでオトナでセクシーなイメージは鳴りを潜め、まるで少女みtainな表情。

「よっぽど怖かったんだねえ。……トラウマ？」

「はい……」

聞けば、彼女の父親であったという人間の男性は、それはそれは愛情のこまやかな人であつたらしい。会社が終わると飛ぶように帰宅し、しかも毎日ケーキだおもちゃだとお土産が絶えなかつたという。それほど、葵さんと妻である人魚の女性を愛していたようだ。

ただ、この父親にはたつた一つ、悪いクセがあつた。

娘が可愛いあまり、突然おどかして泣かせ、泣きじゃくっている彼女をよしよしと抱き締めるといふ、いわば若干歪んだ愛情を持ち合わせていたようである。さんざんにそれをやられて育つた葵さんは、いつしか暗闇とかオバケとか、そういうものを受けつけないようになつていたのであつた。

うーむ。

葵さんのオヤジ殿、多少Sの二オイがありますな。

「ですから、私……達郎様のような、常に堂々とした男性を素敵だと思つのです。いい父だつたとは思いますが、女性を怖がらせて喜ぶなんて、信じられません！」

その意見には賛成しよう。

でも俺、そんなに堂々としてるかね？

どちらかといえば「いつも何も考えていない」部類の人間ですがね……。

「達郎様……」

「ん？」

よほどシヨックだったのか、様子がいつもの彼女じゃない。

「落ち着くまで、もう少し……このままでいさせていただけますか？ 私が取り乱した姿で戻れば、きっと姫様が心配なさると思うのです……」

はいはい。

ナーちゃんが誰よりも大切に思っている葵さんですから。

じゃあ、落ち着くまで待とうか。帰ったところでどうせ、由美さんとマサがバカテンションで飲んだくれてるだけだし。ナーちゃんは普通に眠れているのだろうか。

暗い海辺で葵さんを抱き締めている俺。

彼女は俺に身体を預けたままじっとしている。

満点の星空の下、海が穏やかに心地よくさざめく音だけが、辺りに響いていく。

ぼんやりと黒い水平線を眺めていた、その時！

「……たつろーさまっ？ なにをなさっているのですかぁ！？」

！？

ハツとして振り返ると、そこには ナーちゃんを抱っこしたドルファちゃんが！

「ドルファちゃん！？ どーしたの？」

「どーしたもこーしたもないですう！ 由美さまとマサさまが飲んだくれちゃってうるさいものですからアタシ、ナタルシアを連れて散歩しにきたんですっ！ そーしたらたつろーさまっでは、いつの間にか葵さんといー感じになっちゃってえ！ ひどーい！」ぶんぶん。

間をおかず俺に飛びついてきたナーちゃん、涙目。

「達郎さまっ！ 私を置いて葵さんと二人きりでお出かけするなんて！ 私のこと、嫌いになられたのですか！？ 私はその、人魚ですし、葵さんのように大人っぽくもないですから……でもでも！ ひどいですわ！ 達郎さまは私だけを見ていてくださっていると思

っていましたのに！ そんなに葵さんの色香がお好きなのですか！？」

『ちがーうっ！ 事情を聞け、事情を！』俺はびしっとドルファちゃんを指し、「だいたいドルファ！ 俺と葵さんを面白がってあの山の中に放り出しただろー！ 葵さんはなあ、暗闇とかオバケが苦手だったんだぞ！ 半分共犯者じゃないか！」

「ぶーっ！ でもでもオ！ あたし、たつろーさまに葵さんとくっつけなんて言ってますん！ だいたい、葵さんだつてどさくさに紛れてたつろーさまをゆーわくするなんて！」

「ゆ、誘惑……」

してねエよ。

フツーに怯えていただけだ。

その後。

咆え疲れたドルファちゃんと怯え疲れた葵さんは部屋に戻って寝たようである。

俺、ならばにナーちゃんはというと……

『達郎さまっ！ ほんとーにほんとーに、私だけを愛してくださいませっ！』

『だから、ほんとーだつて！』

『ほんとーにほんとーにほんとーですね？』

『あア……ほんとーにほんとーだつてば』

『ほんとーにほんとーにほんとーにほんとーなのですね！？』

『だから……ほんとーにほんとーにほんとーだつて……』

『じゃあっ！ ほんとーにほんとーでほんとーに』

朝まで砂浜でこれの繰り返しに付きあわされました。

カンベンしてくれ。

その47 お土産はとても大きくて

ちりりり

軒先に吊るされている南部鉄の風鈴が、微風を受けて心地よい音を奏でた。

通り抜けていくほのかな潮の香りを感じながら、民宿二階の部屋でだるそうに転がっている俺。その俺を膝枕しているナーちゃん、ばたばたと団扇を仰いで落ち着いている。

開け放たれた窓から飛び込んでくるビーチの歓声、そして潮騒。

「いったぞオ、ドルファア！」

「いつきまーす！………ていつ！」

「ぬおっ！」

ああ。ドルファちゃんのアタックでマサが沈んだか。

つてか、あいつらの声が一番でかいな。

窓の外を面白そうに眺めていたナーちゃんがふと顔を近づけてきて

「………楽しそうですね、みなさん。あれは、なんとという遊びなのですか？」

「ビーチバレー。」

「いや、格闘ビーチバレー？」

「どっちでもいいや。とにかく、そんな感じ。」

「俺が教えてやると」

「びーちばれー、ですか。もし、私にも足があったら、達郎さまと一緒にああやって遊ぶことができたでしょうに………」

「ナーちゃんは何気なくそんなことを言った。」

「………違うな」

「え？」

「それは、違うんだ。」

「もし、だ。ナーちゃんに足があったなら、きつと」

「どういふ表現をしたものかと俺は一瞬考えたが………俺とナーち

やんは、出会わなかっただろう。人魚であるナーちゃんだから、俺と出会ったんだよ。』

俺の真上にある彼女のかわいらしい顔が驚いている。

が、すぐにいつもの人懐こい笑顔になって

『ふふ……達郎さまのおっしやる通りですね。そうですね。私つたら、ついそんな他愛もないことを。もっていないものをうらやましがるよりも、今こうして達郎さまのお傍にいられることをもっと喜べばよろしいんですね?』

『まあ、そんなカンジじゃねエ? 俺はね』

寝転びながら腕組みをした。

『これから先、ナーちゃんと一緒にどんなことをしようかってずっと考えている。この間まではどうやって海獣組とかリーネの手下から守ったらいんだとか暗いコトばかり考えていたけど……みんなを信じようと思ったら、何の不安もなくなった。ポイズンもレツドバックも他のやつらも、みんな俺のところへ来てくれるし。だから、これから先の楽しいことを二人でたくさん考えて、二人でたくさん実行しよう』

微笑して聞いていたナーちゃん。

とつても嬉しそうに

『達郎さま! ナタルシアは絶対に絶対に、いつまでもいつまでも、達郎さまのお傍におります……』

ちゅー……

少し時間を早送りしよう。

ふと、ナーちゃんが思い出したように

『そうそう。足で思い出しましたわ。人魚族にまつわる不思議なお話をして差し上げていませんでしたね?』

『不思議な話?』

言われてみれば、俺はこれといってナーちゃんに人魚族のあれこれを突っ込んで聞いたことがない。

彼女が戻ってくる前、ドルフアちゃんから海の世界にいる者たち

では唯一人魚族だけが人間と結ばれることができるという話は聞いたけれども。

『実は、口にすることを禁じられた海草というのがあるのです』

『禁じられた海草？』

『ええ。決して口にしてはいけないと、人魚族の者なら幼いころから教えられるのです。おしな草といって、人魚族が口にすると人間の方のように足を手に入れることができる海草なんです』

おしな草、ね。

当たり前だけど聞いたことがない名前だ。

でも、足を得られるのは悪くないことなんじゃないのか？

などと思ったが、ナーちゃんは続けて

『尾ひれを失う、でおしな草、になったようです。どうしてもそのようなものがあるのか、私にはわかりません。ただ、それを口にしたが最後、人魚族がもっとも望むものを得る代わりに、もっとも失いたくないものを失うと言われているのです』

『なるほど。大切なものと引き換えか。人魚族がもっとも失いたくないものって、なんだろう？』

何気なく思った疑問を口にしたつもりだったが、ナーちゃんはちよつと悲しそうな顔をして

『私にもわかりませんが、それはきつと……』ひざ上の俺の頬をそつとなでた。『誰かを愛する心、だと思いますの。 balanサーや獣人のみなさんのように優れた特長をもたない人魚族ですもの、たった一つ持ち合わせている愛を失ってしまえば、それは生きている価値を失うことと一緒にだと思えます』

普段は無邪気で甘えんぼうだけど、やっぱりナーちゃんは聡明な姫様。

自分達がいつたい何者であるのか、その役割は何であるのかをちゃんと理解して、それを守ろうとしている。

どっかのあほんだら暴力バカ人魚とは比べ物にならない。

『そうか。そいつは怖い海草だな』

『だけではないのですよ？ 同じように、口にするとどこでも声を発することができるようになるという海草もあるのです。こわね草っていいましたかしら？ それもまた、人魚にとって大切なものと引き換えだといいます』

『ナーちゃん、その海草…… あればいいと思う？』

俺の問いに、ナーちゃんはにっこりと笑って即答で

『いいえ！ こんな人魚の私を心から愛してくださる達郎さまがいらっしゃるんですもの！ 足も声も、私には必要ございません！』

ナーちゃん、世界一いい女。

そしてその彼女を奥さんにできる俺、世界でいちばん幸せなヤツ。

『…… ナーちゃん？』

『はいっ、達郎さまっ！』

『愛してるっていうとなんかよくわからん感じだから、わかりやすく言っ て 好きだ』

そういえば、はつきり言葉に出して誰かに「好き」って言ったの、初めてかもしれない。

なんか俺、普通に言えたな。

『まあっ！ 達郎さまからそのように仰っていただけなんたってっ！ 嬉しい！』

つてな具合に二人でまったりラブっていると

どぎざーっ

いきなり豪雨。

『あらあら。急に雨になりましたわ、達郎さま』

『だな。まあ、みんな水着だからあんまり関係ないと思うけど 言っている矢先。』

「やべエやべエ……いきなり降ってきやがってよオ」

浜辺にいた四人がダッシュで避難してきた。

ちっ。

せっかくナーちゃんと二人でまったりしてたのに。

葵さん涙々の肝試し事件を除けば、これといったハプニングもなく海辺のひとは過ぎていった。

ちよつとご機嫌ななめになりかけたナーちゃんも、俺が放った例のひとこと以来うきうきしっぱなし。

由美さん、マサ、ドルファちゃんの三人はほとんどトリオと化していて、何かというと三人であだこうだと騒ぎまくり、まあうるさくはあるが結束力が強くてよろしい。

最後の晩には大花火大会なんかもあって、まあ楽しませてもらったような気がする。

そして、その夜更けのことだった。

コツコツ、コツコツ、と窓を忍び叩く音で俺は目が覚めた。

ふと見ると、窓のそこにはでっかい目玉のバケモノが！……じやなくて、よく見れば鯛野郎じゃないか。

「……なんだ？　こんな真夜中に」

眠たいのをこらえて尋ねると、ヤツは声を潜めつつ

「お前ら、今日、帰るんだってな？」

「ああ、帰るけど」

すると、鯛野郎はちよいちよいと手招きして「……ちよつとだけ、来てくれねエ？　姫さんも一緒ならよかったけど、寝てるようじゃしかたがねエ。ダンナのあんたでもいいんだ」

「……？」

別にやましい様子もないので、俺は手すりを飛び越えて外へ出た。波打ち際までついていくと、そこには鯛戦隊マツチヨフォー、キンメ、それに桜エビ部隊一同、とにかくたくさんの連中がいた。

これまで敵対してきた「レッドバック」の奴ら。

とはいえ、俺は警戒するでもなく、ぼへつと立っている。

一斉に飛び掛ってこられたらどうなるかわからないが　彼らはそうはしないという、よくわからない確信が俺にはあった。

もう、月は沈みつつある。朝が近いようだ。

暗い浜辺で向き合うたくさんのお魚たちと俺。傍から見たらすげえへんてこな光景かも。

マツチヨフォーの一匹が口を開いた。

「……俺達、今までブルーフィッシュとは敵対してきた。それは海獣組の連中に脅されていたから、というところなんだけど」とはいえまあ、お前達にはすまなかったと思う」

「……おお？」

向こうからいきなり詫びを入れてくるとは。

謝ってほしいとか、そんなつもりは毛頭なかったのにな。

鯛野郎は言う。

「俺達レッドバックも本音のホンネを言えば、海の世界が混乱するのは望まない。お前も知っていると思うが、お魚や海獣人は人魚族の者を勢力の中心者に迎えようとする。俺達にもかつて、優しい人魚族の姫様がいた。でも、彼女を病で喪ってからはみんなバラバラになっちまったんだ。しまいにはそこをつけこまれて、海獣組の連中にいいようにアゴで使われたってザマさ」

「……」

「でも」別の鯛野郎が進み出てきた。「ナタルシアと仲間の人間達、セイゾー達を追い払ってくれた。だから今、海の世界が変わっているんだ。俺達も、今がやり直すチャンス。まずはブルーフィッシュと仲良くしたいんだ」

レッドバックの連中、みんな神妙な様子。

「ふむ……」

彼らが言うのを黙って聞いている俺の表情は、決して暗くなかったと思う。

「いいんじゃない？」

必要なのはみんなの協力。

その気持ちさえあれば、「ごちゃごちゃ」と論じる必要はない。

心で語り合うまでだ。

「わかった！」

俺はさつと右手を差し出した。「……よろしく、頼む。議論は必要ないだろう」

あんまりにもさっぱりしすぎたせいか、レッドバックの連中は一瞬戸惑ったような色を見せたが

「……これからは赤も青もない。どうか、よろしく」

鯛野郎の一匹がマッチョな腕を差し出してきて俺の右手をぐつと握った。

それを皮切りに、次から次と

「お、俺も……」

「エビAも！」

「エビBも！」

「あ、握手希望だキン！」

結局全匹と握手する羽目になった俺。

人気アイドルのサイン会かよ……。

気がつけば、空が白ばみ始めていた。

「うおい、タツう！……なんだ、寝てやがるのかよオ」

呼びかけてきた由美さんに、ナーちゃんは表情で「お静かに！」

帰りの車中、俺はまた彼女の膝を借りて横になっていた。

明け方に成立した和解の一件、ナーちゃんにだけは話したんだよな。

『まあっ！ そのようなことが……』

ナーちゃん、予想以上の驚き方。

ワケを訊いてみると

『ブルーフィッシュとレッドバックは海の世界ではとても立場が弱いのです。ところが、レッドバックはせめて自分達だけは少しでも上に立とうと、ブルーフィッシュをさげすんでいた時期が長かったのです。そこに目をつけた海獣組の者達がレッドバックを自分達の支配下において、私達を攻撃するように仕向けたということがあっ

て、なかなか私達は仲良くなることができずにいたのです……」
なるほど。

長い暗黒の時代があったのか。

俺は奴らの申し出をあっさりと受け入れたけど、レッドバックの奴らが俺の態度に戸惑ったのはそういう事情によるものらしい。

まあ、まるで俺がブルーフィッシュの代表者みたいな力才で勝手にOKしちゃったけど、間違っちゃいないと思う。相手が変わることを望んでいたって、いつまでも物事は前には進まない。こっちが変わってやれば、かえって相手も変わらざるを得なくなるんだよな。

一応、ナーちゃんには

『……まずかった？』

訊いてみたが

『いいえ！ 達郎さまだからこそ、レッドバックの申し出を快くお受けになれたのだと思いますわ。ブルーフィッシュの民はみな、達郎さまをお慕いしておりますもの。誰も反対する者などおりませなんだ』

にっこり。

でもまあ、ナーちゃんが姫様だし。

今度からはちゃんと相談しないとな。

ともかくも、俺は眠い。

事情を知っているナーちゃんは『お帰りの間、ゆっくりお休みくださいな』と言ってくれたから、俺はお言葉に甘えて寝ていくことにしたワケだ。でも、いろんな思いが湧いてきてなかなか寝付けない。

電車は海沿いのクソ暑い町を離れていく。

「また来てねー！ 冬もいい所だからー！」

鮎彦さん清美さん夫妻が手を振って見送ってくれた。

冬、ねえ。考えておきましょう。寒そうだし。

ともかくも、楽しかった。

この楽しかった夏はもう二度と戻ってこない。

でも……かけがえのないものが手に入った夏だった。

こっから先の未来は自分でつくるもの。

過去が何度もやり直せたら、未来の意味はない。
さて。

どんな未来を創ろう？ ナーちゃんと一緒に。

楽しいことはこれから先、まだまだ数え切れないほどあるんだし。

その48 夏の終わりに

その夜、俺達は近海の港湾地区で開かれていた祭りへと出かけ、締めの花火大会を観て帰った。

『達郎さまーっ！ きれいでしたねーっ！』

由美さんに可愛らしい浴衣を着せてもらっていたナーちゃん、大はしゃぎ。

長い髪をアップにまとめ、白ベースの浴衣がすっごく似合う。

『あア。この夏観た花火の中では一番すごかったかもな』

近海市の花火大会が一番金をかけているっていうせいだろうけど、ナーちゃんと同じく浴衣姿の葵さんにドルファちゃん、人ごみでまあ目立つ目立つ。

ナンパされかかった回数は数え切れないが、その都度ずいっとマサが登場。

傍からえらい睨みを利かせてくる彼を無視してまで二人をナンパしきれぬ人間などこの街にはいない。全て、こそこそと逃走。

帰り道をみんなで騒ぎながら歩いていると

「お……？ 電話だ」

由美さんのケータイが鳴っている。

「はいよ……おオ！ 懐かしいじゃん！ 元気だよオ！」

お知り合いからか。

少しの間、彼女は楽しそうに喋りながら夜道を歩いていたが

「それマジで？ いつ？ ……そっか。いや、ちよつと考えてみたいけど」

急に真面目な表情になって立ち止まり、その場で声を落として話し続けている。

が、俺達が待っていることに気がつく

「おう！ 先、帰ってきてくれ！ ちよいと、大事な電話なんだ！」

「はーい。じゃ、お疲れしたー！」

由美さんを残し、帰宅した俺達。

その時は特に何も感じなかった。友達か誰かからのちよっと込み入った話なんだろうくらいに思っただけ。

しかし、それから三日後のこと。

「あれから由美さま、きませんねえ……」

旅行中にトリオの一部と化していたドルファちゃんがつまらなそうにぼやいた。

確かに。

夏休み中、一日と空けずやってきていた由美さん、夜道で別れたきり次の日もその次の日も姿を見せなかった。

まあ、彼女はバイトもやっているみたいだし、そういうこともあるだろうと正直俺はあまり気にとめていなかった。それよりも、夏休みもあと残り十日ということで、俺は俺で最後までやつつけていなかった宿題の制覇に勤しんでいたということもある。

夜になって、メシも風呂も済ませてから居間でテレビを観ていたらケータイが鳴った。

由美さん。

「……もしもし、由美さん？」

『おう、タツ。アタシだよ』

どういう訳か、電話から聞こえてくる由美さんの声にはいつもの弾けるような調子がなかった。

一瞬、妙な予感を覚えつつ

「どうかしましたか？ 三日も顔見せないなんて、珍しいじゃないですか」

多少の冗談を交えて言った俺。
すると

『まあ、ちよっと、な。 お前、今から新港一丁目のコンビニまで出てこれるか？ その……ナーはナシで』

遠慮がちに、電話の向こうで由美さんは言った。

しかもナーちゃん抜き？

妙な予感は嫌な予感に変わった。

ともかく、一度会わないことには。

「……わかりました。五分あれば行けますから」

電話を切ると、俺は立ち上がりざま隣にいた葵さんに

「葵さん。ちよっと、そこまで出てきます。あまり時間がかからないで戻ると思いますが」

「はい。私も一緒にしましょうか？」

「いや、大丈夫だよ」ソファの上で気持ち良さそうに眠っているナーちゃんをちらりと見て「ナーちゃんを頼む。風邪なんか引いたらいけないし」

「……わかりました。夜道にお気をつけて」

俺はつんのめるようにして家を出た。

新港一丁目にあるコンビニまでは、家から三分あれば着く。

車が二十台も停まれる広い駐車場の片隅、隣家と敷地を仕切るフェンスにもたれるようにして佇んでいる由美さんの姿を見つけた。

「由美さん！」

「おお。すまねエな、こんな時間に」

近寄って行くと、由美さんは片手に缶ビールを持っている。もう片方の手にもっていたペットボトルのコーラを俺に投げて寄越し「それ、飲み終わるまでにはハナシはカタつくから」

「あ、ありがとうございます……」

彼女の斜め前に立って、コーラのフタを開けようとした。

(……?)

そこで俺は気がついた。

いつもならTシャツに短パンっていうラフもいいところな格好をしているはずの由美さんが、きちんとした服装で綺麗に化粧をして

いる。もともと美人だしスタイルもいいから、ちょっとしたファッション誌のモデルでもつとまりそうな感じ。ただ、片手の缶ビールだけが唯一ズレている。

その缶ビールをぐびっとやって

「……この間その花火大会に行った帰り、アタシがケータイで喋っていたのは知ってるよな？」

「そうでしたね。なんか大切そうな話だったから、みんなお先に帰らせてもらいましたけど」

「ああ。それで、コレさ」

長いふわりとした高そうなスカートのすそをつまんでひらひらとやって見せた。

「……？」

コレ？

不思議そうな顔をしている俺に、由美さんは事のあらましを話して聞かせてくれた。

彼女の古くからの友達に、東京でファッション系の店をやっている人がいる。その人は由美さんがそういう仕事に興味をもっているのずっと覚えていてくれたのだが、近く店舗を拡大することになり、その準備からオープン後の営業に至るまで、新たに人手が必要になったのだという。

「……で、アタシに声かけてくれたんだ」

由美さんは嬉しそうに言い、また缶ビールをあおった。

そう。

彼女にはそういうセンスがあった。

ナーちゃんはもちろん葵さんやドルファちゃんについても、色々な場面で由美さんは何かと着るものに世話を焼いてくれた。彼女達がやってきてから毎日着る服をはじめ、先日の旅行については水着の購入、そしてつい先日の花火大会で三人が着た浴衣もそう。

由美さんという存在がなければ、今ごろナーちゃん達はうちのアホ幸子が近所のスーパーで調達してきたしょーもない服を着せられて

いただろう。昭和なデザインの服をまとった葵さん。想像しただけでゾツとするものがある。

確かに、彼女は一時期、この近隣の学校をシメまくって暴れていた。警察にも、だいぶマークされただけでなく何度もお世話にさえなっている。しかも、年齢に関係なくこうやってビールを愛飲したりするし、ちよつとキレれば海の世界で今や伝説となっている「武装天女」に早変わりだ。

でも……だからといって、それらは由美さんの人並み外れた感性とはまったく別のこと。

そいつを表現する機会も場も、今の今までめぐりあうことができなかっただけだ。

ようやく、幸運にもそれがやってきた。そういうことなのだろう。そうだったんだ。

俺は事態を悟った。

由美さんは 遠くへ離れていこうとしている。

咄嗟に何を言ったらいいのかわかなくて、ペットボトルを握り締めたまま突っ立っている俺。

「アタシは、さ」

由美さんは俺から視線を外し、コンビニの賑やかな電飾に目をやった。

「今までぐっちゃんぐっちゃんなコトしかしてこなくて、みんなから嫌われまくってた。でも、マサとかアンタとか、真っ直ぐにアタシと付き合ってくれる人ができてから、ホントに楽しかった。毎日が正月さ。……特にタツ、アンタなんかある日突然わけのわからん世界の野郎どもと一発仕出かした挙げ句マサと二人で乗り込んでやれなんてさ。たまたまアタシとここで会わなかったら、どーなっていたかねえ」

そうそう、そうでした。

マサと二人で葵さんを助けに行こうとしてしているその時、偶然このコンビニにやってきた由美さんとばったり会ったんだよな。確か

に、由美さんがいなかったら俺達、今ごろ生きていなかったような気がする。

でも、由美さんはケラケラと笑って

「それはそれで、今となっては良かったよ。ナーとか葵とかドルファとか、いろんなヤツと会えて、そのあとみんな面白いコトもできて。こんなにいい夏は、アタシの人生で初めてだよ。マジ、感謝してる」

でも、と彼女は続けた。

「山奥の田舎に行つて何があつたか知らんけどさ、まるで間違えたタツを見ていたら思ったのさ。ああ、アタシは楽しさに甘えているだけだな、って。タツやナーが少しづつ前に進んでいるのに、アタシだけいつまでもはしゃいでいたらバカみたいじゃん。だから、なんかしなくちゃならねエなあって、思つてた。旅行に行く前くらいから」

「……」

「そんな感じで悩んでたんだよね。まあ、旅行の時くらいは忘れたれと思つてバカ騒ぎしたりしたけど。帰ってきてからは割とブルーだったなあ。だから、ミキ……ってそこのシヨップやってるアタシの年上の友達ね。ミキが誘つてくれて、涙が出るほど嬉しかった。ああ、やっとチャンスがきたんだなあって」

自分の気持ちをストレートに語っている由美さんの表情はかつてなくさっぱりしていて、とても活き活きしていた。

あのヤンキー調な口調も、いつの間にやら普通に女性的なそれになつてるし。

「由美さんは、何がきっかけでそういうコトに興味を持ったんです？」

なんとなく、もつと喋つて欲しかった。

正直、今夜を過ぎれば由美さんはぐーっと遠く、手が触れ合えない世界の人になってしまいそうで、ちょっと寂しい気がしたりしたから。

で、そんな質問を向けてみると、

「ちっちゃい時から、いろんな服のデザインを考えるのが好きだった。小学校の時なんか、クラス全員の服のイメージとか自由帳一冊に描きまくったコトもあったなあ。そんな時からだよ、ファッション系の仕事に就きたいって思ったのは。でも、アタシん家はえらく金に困っていたから、そういうハナシをすると親がイヤな力オシやがんの。もつときちんと将来のことを考えろ、とかって。ムカついたなあ。だからアタシ、思いつきり暴れてやった。つっても、たかだか貧乏家の片隅をぶっ壊してもしょーがないから、どーせならこの辺りの連中を片っ端からシメてやろうと思って。結局はやつちまっただけさ」

やり遂げるというのもカンタンな話ではないと思いますが……。

それはともかく、彼女の親がいいとか悪いとかは別にして、自分の夢とか希望とかを一番身近な人に否定されるくらい悲しいことはないよな。

そうやって言われた時の由美さんの苦しさ、何となくわからなくもない。

「ま、自分でバイトして稼いで専門学校に行くとかいう方法もあったんだろっけどさ。アタシもともとバカだったし、勉強してどうにかできるとも思えなかった。へんちくりんな遠回りをかましてしまっただけどさ……それはそれで、今となりや良かったよ。アンタ達みたいなの、こんなアタシを受け入れてくれるいい友達に出会えたんだし」

にっこりと笑った由美さん。

真っ向からそれを受けた俺は、どうしようもなく泣きそうになった。

この前、ポイズン達とやりあった時もそうだったが、俺のことを「友達」だつて、言ってくれている。

今気がついたけど、彼女が言うときの「友達」って、とてつもなく重い意味がある。

俺、こんなに素晴らしい人に支えてもらっていた。

正直寂しい気持ちになるけれど、今は俺の方から全力で賛成してあげたい。

じゃないと……申し訳ないよな。

「由美さんの望みが適うときがきたんですから、思う存分やってきてください。離れた街で暮らすようになっても俺達はいつだって、由美さんのことを待っていますから」

「すまねエな、急にワガママ言つて。なんか、タツにしか言えないような気がしたんだ」

そうか。マサにも言つてなかったんだ。

「なにをワガママなもんですか。由美さんには由美さんの人生を選ぶ権利があつて、その努力をしてきたんだ。チャンスは活かさなかつたら、なかつたのと同じコトになつちやいますからね。たとえほかのみんなが反対したとしても、俺は由美さんの選んだ道を支持します。俺にはそれくらいしか……由美さんの恩に応えられないから」

「バカヤロー。カタいコトばかり言いやがつて……」

立ち上がるなり俺をぎゅっと抱き締めた由美さん。

もしかしたら、泣いていたのかも知れない。

でも、決して涙は見せない人。俺は今まで由美さんが泣いたのを見たことがない。

二、三回、ぎゅっと強く抱き締めてから離れると

「ま、そうはいつでも新幹線に一時間も乗れば会えるところにやいるんだ。地球の裏側に行くワケじゃないんだしな」

由美さんは可笑しそうに笑った。

「そうですね。ナーちゃんと葵さんとドルファちゃんの服、引き続き見立ててもらわないといけないんですから。これからもよろしく願いますよ?」

「へへ……美人の着る服は高くするからな?」

それは……できるだけ手加減願いたいものです。

「じゃあ、アタシ、行くから。色々と面倒くさいコトが多くて、さ。今日も一日あっちに行ってて、今から帰って今度はこっちの準備なんだよ。ゆっくり飲んでるヒマなんかありやしねエ」

「はい。忙しいのにちゃんと会って話してもらって、ありがとうございませう」

頭を下げた。

「礼とかすんなよ。アタシ達の仲だろ。気持ちが悪イじゃねエか」
由美さんは去りかけたが、ふと足を停めて

「それから、さ」

俺の方を向いた。

「アタシ、さみしいのはキライなんだ。だから、さっさと行くよ。とりあえず、明日には行っちまうから。みんなにはタツの口から伝えておいてくれ。ホントに勝手ですまねエけど、アタシの最後のワガママ……聞いてくれよ？」

由美さんらしいな。

みんなは多分、さよならも言えないで別れたって知ったらすごく悲しむだろうけど。

ま、永久の別れなんかじゃないんだ。

そこは一つ、由美さんのリクエストに応えることにしよう。

「わかりました。きつと、そのように」

「ありがとうよ。またな！」

去っていく彼女の背中を見送っている俺。

楽しいことは、いつか終わりがやってくる。

由美さんがいた毎日は刺激が多くてドキドキで楽しかったけど、どのみちこういう日があることを覚悟していなくちゃいけなかった。もう二度と、武装天女は戻らない。

今までの日々はかえってはこない。

でも、いいじゃないか。

自分の夢を追っていくこれからの彼女には、武装天女なんかふさわしくない。

由美さんなんだ。

そしていつまでも由美さんは みんなの由美さんだから。

家に戻っても、俺はナーちゃんや葵さん、ドルファちゃんには話さなかった。

なんでって……マサがいなかったからだ。みんながいる時を見計らって話をしようと思っていた。じゃないと、なんかフェアじゃないって気がした。

翌日の夕方になって、上手い具合にぶらりとマサが遊びに来た。

「タツよオ、この間から由美さんに会わねエんだよなア」

俺の部屋でごろごろとしていたヤツが、不意にぼそっとそんなことを口にした。

「そのことなんだけど……実は、話があるんだ」

ちょうどナーちゃん、葵さん、ドルファちゃんもそろっていたから、俺は昨晚の一件を切り出した。

四人は俺の話に黙って耳を傾けていたが、聞き終わるなり

「ええっ!? マジかよ!? それ……マジなのか!？」

大声を上げたマサ。

「由美さま、いなくなっちゃったんですかあ!? そんなあ……」

ドルファちゃん、早くも涙目になっている。

『まあっ! 由美さまが、そんな風に……』

ナーちゃんも悲しそう。

葵さんだけは表情を暗くしつつも、じっと黙っていた。

「でもよオ、由美さん、なんでそうならそうって、言ってくれねエんだよオ! 黙って行っちまうなんてよオ!」

「そおですよ! せめて、お別れくらいは……」

黙って去っていった理由だけは伏せていたから、そういう話が出てくるのもつともだ。

ま、どう転んでもきつとみんな騒ぎ出すだろうと思っていたから、

そこだけは最後に話そうと思ってわざと言わなかったんだよな。

「そオだ！ 今から急げば、何とか駅で会えんじゃねエかな！？」

「……もう、行ってしまったよ。間に合いやしない」

いかにも納得がいかなさそうなみんなに、俺は言った。

「そういう気持ちになるのはもつともだ。でも、今は由美さんの選んだ道をみんなで支えてやるうぜ？ じゃないと、由美さんはいつまでたつても武装天女でいなけりやならないんだ。本当はみんなに会ってから行きたかったと思う。でも、会えば余計に寂しくなっちゃうからって、あえて会わずに行っただよ。……わかってやってくれないか？」

すると

「ええ、達郎様のおっしゃる通りですわ。私達が寂しいからといって、由美さまの邪魔をしてはなりません。心が通じているなら、どこにいてもわかりあえるものだど、私は思います」

ありがとうございます、葵さん。

「……そうですね。私たちはたくさん、由美さまに助けていただきましたもの。せめて今は、由美さまが望んだ通りになっていつていることをお祝いしてあげたいと思いますわ。きつと、由美さまもそのほうがお喜びになるでしょうから」

ナーちゃんもそう言ってくれた。

それを伝えてやると、マサもドルファちゃんも沈黙した。

しばらく、誰も言葉がなかったが

「でも、でも……やっぱり、さびしいよお……」

ぼろぼろと涙をこぼしているドルファちゃん。

だよな。

その気持ちも十分にわかる。

だけど。

由美さんは伊達に俺達のボスじゃないんだぜ？

「……まあ、もう一つだけ、話があるんだけどさ」

四人が一斉にこっちを見た。

俺はケータイを取り出し、受信メールに視線をやりながら

「今日が八月二十二日。で、由美さんの店の新装オープンが二十八日。オープン記念オータムフェアをやるからって、いきなりなんだけどメールがきてるよ。……追伸で『人間の世界じゃない世界のやつらのみ、一部の店員から特典があるかも知れない』だとさ」「ずいぶんな表現なこと。

そのメールをもらったとき、可笑しくて仕方がなかった。

ちゃっかりみんなに一杯食わせたりして。

「えーっ！ なにそれー!？」

泣いていたドルファちゃんが思わず笑い出した。

意味がわかった葵さん、マサも笑っている。

俺がわかりやすく説明してやって、ナーちゃんも苦笑。

『まあっ！ 結局は由美さま……おいでなさいってことですね?』

正解。

多少離れたくらいで、俺達の絆は切れたりなんかしないよ。

一緒に困難を乗り越えてきたんだから。

そしてその絆はこれからもずっと 続いていくだろう。

その49 パンが流行りなんです

九月に入った。

今日から新学期。

夏休みの間に色々なことがあって、俺の環境は一学期の頃と大きく変わったようだ。

それってというのは

「いってきます」

玄関ドアを開けると、そこには一列にずらりと並んでいるミノカサゴやゴンズイ達が。

「達郎さんっ！ いってらっしゅいー！」

「いってらっしゅいー！」

びしっ。

ラインダンスのようにきれいにそろってお辞儀。

ヤクザの親分じゃないんだから、そーいうマネはヤメていただきたい。

家の前を通りかかった近所の小学生が不思議そうな顔で見ているし。

こっぴどくかしいんだけど、と思っていると、真っ青なハッピを着たドツボがささっと寄ってきて

「……達郎さん、留守中のことはお任せください。姫様は我々が命に代えてもお守りしますから。安心して、ご学業に励んでおくんないさい」

物騒なことをいいやがる。

っていうか、今の状況だと却って狙われているのはポイズンの連中の方じゃなかっただろうか。

それにそのハッピ。

背中にでっかく「We are Blue-Fishes」とド派手にプリントしてある。こんなものを、いったいどこから仕入れ

てきたのだろう。

「あのさあ」俺はばりばりと頭をかきながら「別に命に代えなくていいから。誰だって命を落としたらそれまでなんだからさ。なんかあったら、ナーちゃんを担いでみんなで逃げてくれ」

ホントに何気なく言っただつもりだったが、ドツボは演歌歌手的に眉間にぐっとシワを寄せてうつむき、しみじみとした口調で

「我々のような下っ端の者どもにむかつて、なんとお優しい……」。

おい、お前ら！ 達郎さんからありがたいお言葉を頂戴したぞ！

「達郎さんっ！」

「達郎さんっ！」

どうやら奴ら、勝手に士気が高まったようだ。

……もういい。

好きにしてくれ。

ふと、二階の窓に目をやると 葵さんに抱っこされたナーちゃんにここにこして手を振っていた。

高校生活ももう半分を過ぎようとしている。

まだ半分あるなんて、鼻をほじって（みつともないからほじりしないが）安心してはいけない。

そろそろ、真剣に今後の進路について考えなくてはならない時期になるからだ。

進路、か。

どうしたものだろう？

入学した頃の俺は「まあ、学年何番とかでなくていいから落ちこぼれない程度に勉強して、浪人しないようにどこかの大学に進学しつつ、会社に就職か公務員へ」なんていう、よくもまあ夢も希望もない、ついでにあたりさわりもない将来像を描いて満足していた。

一年ちょっと前のあの日、もし釣りに行っていなければ、かなりの確率で俺はそういう道を歩いていたに違いない。想像しただけで吐

きそうになるつまらなさだ。

しかし、今の俺にはナーちゃんがいる。

俺の一日の半分以上はナーちゃんと過ごしていて、彼女とは結婚の約束までできているんだな。初めの頃こそ人魚のオキテ云々事情はあったが、アップダウン強めな紆余曲折を経て俺達の絆は切つても切れない、とかいうよりも俺の両親含め周りの連中全員が「いいんじゃない？ それで」状態。ブルーフィッシュだけでなく、ポイズンやレッドバック、バランスの連中にいたるまで、すでに俺とナーちゃんの婚姻の儀式はいついどこで、のレベルで噂になっているらしい。

現実には、アジヤニシンのおばちゃん（資格好はイワシヤールの）達がやってきて

「姫様。そろそろ、婚姻の儀式でお召しになる衣装の下準備を……」
なんて言いながら、ナーちゃんの身体測定をして帰っていった。

おばちゃん達の手際によさに呆然としていると

「ブルーフィッシュのみなさんの気持ちですから、ありがたくお受けしますの。……よろしいでしょうか？ 達郎さまっ！」

嬉しそうにはしゃいでいるナーちゃん。

ま、いいんでないすか。

気取つても力んでもしやらない。

楽にいきましょう、楽に。

……俺、日増しにアバウトさに拍車がかかっているようだ。

パワーが一パーセントも出力されない状態でとりあえず午前中を終えた。

「夏休み中は毎日予備校でした！」的ガリ勉野郎ならびに優等生どもを除き、その他中途半端軍団はぐったりしている。力いっぱい夏を満喫し終えた直後からかったーい授業に放り込まれちゃあね。

我が家では幸子の夏休みボケが継続されており、朝になって今日から俺が学校だという事実気がついた彼女は

「あら？ 学校、今日からだっけ？ ……月日が経つのは早いのね

え

んな感心、要らねエよ。

要は、俺の弁当なんざ頭の片隅にすらなかったんでしょ？

「仕方がないわあ……はい、お昼代」

ありがとうございます。

でた！ 必殺五百円玉。幸子は何かというとすぐに五百円玉を渡してくる。一度、ワザとなのか本気なのか、お年玉が五百円玉一個という事態もあったっけ。

コンビニは学校から歩いて十分かかるんで、行くのは誠に面倒くさい。

大して美味しいパンなど一個たりともおいてないのだが、購買でガマンしておこう。

今日はほどよい気温で暑くない。

俺はパンとコーヒーを持ってでれでれと中庭へ行き、適当な石段に腰掛けてそれを食っていた。

青空をまったりと流れていく雲を眺めながらパンにかじりついでいると

「隣、いいかな？」

横から声をかけてきたヤツがいる。

峰山の野郎。

もれなくフィールーシャ付き。

俺はちらと一瞥をくれてから「お好きなように」コーヒーをぐびつ。

夏休み前にごたごたとあった時点では、こいつも油断ならぬヤツだと思って警戒する気持ちがあった。

だけど、今は……ぶっちゃけ、どーでもいい。

目の前にいるヤツにいちいち敵だ味方だとマーキングしていたら、おてんとう様の下で大手を振って歩けないよ。

そんなことよりも、このメロンパン 意外と美味しいな。

葵さんのために買って帰ろう。彼女は特に好き嫌いしない人だが、

このところパンにハマっている。とりわけ、美味しいメロンパンに出会って、子供のように満面の笑みを浮かべていかにも美味しそうに頬張るのだ。この前東京に出たときも、由美さんの店の近くで店を広げていた移動販売のパン屋を見つけるなり葵さんはダッシュで駆け寄り、十個も買ってマサヤナーちゃんをビビらせた。帰りの新幹線の中で、それを幸せそうに食べていたっけ。ちなみにドルフアちゃんの好物はカレーパンである。

峰山は静かに石段に腰掛けると、俺の方に首をむけ

「お昼はパンとコーヒーか。食べないよりはいいけど、栄養が不十分じゃないか？」

苦笑している。

十分に理解してますよ。

だけどいけません、うちの幸子が弁当つくってくれないんですわ。

お金持ちのおぼっちゃんに詳しく説明を要する事柄でもないから俺は

「……やむを得ない」

短く答えると、峰山は手にしていた弁当箱を開けて見せて

「口に合うかどうかかわからないが、良かったらこれもどうだい？」

僕には多すぎるんだ。うちの家政婦さん、フィルの分も要ると思っ
ているらしくて、いつも多く作って寄越すんだ」

そこには、形状、彩り、どれをとっても申し分のない、見るから
に食欲をそそるようなサンドイッチが！

「じゃあ、遠慮なく」

手を伸ばしてひとかけ頂戴し、ためらうことなくがぶつ。

うむ。

これは美味しい。

タマゴのやわらかさとパンのしっとり感が絶妙、それにレタスも
新鮮で歯ごたえがよろしい。

俺が美味そうに食っているのを見ていた峰山、自分も食べ始めた。
フィルはナーちゃんと同じく、水を飲んでる。

「どうやら、問題ないみたいだね。まだあるから、食べてくれ。美

味しそうに食べてもらったと知ったら、家政婦さんも喜ぶだろう」「
本当は、お前が食って美味かったって、そう感想を言ってるべき
きだろうけどね。

まあ、いいや。

残して帰る方がよろしくない。

俺はとりわけ好きなネタに分類されるツナサンドをもらってしま
った。

ああ、美味しい！

ホテルメイドの調理パンみたいで、かじった瞬間から「ふわっ」と
幸せが脳天を直撃してくるこの感じ！ しかもこのポリウムと
きたら！ この野郎、いつつもこんな美味しいものを食っているのか！
無我夢中で食っていると

「……ブルーフィッシュはだいぶ、持ち直したようだね？」

ん？ とも言わず、顔だけで返事した俺。

俺の反応を確認した峰山は視線を青空へむけて

「このひと月ちょっとの間、いろいろあってね。フィルの元に海獣
組からトドとアザラシのグループがやってきた。彼等から聞い
たよ。ブルーフィッシュの姫君と婚約した人間が海の世界では相当
な人気があつて、リーネ配下にあつたポイズンやレッドバックが彼
女から離れてブルーフィッシュと手を結んだだけでなく、バランス
ーや南氷洋のPA（プリティなアニマルという意味らしい）なんか
もすでにその動きがあるようだ。そして、その人間とは」

再び俺を見て「君でなければならぬハズだ」

彼の言葉がわかるのか、いつの間にやらフィルがじっと俺に視線
を注ぎ続けている。

俺はコーヒーを流し込みつつ

「……で？」

「いや、潰滅の危機にあつたブルーフィッシュをそこまで立て直し
たのは、瞠目に値すると思つたんだよ。他意はないさ」

「ほい」

声にこそ出していないが、俺があんまりにも淡々とし過ぎているせいか峰山が明らかに面食らったような表情をしたのがわかった。

が、腹芸は十八番の男だから、そこはすぐに冷静を装いつつ

「ま、僕もこうしてフィルを愛しているし、彼女のために海の世界でも然るべき立場を確保してやりたいという気持ちは、正直ある。

……だから、何か必要な情報があるならぜひともお教え願いたいと思ってるね」

それ、ホントかね？

フィルのためというよりも、その実MCG（峰山のおやつさんの会社と、そのグループ会社だ）のためじゃないのかね？

……まあ、いいや。どっちでも。

こいつが人魚のフィルを愛していようとしまいと、将来自分が支配するであろう会社に有益なように仕向けようとか思っているといまいと、ぶつちやけ 俺の知ったコトではない。

サンドイツチを三口ほど食べてしまったから

「お前、この夏休み……どこ行ったの？」

つと、訊いてみた。

えっ？ という顔をした峰山。

いきなり話題を変えてしまったが、これにはちよつとした意図がある。

「夏休み中はまあ、別荘があるから、そこへ行ってたよ。今年は特に暑かったからね、奥山北にある別荘で二週間、それからフィルのために十日ばかりタヒチへ連れて行ったんだ。山ばかりでは寂しいっていうからね」

タヒチね。

なんとまあ、豪勢なお出かけだこと。

つてか、そんな海外くんだりの話はどうでもいいとして、奥山北に行ったというのが興味深い。

そこは俺が行ったじいちゃんの家があるところよりもまだずっと北の方で、とんでもなく自然が豊富な地域。リゾート開発が認めら

れていない国立だか国定公園のエリアにほぼ隣接しているから、そういう状態になっている。

「……で、山の世界はどうだった？」

俺が尋ねると

「ああ、いい所さ。手付かずの自然が残っていてね。毎朝早起きして散歩していたんだけど、彼女が」峰山はフィルの顔を見た。

「なあに？」という表情で視線を返した彼女。

「あんまり早起きが得意じゃないんだ。だから、二、三日もしたらベッドから出るのを嫌がってね」苦笑して「だから、あんまり散策できなかつたよ。二年ぶりの奥山北だったのに」

彼が言うと、ぷつと怒ったような顔をしたフィル。

うちのナーちゃんも朝は苦手だが。

「じゃあ、何も変わったことはなく……か？」

「そうだね。空気がきれいで食材もよかつたから、十分な休養にはなつたよ」

ぷつ。

思わず、笑いそうになった。

奥山北の空気とか食材とかフィルの低血圧（？）とか、そういうことを知れたかつたんじゃない。

俺はわざと「山の世界はどうだった？」って訊いた。

やっぱり、こいつらには顔を見せてくれなかつたらしい。

誰

がつて、山の世界の民が、だ。

それが聞ければ十分。

俺はコーヒーマシンのパックを握りつぶしながらよっころしよ、と立ち上がり

「……お前んちの家政婦さんによろしく伝えてくれ。サンドイッチ、金払ってでもつくって欲しいって、絶賛していたヤツがいたって、さ」

「あ、ああ……」

ぼかんとしている峰山。

フィルムもまた、ヘンな顔をして俺を見ている。

二人を残したまま、その場を去った俺。

海の世界の勢力がどーしたとかこーしたとか……知ったコトじゃない。そんなに気になるなら、自分で調べればいいだろう。知らんぷりこそしているけど、どうせ色々情報握っているクセにさ。

そう。

今の俺がしなければいけないのは　葵さんのためにメロンパンを買うこと。

売り切れたら大変だ。

その50 貝の恩返し

間違いなく偶然なのだが、重なる時には重なるものだ。

夕方、てくてくと家路を急いでいた俺。

いつもの道が道路工事していて歩きにくかったから、港湾地区の方を遠回りしていた。そっちの方が車の数も少ないし、歩道がキレイで歩きやすいんだな。ついでに、晴れている日は港の景色がとてもよい。

俺は左腕に紙袋を抱えている。

メロンパンとカレーパン入り。昼間、峰山と話をしていたせいで購買のメロンパンは売り切れてしまっていた。納得がいかないのので下校してから帰り道の途中にあるパン屋に寄った。で、ついでにカレーパンも発見したという次第である。だからなんなのでしよう。

まあ、パン屋さんのパンだから、とても香ばしい二オイがさつきから俺の鼻腔を「ほれ、ほれ！ 食いたいだろ！」と嫌がらせのよう刺激してきている。

一個くらいは、と言いたいところだがガマンしよう。

葵さんやドルファちゃんが、めいめいの大好物を食べる時の様子といったら

「まあっ！ 美味しそう！ いただきまーす！」

両手でパンをもつて口へ運んでいき「かぶっ」とやってから「にっこー！」と笑顔になる一連の姿は、DVD&ブルーレイディスクにして売ればたちまち十万枚はいくだろう。好きなものを無心に頬張るときには、誰も無邪気になるものらしい。

そういう葵さんとドルファちゃんが見たいから、俺は食わない。

九月に入り、やや日が短くなったようだ。

右側の水平線はすっかり夕陽色に染まっている。

そういや、由美さん元気かなあ……などとぼんやり考えながら歩いていると

「……おっ、と！」

何かでかいものにつまづきそうになった。

慌てて回避した俺。

誰がどこから持ってきたのか、どでかくて平べったい岩が道の真ん中にある。カタチは小判型というよりも、割と丸に近い。切ったトマトの端っこのようだ。

すると。

「……あらあら、ごめんなさいね、人間のおにいさん。私がこんなところにいるものだから」

どこからともなく、しわがれたおばあさんの声でした。

ここで一般人なら「えっ？ どこ、どこ？」とあたりをきよるきよる見回すであろうが 俺はその声の出所が一発でわかった。

しゃがんでみると、足元の岩が小さく「ぱかっ」と口を開け

「あれ、まあ！ 私の声だって、すぐにわかったのかい？」

「わかるよ。海の世界に友達が多いものでね」
貝。

殻の組織だな。以前、ポイズン達がりーネの命令で襲撃を仕掛け、返り討ちにあったという連中である。

こりゃあ、どうやってもボコれるワケがないよな。

俺は笑いそうになった。

声からして相当なお年寄りでさえ、こうなもの。泣く子も黙る力タさだ。

しかしこの形状、ホタテとかアサリとかシジミではなさそうだな。ホッキでもムールでもなくて、だがどこかで見たことがあるような。

頭の中の図鑑をペラペラとめくっている俺。

「人間のおにいさん、ちょっとだけ、頼みがあるんですがの」

「はいはい」

貝のおばあさんは俺に何か頼みごとがあるようだ。

聞いてやるうと耳を傾けていると

「おう、いたぞ！ あそこだ！」
バタバタバタバタ……

突然目の前に現れた魚人、いやあれは海獣人といったほうがいいのだろうか。

半三日月状の背ビレが生えたブルーグレーの背中に、小さく鋭い両眼、ぐつと裂けた口の端にまで並んでいる「正三角形」なキバ、キバ、キバ。

ああ、とうとうおいでなすったか。

奴らこそが真正銘海の世界のギャング「シャーク」だ。リーネの命令を受け、ポイズン達をことごとく柳川鍋にってしまった、残酷非道な奴ら。

数は四匹ばかり、俺と貝のおばあさんをぐるり取り囲み

「ここにいやがったのか、貝のババア。手間かけさせやがって」

「ケガしたくなかったら、大人しく来てもらおう」

おやおや。

大の男が揃いも揃っておばあさんを拉致ろうとは。

「あれ。私や、ごめんくださいと言っただけどねえ。今日は殻の組織の集まりでこっちに来たけど、明日は英虞湾で貝老会があるから帰らなくちゃいけないんだけども」

このおばあさん、サメに囲まれてもちつともビビってねエ。

淡々と自分のスケジュールを説明しているし。

ってか「英虞湾」って、まさか、このおばあさんは……！

「ババアの都合なんかは聞いてねえんだよ！ リーネ様が来いって言うてんだ！ 黙って来ればいいんだよ！」

「……その人間、どきな。邪魔すりやあ、お前もケガを、ケガを」

俺の肩に手をかけようとしたシャーク野郎、そこで固まっていた。ヤツのいかにも凶暴そうな目にじつと視線を打ち込んでいる俺。ほんのわずかも逸らすことなく、ゆっくりと立ち上がった。

「お、お前……」

「シャーク野郎、気圧されたようにずざっと一歩後退り。」

「俺は無言のまま、ヤツの目に焦点を合わせ続けている。」

「あ、あ……ああ……」

「ついにヤツは大人しくなった。」

「俺のただならぬ気配を察知した残りの三匹は、明らかに警戒の色を浮かべて」

「な、なんだア、お前！？ お、俺達がどこの誰だか、わかって」

「俺の右前にいるヤツ。」

「間合いなんか全くない。そいつがその気になれば、俺はあっけなくかみ殺されただろう。」

「……」

「ただ……恐ろしいとか戦おうという気はさらさらなかった。」

「次はお前か。」

「ひたすらに気配も殺気も消し去って、ただ無言でヤツの目を見据えている俺。」

「あ、あわわ……」

「虚勢を張っていたそいつも、間もなく怯えたように引き下がっていった。」

「……」

「とって、小難しいワザを使っていたワケじゃあない。サメなんていう生き物は基本的に「ナワバリ」を張って暮らしている。」

「攻撃しようとするのは、よそ者がそのナワバリに侵入してくるからだ。どっかの映画よろしく、いきなり「がぶっ」とかというのは基本的にありえない。何度か威嚇行動を繰り返した末、それでも退去しないヤツに対して攻撃をするという習性がある。ハチなんかも一緒らしいんだけど。」

「しかしながら、今のこの状況。」

「言ってみれば、俺と貝のおばあさんがいるこの場所は俺達の「エ」

リア」だ。

そこに奴らが逆に踏み込んできたワケだから、俺はまったくもって無言の威嚇を発動した。かといってただ目線を捉えていただけじゃなくて「争うというのなら、死に物狂いで戦うけどもいいんだろうな？」という、渾身の気合い入り。無論、黙って退くのなら手出しはしないという意味も込めているんだけども。

いくらサメが海のギャングだからって、手当たり次第に攻撃を仕掛けるようなヤツらじゃないことは知っていた。ポイズン達の話聞いて奴らの存在を知って以来、俺は俺なりに図書館へ行っただけと調べたワケだ。

だから 本当に悪いのは、半分人間の姿をもっていて、人間同様の頭脳をもっている人魚・リーネのヤツだといっていい。彼女がこいつらをアゴで使って悪事の片棒を担がせているのだから。

ただ、シャーク達はやはりボスであるリーネを恐れているらしく「おいっ！ ナニやってんだよう！ ババアをさらって帰らなかつたらリーネ様にどんな罰を与えられるかわかってんだろう！？」

俺の前にいる一匹が叫んだ。

「だ、けどよ、こいつには……手出しできねえよ。なんか、スゴイ圧されちまったよ」

「もしかして、ナタルシアのダンナってヤツじゃないか？ だとしたら俺達、相手にしないほうが」

すっかり気合で圧倒された二匹は腰が砕けてしまっている。

しかし

「ああっ！ だらしのねえ奴らだ！ 要は、このババアさえ連れ帰ればいいんだからよオ！」

そう言っただけの前のサメ野郎はおばあさんに手を掛けようとした。

「……待てっ」

さっと間に割って入った俺。

するとヤツは

「邪魔すんじゃないエ！ 人間のクセによオ！」

がばっ

でかい口を開けて俺に噛み付こうとした。

「おにいさん！ ダメよ！ お逃げなさい！」

おばあさんがそう言ってくれたが、俺は動かない。

そのギザギザで一度喰らいついたら決して外れないというサメ独特の鋭いキバが俺をとらえかかった。サメの歯は獲物に噛み付くと外れない構造になっていて、入れ歯のようにかぼつと外れてはまた生え変わるといふ機能を持っている。……この状況でそんなうんちくは必要ないか。

しかし。

「あ……が……が……？」

ほとんど頭を丸ごとかじられているといった姿勢で、サメ野郎は動きを止めた。

あと数ミリアゴを動かしていたら、俺は首ごと持っていかれていただろう。

何となく生臭いヤツの口の中をしげしげと眺めている俺。

「お前……奥の方に虫歯が出来ている。ちゃんと治せ」

「……」

そのまま、サメ野郎は固まっていた。

しばらくして、やっと離れたヤツは

「お前、なんで、逃げないんだ？ 俺はお前をかみ殺そうとしたんだぞ？」

俺の視線はヤツの目にロックオンしている。

じっと目力押し込みながら「……お前は最初から、俺を噛み殺すつもりなんかなかった。脅しのつもりだったんだろう？」

そう。

本当に殺すつもりだったら、黙って噛み付いてきていたはず。

仲間が恐れる様子を見ていたこいつには、俺を殺すことなんかハナから出来やしなかった。俺は放り出したパンの紙袋をゆっくりと拾い上げながら

「お前達だって、本当は海の世界の安定を望んでいるはずだ。けど、力をもった人魚族に押さえつけられていて、仕方なく服従しているんだろっ？」

「……」

「本当の人魚族は、そんな真似はしないハズ。人魚っていうのは愛情が深くて優しい生き物だ。だから、ナーちゃんのところには今、たくさんの中が集まってきている。お前らがさんざんにいじめた、ポイズンの連中もな」

そうして最後にぐつと強く睨んで

「……リーネに伝えておけ。近々、お前の顔を見に行つてやるつてな。積もる話があるんでね」

周囲であうあうと立ち竦んでいたシャーク達。

やがて

「くつ、くそオ！」

ばたばたと退散していった。

奴らの青みがかつた灰色の背中を眺めていると

「あれあれ……おにいさん、とってもお強い方で。どうもどうも、ありがとねえ」

貝のおばあさんがぱくぱくと殻を開け閉めしながら礼を言ってきた。

俺はまたしゃがみこんで

「で、おばあさんは帰らなくちゃいけないですよね？ どうやって帰るんです？」

「おお、そうそう。それなんだけど」

「ああっ！ 美味しいメロンパン！ ありがとうございます、達郎様っ！」

「うまいっ！ これ、どこのお店のですかあ？」

世界に平和が訪れたくらい幸せそうな顔でパンにかじりついてい

る葵さんとドルフアちゃん。二人とも、無邪気でカワイイ。

と、その背後では幸子が

「んまあ、ステキっ！ こおんなすごい、おとーさんなんか買ってくれたこともないのにい！ どおしましょー!？」

狂喜乱舞で踊り狂っている。

無論、近所のパン屋で買ったパンのお土産ごときで喜ぶような女ではない。

ヤツの手には、軟式野球のボールより一回りほど小さい、しかしながら目も眩むような美しくどこでかい真珠が。いったい幾らになるのかは知らないけどさ。

シャーク達が逃げ去ったその後。

おばあさんが英虞湾に帰るために俺に頼んだことは

「はあっ!？ クール宅急便!？」

「そうそう。あれが楽でいいのよ。黙っていても、英虞湾に送ってくれるからねえ。涼しいもんだよ。ふあふあふあふあ……」

ほんわかと言ったのけたおばあさん。

自分を宅急便で送ってくれなんて、アンタ……。

仕方がないので俺はケータイで宅急便を呼び、おばあさんを梱包（この表現ははなはだ問題があるものの、事実だから仕方がない）してもらった。

どうやら、生き物を運んでくれるサービスもあるらしく、業者のおじさんの手によって小さめな水槽の中に納まったおばあさんは「いやいや、すっかり手間かけさせちゃったねえ。おかげで助かりました。助かりました」

「今度は迷わないでね？ 暑いから、干物になっちゃうよ?」

どうやらおばあさんは、宅急便の営業所を目指して移動中に迷子になったらしい。

フタを閉めようとすると、おばあさんは

「ああ、そうそう。これ、送料とお礼ね」

カラの間から、キラリと光る何かを差し出した。

それを目にした俺は、ようやく思い出した。

このおばあさん……アコヤ貝！

英虞湾にいて真珠を生産してくれるという、人間にとってはとてもありがたい貝である。

しかし、その真珠、パールみたいにバカでかい。

「で、でもこれ……受け取れないよ？ 割に合わないから」

そう言っただけで遠慮すると

「ふあふあふあ……遠慮しないでいいから。私や、こんなものは幾らでも作れるんだよ。人間の皆さんはとってもありがたいがたがるんだけど、ナニがいいのか、このババにやわからんねえ。ふあふあふあ」
かくして、アコヤ貝のおばあさん・アコばあちゃんは無事に故郷の英虞湾へと帰って、いや配送されていった。

何気なく助けてやった貝のおばあさん。

そしてボコリ合うことなく退けたシャークの連中。

たまたまたったといえはそれまでだが 数日ののち、この出来事が事態を大きく旋廻させることになるうとは、俺は全く想像もしていなかった。

その夜。

『達郎さまっ！ このドレス、いかがでしょう？』

白とスカイブルーが程よく調和した、ナーちゃんのドレス。

ニシンシアさんとアジーノさんが仮で仕立てたものを持ってきたのだ。仕事が早い。

うん、似合っているよ。カワイイ。

でも、でもね……

『いいんだけど……全身スケスケはマズいな。せめて胸のところ、もう少し見えないようにしてもらった方がいいと思うけど？』

『そおですかあ？ じゃあ、達郎さまがおっしゃるのなら』

ドレスの裾をつまんで首を傾げている。

デザインは悪くない。

悪くないのだが オールシースルーはありえないだろう、普通。胸すら隠れていないのだ。

そんなエッチ度全開のドレスじゃ、親父を招待できなくなってしまう。

その51 ケリ、つけます

アコばあちゃんと出会った日から数日後。

夜、せつせと宿題を片付けていると、ふらりとマサがやってきた。

ヤツは俺の部屋に入ってきてどつかと腰を下ろし

「ああ、ノド、かわいた。……なんか、ねエ？」

「はい、ただいまお待ちいたしますわ」

俺が立とうとすると、葵さんが代わりに冷蔵庫からコーラを持ってきてくれた。

一・五リットルのペットボトルからコップに注ぐことなく、マサはそれを一気に飲み干し

「うふっ……げぶ！」

宇宙誕生のビックバン級にでっかいゲップを一発かましやがった。もう一度ふうつと大きく息をつき

「ああ……落ち着いた！ うめエよなア、コーラはよオ！」

「……」

ヤツをじつと見ている俺。

いつもなら黙っていてもうるさいのに、今日はなんか様子が違う。後ろめたい隠し事をしている、というのではなく「隠れて何かを達成しちまった」という感じ。そういう気分の高揚をして、マサをいつになく言葉少にしているものと見た。

しかも、ヤツはこんな時間だというのに制服姿で、あちこち泥だらけだ。

考えられる「達成」は一つしかない。

「おい、マサ」

「ああ？ なんしたア？」

俺の顔からは表情が消えている。

「お前……今日はどこやってきたんだ？」

「おオ。なんも言ってるねエのによくわかったな！ わかったな！」

愉快そうにケラケラと笑っている。

「聞いて驚くなよオ」

体ごと俺の方へ向けると

「……近水、カンペキにシメた。これで全部、キンコー（近海工業高校のことだ）のシマ。ウケるだろ？」

それからぐずぐずと、ヤツは俺に事情を説明してくれた。

七月の夏休み前、ちょうど潮清祭の最終日、マサは近水のト
ップ・魚住とナンバーツーを続けてボコツた。

それで大人しく引っ込めばよかったものを、魚住達はご丁寧に復
仇を企てたらしい。

かといって、キンコーの連中は近海でもダントツに強い。迂闊に
殴り込めば返り討ちに遭うのは火を見るより明らかだった。

そこで魚住達はマサの下についている近海星島という学校の連中
を挑発して圧倒的な数で叩きのめしてから

「キンコーの鮫島に言っとけエ。臨海小公園でケリつけてやるって
よオ！」

顔中を腫らした近海星島の連中がマサのところに泣きついたのが
昨日のこと。

「ああ？ 近水の魚住がア？ …… あいつ、バカじゃねエの？ 懲
りねエ野郎だぜ」

そう言っただけで一人臨海小公園に乗り込もうとした彼を
「……待った。どうも、話がカンタンすぎる」

と、止めた者がいる。

キンコーナンバーツー、マサと親しい勝海勇次という男で、普段
マサが「ガツ、ガツ」と呼んでいるヤツである。成り行きで二、三
度会ったことがあるが、不良かつケンカっ早い人間にはとても見え
ないほどに冷静なヤツだった。ただ……でかい！ そのでかさゆえ
に、まともにケンカを売ろうとするバカはこの近海にはいないよう
である。

そのガツ、体力バカ揃いの近工にあってはレアな頭脳派なようで

「どうも、ヤツらの狙いは近工つぶしにあるような気がする。お前一人を臨海小公園に呼び出しておいて、お前がいなくなったスキを衝いてここへ寄せてくるだろう。臨海小公園には……ヒデ！

お前が行け！」

ヒデっていうのはマサのダチで、阿波野秀行という。

これも三度のメシよりケンカが好きだなだから

「おお！ やっちゃる！ 後から来たって分けてやんねエからなア！」

そして、マサ本人が臨海小公園へ行った振りをしつつ彼は近工へと引き返し、ガツの作戦でヒデはわざと遅れて出向いて行った。

果たしてガツの読み通り、近工には近水生が大挙して押し寄せ

「キンコーのクソども！ 出て来いコラア！ ぶっ潰すぞオボケエ！」

そこへ、専用の木刀を担いでのっそりと出て行ったマサ。

「……出て来てやったわ。カクゴ、出来てんだろオナア？」

近水生の連中は一斉に、白昼にバケモノを見たような顔になった。

臨海小公園へ行っているはずのマサが、しかもたった一人で現れたからである。

こいつの辞書の最初のページは「先制攻撃」とでっかく書いてあるらしい。

「ぜんぶ死ね、コラア！」

近海最狂の男に突っ込まれては、腰の抜けた近水生に成す術はない。

しかも、四分五裂してメチャクチャになっているところへ「マサア！ 半分こじゃあア！」ガツをはじめとする近工奇襲部隊が包围し、近水生は一人残らずボコられた。

三十分後、死屍累々（死んじやいないけど）となった近工前庭。ふと気がつくと、肝心な魚住、そしてナンバーツーがいない。

マサは倒れている一人を引き摺り起こし

「コラ！ 魚住はどオした、魚住は！？ あア！？」

「う、魚住さんなら……近水で亀田（これがナンバーツー）さんと一緒にいます……」

突き飛ばしざま、タメ蹴りを入れてふっ飛ばすと

「とことんシケた野郎だぜ。テメーは高みの見物か。……ぶっ殺すつきゃねエわ」

「マサ、手伝おうか？」

「いや……いい」

彼は再び木刀を肩に担ぎ、学校を出て行くこうとして足を停めた。

「おめエら……どこのどいつが相手だろうと、きたねエマネだけはすんじゃねエぞ？」

そしてマサはその足で近水へ行き、魚住達がいないとわかるやあちこちと歩き回って居所を突き止め 完膚なきまでに叩きのめした。

これによつて、近工と敵対する勢力は消滅した。

でもよオ、とマサは笑った。

「……これでオレ、カンペキ退学。ま、別にどーでもいいんだけどよ。許せねエ奴らをボコつて近工を救ったオレはゆうしゃ、つてか？ 八八八」

心の底から愉快そうに笑っているマサ、

正直俺は 泣きそうになった。

こいつ、どこまでバカなんだろう。

愛すべきバカ。

ちゃんと、知ってるよ。

マサが好きでこんなコトしてるワケじゃなくつて、でもそれ以外にこの野郎は 自己を表現する手段を知らない。

親父さんが女つくつてどっか行っちゃまって、今はおふくろさんと二人暮らし。そのおふくろさんも水商売が長くて、いつの頃からか男関係が絶えない。生活のためとはいえ、ろくすっぽ親らしいこともしてもらえないままに育ったマサは一人、自分の居場所を探し続けて日々ケンカに明け暮れた。何度警察のお世話になろうとも、飲

んだくれて男のところにいるおふくろさんが来てくれたためしはない。いつも青い顔をして警察署へ飛んで来てぺこぺこ頭を下げてくれたのは 親父さんの遠い親戚たらいう、おばちゃんだった。そのおばちゃんも、今は健康を害して入院しているらしい。とすれば、誰がマサのことを迎えに行つてやるんだよ？

暗い顔をしている俺に、ヤツはカラカラと笑いながら言った。

「わーってる、わーってるって！ ンなくれエカオ、すんなって！ 別に、ムシヨ入れられるワケじゃねエんだし。それよか」ナーちゃんや葵さん、ドルファちゃんを見て「おめエらがフツに付き合つてくれんのがいいんじゃねエかよ！ オレみたいなパラッパツパーが黙つて家ん中に入ってきたってイヤなカオ一つしねエし。タツなんか、いきなりケータイ鳴らしてきて『力を貸してくれ』って……嬉しかったア！ 思う存分ケンカもできたしよオ！」

よつこらしよ、とマサは立ち上がった。

「んじゃオレ、行くわ。そろそろガツコーでも騒いでも思つし」こいつ、自分から警察に行くつもりだ。

「マサ！」

呼び止めた瞬間、目の前がぼやけた。

「タツおめエ、何泣いてんだよオ！？ ガラにもねエ」

からかうようにヤツは言ったが 俺はずっと忘れない。

マサ、嬉しそうだった。

咄嗟に何て言つたらいいのかわからなくなった俺は

「ドツボさん！ ちょっと！ ちょっと、たのんます……」

十分後。

玄関前にずらりと整列したポイズンの連中。

例によつて、青いハツピを着たドツボがずいっと進み出てきて

「……マサさん、お帰り、お待ちしておりやす」

「おお！ 帰つてきたらよオ……」

マサは声を低くして俺の耳元に顔を近づけ

「女の子！ 女の子！ 海のコでもいいから、紹介して！」

バカ野郎！

こんな時にいうセリフがそれか？

まあ、約束はできねエけど……前向きに考えてやるうとは思う。

「じゃーな！」

手を振りながら、暗闇の中へと消えていったマサ。

一部始終を聞いていた葵さんにドルファちゃん、それに俺から事情を聞いたナーちゃん、言葉もない。

葵さんはそっと人差し指で涙を拭って

「達郎様……。私たちはマサ様に数え切れないほど助けていただきました。なにか、なにかできることはないのでしょうか？」

「あるよ」

俺は悲しそうなナーちゃんをぎゅっと抱き締め

「……みんなで、ヤツの帰りを待っていてやろう。あいつは、待っていてくれる人達がいれば、何よりも喜ぶハズだよ？」

それからややしばらく、俺達はヤツが消えて行った闇を見つめていた。

由美さんが去り、マサもどうなるかわからない。

ふとした瞬間に夏の間の楽しかったコトが甦ってきて呆然としたりしたけれど、俺は立ち止まっているワケにはいかない。

俺が動揺しちまえば、みんなに迷惑をかけてしまう。

何よりも、ナーちゃんを不安にさせたくはなかったし。

でも、嬉しいこともあった。

「達郎ちゃんのウチはここかい？ あたしだよ！」

マサが去っていったからすぐの日曜日の早朝、表からでかい声でした。

あたし？ 誰だよ、一体？

アタマが寝ぼけていて全く回転していない。

ナーちゃんにいたっては腕だけで俺にぶら下がって眠り続けてい

る。

しばらくベッドの上でぼーっとしていると

「たつろーにーちゃん！ ボクだよーっ！」

おおっ！

この甲高い坊やの声は！

途端に脳みそが一気に動き出した俺は、窓際に駆け寄ってぐわらりと開け放った。

窓の下、玄関先にはのっそりと立っているでっかい人影が二つ。

それに羽をばたばたとさせているちっこいヤツは

「やっと起きたかい！ ブルーフィッシュのみんなはもう起きて働いているよ！」

「わーい！ たつろーにーちゃん！」

「おおっ！ トビタローか！ それに」

ジーナさん、そしてジンベエさんまで！

「どーしたんですか！？ 何かありましたか！？」

ジーナさんは、げらげらはははと近所中を叩き起こすような大声で笑って

「どーしたもこーしたもないよ！ 達郎ちゃんと姫様の結婚を祝う連中がブルーフィッシュに押し寄せてきてあたしらの居場所がないんだって！ しばらく、厄介になるよ！」

よくわからないけど、ものすごい嬉しさがこみ上げてきた。

そっか。

来てくれてありがとう、みんな。

……ありがとう。

その52 おかえり

幸いなことに、マサは少ししてから戻ってきた。

数日後の夜、近工のガツからヤツがやってくるといふ連絡を受けた俺達は、速攻で家から飛び出して行った。

たまたまかち合ったのは、偶然にも 新港一丁目のコンビニ前だった。

暗闇に大小多数の人影（魚影もあるが）を認めたマサはびくつとして足を止め

「お、おめエら……そつたら大勢でドコ行くんだア？」
目を丸くしている。

可笑しくて仕方がない。

なんたつてそこにいたのは俺にナーちゃん、葵さんにドルファちゃん、ジンベエさんジーナさん夫妻にトビタロー、ドツボ以下ポイズンな奴ら、それにたまたまやってきていたレッドバツクの連中。総勢で三十名&匹を超えている。出迎えには十分すぎる数だ。

ポイズンとレッドバツクの連中はささず左右に展開・整列して花道をつくり

「ささつ、マサさん！ 海の勇敢なる正義の戦士！ どうぞ、こちらへ！」

「あ？ オレ？」

何が起きているのかわからず、呆然と突っ立っているマサ。

すると、ドルファちゃんが

「マサさん！ はーやーく！ ここまで来てくれたらドルファ……いいコト、し・ちゃ・う！」 ちらりと胸元を見せるようにした。

「ドルファさん！ そのようにはしたくない真似はおよしなさい。マサ様はお疲れなんですから！」

「えー……でも、でもオ！」

葵さんとドルファちゃんのやりとりを聞いていたジーナさん、げ

らげらと笑い出した。

「マサにーちやーん！ 待ってたよー！」

トビタローが羽をばたばたさせている。

「うおい、マサ！ 約束通り、お出迎えだ！ 文句あつか!?」

「出迎え……?」

今ひとつ飲み込めていないようだったマサ。

少しづつそのキツツイカオをほころばせて

「……おめエら！ オレを待っていてくれたのかよオ！」

荷物を放り投げるや、花道ダーツシュ!

「マサさんっ！」

「お帰りなさい、マサさん！」

こうしてマサは無事に復帰した。

想定された通り、近工は退学処分になるらしいけど 近工だろ

うとそうでなかるうと、お前は友達だ。

だから、こうして待っていたんだぜ?

「そうそう、そうだった」

俺はポツケからケータイを取り出すと、メールを開いてマサに示した。

『マサに伝えてくれ

とーとーやりやがったか、このバカ

まーいーや

お前らしくていいよ

やっぱりお前はアタシの大事な後輩だよ』

「コレ、由美さん……だよなア?」

「おお。逐一報告入れてるんだぜ? 俺達のボスだから」

「そっかア……」

しみじみと呟いたマサ。

この後輩、そして今東京にいるその先輩はやっていることが一緒
近海一帯のガッコーを制覇しながら、責任を負って独り近工を退

学させられている。

そういつコトもあって、色々と思うところがあるのだろう。

「ま……少し、ゆっくりと考えようぜ？ お前はなんだかんだで脳みそと氣イ使いすぎてきたんだよ。ここらでちよっとぐらい、休んどけ。人間、やり直せばなんとかなるもんだし」

俺は笑顔を作ろうと思ったけど、なぜか笑えなかった。

自然、真面目なセリフになっちまった。

でもまあ、それで良かったのかも。

「お、おオ……すまねエな」

そしてヤツはこう付け加えた。

「オレ、もう、バカなマネはしねエから。おめエらに迷惑、かけちまうし」

次の日。

これまでの人生の疲れをリセットするかのようには俺の家で夕方まで寝こけていたマサ。俺が学校から帰ってくるとむっくりと起き

「あア、よく寝たア！ なんだか、ハラ減ったぜエ」

俺は制服を着替えながら

「マサ、メシは外な。今日はうちの両親いないから。何にする？」

「あ？ あア、何でもイヤ。オレ、こう見えても好き嫌いはねエんだぜ？」

ケラケラと笑った。

いいことだ。

俺なんかかなりのカテゴリで好き嫌いあるし。そのうちの何割かは幸子のせいなんだけどね。

「じゃ、もうちよいしたら行こうぜ。その前に、葵さんが風呂沸かしてくれてたから、入って来いよ」

「え？ 葵さんが一緒に入ってくれんの？」

「……バカ」

それから二時間後。

俺とナーちゃん、マサ、葵さんにドルファちゃんは近所のファミレスにいた。

例によって回転寿司ライスのドルファちゃんにならんで、特大ボリウムステーキを平らげているマサ。

「ああ、うめエ！　こんなに美味しいモン食ったのはウニ以来だぜ！　たかがファミレスのステーキと新鮮なウニと一緒にするな。」

食後にコーヒーとデザートでまったりしていると

「……そーいえばよオ、魚住ボコった時に聞いたんだよな」

膨らんだ腹を叩きながらイスに踏ん返り返っていたマサが思い出したように口を開いた。

「あいつン家、すげエ借金らしィんだよな。あそこの水族館、潰れただろオ？　で、やべエらしいの。　俺が行ってねエからかなア」
それはない。

潰れるきつかけの一つをつくつたのは俺だし。

でも、今となってはそのことを知っているのは俺とナーちゃん、そしてめぐみだけ。

しかし、その背後にはあのリーネがいたワケで。

ヤツと組んだ連中はことごとく酷いことになっていく、俺はふと思った。そういう意味では、リーネというのは悪魔か魔女みたいな存在かも知れない。

「ああ！　そーいえば！」

俺はポンと一つ手を叩いた。

その仕草が面白かったのか、ナーちゃんも真似をして「ぽむつ」とやった。

「それであいつら、アコばーちゃんを拉致ろうとしていたのか。何でまた、殻の組織に手エなんか出すのかと思っただケド……そーいうことか」

俺の隣の葵さん、アイスコーヒーを一口飲んで

「ええ。アコヤ貝の方達が真珠という高価なものを造り出せるというところもあります、貝の殻には、それだけで人間の方の世界で重

宝されるようなものもあるって聞きましたわ。きつと、それを狙っていたのでしょう」
すると。

リーネはまだ魚住興業とは手を切っていないということになる。
しかし……なんだってあの計算高いバカ人魚が、落ち目必至な魚住にこだわるんだ？

峰山のところのフィルと張り合っているから？

魚住が何か彼女の弱みを握っているから？

よくわからん。

「……ところで、タツ！ タツ！」

マサが俺の方に身を乗り出し、声を潜めて「女の子！ 女の子！
どーなった？ どーなった？」

なんだ、それかよ。

「もうちよい待てやい。そんなに早くは見つからんよ。俺は結婚相談所じゃないんだからさ」

ちよつとがっかり顔でマサは

「頼むぜエ？ カワイイカノジョできたらオレ、マジメに頑張れそ
うな気がする！」

はいはい。

ってか、マジメに頑張るヤツに女の子は寄ってくるんだよ？

他愛もない話をあれこれしつつ、俺達はファミレスを出た。

その53 心の歪んだ人魚（前編）

ファミレスを出て夜道をてくてくと歩いていたら俺達。

そろそろ、夜風も冷たくなってきたな。

みんな長袖だが、相変わらずTシャツ姿のマサを見ていたら、こっちが寒く感じる。

と、前方の闇から何かが高速でびよんぴよんと跳ねてきた。

「 たつろーにーちゃん！ 」

トビタローか。

彼は俺の右肩にひよいと飛び乗って（それくらいヤツは小さいのだ）

「今、海の方に行ってきたんだけど、あの大きな建物のところでなんか騒ぎになってたよ？ シャークのチンピラ達と、人間の人間がケンカしていたんだ。ボクが見ていたらシャークのやつら、人間の人間をやっつけて中に入ってたんだ！」

「なに？ シャークの連中が？」

「ってことは……リーネが動いたのか？」

大きな建物は「近海マリンミュージアム」だな。

「達郎様っ！」

葵さんが俺を見た。

うん、と頷いて見せた俺は

「行ってみよう。あのリーネたらいうバカ人魚とまだ話をしない」

臨海再開発地区へと急行した俺達。

近海マリンミュージアムのあたりは今じゃ人気もなく、夜は真っ暗。なんとなく心霊スポット的なブキミさが漂っている。そっぴや、爆発事故で死人も出ていたんだよな。この近くに慰霊碑があったよ

うな気がする。

例の閉鎖以来、建物とか土地の処理も進まず、市議会でも結構もめているようだ。

敷地はぐるりと工事現場の鉄板みたいな塀で囲われていて「立入禁止」の看板が寒々しく夜風に吹かれている。

「ここだな？ トビタロー」

「そーだよ！ この中だよ、たつろーにーちゃん！」

よくまあこの坊や一人でこんなところへやってくるものだ。

よりによってあのシャークの連中がいるってのに。

とはいえ、こいつの機動力ときたら海の世界でもトップクラスな
んだけども。

「おいタツう！ あそこ、開いてるぜ？」

マサが指したのは、塀の二画に設けられた出入り口。

力任せにこじ開けられたようにして、網状の戸が傾いてぶらぶら
としている。

ジャキツ！ ガシャツ！

背後で葵さんが「オーシャンイーグル」を、ドルファちゃんが「
アクアライアット（オーシャンイーグルのショットガンバージョン
である）」をリロードした音がした。葵さんとはかく、ドルファ
ちゃんはこんなバカでかいものをどこに隠し持っていたのだろう。

ついでに「ベきつごきつぱきつ」これはマサが手や指の骨を
鳴らした音。

みんな、やる気だなあ。

が、たった一人、ナーちゃんだけは顔色が無い。

「ナーちゃん？ 大丈夫か？」

「はい、達郎さま……」彼女はぎゅーっと抱きついてきて「私、何
か嫌な予感がいたしますの。リーネがとてもよくないことを考えて
いるような気がして……」

ふむ。

考えてみれば、なんだってヤツは今になって閉鎖した近海MMな

んかにやってきたのだろう？

ああいうヤツの思惑なんか、推測するだけムダというものだが…

『ナーちゃん』

『はい、達郎さま』

『どのみち、俺はあいつに話がある。できる限り、話し合っ解決したいと思っている』

背後で銃器やら拳を固めている連中を引き連れているからあまり説得力もないけど。

『だけど、黙ってお引取りいただけないなら、これ以上海の世界を巻き込まないでもらうためにも、力づくで追い出すことにならないとも限らない。……同じ人魚族のコに暴力を振るいたくはないけれども』

すると、ナーちゃんは小さくにごつと微笑んで

『私は、夫である達郎さまに従うだけですわ。結果は結果。それはリーネの責任ですもの。……でも、そのように人魚族の者を心配したださる達郎さまのお気持ち、私はとても嬉しく思います』

よし。

これで、決まりだ。

「行こうぜ。みんな、離れるなよ？」

「はいっ！ 達郎様！」

「りょーかいでえす！」

「うっし！ 海のヤツ相手なら、磯山警部の世話にもならんで済むだろオ！」

あ……警察のお知り合いかね。

世話にならないでおこうと思ったただけ成長したんだなあ、マサのヤツ。

俺は心の中で「るー」と随喜の涙を流しつつ、出入り口をくぐった。

位置関係。

俺達は今、建物を目の前に西側を向いている。

北側には東西に「臨港一号線」と呼ばれるでっかい道路が走っていて、近海MMの正面はその道路に面している。つまり、正面入り口は北向きということになる。

建物東側から踏み込んでいくという状況なのだが、俺の記憶に間違いがなければこつちには係員専用通用口とか、搬入口なんかがあったはずだ。建物の反対側が例のスタジアムとか海獣類のプールがあったから、足を踏み入れるなりいきなり「どぼん」とかいうことはないと思うのだが。その時は美女三人とトビタローに助けってもらおう。

第二の都市動脈があるから近隣にメーカーとかの流通経由地とか大きな店舗が点在していて、その灯りによって幸い目が利くくらいの照度は保証されていた。

敷地の中へ潜り込むと、行く手にでっかい壁。これは建物だ。

周囲はアスファルトで固められているのだが、一連のドタバタを物語るかのようにあちこちに廃材やら色んな物が転がっていて、どこか雑然としている。よそ見して歩いていたら、それらにぶつかったりつまずいてしまうかも知れない。

「さて、どつちからはいる……!？」

迷う必要はなかった。

左手、海側の方へ視線をやった俺はすぐに異変を悟った。

人が 何人か倒れている。

「おい、タツ！」

「おう！」

駆け寄って見ると、スーツ姿や作業服姿の男性ばかり。

胸や腕のところの刺繍を見れば、それがどこの人達なのかはすぐにわかった。

魚住興業。

シャークの連中ともみ合いになった拳げ句、ボコられて撃沈したらしい。

不幸中の幸いと言っているのか、パツと見で「がぶっ」とやられてる人はいないようだ。グーでパンチされたり、テキストな得物で「ぽかっ」と食らったんだろ。とはいえ、やつらの力はハンパないから、こつやつて戦闘不能にされてしまっているのだが。

ざつと人数やケガの具合を確認しつつ

「うおい、タツう！ きゅーきゅーしゃ、よぼーぜ！ ー ー 番、
ー ー 番！」

それは以前、君がお世話になった国家権力へのホットラインだよ。ともかくも、ケータイを取り出してー 九番しようとしたその時。「放っておけばよろしいじゃありません？ そのような、役に立たない人間達なんて」

ジャキツ！ ガシャツ！

どこからともなく声が聞こえたと思いきや、間髪を容れずして銃を構えていた葵さんとドルファちゃん。

彼女たちは銃口を斜め上へと向けていた。

しゃがんでいた俺はゆっくりと立ち上がり

「……会いたいと思っていたところだよ。やっと、姿を見せてくれたな」

見上げた。

二階部分はテラスのようになっていて、営業していた頃は喫煙場所とか自動販売機ブースとかあったような気がする。確か「グラントオーシャンビューテラス」とかいうけつたいなネーミングがされていたんだよな。こつち側は高い建物とかなくてずつと先の埠頭まで見渡せるから、眺めは悪くなかった。そついや、めぐみと一緒に写メ撮らなかつたっけ？

その、ぶつとい手すりの部分。

腰掛けて俺達を見下ろしている一人の女性、いや……人魚がいる。暗い上に左半身だけ中途半端な光源を浴びていたからはつきりとは見えていないもの。長いふさふさの髪に、よく整った顔立ちそして身体。腰から下は例によつてつまずき先でキュツと細くなつて大

きなひれが「ぴちぴち」している。これだけなら、物語にも登場する美しい人魚となんら変わりはない。

ただし、俺は見逃さなかった。

海の世界でもっとも獰猛だと言われているシャークやウツボなんかよりも、もっと冷たく残忍に光る瞳。積もり積もった不平や不満を象徴しているかのような、真一文字に結ばれた唇。

何よりも、彼女には　愛嬌、愛想、笑顔、そういうものがカケラも感じられない。

こいつが本当にナーちゃんと同族の人魚なのかと、思わず疑ってしまうほどだ。

リーネ。

全ての悪の元凶。

ブルーフィッシュを潰滅寸前まで追い詰め、ナーちゃんを捕らえて人間に引き渡したばかりか、葵さんを総督府の奥深くへ監禁し、が失敗してブルーフィッシュが持ち直すや、今度は協同しようとしたバランサー達をポイズンや近水の連中に指示して襲わせ、ドルフアちゃんは瀕死のケガを負った。ジーナさんやジンベエさんも危ないところだったらしい。

しかも、だ。

さんざんにこき使った海獣組の連中やポイズン達を情け容赦なく使い捨てたばかりか、自分の命令を果たせなかったやつらには見せしめに暴力を加えたという、血も涙も鼻水もない女。

彼女のために、俺達はこの一年さんざんに振り回されてきた。

時には、命すら落としかけたんだ。

俺はともかく、ナーちゃん、葵さんにドルファちゃん、由美さんやマサ……みんなに手を出すなんて　絶対に許すことはできない。今日こそ、泣くまで八バネ口食わせてやる。持ってきてないけど……。

どこへ行ったものか、シャーク達の姿はない。

彼女は一人きりだ。

下からは、凄腕ガンナー・葵さんとデストロイヤー・ドルファちゃん
がロツクオン済み。

もう、逃げ場はないハズだが……？

「葵、ドルファ。あなた達、私のことを撃てまして？ 人魚の血を
分けた葵にバランサーのドルファですもの、まさか、この私を撃と
うなんて」

「撃てますわ！ そこ、動かないで！」
葵さんが叫んだ。

「達郎様やマサ様は、命をかけて私を助けに来てくださったのです
もの！ あなたのような人魚の端くれでもない者に、かける情けは
ありません！ 達郎様のご指示とあれば、私はいつだってあなたに
向けて、このトリガーを引きます！」

「そおでえす！ アンタ、悪いコトしすぎて海の全世界集会で追放
宣言までされてんだよ？ 知らなかったの？ とんだおバカちゃん
！」

あっけらかんとしているだけに、ドルファちゃんの威嚇は葵さん
よりもコワいものがある。

さすがのリーネも「ちっ」という顔をした。
その一方で。

『た、達郎さまっ……！！ リーネは……リーネは……！！』
俺の腕の中で、ナーちゃんはぶるぶると震えている。

『……ああ。やっちまったなあ、あいつ』
そう。

リーネはすでに、やっちまったのだ。

こわね草 人魚族が口にすれば、陸上でも声を出すことができ
るといふ海の世界の不思議な海藻。しかしながら、声と引替えに、
その人魚はもつとも失いたくないものを失ってしまうのだという。

あの日、ナーちゃんは言った。

人魚が失いたくないもの。

それは……愛情なのだ、と。

愛情を失ってしまえば、人魚として生きている価値はゼロ。どんな生き物よりも深い愛情があるから、人魚族はその存在に価値がある。

ところがリーネのヤツ、愛情を捨ててまで声を手に入れやがった。どつりで血も涙もないコトを次から次と仕出かすもんだよ。

「……おい、リーネ」

俺はテラスを見上げた。

彼女は葵さんやドルファちゃんに向けていた視線を俺に移し

「初めまして？ ナタルシアのダンナ様。といつても、私はあなたを見たのは初めてじゃないけれども」

「知ってるよ。陰からこそそと覗いてやがったなア、お前」

潮清祭の最終日、俺がポイズンどもに襲われた時だ。

由美さんや葵さん、マサにドルファちゃんの救援を受けて殲滅に成功した直後、校門の前に停まっていた一台の車が走り去っていった。峰山からリーネの話を聞いていた俺は、そこに彼女がいたのだと直感した。

このクソバカ性悪人魚が……そう思えば腹も立つが、今となつてはそうでもない。

なんか、悲しいものだ。

ほんのちよつとの努力で、こんなにたくさん仲間達がいてくれるっていうのに。

自分、自分、自分、自分、自分、自分、自分。

呪文がおまじないのようにそればかりを追い求め続けてきたこの女は、とうとう周りから誰もいなくなってしまった。

自分のことを考える事自体、決して悪いことじゃない。自分の事を考えないようなヤツは、かえってアヤシイ、というかアブナイものがある。

だけど、生き物は人間だけじゃなくて、何でも 周囲との協調・協和の中で生きている。

単独で生きている生き物なんて、この世の中にはいないよ。

俺のクラスにも、一人嫌われ者のメガネデブ野郎がいる。

そいつはそこそこ勉強ができて成績が悪くないけど、誰も相手にしていない。自分を正当化するために誰にでも平気でウソをつき、平気で誰かを悪者にするからだ。過保護で育ったとかなんとか噂はあるものの、原因はどうあれ、悲しすぎる。恵まれない環境で生きてきたマサだって、誰かを大事にしようってほんのちよつとでも思う気持ちを持ち続けたから、由美さんをはじめ、今こつやっただくさんの仲間達がいるんだ。

自分一人だけで生きていくことなんて、絶対にできない。

ちよつとでいい。誰かのせい、環境のせいにするのはヤメて、自分自身の努力をしてみることに。ほんのちよつとでいい。それだけでも、大きく変わることができる。

はじめと自分にしがみついたって、最後には何にも残らない。

自分で自分の今の姿なんて、絶対に見えないのだ。

鏡が必要なんだ。

周囲の人達っていう、多面鏡。

俺。
去年の夏、葵さんを見送った以来のすごくイヤな気持ちになった

胸の中に山積している数々の怒りをこくつと飲み下して

「シャークの奴らは……どうした？」

周囲に気配がないようだ。

するとリーネはふふん、とハナで笑って

「彼等には、この中にある大事なモノを取りに行かせましたの。そうしたら、魚住興業の人間達が邪魔をしにきたものですから……それ、その通り」

アゴをしゃくった。「シャークどもにやらせました。何の力もないくせに、金とやらいうものが大好きな人間達、下品すぎて吐きそうになりますわ。殺さなかつただけ、感謝して欲しいですが……もつとも、そのシャーク達も今ごろは油の海で悶えているでしょう

よ。最後の最後まで役立たずだった自分達の不甲斐なさを、苦しみながら呪えばいいわ」

「なんてコトを……」

葵さんの声が上がった。

思わずトリガーを引きそうになっているのを、片手で制した俺。
やれやれ。

早いトコ、引き摺りあげてやらないとマズいなあ。エラに油が詰まりでもしたら、奴ら窒息死しちまうよ。リーネのヤツ、冷酷非道な真似をしやがる。

「俺も、金好きなのヤツは性に合わねえ。だけど……」俺はどういったものかとアタマの中で言葉を選んでいたが「結局、アンタには何一つわからなかったようだな。アンタがどう思っているかは知ったコトじゃないが、どう見たって、今のアンタは悲しすぎる……」

「あ、あなたなんか！ 私の何がわかるっていうのよ！」
リーネが咆えた。

「全ては海の世界よ！ 海の世界が悪いのよ！ 葵、ドルファ！ あなた達だって思っているでしょう！？ 自分の自由に誰かを愛することも許されなまま、無駄に長い生命を保ち続けなければならぬなんて！ 苦痛以外の何物でもないのよ！ あなたのような人間や、甘やかされて育ったナタルシアなんかにはわかってたまるものですか！」

「……」

葵さんにドルファちゃん、沈黙している。

しかし、銃口を下ろそうとはしなかった。

『ナーちゃん、どうということなんだ？ なぜリーネは自由に誰かを愛することが認められないんだ？』

『それは……リーネが、人魚族の長たる運命をもって生まれてきたからなのです……』

リーネの鱗が、北側からの光を受けて一瞬キラリと輝いた。

ゴールド。

金色に輝く鱗をもった人魚の娘。

何人に一人という割合で誕生するそのココそが、ゆくゆくは世界中の人魚を束ねる長になるのだと、ナーちゃんは話してくれた。

しかし、辛そうにこうも言った。

『世界中の海を治める存在なのですもの。誰か特定の人間と結ばれてはいけないと、古くからの掟が人魚族にはあるのです。それを…』

…リーネは……』

恨んでいる、か。

そしていつそのこと、と思い詰めた彼女は 禁じられた海草を手に入れて、人間の姿になろうと思いつたのだらう。

まずはこわね草を手に入れたリーネは、陸上でも話ができるという「声」を手に入れた。

人魚族だけが生まれつき具えている「深い愛情」と引替えに……。こわね草とやら、確かに恐ろしい効果がある。

たった一人の人魚から愛情を消し去っただけで、海の世界はこんなにも大時化、じゃなくて大荒れになったんだからな。それというのも、海の世界で人魚族がひっぱりだこの希少な種族だからだ。例えばあのイワシヤールが（同じ効果はないだらうが）今のリーネみたいになったとして、周囲から総スカンを食った拳げ句ボコボコにされて簀巻きの刑になって終わりだらう。ってか、声も足ももっていないと、あんなヤツになってしまうのか……？

「つまりは、ナタルシア！ あなたも！」

リーネがナーちゃんを指し

「私のような人魚の犠牲があつてあなたの幸せが、いや世界中の人魚達の幸せはあるのよ！ あなた、よくもまあ私に向かって大きな顔ができて！？」

『私は……私は……』

リーネのコトバがわかるナーちゃん、泣きそう。

「……待てい。今のお前がそれを言うのか？ 耐え忍ぶことを放棄して好き勝手にやっておいて、仲間を売り飛ばすような真似までし

たクセに……お前は……」

言っているうちにぐつぐつと、腹の中が煮えくり返ってきた。

しかし 滝女さんの言葉を思い返し、俺はすうっと大きく深呼吸。

ケンカじゃない。

大事なことは、強い心を示すことだ。

「……俺、ナーちゃんと再会するまでに、二人もの女の子の気持ちに伝えてやらなかった。本当は、好きだったのに、俺が自分勝手だったばかりに」

「……」

「確かに、自由に誰かを愛せないのは不幸なことだ。でも、自由に愛せることイコール幸せなんかじゃない。誰かを愛するっていうのは、自分にもその相手にも、責任を負うことだ。自分の責任が中途半端だったり、想いが叶えられなかったりすれば苦しい。愛するっていうのはそういうコトだと思うぜ。だから言うのさ、お前には何もわかつちやいないって」

何だかね。

体質で乳製品を食べない人に向かって「乳製品を食いすぎれば下痢するんだぞ！」とか力説しているのに近いかもしれない。そもそもずれているような気はする。食わず嫌いの人に対して言うならまだしも、食いたくても食べない人に言うべき主張じゃない。

でも、自分が食べないからって「乳製品は撲滅すべきだ！」なんていうのも、なんだかおかしいよね。それじゃあ、互いに逆ギレ合戦だ。

それに リーネにはもう、愛情という心が無くなってしまっている。

愛の話をしても、彼女には届かない。

すると、悲しそうにしながらもオーシャンイーグルを構えていた葵さんが

「でも、私は……」

キツと顔を上げ、咆え返した。「私が姫様をお守りすることで、姫様は私の気持ちを受け止めてくださっているのです！ 姫様が達郎様を深く愛し、ご結婚されようとも、私はいつまでも姫様のお傍にあつて姫様をお守りします！ 私にだって、愛情深い人魚の血を引く者としての意地があります！ あなたのように、平気でみんなを苦しめて困らせるようなマネは断じてしません！」

葵さん……とっても美しくて、何よりも強い女性。

でも、ドルファちゃんも負けていない。

「だいたいさあ、くつついたとかひつついたとかだけが恋愛じゃないでしょお！？ 好きだつて思っていることを受け止めてもらえたら、それだつてすごいコトなんじゃない？ 黄金鱗のコは人間と結ばれてはいけないうつて、アタシも知ってる。でも、好きになっちゃいけないうつてハナシじゃないじゃん！ あんたそもそも、誰かを本気で好きになつたコトあんの？」

言う言う。

何となく、理屈で応戦しているような気がしなくもないが……。

葵さんとドルファちゃんの「魂の援護射撃」で、空気はどうやらこつちサイドの流れ。

これ以上何を言つてもムダ、という顔でふうつと溜息をついたりーネ。

「……もう、いいわ。ナタルシア、よく見なさい。これが何か、お分かりかしら？」

彼女は一本の草みたいなものを手に行している。

目を大きく見開いたナーちゃん。

あれって、もしかして！

その54 心の歪んだ人魚（後編）

リーネが手にしている小さな草。

一見、そこらへんに生えているただの雑草っぽい。

しかし、そいつは

「あなたコレが何だか、知っているんでしょ？ おしな草。これを口にすれば私は真正銘、人間になれる。もう、こんなくだらない海の世界なんかとはおさらばよ」

彼女は得意げな笑みを浮かべて

「……魚住興業の人間達、どこで拾ってきたのか知らないけど、こいつをこの建物の中に隠していたのよ。私がこれを欲しがっているのと知って、いろんな要求をしてきた。何だか金に困っているとかで、海の世界で金になりそうなものを持って来たってね。だから、手っ取り早く殻の組織を襲わせたんだけど　ポイズンの連中、クス。何にもできやしない。シャーク達もそう。だから私、魚住興業の人間とシャーク達を上手く言いくるめて、ここで互いに潰し合うように仕向けたのよ。ま、あなた達がやってきたのは想定外だったけど」

くすくすと笑い出した。

「……よオ、タツ。あのへんな草、そんなに高エのか？　俺ん家にも生えてそうだぜ？」

不思議そうな顔をしているマサ。

俺はナーちゃんから聞いたおしな草の話を一言で説明してやり「俺達には何のありがたみもないけど、人魚族にとっては一大革命が起きるような海草なんだと」ついでに「副作用も一大革命らしいけどな」付け加えてやった。

「達郎さまっ！」

いきなり俺にすがり付いてきたナーちゃん。

ほとんど涙目で

「リーネに、あれを口にさせてはなりません！　すでにこわね草を

口にしてしまったというのに、おしない草まで口にしてしまったら
どういうことになるか　！」

「……人間と同じくなる、っていう単純なハナシじゃないんだな？
うすうすそんな予想はしていた。」

「はいっ！　こわね草におしない草、二つを合わせて口にする時人
魚の身体には死よりも恐ろしいことが起こるのだと、大姉さまに聞
いたことがあります！　彼女はまだこわね草しか口にしていないか
ら人魚の姿を留めています……」

おっとり屋さんのナーちゃんが早口になっている。

彼女は彼女なりに　リーネを案じる優しい気持ちがあるのだろ
う。

死よりも恐ろしいこととは何なのか、それは想像もつかないが、
ともかくもあのへんな草をリーネに食わせてはならない。

俺はこっくりとうなずき

「葵さん、ドルファちゃん！　リーネを止めるんだ！　あれを食わ
れちまったら、大変なコトになるそうだ！」

「はいっ！」

言つが早いか、葵さんはリーネの手にあるおしない草に狙いを定
めた。

タタンツタンタンツ……

すかさず轟いた銃声。

リーネはというと

「……」

跡形もなく吹き飛ばされたおしない草の根っこのところだけを持
つて呆然としている。

葵さん、グツジョブ！

これでリーネはおしない草を失った……かと思いきや、

「……ハハハッ！　あなた達、おばかさんねえ。私がわざわざ、
これ見よがしにおしない草を見せびらかしたりすると思つて？　葵
が撃つたのはそのへんに生えていた雑草よ」

マサ、正解です。ただの雑草でした！

じゃなくって。

「じゃあ、お前……」

「食べたわよ。あなた達がここへ来る前に」

「食ったのか！」

俺とマサの声が見事にハモツた。

ドラマとかアニメによくある「ギリギリで滑り込みセーフ」はあり得なかったのだ。

葵さんやドルファちゃん、固まっている。

よくわかっていないトビタローだけが羽を「ぱたぱた」。

『そ、それじゃあ……リーネは……』

ナーちゃんがかくかくと震えている。

フンツ、とリーネは俺達を見下すようにして

「残念でした。思いつきの優しさや気遣いなんかで誰かを救えるなんて思わな」

そこで彼女はピタリと動きを停めた。

数秒間ののち、

「……きゃあああああっ！ ああああああっ！

もんどりうって苦しみ出した！

おしない草が効いてきたようだ。

「いやあああああっ！ くああああああっ！」

相当な苦しらしく、両手でのを押さえ、振り絞るような声で悲鳴を上げているリーネ。

そのまま彼女はバランスを崩し、テラスの内側へ転げ落ちた。

「あっ、あっ、あっ、ああっ……ぐうっ……がああああああっ

！」

姿は見えなくなつたが、上から断末魔の絶叫だけは降ってくる。

突然のことに俺達はみんな呆然としていたが

「ドルファさんっ！」

葵さんの呼びかけに

「はいっ！ アタシ、いつきまーす！」

返事をするなり葵さんの肩に手をかけたドルファちゃん。

すると、彼女は葵さんの背中を駆け上り、肩に乗ったとも思えない素早さで葵さんを踏み台にしてテラス目掛けて跳躍！

軽々と二階テラスの手すりを飛び越えていった。

すげエ……！

さすがはイルカの血を引く女の子。ジャンプ力はハンパない。

だが、見とれている場合じゃない。

「……おい、行くぞ！ 中に入れるハズだ！」

「おオ！」

「はいっ！」

俺達も後を追って近海MM内部へ突入。

通用口をぶち抜いて真つ暗な館内をやみくもに突き進んでいき、どうやらエントランスと思しきだだっ広いホールに抜け出た途端。

「うおっとお！」

「ぬおっ!?!」

「きゃっ！」

いきなり停まった俺の背中にマサ、葵さんが玉突き。

目の前には 床面水槽（横からじゃなくって、上からのぞき見せるタイプの展示用水槽だ）があり、その中にはなにやら「ねとつ」とした液体が溜まっている。気付くのが遅かったら、マジダイブするところだった。

すると、その液だまりの表面が「てるっ」と盛り上がってとんがった何かが飛び出してきた。

「たっ、助けてくれエ！ 息が、息ができねエよオ！ 頼むよオ！ 死んじまうよオ！」

シャーク達。

いかにも哀れな声で助けを求めてきたそいつもすでに力が失せているのか、這い上がる力もないままにまたずると油だまりへ沈んでいきそうになっている。

リーネの悪事に加担した許せない連中だが、目の前で苦しみなから死んでいくのを黙って見ているワケにはいかない。

「タツう、行け！ オレがこいつら、引き上げといてやるよ！」

「すまん！ 頼む！」

バカ力のマサに後を託して行こうとすると

「達郎様、姫様！ マサ様お一人では大変ですわ！ 私も、お力添

えします！」

「ほい！ よろしく頼みます！」

俺とナーちゃんはグラウンドオーシャンビューテラス目指して先を急いだ。

「が、何せ中は暗くて何がなんだか……。

しかし、俺達と一緒にトビタローがいる。

「たつろーにーちゃん、あっちだよ！ あっちに階段があるよ！」

「おオ！」

彼の誘導で何とか二階へたどり着いた。

夜風が心持ち冷たいテラスへと出てみれば

「達郎様、ナタルシア……。」

ドルファちゃんが呆然とした面持ちで佇んでいる。

「どうした！？ まさか、リーネは……！？」

「あれ……あんなになっちゃったよオ……。」

彼女が指した方向を見た俺達。

悪の限りを尽くした挙げ句、禁じられた海草を口にした哀れなり

リーネの末路とは

「……ふあ？」

これは決して、ナーちゃんの声でもトビタローのクシヤミでも、まして俺のあくびでもない。

ちよつと高めに設けられている手すりの足許、あのリーネの姿はない。

ただ、たよりなくふやふやとつごめいているちっちな気配が一つ。

そいつが俺達を一目見るなり発した声である。

急に現れた俺達をしげしげと眺めて小首を傾げていたが、やがて「きゃっ！」

嬉しそうに笑った！

『達郎さまっ！ あれ、あのコ……！』

事態を呑み込むや、たちまち破顔一笑したナーちゃん。

『おオ！ そーいうことかよ！』

なんとまあ、おかしな出来事もあったものだ。

リーネの代わりにそこにいたのは、よちよちとした小さな人魚の赤ちゃん。

それでも生まれたての人間の赤ちゃんよりは物がわかるようで、笑ったり首を傾げたり、しっかり自己表現する術を具えているようだ。

禁じられたこわね草、そしておしない草を口にしてしまったリーネを襲った副作用、それってというのは 誕生したての頃に戻ってしまうというオチだった！

ってか、多少深刻な言い方をすれば「それまでの成長、記憶、経験を全て失う」ということになるのだろうか。そりゃあ、確かに失いたくないものだよな。何にもわからない赤ちゃんに戻ってしまえば、足も声もへったくれもない。

気を張り詰めさせていたナーちゃん、ホツとしたのか

『達郎さまぁ……私、私……』

ぐすんと涙ぐんでいる。

『よしよし。良かったな、ナーちゃん！』

目の前ではドルファちゃんが

「おー、よしよし！ あんた、こんなにちっこくなっちゃったねえ。

……ほれ、なんか言いたいコトでもある？」

ミニリーネを抱っこしてあやしている。

「ふあ？」きよとんとしてドルファちゃんの顔を見つめていたリーネ（ちゃんをつけることにしよう）ちゃん、小さな腕で抱きついて

「きゃっ！」嬉しそうに笑っている。

あの残虐非道に成り下がったリーネも、誕生したての頃はきつとこんな風は無邪気だったのだろう。抗うことのできない海の掟に縛られることを嫌った彼女は、とうとう禁忌を犯してあんなヤツになってしまったが、それも全部リセットだ。

「……うおい！ サメ野郎どもの救助、完了だぜエ！」
追っかけで、マサと葵さん登場。

二人とも、ずぶ濡れ。

「お？ どーした？ なんでそんなにびしょ濡れなんだ？」

「いえ、その、私が」

葵さんいわく、油の池からシャーク達を引き摺り上げてやったのは良かったが、彼等はエラに油がついて苦しんでいる。

「とにかく水！ 水！」

マサが水を探しそうとしているとき、葵さんはふと天井を見上げた。

天井には、あの海底からの眺めをイメージした巨大な水槽が。

「水ならありますわ！」

彼女にしては珍しいことに、何も考えていなかったらしい。

天井目掛けてオーシャンイーグルをぶっ放し 現在に至る。

「ったくよオ、葵さん、いきなり撃つちまうんだもんよオ！ 溺れ死ぬかと思っただぜエ！」

「ご、ごめんなさい……私ったら、何を考えていたのでしょうか？」

恥かしそうに小さくなっている葵さん。

「ま、助かったよ。ありがとう。リーネんだけど」

「ほら、こいつ。ちっこいでしょお？」

ドルファちゃんがリーネちゃんを二人に見せた。

「まあっ！ かわいー！ このコになっちゃったんですかあ！？」

反省はどこへやら、葵さん大喜び。

彼女に抱っこされてにこにこしていたリーネちゃん。

ふと、傍にいるマサに気が付いたらしい。

「……………」

つぶらな瞳でじーっと見つめていたが

「きゃっ！」

嬉しそうに微笑んだ！

おやおや、マサのことが気に入りましたか！？

が、もともと子供が得意ではないマサはちよつと後退りして

「お、オレはいいって！ あんまりガキンチョは」

言った途端。

「くすん……ふえ、ふえ、ふえええん！」

泣き出した！

「おお、よちよち、泣かないの。よちよち……………」

あやしている葵さん。ドルファちゃんはコワい顔で

「ひどーい！ マサさまったらあ、リーネちゃんを泣かせたあ！

かわいそー！」

「ふええええん！」

困った顔でたじろいでいるマサ。

泣く子も黙る近海の番長だった男が、今や泣く子に黙っている！

「ええーっ！ しゃーねエなア……………つたくよオ」

ぶつぶつ言いながら近寄って行き、恐る恐る頭をなでてやると

「……………ふえ？」速攻で泣き止んだかと思うと「きゃっ！ きゃっ！」

えらく喜びだした！

葵さんの胸から身を乗り出すようにして、マサの方へ行きたがっている。

「えー……………オレ、抱っこすんのオ？」

マサがしぶしぶ抱っこしてやると、リーネちゃんはヤツにぴったりとくつついてにこにこしている。

その様子を見ていたドルファちゃん、葵さん、

「こりゃ、キマっちゃった？ かなあ」

「……………ですわね。マサ様を選んだようですわ、あの」

二人の発言を耳にしたマサ、固まっている。

「え……オレ、このコに……好かれてんのオ？ まさか……」
元不良と幼い人魚の女の子。

実にほほえましい二人の触れ合いを見ているナーちゃんは

『ふふ。リーネったらやつと、愛する人に出会えたようですよ？』

達郎さまっ！』

そうなのか？

『ええ。どんなに幼くても、人魚族に生まれつき具わっている深い愛情に変わりはありませんもの。ですから、リーネは早くもマサ様に一目惚れしちゃったのですね！』

しゃーないよな。

人魚族は心が強くて優しい人間の男性と結ばれたいと願っている。リーネちゃんはマサのことを、そういう男性として見たってこつた。

「ま、行く末はナーちゃんみたいな優しくしてセクシーな女の子になるんだから、悪くないんじゃない？ それにマサ……言ってたよな？ 海のコでもいいって」

「……」

こうしてマサは、思いがけずカノジヨをゲットした（付け加えよう。ゲットしたのと一緒な状況になった）。

ともかくも、ひっpegがそうとすると泣き出すので、リーネちゃんはマサに託すしかなくなったのだ。よほど気に入ったのか、頬擦りしたりチューしたりくつついたり……大変な甘えよう。マサも突き放すのは忍びないらしく、彼女の好きなようにさせている。なんだからだで楽しそうだぞ？

ま、ホントにマサのところへ預けるかどうか、細かいハナシは後からみんな考えよう。

一つだけ言えることは もう、リーネは自由に誰でも愛することが出来る。人魚族の掟に縛られることは二度と、ない。
なぜって？

おしない草の効果か副作用か、彼女の鱗は黄金から色が抜けて「白銀色」になつていたから。

俺達を散々に悩ませた悪の人魚・リーネはこの夜、無邪気でキュートな「リーネたん」として生まれ変わったのだった。
めでたしめでたし。

その55 秋ですな

その後、魚住興業については多少の動きがあった。
まず、倒産。

これは近海MMの閉鎖がもつとも大きな原因らしい。負債総額ン億円というから、この地域土着の会社が抱えた借金としてはかつてない規模だ。

次に、魚住の強引なやり方に苦慮していたあちこちの取引先が立ち上がり、一斉に裁判を起こした。どうやら地元のチンピラとつるんで恐喝まがいの行為もやっていたとかで、警察が動く事態にもなった。魚住社長は逮捕こそされなかったが、もはやこの街で顔を晒して歩けない人間第二号になってしまった。第一号は峰山社長である。

追われるようにして近海からいなくなったらしいと、親父の知り合いの記者が言っていたようだ。マサが近工の連中を通じて聞いた話でも、近水に魚住の姿はないという。確報だな。

俺とナーちゃんが再会したあの近海マリンミュージアムも取り壊されるとかされないとか、街の人々の話題に上っている。噂では、峰山、といってもMCGの方が再び権利を得たつていうし。もしかすると、建物を再利用して工場にするかもしれないということ、親父・舟一がもつともらしく語っていた。

さて、俺達サイドはというと。

リーネちゃんの誕生日(?)から数日後。

まず九死に一生を得たシャーク達はすこすこと南の海へと帰って行った。

「ホンマ、すいませんでした！」

居並ぶ俺達を前に、一斉に土下座した彼等。

やつらから手ひどい暴力を受けたドツボ以下ポイズンの連中はぶんぶん怒っていたが、俺はそれを制止しつつ

「お前ら、もう一度訊くけど……海の世界、平和な方がいいんだろ？ 違うのか？」

「いや、達郎さんの言う通りだ。俺達は何も、争いを好んでいるワケじゃない。リーネから、十八同盟を動かして俺達を襲わせるって脅されていたんだ。まさかとは思ったが、その、仲間達を危険にさらすワケにもいかないから、仕方なく……」

そのリーネ、もといリーネちゃんはマサに抱っこされて、すやすやと気持ち良さそうにお休み中。本当にあのろくでもないリーネだったのかと疑ってしまうほど、今のリーネちゃんはキュートである。マサにも、次第に彼女をいとおしむ心が芽生えてきたようで、ヒマさえあればあやしたり抱っこしたりしている。ちよつとパパに見えなくもないが。

「十八同盟が？ そんなコトするハズないでしょー！ スミスおじさんもカイおばさんも、とつてもいい方達でえす！」

ドルファちゃんが怒っている。

また新たな固有名詞が出てきたぞ。

十八同盟にスミスおじさん？ カイおばさん？ なんじゃソリヤ？

「ともかく」俺は言った。「やつと、ここまで来たんだ。お前らもひとつ、よろしく頼む」

「ああ、わかつている。もう二度と、お前達やブルーフィッシュには手を出さない。約束するよ」

そうしてシャーク達は去って行った。

これでとりあえず、リーネに加担していた連中はことごとく雲散霧消したことになる。

ウツボ達とは完全に和解したワケじゃないが、少なくともこっちはドツボさんがいる。で、あのチンピラもどきの連中はバランス一達の監視化におかれ、肩身の狭い日々を送っているようである。まだお会いできていないが、バランスーの中ではジンベエさん級のでかさを誇るクジラさん達がこの近くまでやってきていて「悪さ、すんなよ？」とか言いながらウツボを見張ってくれているという。

唯一、あのセイゾーらの「ハーレム・THE・セイウチ」とはど
ういう話し合いもできないままになったが 風の便りでは、セイ
ゾーはボスの座を追われたようである。若くてしっかりした新ボス、
それに新しい人魚族のコを中心に迎えたとのことで、もはや悪事に
加担する心配はなさそうだ。

こうして、長きにわたったリーネ一派の策動による海の世界のド
タバタは（かなり急展開ではあったが）終止符を打たれた。

ま、俺達が一つつ力づくで解決しようとしていたら、こうも早
くは片付かなかっただろう。

ナーちゃんとのブルーフィッシュとドルファちゃん達 balanサ
ーが協力したことから、次々と慕い寄ってくる連中が出てきて、し
まいにはリーネがどうすることもできないような大勢力になったと
いうのが大きいかもしれない。

滝女さんが言ったとおり、力は力の争いしか生まないワケで。

強い心があれば、争ったりすることなく、一番大切な部分でつな
がることができる。

よくわかったよ。

一切が片付いたその晩のこと。

「……ねえ、ナタルシア」

ドルファちゃんが思いついたようにナーちゃんに尋ねた。

「そーいえば、スミスおじさんとカイおばさん、そろそろ呼びに行
った方がいいんじゃない？ 婚姻の儀式に間に合わなかったら大変
じゃん。けっこーお年寄りだから、ここまで来るのに時間がかかる
よ?。」

ぶっちゃけ俺はこれといって何の関与もしていなかったのだが、
水面下では着々と俺とナーちゃんの結婚話が進められているよう
である。人間の世界では男性は十八歳からじゃないと結婚できないの
だが 相手は海の世界のコ。関係ないってばないか。

『そうですね。いろいろあって、お声がけるのを忘れていました
わ。スミスおじさまとカイおばさま、お元気でいらっしやるかしら

？ 長いことお会いしていませんでしたわ』

懐かしそうなナーちゃん。

「んじゃあたし、呼びに行ってくるね！ ジーナさん、あとよろしく！」

「はいよ！ 気をつけて行っておいで！ まだ海獣組の連中の幾つかは、油断できないからね！」

ドルファちゃんはスミスのおっさんとカイのおばちゃんだかを呼ぶために海へ出た。

結局、彼等が何者なのかわからんままだけど。

なんだかバタバタやっているうちに、もうすぐ十月。

ドルファちゃんが旅に出たとはいえ、海藤家は毎日えらい騒ぎだ。

「ダンナ、凝ってますな」

「んー。最近、デスクワークが多くてねえ」

居間では親父・舟一がハナミノカサゴに肩を揉んでもらっている。

「ママさーん！ お布団、干しといたよー！」

「あらあら、すみませんジーナさん」

最近はずいぶん旅行に行く機会が減ったようだ。

ジーナさんといういいお知り合いができたからかも知れない。ま、

幸子の頭の中なんか、何を考えているかわかったものじゃないが。

幸子のお知り合いといえば、あのイワシヤールはどこへ行ったのだろう。夏休みに風呂場からぶっ飛ばしたきり姿を見せていない。

ま、いいか。

あの青魚、何の役にも立たないどころかいるだけで腹が立つし。

庭先で幸子とジーナさんがやりとりしているかと思えば

「おい、おめエら！ 達郎さんの大切なお宅だ！ キレイに掃けよ！」

「うっす！ お頭！」

ドツボの指揮下、ポイズン達が竹ぼうきで家周りを掃除している。

そこへマツチヨ鯛とキンメが現れて

「うおい！ ブルーフィッシュからの届け物だぜえ！ 達郎さんはいらっしやるか？」

「あーっ！ この鯛野郎！ せっかく集めたゴミの上に乗っかりやがって！」

「何イ！？ やるか、このフグ野郎！ 今が旬だからって、調子にのるなよ！？」

フグと鯛がにらみ合っていると、にわかになぼーっとでかい影が。言うまでもなく、ジンベエさんだけだ。

「……お前達、争い、良くない。ここは達郎さんの家。争い、良くない」

「は、はい……」

そのジンベエさんの頭をぴよんと踏み台にして、トビタローが二階目掛けて飛んで来る。

「たつろーにーちゃーん！ もう少ししたら、ブリさんが来るよー！ おつきいんだ！」

「おお、ご苦労。来たら、居間に頼む」

「はい」

また窓から飛び出して行ったトビタロー。よく働くヤツだ。

ふと、窓から外に目をやれば

「ああ……あつたかいねエ。……眠くなってくるだろオ？」

「きやつー！」

物置の屋根の上で大の字に寝転がって日向ぼっこしているマサ。

ヤツの腹の上には、にこにこしているちっこいリーネちゃんがいる。でっかい頃よりもずっとずっと幸せそうだな。いいコトだ。

なんだか嬉しくなってきた。

そんな彼等を眺めていると、ちよいちよいと袖を引かれた。

「ん？」

振り返ると、やっぱりにこにここと笑っているナーちゃんが。

『これ、どおですかあ？ 達郎さまっ！』

前とは違うデザインのドレスか。
うんうん。

ナーちゃんにはとっても似合うよ。

だけど、これ……

「達郎様、いかがでしょう？ このデザインこそ、姫様の魅力を十分に引き出せると思いませんか？」

ニシンのおばちゃん、やったらと自信満々だ。

その隣にいるアジのおばちゃんが不満そうに

「とは申せ、達郎様。これでは姫様の胸ばかりが強調されていて、姫様全体の魅力が伝わってこないと思うのですよ。やはり、この前私が縫ったデザインの方がよろしいかと」

確かに、ね。

肩から背中、胸元がずばり露出。下からすくい上げるようにしてあるから、今にも溢れこぼれ落ちんばかりになっているナーちゃんの胸！ ってか、胸をちょっと隠してある以外はほとんど露出じゃないかよ……。

「いやいや、アジーノさんのより、私の方が……」

「何を仰いますか！ ニシンシアさんのデザインでは、姫様がハダカ同然でしょう？ 姫様に恥をかかせるおつもりですか？」

どっちのおばちゃんも譲らない。

判決を下してやる。両方不可！

アジーノさんのドレスはスケスケで胸まで露わだし、ニシンシアさんのは胸しか隠してないし。どーしてこう、両極端になるかね？

「両方を一緒に組み合わせたデザインにしてみらえる？ 胸のところをニシンシアさんのやつをベースにして、周りをアジーノさんのデザインで固めればいいと思うケド？」

それが常識的なデザインというものではなかるうか。

にらみ合っていたアジとニシンは

「では、達郎様がそのように仰るのであれば」

何とか受諾してくれたようだ。

背後では葵さんが苦笑している。

「さて、姫様のドレスが落ち着きましたから、お次はくるりと振り返ったアジとニシン。」

「葵様のドレスもご用意して差し上げたいと思いますの」

「え……？」

葵さんが固まった。

「さあ、葵様！ 寸法を測りますから、お召し物を脱いでくださいまし！」

「わ、私は必要ありませんから！ 姫様をお守りする立場ですから、ドレスなど……」

「何をおっしゃいます！ 一番姫様を支えてこられたあなたが美しく飾らなくてどうしますか？ さあ！」

「いやーっ！ 要らないですってばーっ！」

アジとニシンに追われ、葵さんは逃げていった。

『達郎さまっ！ このドレスでは……いけませんか？』

不思議そうな顔をしているナーちゃん。

前のめりになっているから、そのこぼれんばかりに寄せ上げられた胸がぽゆぽゆと重力に引かれるままに揺れている。

いけなくはないよ？

いけなくはないんだけど、やっぱり 親父を招待できないんだ

よねえ、これじゃ。

人間と海の世界の連中がシャッフルしていて騒がしくはあったが、海藤家は今日も平和なのであった。

その56 魅せる男、見られる女

早いもので、十月も半ばになろうとしている。

リーネ騒動が収まったから、毎日は平和に、しかしどんどん過ぎていく。

「うーむ……」

放課後、図書室で独り頭を抱えている俺。

目の前には白紙の「進路希望調査書」が……。

どうしよう？

海の連中とまったり毎日を過ごしているうちに、すっかり忘れていた。

この前、担任との面談が実施されたのだが、俺の担任いわく

「海藤はなあ……成績は悪くないんだが、かといってびつくりするほど良くもない。文系かというと理系教科が悪いワケでもなく、と行ってどれが優れているということもない。うーむ……正直、お前自身はどうしたいんだ？」

アドバイスに困った挙げ句俺に振るんですか。

どうしたいと言われてもねえ。

大学へ進学できればベストではあるが、この街に大学はない。進学しようと思えば自動的に遠くの街へ出て行かねばならないが

ナーちゃんとのことがあるから、そーもいかない。しかしながら、この不景気で就職なんか夢のまた夢に近い。なにか技術を学んできたのならまだしも、潮清みたいに机上の勉強しかしていない学校の生徒を喜んで採ってくれるような心優しい会社なんか世界中に存在しないに決まっている。

とはいってもなあ。

プーは避けたい。

あともう少し親父の世話になるのはやむを得ないとしても、その間に自分でメシを食べるようになるための「何か」はしなくちゃい

けないと思っっている。

今の俺に関わりの深い事柄を考えてみよう。

……海？

海？ 海か。

海といえば 漁業。いや、漁師というのはちょっと短絡的すぎる。

水族館？ 水族館で働くには学芸員にならなくちゃいけないのか？ 微妙。

海上保安庁。……よくわからん。

一人でぶつぶつ言っている俺を見た担任は多少引き笑いをしながら「海藤、まだ時間はあるから、ご両親ともしっかりお話をしてみる。それからまた、決めていこうじゃないか」

逃げやがった。

とはいえ。

担任は俺の進路を決める係じゃない。あくまでも、決めるのは俺自身だ。

うーむ……困った。

「おーい、たっつー！ ナニしてんのお？」

「わあ！」

不意に背後から声をかけられてビビった俺。

なんだ、めぐみかよ。

「わあ！ とはヒドイなあ。こんなカワイイコつかまえてビックリすることないじゃん！」

その自信はどこから湧いて来るか知らんが、自顔自尊する性格は変わってねえなあ。

「お？ 進路希望調査書！ ……って白紙じゃん。たっつー、どこもいかないの？ プー志望？」

ひでえ言われようだ。

「どこにいこうか悩んでいるから白紙なんだ！ そういっつお前は決まったのか？」

「アタシ？ アタシはねえ」えへん！ という感じで腰に両手をあてて平らな胸を張り「調理関係の専門学校に行こうと思うんだ！ 三ツ星フランス料理レストランに就職するか、屋台のおでん屋になるか駅前のケーキ屋に勤めるかはわからないケド」

なんか落差がありすぎないか？

三ツ星レストランと屋台のおでん屋って……。

ただ、めぐみはこうも言った。

「アタシもこの間までどうしたらいいか迷ってたけど……たっつーのおかげだよ？」

「へ？ 俺？」

「うん！ たっつーはさあ」

彼女が言うには、進路をどうしようか悩んでいる時、駅前商店街にあるお好み焼き屋の前を通りかかってふと思いついたのだという。学校祭で、懸命にお好み焼きを焼きまくっている俺の姿。

そこから料理関係の道はどうだろうと真剣に考え始めたらしい。言われて見れば、めぐみの舌は割と確かだった。

学祭の出店でも、野球部時代練習の帰りに寄った店でも、こいつが「いい」といった店は確かに人気があったような気がする。

「そうか……」

気がつけば俺、めぐみに向かってとうとうと進路の悩みをぶちまけていた。

図書室には、他に誰もいない。

彼女は行儀悪くも机の上にひょいと腰掛けて俺の話に耳を傾けてくれている。

「ふーん……」

聞き終わったためぐみは腕組みをしてしばらく考えていたが「たっつー、アタシと同じカモ。ムリして大学に進学しても、きっとその先でまたどうしたらいいのか、わかんなくなるんじゃないかなあ」

「……」

「今はまだたつつーのおとーさん元気で働いているんだし、今のうちにもうちよい勉強させてもらえば？ 大学の勉強じゃなくて、たつつーがほんとーに自分に向いていて、やりたいコトの勉強。」

そしたら、その先でどうしたらいいかも見えてくるんじゃない？」

おお！

なんて明快なんだ！

担任が導けなかったアドバイスを、めぐみはすらすらとよどみなく話してくれたぞ。

そうか。

そうだな。

大事なのは、自分がどうしていきたいのかをきちんと見つめるってこった。

大学とか就職とかっていうのは手段であって、それそのものが目的じゃないしな。

なんか、目の前が一気に明るくなったような気がするぞ！

「ありがとう。見えてきたような気がする！ もっかい、俺がやりたいところに戻って考えてみるよ」

「へへ。たつつーに感謝されると、テレくさいなあ……………」

頭をかいているめぐみ。

「ところでさあ」

彼女には、何か報告事項があるらしい。

「アタシ………… 清水先輩と付き合うことにした。暫定、だけど……………」

「ほお」

これはすごいアクセントだ。

夏休みに入って間もなくの頃、清水先輩はめぐみに拒絶されて動物園のクマ状態で悶絶し、落ち込んでいた。

しかし、ヤツはそれだけの男ではなかったようで、一念発起して野球と勉強、共に狂ったように集中し始めたらしい。レクレーションと称する部室でのゲームを一切禁止し、朝も早くから夕方までびつちりと練習に取り組むようになった。墮落にどっぷり浸かっ

た三年生の何人かは耐え切れなくなって去っていったようだが、その真剣さを見た二年生や一年生が何人か入部してきて、結果的に試合には支障なくなったという。

「で、この前。秋の地区予選大会の前の日よ」

放課後、ぶらぶらと帰宅しようとした彼女の前に、一人の野球部員が駆け足でやってきて、びしっと立ち止まった。

びっくりしてよく見てみると　なんと彼は清水先輩だった。

あのだらしのない長髪メガネ男の影はどこにもなく、さっぱりして引き締まった顔に変化した彼はめぐみに向かってただ一言

「明日の予選、俺達は必ず勝つ！　だから……勝ったら、俺と付き合って欲しい！」

返事を聞くことなく、ダッシュで去って行った。

多少の青春クサさはやむを得ないが、ともかくもめぐみはドキリとしたらしい。

で、翌日。

こっそりと試合を観にいつてみると　試合はもつれにもつれ、同点のまま延長戦に突入していた。

十回の裏、潮清の攻撃。

ツーアウトから目の覚めるようなツーベースヒットを放って出塁した清水先輩、いきなりサードへの盗塁を試み、タッチの差で滑り込みセーフ。

ツーアウト、ランナーは三塁に清水先輩。サヨナラのチャンス。いつになく気合いの入ったヒツジが出したサインは「スクイズ」だった。

ピッチャーが振りかぶると同時に、清水先輩はホームへと猛進した。

バントにはなったものの「かすっ」っという情けないゴロ玉。しかもピッチャーの正面。

だが、清水先輩は躊躇することなく、男を見せた。

「うおおおおおおお」

一気にヘッドスライディング。

同時に、キャッチャーはピッチャーからの送球を受けている。
ずざーっ……

一塁側スタンドを埋め尽くした相手校の生徒達、そしてばらばらとまばらな三塁側スタンドの観客達、一斉に息をのんだ。

わずかな静寂ののち、審判の右腕は 横に振られた。

「セーフっ！」

この瞬間、潮清高校軟式野球部悲願の「一勝」は達成された。

ホームに届いていたのは、清水先輩の右手の先、ほんの数センチだった。

「いやったあーっ！」

ベンチから狂喜乱舞して飛び出していったナイン達。

すべての力を使い果たした清水先輩はグラウンドに伸びたまま起き上がれずにいたが、数秒後には

「ばんざーい！ ばんざーい！」

胸上げをかまされていた。

たかが地区予選の一回戦に勝ったぐらいで甲子園出場が決定したかのように喜んでる潮清ナインを見て、相手校の生徒達や審判員達は呆然としたらしい。

しかし、外野席の隅っこで隠れるようにして一部始終を見ていためぐみは

「泣いちゃったよ。あのしょーもないバカ先輩が、あそこまでやるんだもの。何にも言えなくなっちゃった」

笑いながらも、彼女はまた涙を浮かべていた。

そうか。

ついに勝ったか。

めぐみの話を聞いて、また一つわかったような気がした俺。

一打一点の強打者が一人いたところで、チームが勝てるワケじゃない。
ない。

全員で「勝ってやる！」って執念を燃やして協力したからこそ、

勝てる日がやってきた。

そういう意味では俺、自分しか見えていなかったな。自分さえ打てれば、チームがクソ負けしようとうとうしようとうと、別になんとも思っていないかったし。

しかし　その後、清水先輩はめぐみに向かって言ったらしい。

「この夏、海藤と水瀬に去られてどうしようかと思っただ。でも、あの時一人で真剣にやっていた海藤に比べてやれないチームにしたのは俺だ。あいつが俺に活を入れて、今のチームにしてくれたんだよ」

なんか俺、えらく厳肅な気持ちになっていた。

あの清水先輩が、感謝してくれていたとは。

すげえ成長を遂げたんだな。

心の底から敬意を表したい！

「でもさあ」

めぐみはちよつと不満そうに

「確かにいい感じのオトコにはなったケドお……エロい心まではカントンに矯正されないのよね。こないだ一緒に映画に行ったんだけど」

気がつけば視線はいつも胸元、上りの階段やエスカレーターは常に背後。

ついでに、近くをミニスカなギャルが通れば視線が一緒に動いていく。

「どお思っ？　アタシのを見つめ続けるならともかく、よそのコをじっと見てんだよオ！　ホントに付き合っがいいのかどうか、考えちゃうんだけど！」

あー……。

そっぴや清水先輩、めぐみの格好がいかにかエロいかについて延々と語っていたっけ。

こんなに心の直ぐない女をつかまえておいて、それはないよな。

まだまだ男を磨く必要があるようだ。

その57 ニオイます

秋も大分深まった。

その日、俺はジーナさんと共に買い物へ出た帰り道、臨港一号線沿いを歩いていて。

例の近海MM跡近くまでやってくると、どうも雰囲気が騒々しい。ジーナさんはあまり目が良くないから

「達郎ちゃん、人間の皆さんがもめているのかい？　なんか、やけに騒がしいねえ」

はつきり見えていなくとも、気配でわかるらしい。

俺達は一号線を挟んで近海MMの反対側の歩道を歩いているのだが、あっち側にはノボリがたくさん立っていて、ハチマキを締めたおじさんおばさん達がこれでもかとはかりにたかっている。で、

「うにやらかかんたら、はんたいい！」
とか連呼している。

近海MMの建物の周りは例の塀で囲われており、その中では足場が組まれている。何かの工事が始まっているようだ。そういや魚住興業が潰れてそのあと、峰山の実家のMCGがまたこの権利を持つていったんだよな。なんか、工場にするとか言ってたっけ？

騒ぎを横目を通り過ぎて行こうとすると

「これ、お願いします！」

道端にいたおじさんがビラを差し出してきた。

「はいはい」

受け取って書いてある中身を読んできると

『峰山グループによる産廃リサイクル工場建設、断固反対！』
と見出しがある。

ふーん。

そんなモノを造ろうとしていたのか。

以下、峰山グループがどれだけ「悪いコト」をしてきたか、を紹

介する文章が延々と細かい字で続いていく。

『市の幹部に多額の賄賂を贈って湾岸への排水垂れ流しを隠蔽し、一方でコスト削減と称したずさんな設備管理を続けた結果、多数の死傷者を出す大惨事まで引き起こしたことは記憶に新しい。しかし、負傷者、遺族への補償については未だ峰山側から具体的な方策が明示されていないのが現状である』

ここまででは知ってるよ。

だけど、これはMCGじゃなくて、その社長の兄弟である人間が経営していた「峰山グループ」がやったことだよな？ MCGとは別なんじゃ……？

そう思いつつ読み進めていくと

『現在のMCGは、対立する魚住興業を弱体化させるために近海Mをめぐる不正疑惑をでっちあげた疑いが濃厚である。かつ、逮捕された峰山社長と同じような手口で市の関係者と接触し、何らかの便宜を図った模様である。なぜなら、この直後に宙に浮いていた近海MM跡地の使用权をMCGが得ているからである』

おおっと？

なんか、きな臭い感じがするぞ。

魚住がいなくなったと思ったらようやく峰山も本性をあらわしてきたのか？

思わずチラシの内容に没頭していると

「達郎ちゃん、歩きながら字を読んだらアブナイよ？」

ジーナさんに注意されてしまった俺。

「すみません……」

それで翌朝。

朝刊を見た俺は思わず眉をしかめた。

『MCG、反対派住民の一部を名誉毀損で告訴』

記事を読む限り、どうやら昨日撒いていたビラがそれらしい。

峰山の親父のコメント『事実無根のデマをもって中傷されたことは、きわめて遺憾である』

確かにねえ。反対派つてのは世界中どこでも過激だから、そういうこともないとは言えないかもしれないけれども。とって、これがデマであるという保証もないんだよな。だいたい、今度の工場建設計画がまともだったら、あんなに住民の方々が反対したりしないと思うんだけど。

ぶっちゃけ、なりふり構ってねえ感じがする。

峰山。

リーネがいなくなった今、お前はいつたい何を考えているんだ？

近海MM跡地での騒ぎといい、MCGの告訴もそうだが、例の峰山についても最近妙だと思うことがあった。

「やあ、海藤君」

ある日の朝、学校の玄関でばったりヤツと出くわした。

あれ？ いつもべっちゃりくっついてる筈のセクシー人魚・ファイルがない。

「お前、ファイルはどうした？ 一緒じゃないのか？」

すると峰山はふつと小さく笑って

「これからは進学に向けて授業に本腰を入れていかないとならないからね。彼女には家で留守番をお願いしたよ。まあ、イヤだつて、とんでもなくだだをこねられたけどね」

その時はそんなものかと思って意に介していなかったが。

とある休み時間、次の授業の教師とばったり出くわして、実験の教材を準備するように頼まれた。

「えー……めんどくさいっすよ。昼メシ買いたいのにー」

「ここで海藤に会って助かった！ ちょっと用事を足して来ないとならないんだよ！ 頼む！ 片付けはほかのやつにやっってもらおうかー」

何かと良くしてもらっている教師の頼みとあっては、逃げるわけ

にもいかない。

仕方なく俺は、校舎のもっとも端にある倉庫へ行った。

一階の奥にあるそこは人気が少なく、昼休みになるとどこからともなくカップルがやってきてはべっちゃりへばりついている様子が目撃される場所である（そんな情報は要らないが）。

誰もいない、薄暗い廊下をぐだぐだと歩いてみると

「 そうなのか。フィルのヤツが？ そうか……そうだな。それもやむを得ないだろう」

声が出た。

一瞬知らないヤツかと思ったが、フィルという単語で俺はその声の主を知った。

近寄って行ってスキンシップ代わりに小突いてやるうかと思っただが、

「 だから、いって！ 僕が許可するんだ！ 言う通りにしてくれ！」

突然、語調が荒くなった。

驚いて近くの物陰に身を潜めた俺。

すると、峰山は電話の相手にこんなことを言った。

「 うん、そうだ。もうフィルは用済みなんだからな。カン違いしないでくれ」

あ？

今、何と？

……用済み？ フィルが？ なんだソリヤ？

「じゃ、そういうことで」

ヤツはそのまま電話を切り、すたすたとこちらに向かって歩いてきた。

スキンシップどころじゃない。

俺は物陰に隠れたまま、峰山が通り過ぎていくのを待った。

などという出来事があったから、なおさら俺の峰山に対する不信任は強くなっていた。

それにしても「用済み」扱いされているフィル、大丈夫なのだろうか？

まさか、人知れず殺されたりなんか……しないよな？

安否を確かめる術なんかないのだが、それだけに気になって仕方がない。

近海MM跡地をめぐるトラブルと用済みにされたフィル。どういう関係があるのだろうか？ これはまず、工場建設反対派の人たちから事の真相を確かめてみなくちゃならない。

だけどなあ　一介の高校生が殺気立った反対派のおっちゃんおばちゃんのところへ近寄って行ったって「はいはいはい、ジャマだよ、ジャマ！」とか言われるに決まってるんだ。

おっちゃんおばちゃんから詳しく話を聞く方法。

峰山から化けの皮をはいでいく奇策。

なんかないだろうか？

あれこれと考えながら廊下を歩いていると

「きゃっ！」

「おっとお！　ごめん！　考え事を」

女子生徒にぶつかりそうになった。

慌てて謝ろうとすると

「お？　たっつーじゃん！　考え事しながら歩いていたら危ないよん」

相手はめぐみだった。

「あ、ああ、そうだな。気をつけるよ」

彼女は他の女子生徒と一緒にようだ。

傍にしているのは、太い黒縁メガネをかけた生真面目そうな女子。上から下まで一直線ストレートのロングにパツン前髪っていうのはどうだろう？　うっかり恨まれたら、夜中に呪いの儀式とかやられるかもしれない感じのコである。めぐみのヤツ、なんだってこんな女子と連れ立ってるんだ？

といつつ、なんか記憶にある顔だ。

「めぐみ、彼女は？　どっかで会ったことがあるような……」

「たつつーってば、ホントにアタマがハムスターだねえ。潮清祭の時、取材に来てたじゃん！　校内でもっとも売れた出店の秘密を探る、とかっていうネタでさあ」

おお！　そうそう、そうだった。

「ああ。確か、報道新聞部の……」

「三波真砂子です。あの時はどうも」

笑わずに挨拶した三波。

思い出した。

こいつは見てくれ真面目で根暗そうな反面、校内や近隣の噂や事件を綿密に調査取材し、細かく検証して新聞や小冊子に掲載するという特技をもっている。その分析はほぼ完全無欠で、市内の高校生による新聞コンテストで二年連続金賞をもらったりもしているようだ。しかしながらロツクオンされた側としてはたまったものではなく、三波が暴いた記事によってすでに怪しいコトをやっていたクラブの五つや六つは消滅させられているという。一時期、あのヘツポコ軟式野球部も狙われた事があった。幸い、仲のいいめぐみが説き伏せて事無きを得たのだが。

サカナのように表情のない三波の顔を眺めているうち、一つのアイデアが浮かんできた。

これはもしかすると……イケるかも知れない。

「おい、ここで会ってちょうど良かった！　ちょーっと、協力して欲しいんだよ」

その58 海をめぐるお話（Aさん、談）

放課後。

俺はめぐみ、三波と連れ立って、例の工場建設場所を訪れた。

案の定、今日も反対派な皆さま達がコワイ顔をして建設現場を睨んでいる。

「あのーすいません！ 潮清高校報道新聞部の者ですが……ちよつとお話をうかがうことはできませんでしょうか？」

「え？ 潮清高校の生徒さん？」

頭に八チマキを巻いたつるっばげのオッサンにさっそく胡散臭い顔をされた。

こりややつぱり追い返されるか？

思ったが、後ろにいたおばちゃん達のうち、一人が

「あら！ 潮清の新聞部でしょう？ 知ってるわよ！ 市の高校生新聞コンテストで何度も金賞に入ってるのよお！ ちよおーどいい人たちが来てくれたわあ！」

パツと顔を明るくして

「せつかくだから、取材してもらいましょうよ！ そのへんの一般紙なんかよりもっっかりした記事を書いてくれるわよ？」

すると、他のおばちゃん達も

「まあ、そうなのお？ らっきーじゃない！ この際、峰山の悪事をしっかり報道してもらわなくちゃ！」

「そーね！ アタシもいいと思うわ！」

おばちゃん達が一齐に賛成してしまったものだから、つるっばげは戸惑った顔で

「え、そうなの？ 潮清高校って、俺はてっきり頭の固いガリベンさんしかいねえもんだと……」

俺やめぐみみたいに頭ふやふやな連中だっただくさんいるんです。

といういきさつがあり、二十分後、俺達は「建設反対住民連

合副会長」とかいうおっさんの家にいた。

ちなみに、会長さんとやらは例のビラによって訴えられているから、今日はその対応でいならしい。

「いやー、よく来てくれたね。あなた達のような若い人たちに興味をもってもらえて、すごく良かったよ」

にこにこしながらそう言った副会長のおっさん、名を沼田さんという。

見た目、通常のおっさんである。

一步現場に踏み込むと燃えてくるらしい三波は「キラーン！」とメガネを鋭く光らせ、目にも止まらぬ速さでノートを開きペンを構えた。

「では、さっそくですが……今回の経緯について、詳しく伺いたいと思います」

やる気百二十%の態度の彼女を見た沼田さんはちよつと嬉しそうにしたが、すぐに表情を曇らせ

「まったくさあ、酷いもんだよ。峰山のやり方は……。魚住も魚住だったけど、ありゃあ、魚住以上だよなあ」

「いやあ、アタシ、ぜんぜん知らなかったあ！ ひどい話だね！」
ぶんぶんと怒りながら、アイスコーヒーをちゅーちゅーやっっているめぐみ。

「まだ、結論を出すわけにはいかないけれども……あの方達の話を聞く限りでは、かなり悪質だと思うわ。記事にする価値、十分よ」

三波のメガネが光った。

沼田さんから詳しい話を聞き、ついでに建設現場の写真を隠し撮りしまくった俺達。

のどが渴いたと騒ぐめぐみのために、最寄のファーストフード店に立ち寄っていた。

取材で聞き取った話。

数年前、俺達がまだ潮清に入学するよりも前のこと。

現在建設工事が進められているあの一帯は、近海市による臨海地区再開発計画によって埋め立てが行われた。近隣で漁業を営んでいる人々はその計画に反対していたが、市は潮の流れなどを詳しく調べた報告書を開示し、埋め立ては漁業にはほとんど影響を与えないという説明をした。それでも反対する人々はいたが、埋め立て地は工業用地とはせず、臨海公園ならびに地域の業者に運営を委託した商業施設を建設するという話だったから、住民達はしぶしぶながらも反対運動を収めることにした。多少の影響は出るかもしれないが、工業用地でないなら水質の汚染等も発生しないだろうと判断したからだ。

しかし、埋め立て工事完了後に急ピッチで建設が進められたのは大きな工場だった。

住民達の猛抗議に、市の職員は冷たく一言。

「予定が変わりましたので」

建設現場へ押しかけていって抗議するも、警備員や建設会社の人間によって住民達は追い返され、誰も彼等の悲痛な抗議に耳を傾ける者はなかった。

結局、そのまま工場は完成して稼働を始めたのだが、少し経ってから住民達は異変に気がついた。海の色が次第におかしくなっている。魚も急に取れなくなった。それだけではなく、住民達の中にも健康を害する人たちが現れ始めたのだった。

あの工場は明らかに、有害な排水や煙を垂れ流している。

大学の先生などを呼んで調べてもらうと、結果は明白だった。

「いやあ、おかしなこともあるものですね。これだけ基準値を上回る有害物質が検出されているというのに、市は何もしないのですか」
ついに漁師さん達を中心に、市や工場の経営者を相手取って裁判を起こそうということになった。

しかし、その矢先。

「ごめんください。MYリゾートと申しますが」

そつ名乗る業者が、住民達の前に姿を見せるようになったという。自らも当事者であるところの沼田さんはしみじみと言った。

「思えば、あれも峰山だったんだねえ……。一帯をリゾート地として開発を計画中で、用地買収を進めているだなんて。ハナシが出来すぎているとは思ったんだけど」

業者は言葉巧みに言ったらしい。

今、皆さんは裁判に持ち込もうとしているが、それではいつになったら結果が出るかわからないし、あるいは負けてしまえばそれまでです。私達はこの辺を造成してゴルフ場にしたいと考えているのですが、どうでしょう？ 土地をお譲りいただく方が、現実的に解決できるのではないかと思います。

断固として首を縦に振らない人も中にはいたが、結局は一人、また一人と契約に応じる者が出てきてしまい、ついには残る住民の方が少なくなってしまった。そうしているのも束の間、やはり汚染されていく空気や海には耐え切れず、とうとう全ての人が立ち退いていき地域は無人と化した。

これはいつぞや、俺がイワシと共に葵さんを助けに行つて、そして別れたあのあたりだ。

「ちよつと、待つてください」

三波が遮った。

人差し指でメガネの端をぐいっと上げながら

「その、市の職員が言った『計画の変更』というのは、どういうことなのでしょう？ 最初に皆さんに提示されたプランはウソだったということですか？」

いやいや、と片手を左右に振った沼田さん。

「いくら何でも、いきなりウソの説明はないですわ。弁護士を通じて調べてもらいましたけど、埋め立て工事が行われている当初は確かに、臨海公園と商業施設を建設する予定だったみたいです」

だが、と彼は付け加えた。

「その後で、明らかに……。何かがあったんです。さもなければ、ああ

もあつさり計画がひっくり返るワケがないですからね。なんでそつたらことになるんだって、何度も説明は求めたけども」思い出し、いて腹が立ったのか、沼田さんの口調に訛りが混じってきた。

「市はあ、なんの説明もなかと。変更になったってえ、一点張りですあ」

「じゃあ、何があつたのかは、調べようもなかった、と」
念押しをするように、三波が重ねて尋ねると

「いんや。魚住興業はあクビんたつていう人から聞いたさ。臨海公園と商業施設はあ、魚住で請け負うことになつちよつたと。それが急に」

「ばしつとテーブルの縁を平手で打ち

「……峰山に持ってかれたんだつて！ やつら、市の人間に手エ回したんだ。でもなけりや、ここまで決まつたモンはひっくり返らんとよ！ 間違いなか！」

「ここまでが、俺達の知らなかつた部分だ。

「これ以降の騒ぎは今年の初めになって起きている。

工場が爆発事故を起こして警察が現場検証に入り、その時になつてようやく工場内部から秘かに排水を海へ垂れ流していたことが明らかになった。工場関係者の証言で市がこの事実を黙認していたことがわかり、峰山グループの社長以下関係者だけでなく、市の方からも逮捕者を出す騒ぎになった。しかしながら、魚住が受注していた工事が突然峰山にひっくり返された件についてはなんら詳細がつかめず、真実が明らかにされることはなかつたようである。

港湾の汚染を看過した責任をとって市長が辞職したことによる市長選挙が終わつたあと、市は急いで工場跡地付近の再開発計画を立案し、汚染区域を埋め立てた。同時に、入札によって敷地の使用権を魚住興業が取得し、あの近海MMがオープンしたのだ。

だが 魚住興業もまた、裏ではろくでもないことをやっていた。どこでどう接触があつたのか、リーネなる人魚と手を組んで展示用の生き物を調達していたのはまだしも、リーネが策略によってナ

「ちゃんを捕らえて近海MMに引き渡すと、彼女をこともあるうにシヨーに出してさらし者にしたのだから。ただし、このあたりの詳細は正直わかっていない。何せ、ナーちゃんや葵さんは囚われていたのだし、彼女達が人間側の事情なんか知る由もないのだ。」

まあ、それはともかく。

俺は沼田さんに訊きたいことがあった。

「過去の経緯はわかりましたけど……峰山も今は経営者も母体となる会社も当時とは異なっているはずですよ？ どうして皆さん、反対運動をされているんですか？」

すると、彼はふうつと大きく一つため息をつき

「そりゃあね、一見あん人達は何にも悪いコトしてないように見えますよ。でもね……」

とんでもないことを言った。

「……魚住は、峰山、つて今のMCG、ですか？ 一杯食わされたんですわ。魚住もあちこちで評判が良くないコトはしてましたけど、それは一つ一つ見ていけば地主とか相手の業者にも非がある話なんですよ。ケド、峰山は違う。あやつら、最初から水族館（＝近海MM）が失敗するように、身内の者を知らん振りして送りこんどつたんです。それだもの、ふた月しないで潰れるワケださ」

……はい？

今、なんと？

「今の峰山、あれはあとんでもなくズルいヤツだア！ 兄弟のほうの会社がいずれ上手くいかなくなるのを見越して、魚住に手エ回しといたんだもの。ああ、市にもだ。……今度リサイクル工場なんかつくるっていつてるけども、なあんも、すぐ工業薬品の工場さ変えちまうから！ そうなったら、あんだ、この辺の海なんかもーもーぶるぶると首を振った。」

「 死の海だ。どーもなんね」

要するに、近海MMの施設を改築してできるであろう工場とやらは、名目上「廃棄物リサイクル施設」となっているものの、沼田さ

ん達はそうではないという事実を握っているらしい。そして過去の経緯、それからMCGのやり方から、必ず連中は住民にとって有害な汚染を繰り返すであろうと考えているようである。

「ただ、ちよつと建設を差し止める根拠には乏しいわね。薬品工場云々はいいとしても、イコール環境汚染だというのでは、話が飛躍しすぎだわ」

俺は三波の意見に賛成だ。

何かやっている、と、何か仕出かしそう、じゃ全く違うからな。

建設差し止めの訴訟に踏み切れないでいるのは、そういう事情もあるかららしい。

「ま、もう少し調べてみたほうが良さそうね。一方の意見を聞いただけじゃ、何とも結論は出せないから」

ノートとペンをしまっている三波。

記事になるならなはいともかく、今日のところはこの三波が動いてくれただけでも収穫だと思った。取材に同行するまでは、事の中身がよくわからなかったし。

「うーん。でもさあ……峰山はアヤシイよ」

めぐみは長く伸びた前髪をぴっぴつと引っ張りながら

「なんだかんだいったってやっぱりみんな、同じコトを繰り返すのよ。清水先輩だってそうだもん。もう目移りはしないっていったのに、やっぱりほかの女の子を見てるし」

他の席にいる女の子達をちらりと見やった。

「やっぱ、付き合い取り消しにすっかなあ。あんな浮気野郎だなんて、思わなかった」

本決めでなくて暫定だって言ってたしな。

清水先輩、ツメが甘かったようだ。

せつかくこんないい女がうんって言ってくれる寸前だったのに。が、すっかり冷めてしまっているらしいめぐみはあっけらかんとして

「……真砂子、あなた、どんな人が好きなの？」

「私？ 私は……」

三波はしばらく宙を睨んで考えていたが

「……浮気性でもいいわ。それはそれなりに、なんか面白い情報が
いろいろとつかめそうなもの」

おい……。

その59 海をめぐるお話（Bさん、談）

帰宅した俺は夜、みんなに事情を打ち明けた。

「　　ってことで、峰山の親父の会社はみんなに相当恨まれていて、しかもヤツ自身もクサイんだ。俺が想像する限り、フィールシャは恐らくヤツによって自由を奪われているんじゃないかと思う。彼女がどうして峰山に接近して、何で用済み扱いされているのかがよくわからないんだけど」

すると、仰向けに寝転んでリーネちゃんをあやしていたマサ、

「　　なの、カントンじゃねエか。ボコってやりゃあいいだろオ？」

そうくると思ったよ。

しかし、ヤツの腹の上にちょこんと座ってにこにこしていたリーネちゃんが

「きゅ！」

急に怒った顔をした。ダメでしょ！　とでも言っているようだ。

「リーネたんってば、じょーだんだよオ、じょーだん！　あははー！　」

ダメだこりゃ。

完全に虜になっちまってる。

「でも、困ったねエ。アタシ達、狙われているのに気がついていたらリーネの動きには気をつけていたんだけど、フィールシャはノーマークだったしねエ。彼女、セイウチ一派に幅を利かせてはいたけど、といって海の世界で悪いコトをしていたって話も聞いてないし」

これはジーナさんの発言。隣でジンベエさんが大きく一回、うなずいた。

眉間にシワを寄せて難しい顔で黙っていたドツボさんも

「あつしらも、リーネに脅されてバランスを襲うようには言われたが、それ以前のコトには関わり合っていないですからねエ……。ま、

達郎さんを襲ったのも、結局はブランサーに協力する勢力を潰すという目的だったみたいです。よう、わかりませんのう。お役に立てずにあいすみませなんだ」

アタマを下げた。

「いや、いいんだ。ブルーフィッシュを追い詰めた一連の黒幕はリーネだったんだし。その間のどういう場面にもフィルーシャは登場してこない。と、すると……」

「なぜ彼女は峰山さんという方のところに身を寄せたのでしょうか？そこがわかれば、少しは見えてくるような気がするのですが」

葵さんが言った。

俺もそう思う。

フィルーシャが何をしたのかわからないために、真相に近づきたくても近づけないのだ。

以前ドルファちゃんが教えてくれた話では、セイウチ一派の中心であったところをリーネによって追い出され、彼女をひどく恨んでいたという。と、すれば、リーネへの恨みを晴らしたいという気持ちがあっただろう。そのために人間である峰山に接触したと考えれば、かなり自然な気がする。

もう少し突っ込むと　リーネと手を組んでいる魚住もまたフィルの敵であり、峰山は魚住を蹴落とそうと企てている。つまり、フィルは峰山のため、魚住を陥れる何らかの働きをした可能性があるんじゃないだろうか？　そして魚住が脱落した今、秘密を知っている彼女は逆に峰山から邪魔者扱いされてもおかしくはない。それ以外に、疎まれるだけじゃなく用済み呼ばわりまでされる動機は考えにくい。

自分の頭の中の整理も兼ねてみんなに話してみると

「ありえますわ！　もし峰山さんとフィルが仲違いしただけなら、彼女は海へ帰されるだけで済むはずですよ！」

「だねエ。アタシも、そんな気がするよ。フィルのお嬢ちゃん、惚れる相手を間違ったねえ」

ジンベエさん、無言でこっくり。奥さんの言い分はなんでも賛成なようだ。

相変わらず不景気な面をしたドツボさんはずいっと膝を進めてきて

「……ご高説です。さすがは達郎さんだ！」
恐縮です。

とまあ、なんとなくわかったような、わからんような。

推測は幾らでもできるのだが、問題はフィルの安否だ。

もしも人間達の手によって彼女の身に危害が加えられるようなことがあれば、彼女自身にも責任があるとはいえ、海の世界と人間達の間を悪化させてしまいかねない。俺に言わせれば、峰山達は恐らく……フィルを利用したのだろうし。

さて、どうしよう？

残念ながら、こつから先についてはいい知恵が浮かばない。

『すやすや……』

夜更かしができないナーちゃん、すでにお休み中。

ふと見ると、マサの腹の上でリーネちゃんが幸せそうに眠っている。

そしてマサ本人も

「……ぐう……」

寝ていた。

人間と人魚。

こんなにも仲睦まじいカップルがまた一組誕生したその反面、不幸な状況を迎えたカップルもいる。

あの頃の峰山とフィル、何だか幸せそうに見えたのに。

わからないものだ。

明後日に学力診断テストを控えていたから、翌日は早々に下校して自宅で学習。

で、テスト終了後。

峰山やフィルの件があったから真っ直ぐに帰ったものかと思っただが、かといって今できることが思いつかない。

やむなく帰ろうとして教室から出たときだった。

「海藤くん！」

呼び止められた。

振り返ると、そこには三波の姿が。

「おお、三波か！ どーした？」

彼女は相も変わらず表情も愛想もない顔で

「海藤くん、これから何か用事ある？」

「いや、特にないけど……」

「じゃあ、一緒に行かない？ この間の件で、取材に」

「取材？ またあの反対派のおっちゃん達のところか？」

三波はかぶりを振り

「ううん、違うの。今日は別なところよ」

別なところ？ まさか、MCGに乗り込むとか言わないだろうな

？ 反対派の一方的な意見だけじゃ判断できないとか言っていたし。

いぶかしんでいると

「意外なところに取材すべき対象があったのよ。妹の同級生の家。

昨日まで私も知らなかったんだけど、実は」そこで三波は声を

ひそめ「……そのコの父親、峰山グループの社員だったのよ。春先

の事故で大怪我を負って会社を辞めたらしいんだけど、背後にいろ

いろあるみたいなのよね。妹を経由して話を聞かせてもらえないか

って頼んだら、OKだった。さっき、メールがきたの」

ほお。

そいつは興味ある。

ってか三波、お前 ホントにそういうコトに向いているんだな。

夕刻、俺達は爆発事故を起こした工場で働いていた、元峰山グル

ープの社員だったという三波の妹の同級生の父親に会って話を聞くことができた。

奇跡的に一命を取り留めたというその人の半身にはその時に負った傷の跡が残っているようで、事故から半年を経た今でも体の右半分が上手く動かせないのだという。

峰山が莫大な利益を上げていた裏側では、秘かに排水や廃棄物を海に投棄するようなことをやっていて、その事実を知る社員達はなぜか仕事とは不相应に高額な給与を支給されていたのだった。

「つまりは、共犯ということだね。不法投棄の実態を知っていて、その上でどう考えても不自然に高額な給与をもらっていたんだから、これは口止め料と言ってもいい。今となっては、バカなことをしたものだ後悔しているよ。このケガは、その報いなんだね……」
俺達が訪れたその家は、やったらとでかくて新しかった。

一年少し前に新築したらしい。

その給与でもって購入したのだろう。

「会社と補償をめぐって係争中とはいえ、今の収入はゼロ。この家のローンも残っているんだ。上の子は大学進学をあきらめて知り合いの会社に就職して働いてくれてくれるけれども、それでもかなり厳しい。家を手放さなくちゃならないかもねえ」

そんなとりとめもない話ばかりが続いて、俺も三波も肝心な部分を聞けないでいる。

とはいっても、わざわざ時間を割いて思い出したくもないことを喋ってくれているワケだから「もう結構っす」なんて言えやしない。

ただ、一通り後悔めいた話の最後に、彼はこんなことを言った。

「工場の機械には定期的に交換しなくちゃいけない部品があるんだけど、それらの交換なんか私を知る限り一度もなかった。非常に危険だと思って工場長に上申したことがあるんだけど、工場長は『それができるのなら、やっているよ。でも、上が……』って言ったきり黙ってしまっただけ。ところが、その工場長は少し経ってから辞めさせられたんだ」

「辞めさせられた……？ どうしてです？」

三波がすかさず突っ込んだ。
すると

「理由はわからないんだ。ものすごく急な人事で、ある日突然いなくなつたようなものさ。それでその後やってきたのが私よりも若い工場長だつたんだが、着任早々一通り設備を見て回つてから『これはいけない。よくこんな老朽化した機械を使い続けていたものだ。早急に設備の全面的な交換を検討しよう』って、ね。今まで会社が認めなかつたものを、今さらできたものかと疑つたんだが、次の日にはすぐプロジェクトチームも立ち上がつて、あれこれ本社と調整を進めていたよ。今度の工場長は手腕が違うなあって、みんなで感心していたんだけども、ちょうどその矢先さ、あの事故は……」
遅かつたのか。

あと少しだけ工場長の交代が早かつたら、あんな事故は起こらずに済んだかも知れない。

「で、その工場長は警察に捕まつたんですか？」

「いや。機械設備の運転全面休止という措置が取れたはずだといって責任は問われたが、なにぶん彼自身は何とかしようとしていた側の人間だからね。最終的には逮捕もされずに済んだようだよ。峰山グループがどうにもならなくなっているうちに、MCGに引き抜かれていったようだけど」

三波の妹の同級生宅を辞去したあと。

バス停にむかつて坂道をぶらぶらと歩いていると

「……」

三波があごに手をあてて、なにやら考え込んでいる。

「どうした？　なんか、引つかかることでもあったか？」

何気なく訊いてみた俺。

「……海藤クン、おじさんの話の最後、気にならなかつた？」

「最後？　工場長が変わつたつてところか？　なんかまあ、運が悪かつたのかも知れないと思つただけど」

事故が起こったのは、設備の交換に向けて動いている最中だった。ならば悪いのは新しい工場長よりも、その先代のせいだと考えるのが普通だろう。上層部が認めないからって、老朽化を放置し続けていたのだから。

そういう意味のことを言うと、三波は眉間にシワを寄せて俺を見た。

「っていうか、なんかおかしくないかしら？ 先代の工場長が気弱で上にモノを言えない性格の人だったかも知れないけど、その後になって会社は設備の交換を認めているのよ？ そこで工場長の首がすげ替わった理由がわからない。だって、その人は明らかに老朽化の危険性を知っていて、設備交換には反対してなかったんでしょ？ おじさんの話を聞く限りにおいては」

「でもさ、新しい工場長の力をしてやっど会社に危険性を理解させたっていうセンもなくはないだろ？ 先代の工場長がきちんと会社に伝えきれていなかったかも知れないんだ」

「それにしてもおかしいのよ。工場長が替わってすぐにいろんな動きが起こったってのは」

しかも、と言ってめがねの端を右手でくいと上げた三波。

「……新しい工場長、事故の後に一人だけMCGに引き抜かれてるのよ？ どうも自然じゃないわ。何となく、作為的な二オイがするんだけど。私にはね」

その60 そして峰山さん、談

ここまでくるともう、何が何だかわからない！

三波は調べていくにつれてかなり関心が高くなってきているみたいだが、峰山の過去の悪事を明らかにしたところで俺達みたいな高校生にはどうすることもできないんだよな。今建設が進められている廃棄物リサイクル工場にしたって、また平気で垂れ流しとかされたらかなわないけど、直接は俺に関わってくることもないし。

俺達にとつて重要なのは フィルが無事かどうか、それだけ。彼女はかなり高い確率で峰山の悪事を知っていて、そのために自由を奪われているハズ。

要はフィルさえ救い出して話を聞けばいいんだけど、その方法がない。

(うーむ。手詰まりか……)

ベッドの上に寝転がってあれこれと考えていると、例によってリネちゃんと遊んでいたマサが

「よオ、タツウ！ お前、こないだから何悩んでんだア？ なんか、くれエよなア！」

悪かったな。

たまにや、真剣に考え事したっていいじゃねえかよ。

「ん……この前、みんなで話してただろ？ フィルって人魚のコを、どうやって助け出したものかなあと思つてさ」

「あア？ ンなコトで悩んでたのかよオ！」

マサはニヤリとして

「だからよオ、そのなんたらつてヤツをシメればいーんだつて！
ぜってエなんかわかるつて！」

はいはい。

だから、腕力とか暴力に頼らずにシメる方法を考えているんです。峰山の口からフィルの居場所と安否を喋らせる手段をね。

ま、マサがいうのは「首根っこをつかまえてうんぬん」の方でしようけど。

「きゅー！ きゅー！」

ヤツが自分の方をむいてくれないものだから、リーネちゃんが怒り出した。

「はいはい！ ごめんねリーネたん！ ちゅーしよーか、ちゅー！」

心の底から楽しそうなマサ。

アイデアをひねり出さねばならないような今の状況では役に立たないけど、彼の存在によつて不幸だったリーネがこれだけ幸せそうにしていることだし。それはそれでいい。

また天井を向いて脳内サーフィンを始めようとすると

「……達郎さん。あつしは思うんですがね」

まるで番人のようにドアの前に正座していたドツボさんがずいっと膝を進めてきた。

「その、峰山さんたらいう方とは、直談判されましたの？」

「いや。あんまり会わないし、あの電話の一件以来喋ってないけど？」

そう答えると、ドツボさんは「きゅっ」と眉間にシワを寄せて

「あつしみたいなバカモンの浅知恵で大変心苦しいのですが、ここはいつそ、正面きつてぶつかってみるという手はどうなんでしょうねえ。なんかこう、上手く言えませんが……詰まった時には思い切つてぶつかってみれば、意外と開けたりなんか」とまで言つて、ドツボさんはカリカリとアタマを搔いた。「いや……差し出がましい口を叩いて申し訳ありません。聞かなかつたことにしておくなさい」

ずりずりと後退していつて、まだドアの前で狛犬みたいに座っている。

「……」

考え込んでいる俺。

言われてみると、そういうものかも知れない。

俺は何とかして峰山の裏をかこうとしているけど、あれだけスキを見せないヤツのバックをとろうなんて、それ自体が現実的でないかもしれない。その方法を考えているだけで日が暮れるよな。

逆に　　どーん！　　ってぶつかってやれば、予想もしなかった展開が起こるかもしれない。

ああいうヤツだから、かえって面食らうんじゃないだろうか。

俺はがばつと上体を起こした。

「ドツボさん」

「へい！」

「そのアイデア、もらった！　それでいこう！　明日、ヤツに真っ向から訊いてみるよ」

一瞬びっくりしていたドツボさんはちょっと嬉しそうな力オになつて

「あつしみたいいなヤツの話聞いてくださるなんて、達郎さんはなんとお心が広いんだ！　感激しやした！」

ずいっと身を乗り出した。

「ようがす！　あつしらも、なんか手を考えてみましょう！　フィエルとやらに恩はねエが恨みもねエ。困ったヤツには手を貸してやるのがポイズン組の掟ですからのう」

あれ？

ポイズン「グループ」じゃなかったっけ？

いつから組を結成したんだか。

翌日。

昼休みになってから俺は峰山の姿を探した。

ダメもとでヤツのクラスをのぞいてみると……うまい具合にいた。女子達に囲まれて、なんじゃかんじゃとお喋りに興じている。イケメンはやっぱりモテ度が格段に違うものだ。とはいえ、もっぱら

喋っているのは傍にいる女子達で、峰山自身はクールな顔でうんうんと聞いているだけだが。

俺はずかずかと教室に突入していき

「……峰山、ちょっといいか？」

輪の中に割り込んだ。

「おや、海藤君じゃないか。君の方から僕を訪ねてくるなんて、珍しいね。……何か、あったのかい？」

微笑している。

俺はウンとうなずいて

「話がある。ちょおつと、来てもらえないだろうか？」

不愉快そうな顔をした女子がいる。せっかく大金持ちのイケメンボンボンとお喋りしていたのに、といったところだろうが、知ったことではない。

どうせ断られる理由なんかないだろうとタカをくくっていたけれど、案の定峰山は

「話、かい？ ……いいだろう。じゃ、場所を変えようか」

あっさり快諾。

ヤツはすつと立ち上がると

「じゃあみんな、申し訳ないが、続きはあとで聞かせてもらうことにしよう。ちょっと、失礼するよ？」

女性陣にそうことわりつつ、俺のあとについてきた。

先に立って歩いている俺は、屋上を目指している。

多少天気は良くないが、屋外ならよほど大声でも出さなけりゃ、誰かに話を盗み聞きされることもないだろう。ヤツにしたって、内容的にあまり聞かれたくないハズだ。

二年生の教室は四階建て校舎の三階にあるから、二フロア登れば屋上に出られる。

分厚い鉄製のドアを開けてみると、屋上に生徒の姿はほとんどなかった。

俺は誰もいない方角へすたすたと歩いて行って、くるりと振り返

るなり

「話というのは、フィルのことなんだが」
単刀直入に切り出した。

「ふむ」

峰山は顔色も変えずにうなずいた。

「俺、この間、先生に頼まれて一階の倉庫まで実験用具を取りに行
ったんだよな。そうしたら、お前がいて電話で喋ってた」

「……」

「悪いと思うが、聞こえちまったから仕方がない。お前、フ
イルは用済みだとか何とか、言ってたよな？ あれ、どういう意味
なんだ？」

ヤツの表情をじっと注視している俺。

こいつのことだから、動揺したりする筈がない。

しらばっくれるか、あるいは事実を認めつつも開き直るか。
すると

「……彼女とは別れることになったっていう意味だ、と言っても君
のことだから信じないんだろう？」

うん、と思いつきりうなずいてやった。

んなワケねーだろ。

もつと上手い言い訳は考えつかなかったのかよ。

峰山はつと俺から視線を外すと、ふうつと大きく一つ息をついた。
「洞察力の鋭い君に対して隠し事は通用しないだろうから、正直に
言おう。確かに僕は、魚住を潰す策略のために、彼女を近づけ
た。そして狙い通り魚住が倒れた今、フィルには何の用事もない」

おーおー。

ずいぶんと身勝手なお話ですな。

フィルも腹に一物もっていたとはいえ、人魚である彼女を営利の
ために利用した挙げ句、あっさり切り捨てるなんてさ。時代劇の悪
代官じゃないですか。

「かといつて」

手すりの傍まで歩み寄っていつて片手をかけながら峰山は

「……彼女を傷つけたり、あるいは命を奪おうとか、誓って言うが、全く考えたりした事はない。今の工場建設の一件が済んだら、海へ返してやるつもりだ。だが、今はできない」

「なんで？」

ヤツは俺の顔を見て微笑をたたえ

「色々、知られてしまっているからね。峰山としては仕方がなかったことも多いのだが、かといってそれを公にされるとこっちも都合が悪い。フィルはあの通り見た目に可愛いコだが、僕の愛情を失っているからには、きつと復讐の一つも企むだろう。……そういう人魚さ、彼女は」

あれよあれよと手の内を明かされてしまうと、なんだか気が抜けてしまう。

だけど、俺はヤツの話を全面的に信じる気にもなれなかった。

ものすごい偏見だとは思っけど 峰山には信じてあげたくなくなるような、人間としての愛嬌とか可愛げがカケラも感じられないのだ。どーせ最後には裏切るんだろうこいつ、みたいな凝り固まったフィルターしかかからないのだ。貧乏育ちな庶民のヒガミかも知れないけど、金持ちは金のためなら何をやるかわかったものじゃないという気がする。

「じゃあ、そういうならさ」

俺はビシッとヤツを指し「元気なフィルに一目、会わせてくれ。

そうしたら、信用しよう」

「何かと思えば、そんなコトか。お安い御用だよ。いいだろう」
よし。

ドツボさんの言う通り、真っ向からぶつかってみて良かった。

フィルが無事なら、とりあえずは安心だし。

だけど せっかくの機会だから、もう少しツツコンでみたい。

峰山が今、何を企んでいるのかを。

「フィルのことはまずよしとして……お前んち、何を仕出かそうと

してんの？ 住民の皆さんに、えらい恨まれようじゃん。一方的な見方をするつもりはないけどさあ、なんか、ヤバいんじゃないの？」
そう、ど真ん中ストレートをかましてみた俺。

すると、峰山は

「……信頼されていないのはわからなくもないさ。おじさんの会社がやったことは、ずばり犯罪だからね。別組織とはいえその身内の会社とくれば、なかなか理解されないのもやむを得ないというものだ」
表情から笑みを消し、遠くの空を見るようにした。

「だけど、この街の人はわかっていないんだ。これという大きな産業を持たないままでは、現代は街そのものが生き残っていくことはできないんだよ。色々と恨まれこそしているけど、MCGやかつての峰山グループがあったから、この近海はやってこれたに決まっている。そうじゃなかったら今ごろ、近隣との市町村合併で近海市はなくなっていた筈さ。バブル以降、経済が振るわないからね」
言い分はわからなくもない。

ぶっちゃけ、大きな企業がやってきてくれればそれなりの経済効果で街は潤うが、そうでなければ人は寄り付かないし、金も動かない。だから、街は潰れていってしまう。少子高齢化とかいうヤツで、全国の市町村がそういう問題に頭を悩ませている筈だ。確か、公民の授業で聞いた記憶がある。

でもなあ。

そのために海を汚したり古くからいる人々の生活を圧迫したりするってのはどうなんだ？

峰山の言い分は、何となく「悪事の正当化」に聞こえなくもないんだけど。

そんな意味の事を少し言うと、珍しくヤツは憤然として

「だけど、考えてみたまえ。この街で漁業に従事してきた人達、魚住のような地元密着の産業に携わっていた連中、彼等が一体何をしていたというんだ！？ 魚が獲れなくなってきたからといって工夫をする訳でもなく、輸入製品が入ってきたから自分達の産業が圧迫され

たといつて文句を言う。 何も努力をしない奴らに限ってそうさ。 今回の工場の件も同じだ。 工場が完成して稼働すれば環境が汚染されるとか騒いでいるようだが、その彼等は自分達の生活しか考えていない。 結局、近海市の産業を支えているのが誰かなんて、市民の誰も考えちゃいないのさ」

資本家という人たちは、きっとみんなこういう考え方をするのも知れない。

俺はヤツの顔を眺めながらそう思った。

確かに、その辺の海で魚を獲っていたオッサン達になにか知恵があつたとは思えない。

だけどオッサン達にも、この街で生きていく権利がある。

峰山だろうと魚住だろうと、そのオッサン達を追いやる権利なんかないんだよな。

といつて 今のこいつと議論するだけ時間のムダだ。

峰山は峰山で、自分の正義を信じているから。 その正義とやら、どこまで正しいかはわからないが、少なくとも完全な間違いではないと思う。

そろそろ、昼休みは終わるだろう。

屋上にぼつぽつといた生徒達が、教室に戻り始めた。

「お前の正義を否定するつもりもないし、正しいか間違っているのか、今の俺に判断する材料はない」

「……」

「ただ、一つだけ聞きたい。……あの工場、いずれまた、海を汚すのか？」

俺の問いに、峰山は不思議そうな顔をした。

何を聞くこうとしているのか、意図がつかめなかったようだ。

が、すぐに目を細めて首を縦に振り

「必要とあらば、ね。この街のためには、そういう多少の犠牲はやむを得ない」

わかった。

こいつとは、分かりあえない。

そして、俺は確信した。

MCGが建設中のあの工場、反対派の人たちが言う通り、いずれ排水を垂れ流すに違いない。

その61 決着をつけましょう

それから、幾日も経たなかった。

とうとう反対派の人たちが実力行使に踏み切り、工事車両の入り口に座り込みを始めたのだ。

警察もやってきて大騒ぎになり、新聞にも割と大きく取り上げられた。

「あらあら……こんな工事現場で座りこんだりしたら、服が汚れてしまつわねえ。クリーニング屋さんが儲かるじゃないの」

天然幸子は新聞を見ながら、またワケのわからん感想を述べてくれた。

ちよつとだけ、峰山に同情しなくなった俺。

市民というのは自分に関わらない限り、割と無責任なものな。この幸子がいい見本だよ。

峰山と話をして以来、俺も少しは街のことに関心をもつようになしてみた。

そうしたら、近海市も意外と大変らしい。会社としては大きいほつだつた魚住が潰れ、それに伴って経営がやばくなりそうな中小企業が幾つか出てきているようだ。それとか、土地の安い郊外に大きなショッピングセンターが幾つも建てられ、それによって昔からある商店の店じまいが加速していること、などなど。

ま、そういう話はだいたい親父に訊くから、親父とのコミュニケーションの機会が増えたのは海藤家にとって喜ばしいことなのだが。とはいえ もはやのんびり構えてももられない。

どこから聞きつけたのか、峰山は報道新聞部の動きを知って圧力をかけた形跡がある。

「突然、顧問の塩尻先生に呼ばれたのよ。何かと思つたら『あの工場建設の件を取り上げるのはちよつと見合わせなさい』だつて。どうしてですかつて訊いても、塩尻先生つてばきちんと答えてくれな

いのよ。……もう、アツタマきちゃう！」

三波が怒りながらも報告をくれた。

なんでも、あの建設現場で親が働いている生徒もいるからとの理由らしいが、どうもアヤシイものだ。峰山からワイロでももらったんじゃないだろうか。塩尻つてのは中年の暗い教師で、特定の生徒ばかり目にかけるとかであまり評判がよくない。

それに、峰山が言った「海を汚すだろう」というあの一言、どうやら現実味を帯びてきた。

反対派の住民が、大きな排水パイプやら機械が搬入されていくところを目撃したらしい。そういうこともあつて、例の騒ぎは起こったようである。耳の早い親父が教えてくれた。

やってくれるじゃないか。

ヤツが言う「正義のため」なのか、あるいはそんなことはこれっぽっちも考えていなくつて、単純にMCGの好き勝手なのかはわからないけども。

俺は意味不明な発言を繰り返している幸子を無視して自分の部屋へ戻った。

ベッドの上ではナーちゃんがやすやすとお休み中。

こここのところ、日中は海の連中の話をあれこれと聞いてやっっているらしい。

心優しい姫様。そりゃあ、疲れるよな。

傍らに腰掛けて彼女の頭を優しく撫でてやっていた葵さんが俺の方を見て

「……姫様ったら、達郎様をお待ちしていたんですけれども、気がついたらこの通りですの」

苦笑している。

俺はふむ、とうなづいて自分のチェアにどつかと腰を下ろした。

ナーちゃんと葵さんのほかに、ジンベエさん・ジーナさん夫妻、ドツボさん、トビタロー、そしてマサがいる。例によって抱っこされているリーネちゃん、可愛く寝息を立てている。

実は人魚の二人（といつても、リーネちゃんはわかっていないだろうが）を除くみんなには、峰山との話の中身を伝えてある。

そしてこれから俺は 一人出かけるつもりでいる。

峰山が指定してきた場所へ、フィルの安否を確認するために。

「達郎ちゃん。やっぱり、誰かと一緒の方がいいよ。アンタになにかあったら、真っ先に姫様が悲しむんだよ？ せつかく、婚礼の段取りも進んできたつてのに」

いかにも心配そうなジーナさん。

やっぱりジンベエさんが隣でうんうんとうなづいている。

葵さんも

「私もそう思いますの。私のオーシャンイーグルなら、多少の人数でも達郎様をお守りできますし」

「おオ！ なんだったら、オレがいくぜエ？ 人間相手にすんなら、オレしかいねエだろオ！」

拳を固めているマサ。

実は俺、ナーちゃんが眠ってしまったのを待っていたのだ。

彼女は絶対に「私も参ります！」って言うハズだから。

案の定、すーすーと気持ちよさそうに爆睡してくれているけれども。

「ありがとう、みんな。気持ちは嬉しい」

俺はみんなの顔を見回しながら

「……だけど、万が一、ということもある。俺がいないスキをついて、ここへワケのわからん連中が押し寄せてこないとも限らないんだ。それに、俺一人なら逃げるのも簡単だしね」

「だったら達郎さん、せめて、ポイズンの連中を……。何の役にも立たないかも知れませんが、せめて急を告げにここへ戻ってくるのとくらいはできますぜ？」

ドツボさんが言うつと

「じゃあ、ボクの方がいいよ！ フグさんとかゴンズイさんよりも早く飛べるし！」

「そつ、それは……」

真面目なドツボさんと無邪気なトビタローの話に思わず笑みを浮かべてしまったが、俺はすぐに表情を引き締め

「ありがとう。でも、峰山にサシを要求したのは俺だから、俺が約束を違えるワケにはいかない。もし、今夜中に俺が戻らなかつたら、その時は――」

「バカなコト言ってるじゃねえ」

マサが唸った。

「タツ、お前に何かあつたらここにいるみんなで、その峰山たらいうヤロー」元・近海の番長は鋭い目をギラリと光らせ「……ぶつ潰すからな。止めてもムダだぜ？」

「あア、わかつてるよ」

俺は立ち上がった。約束の刻限が迫っている。

「別に、ヤバいことがあるって決まったワケじゃない。あくまでも、フィルの無事を確認できればそれでいいんだからさ」

部屋を出ようとして、ふとナーちゃんを見た。

「ごめん。」

こつという危ないことは、これで最後にするから。

もうこれからは二度とナーちゃんに心配なんかかけたりしないよ。胸の内で固く誓った俺。

「じゃ、行ってくる」

玄関先には、ミノカサゴやマツチヨ鯛、キンメがいた。

「こんな時間にお出かけですかい？」

「ああ。すぐに戻るよ」

「お気をつけて。婚礼も近づいてきてますからな」

そつ。

アジーノさんとニシンシアさんのおかげで、何とかナーちゃんのドレスもできた。

ブルーフィッシュやレッドバック、ポイズンの連中があちこちの海へと出かけていって、俺達の婚礼について触れ回ってくれている。

より遠くの海へは、ドルファちゃんをはじめ balanサーのみんなが行ってくれているようだ。

何だかんだと派手に議論はあったが、とりあえずはブルーフィッシュでやることになったのだ。

マサや由美さんはともかく、親父やおふくろを海の世界に連れて行ったら途中で溺れ死ぬだろうし、かといって人魚族のゴ達を地上に上げるのも困難がある。彼女達は陸じゃ喋れないし。

こつちの世界で結婚式を挙げるのは俺が十八歳になってからにする。人間の世界の掟だと、男は十八歳にならないと結婚できないしな。ついでに由美さんが「アタシがナーのドレスを用意すんだからよオ！ アジとイワシのドレスで満足してんなよなア！」とか（ほとんど脅迫に近い）メールを超越してきたという事情もある！

ただ、その前に 決着をつけておかなくちゃならない。

峰山、そしてフィールシャ。

ヤツらに海を汚されてしまっただけは、二度とブルーフィッシュへ行けなくなってしまう。

それに、フィールシャの身にもしものことがあってもいけない。

色んな思いを抱えつつ、夜道を独りてくと歩いていく俺。

行く先は……あの工場建設現場。

しかし、妙な場所を指定してきやがったものだ。

みんなには申し訳ないが、もしかすると タダで済まないかも知れない。

そんな気がした。

その62 最後に笑う者は

深夜の臨海再開発地区。

あの工場建設現場へとやってきた俺、工事用車両通用口の前に立ってしげしげと辺りを眺め回している。

リーネの一件でもここへやってきたんだっけ。

さらに言えば、捕われたナーちゃんと再会したのも今は潰れたこの近海マリンミュージアムだ。

何かといわくの多い場所だよな。

まあ、いいさ。

今夜こそケリをつけてやろう。峰山とフィルの一件さえクリアになれば、あとは海の世界を巻き込んだワケのわからん懸案事項も全てなくなるといふものだ。ただ、あの峰山が「はいそうですか」ってあっさり引つ込むとも思えないけど。

すぐ傍を走っている臨港一号線の道路も、今は通る車もない。

もう十一月も近いとあって、肌を刺すように風が冷たい。

辺りは物音もなく静まり返っているから、風の音だけが耳に聞こえてくる。

(さて……どこから入ったものだろう?)

上着のポケットに手をつ突っ込んでキョロキョロしていたが、埒があかない。

試しに工事関係者用の入り口を手で押してみると、ギイツと音を立てて開いた。

「……ふむ」

中へ入った。

地面は鉄板が敷かれていて、ちよつと歩きにくい。

工場はもともとあった近海ミュージアムを再利用するから、外觀そのものはそれほど手が入られていない。それでもあちこちを直しているようで、ぐるっと足場で囲まれていた。いたるところに資

材が山積みされていて、仮事務所のプレハブ小屋なんか置かれていたりする。作業員の数がハンパないせいか、一棟だけでなく幾つも並んでいる。

敷地内に侵入したのはいいが、工事中の建物だから正式な入り口なんかわかりやしない。

どうしたものかと思っていると、ポケットの中でケータイが鳴った。

「……はい」

「海藤君か。着いたかな？」

峰山からだった。

「着いてるよ。けど、どこから入りやいいんだ？ でかすぎてよくわからんぞお」

「建物の左、東に面した側に裏口がある。そこから入ってきてくれ給え」

「お前さあ」

「何かな？」

「俺を殺す気でしょ？ こんな人気もないところに呼び出したりして」

笑いながら言うと、

「何度も言った筈だよ？ 幾らなんでも、僕達は人殺しなんかしたりしないって。それに、海藤君が一对一を望むというから、その通りにしたつもりだが」

「どうだかねえ。」

悪い奴らは誰でも建前としてそう言うんじゃないかと思うけど？ それに。

「ウソつけ」

「……？ どうしてウソだと言っただね？」

「ファイルがあるだろう。一对一じゃないよ、最初っから」

峰山は一瞬固まったらしいが、すぐに電話の向こう側で笑い出し「違いない。……それより早く来たまえ。そのファイルを確認しに」

「わかったよ。んじゃ、お宅の自慢の工場にお邪魔するわ」
電話を切って裏口へ向かって歩き出した俺。
うーん。

意外とわかりやすいヤツだったんだなあ、峰山って。
思ったより簡単に引っかかりやがった。

まあ、いいや。

暗がり歩きながら、リーネの時にも確か同じようなところから
中へ入ったのを思い出していた。

そっぴや、葵さんが破壊したあの天井の水槽はどうしたのだろう。
あと、シャーク達が死にかけたあの油のプールも。

中では何が待ち受けているかもわからないというのに、結構余計
なことばかり考えている。

そのまま裏口から建物の中へと入った俺。

相変わらず、外よりもさらに暗い。闇が深すぎてほとんど前が見
えない。

「あんにやるー、照明くらいつけてくれよなあ……」
ぶつくさ言いつつも、俺は手探りで前へと進んでいく。

少しづつ目が闇になじんできたと思った時だった。

目の前で何かがキラリと光ったかと思うと、俺の首に何やら冷た
い感触がきた。

「動くなよ！ 動いたら、どうなるかわかるだろオ!?!」

すぐそばで、若い男の荒い息遣いがある。

「ん？ ……どちらさんだろう?」

「魚住だ。お前は俺を知らないだろうが、俺はお前を知っている。

峰山に聞いたぞ。近工の鮫島とつるんで水族館をメチャクチャ
にしたり、色々やってくれたそうだな」

どうも、情報が微妙に捻じ曲げられている。

峰山のヤツがそういう言い方をしたに違いない。

「なんだーお前？ 金に困って峰山に買収されたのか？ 手下に成
り下がってたとはなあ」

「動くなっつってんだ、コラ！　ぶつ殺すぞオ！」

こいつの腰抜けぶりはよく知っている。

ウツボとかシャーク達の野生的な狂気に比べれば、かわいいそうなくらいに怖くないし。

逆に俺は声をぐつと（ほとんどどこつちが悪役みたいに）低くして「動くなと言うなら軽々しく動くつもりもないが……その代わり」ギロツとヤツを睨んだ。「俺にもしものことがあったら、近工のマサが黙ってないからな。次はお前、ボコられるだけじゃ済まんぞ？」

「……………」
魚住は黙ってしまった。

マサの雷鳴は伊達じゃないな。

ってか、さつそく名前を借りてしまった。すまん、マサ。

ナイフの峰で促されるままに歩きながら、俺は付け加えた。

「……………言っておくが俺は一度、マサをのめしてんだ。だからお前ごときをボコるのは造作もない」

「……………」
何も言わなかったが、明らかに魚住は動揺しているらしい。気配でわかる。

それよりも　峰山の野郎。

そう。

ヤツはこんなにもあっけなく、約束を破りやがった。

何が「一対一を望むというから、その通りにしたつもり」だ！

さつき電話があったとき、俺がいきなり「ウソつけ」と言ったら峰山は電話の向こうでぎょっとしていたようだ。すぐに落ち着いたフリを装っていたけれども。

この調子だと、俺は一步一步危険に近づいていつているようだ。

どこをどう通ったのかよく覚えていないが、魚住に押されるまま歩いたり上つたりを繰り返して、気がつくとやたら広くて天井が高いスペースにいた。

左右にどでかいカマミみたいな機械が三つづつ並んでいて、真ん中

が広い通路になっている。

そして、その先には

「……やあ、海藤君。我がMCGの誇る最新鋭の廃棄物リサイクル工場へようこそ」

左右の機械に取り付けられたライトから、舞台役者のように光を当てられている人影一つ。

峰山のすました面には止した方がよさそうだ。

ホラー映画に出てくる、殺された若者の死体に見えなくもない。

「招待するなら、灯りくらいつけとけよな。何度も転びそうになつたぞ」

「だからお出迎えをつけたのだが……役者として向いていなかったかな？」

「演出が安すぎだろう。これじゃハナシにならんぞ」

問答無用でダメ出ししておいた。

すると

「おい、峰山！ お前の言う通りにしたぞ！ 俺はもう、いいの？」

魚住の叫び声がかいスペースにわんわんと響いた。

「もう少し、そのままにしていたまえ。……もつとも、海藤君の前では君など何の役にも立たんが」

「……」

はいはい。

ナイフを見せびらかしているってことね。

「峰山あ、どーでもいーけど、フィルはいるのかあ？ 殺したりしてないだろうな？」

俺がバカみたいに質問すると

「ふふふふ……殺す？ そんなコトはしないって、言ったじゃないか」峰山は笑いながら力チリと何かのスイッチを押した。

すると、もう二つばかり照明がつき、その光の中に フィルはいた。

今まで暗くてわからなかったが、ちょうど峰山の背後、大きな機械の縁に腰掛けてこちらを見ている。

相も変わらず姿は美しいままだったが……得意げ、というよりもぞっとするほど冷たい微笑み。

あの日のリーネに似ていなくもない。

むしろ、彼女よりもいつそう冷酷な感じがするのは気のせいだろうか？

「どうだい、海藤君。僕が言った通りだろう？ フィルはこの通り、無事さ」

そうよ、というかのように、尾ひれをぴちつと跳ねて見せたフィル。

「にやーるほどねエ……」

俺はわざとおどけてやった。

「おや？ あまり驚いていないようだね。……もしかして、海藤君の予想の範囲だったかな？」

峰山の声には、意外そうな響きがあった。

実は、その通り。

確信こそなかったけど 俺はこういうことではないかと内心思っていた。

もちろん、最初からそう思っていたわけじゃない。そこまで俺、カンがよくはないんだな。

どこからそう思ったかという点、先日、俺の求めに応じて峰山と一緒に屋上へ来て話をした時点からだ。ヤツがすんなり「フィルに会わせてやる」と言ったものだから、もしやと思ったんだな。

やっとわかった。

フィルは自ら手を下すことなくリーネ、そしてナーちゃんをはじめとするブルーフィッシュが対立して共倒れすることを狙っていた。

最初の動機こそ、リーネ憎しだったかも知れない。

だが、ナーちゃんがリーネの手から助け出されてブルーフィッシュが立て直されていくにしたがって、だんだんそっちの方も疎まし

くなってきたのだろう。なぜなら、初めのうちこそリーネさえ蹴落とせば済んだものの、予想に反してブルーフィッシュが挽回してきてしまった以上、黙っていても海の世界を支配することが不可能になるからだ。

ドルファちゃん達バランサーは何も、リーネだけを抑えにきたんじゃない。

フィルが陰で何やら企んでいることもうすうす勘付いていた。

だから初めてドルファちゃんとジーナさんが学校へやってきた日、不愉快な顔をしたフィルにドルファちゃんは言った。

「ちょおつと妙な気配を感じちゃったんですよねえ」と。

そこでフィルはリーネがさんざんに悪事を働いて目をつけられているのを幸い、しばらくは沈黙を決め込んだ。リーネの力が強すぎで動くに動けなかったということもあるだろうけど。

で、リーネが俺達に次々と策謀を阻止されて勢力を失いつつあるのを見計らい、陰で動き始めた。

どういうことをやったのかはわからないが、思いつくところでは海獣組の分断だろうか。

それは峰山の発言からも想像がつく。

二学期早々、昼休みに会った時にヤツは言った。「トドとアザラシのグループが味方についた」とかいう、アレだ。

俺達ブルーフィッシュにとってはそれもまったくのマイナスだったワケじゃないけど、一方でフィルはリーネ一派と俺達が潰しあうのを黙って見ていた。考えてみればわかる。本当にリーネだけが憎いなら、ストレートに俺達と手を組もうとしたハズ。彼女はそれでしょうとはしなかった。

で、リーネが倒れた（ああいう形でケリがついたことを知っているかどうかはわからないが）あと、今度は俺達を潰すために動き出した。

巧妙にも、峰山が演技をしてあたかも彼がフィルを疎んじてどこかへ監禁でもしているかのように見せかけた。校舎の一階で俺が盗

み聞きした峰山の電話、あれは芝居だった。まあ、最初のうちはこ
ろりと騙されたけれども。

そして、ここからが肝心だが MCGの仕掛けたワナによって
まんまと潰された魚住の資産「近海マリンミュージアム」の跡地は、
目論見どおりMCGの手に入った。そして連中は市の人間をも抱き
こんで、かつて身内の「峰山グループ」がやっていたような、廃棄
物の不法投棄をやったのけようとしている。それに勘付いたらしい
住民達が騒いだりしたが、MCGにとっては痛くもかゆくもないハ
ズ。反対派の住民が大勢いるとはいっても、建設や工場の稼働を
差し止められるような証拠は握られていないからだ。

こいつはうまいことに、フィルの狙いと一致した。

なぜなら、この辺りの海を汚してしまえば、ナーちゃんをはじめ
ブルーフィッシュや、それに味方する連中が海と行き来できなくな
ってしまう。もちろんブルーフィッシュへ行けるのはここだけじゃ
ないだろうが、ナーちゃん達ブルーフィッシュにとっては相当な痛
手となる。この先は推測だが、恐らくそうやってブルーフィッシュ
の連中が弱ったところでフィルは何らかの攻撃を仕掛けるつもりだ
ったんじゃないだろうか。可能性はかなり高いと思う。

で、どうして峰山とフィルが演技をしてまで俺を呼び出したのか。
答えは目の前に据えつけられている、これらのでっかい機械だ。

これらを動かして海の汚染を始めると同時に 今ごろ、マサヤ
葵さん、ジンベエさんジーナさん夫妻にポイズンの連中、俺の想定
通り迎撃を開始している頃だろう。相手は恐らく、トドやアザラシ。
例え今晚のうちにみんなを叩きのめせなかったとしても、明確に
敵対する勢力があると知らしめることで、ブルーフィッシュは今後
身動きが取れなくなる。峰山の考えそんな手だ。

もっ一つだけ。

MCGはかつての峰山グループにも魚住の近海マリンミュージア
ムにも、息のかかった人間を送り込んでいたのだ。

三波の妹の同級生の父親の話に出てきた、爆発事故前に着任した

という新しい工場長。

俺がイルカショーをぶつ潰して間もなく、近海マリコムミュージアの不正を内部告発したヤツ。

……いずれもMCGの人間と思っている。

だから、この短い間にMCGにとつてもっとも都合のいい状況をつくり出す事ができたと考える方が自然なんだよな。偶然かも知れないが、それだとあまりにも幸運すぎる。普通はありえないよな。

と、というような推理を、俺は適当に短縮して語ってやった。

ドラマとかだと、悪役が「死ぬ前に教えてやるう」とか言つてべらべら喋るんだけど、定番のシナリオを根底から覆してやった俺。まあ、峰山みたいなヤツが自分から「はっはっは、教えてやるう」とかいうハズもないし。

俺の背後で、魚住は沈黙している。

自分の実家が破産した原因が目の前にいる峰山の親父達のせいだつて、そこまで理解できたかどうか。

「……ふふ、なかなか、鋭いものだね海藤君。やはり、僕が見込んだ通りだ」

峰山が笑い出した。

「細かい話は別として、ほぼいいセンをいつているね。大したものだよ。リーネの部分だけ、一点抜けている話があるけれども」

「ほお。そいつはどうも」

どうせ話す気なんかねーんだろうとか思っている

「ここにおしな草があるってリーネに教えたのは、このフィルなのよ」

はい？

「リーネはそもそも、人間と同じ声、そして足を手に入れたいと欲していた。おしな草が生えている場所を知っていたフィルはそれを手に入れて、MCGが送り込んだ魚住の社員を通じてリーネの耳に届くように仕向けたんだ。案の定、リーネはそれを手に入れようとして、魚住の社員達とシャーケの連中を潰し合わせた。まったく、

救いようがない人魚だったんだね、彼女は……」
そういうコトですかい。

結局はリーネも峰山に踊らされて自滅したっていう筋書きか。
ま、以前の彼女よりも、今のリーネちゃんは十分幸せそうだから、
それでも悪くないかも。

とか言っている場合じゃないな。

多分大丈夫だろうとは思うが、みんなのコトが心配だ。

もう、峰山にもファイルにも用はない。

さつさとここから脱出してみんなの元へ戻りたいのだが……どう
も簡単にはいかないようだ。

魚住の野郎、ずっと俺にナイフを突きつけっぱなしだし。

普通ならあれだけ実家の会社がコケにされた話を聞けば「何イ、
コノヤロー！ きーっ！」とかなる筈だが、こいつはそれもせずに
銅像みたいに突っ立っているだけだ。俺が動けば動いたで、バカの
一つ覚えみたいにナイフを振るって俺に襲い掛かってくるだろう。
さて、どうしたものか。

いざとなったら俺、考えナシだったかも。

いいアイデアが思いつかないまま、魚住ともども突っ立っていると
「……さあ、海藤君。いいものを見せてあげよう」

ヤツはこっちへ歩み寄りつつ、手にしていた何かのスイッチを示
して見せた。

「この電源を入れれば、ここにある六機の機械が動き出し、すでに
運び込まれている廃棄物の処理を始める。その過程で当然排水が発
生し、本来ならばその処理設備も具えていなければならないのだが
……この工場にそのようなものはない。ただ、排水パイプが海へと
つながっているだけさ」

「建設中つてのは、ダムーだったのか。お前ら、反対派のオッサン
おばちゃん達をたばかって」

「この前、言った通りさ。あの愚かな市民達だって、所詮は自分達
のことしか考えていない。そんな奴らを気遣うだけ、無意味無価値

というものさ！」

そこだけはホンネだったのね。

俺は呆れかえったが、今度は黙っていた魚住が

「峰山ア！ てめエ、やめろオ！ 自分のやってるコト、わかってんのか！」

怒り出した。

「うちの親父だってなんかひでエコトやってたけどよオ！ お前ン家みたいな汚ねエマネはしてねエんだよ！ クソツタレが！」

俺を突き放すと、今にも峰山に向かってかかっていこうとした。
なんだ。

話、ちゃんと理解できていたのか。

「フン、君のような不良バカと話をするつもりはないよ。おい、お前達！」

峰山が一声すると、機械の陰からわさわさとでっかいぶよんとしたカタマリが！

いや、よく見れば懐かしいあのセイウチだった。

フィルのヤツ、古巣の連中を再び手なずけたらしい。

「Say、House！」

「セイセイセイセイ！ ボヨンとやっちゃうぜエ！」

軽く十頭を超えるハーレム・THE・セイウチ軍団が、魚住と俺を目掛けて突進してくる。

「うわーっ！ うわーっ！」

やっぱり腰抜けだった魚住、たちまちビビッて逃げ出してしまった。

俺も逃げようかと思ったが それはまずい。

峰山の野郎にこれらの機械を動かさせたりなんかしたら、ブルーフィッシュは取り返しのつかないことになる！

峰山を、止めるしかない。

そう決めた俺は床を蹴って突進した。

「セイイ！」

突っ込んできたセイウチ野郎を軽くすり抜け、前へ前へと進んでいく俺。

だが何せ、峰山までの距離がありすぎる。

しかも十頭前後だと思われたセイウチ軍団はさらに数を伏せてあつたに加え、海へ帰つたと思つていたウツボども、それにトドま出てきたから性質が悪い。

遠くにちらりと、必死な俺を眺めて冷たく笑っているフィルの姿が目に入った。

「ふふん、抵抗するのはやめたまえよ、海藤君。君がいかの下劣な軟式野球部で鍛えていたといっても、なにせこの通り」

ヤツは機械のスイッチを掲げて「すべては僕の手にあるのだからね」

そうしてそのまま、無情にも電源を入れようとしやがった。

万事休す！

峰山の指が機械のスイッチをポチツとやり やや間があつて、建物全体がゴゴゴゴと振動を始めた。機械が動き出しちまった。

これまでか。

土壇場にきて、ブルーフィッシュを守りきれなかった。

再び海が汚され、そのためにブルーフィッシュへ戻れなくなったと知ったらナーちゃん、どれだけ悲しむだろう。

でも、こうなつてしまえばどうすることもできない。

俺はあきらめかけた。

だが

「な、なんだ！？ なぜこんなに、工場が揺れる？ まさか、据え

付けに不備があつたとしても……」
そう。

機械が稼働するにしてみれば不自然なくらい、工場全体がえらく揺れていた。

マグニチュードいくらの直下型地震にでも見舞われているようだ。
「セイセイ（どうやら静まれ、というニュアンスのようだ）…」

「トツ、トドツ？ のつまり!？」

あまりの激震に、暴れまわっていた海獣組の連中も右往左往し始めた。
そして。

ばーん！ どーん！ がっしゃーん！

巨大な機械の間の通路に敷かれていたアミアミ鉄板（よくわからんが、工事現場とかによくあるヤツ）が見る間にあちこち弾け飛んでいく。

まるで、地震というよりも怪獣に襲われているみたいだ。

立っていられなくなり、俺は床に伏せた。

「……!？」

そこで見ってしまった。

大穴の開いたところから、赤くうねうねとした、ほとんど大木のような巨大な触手が突き出てきたのを！

やっぱり怪獣か!？

いや違う。

これって、これって、もしかして

「……また海を汚すつもりかね？ 懲りない人間達がいたものだな
」！

どこからともなく、でかい声がした。

ドキュメント番組のナレーターにあるような、重低音の効いた澀みがなくて聞きやすいおじさん風ボイス。ラジオのパーソナリティとか、カラオケなんか歌ったら恐らく聞き惚れるだらうけど、それ

はともかく。

どがーん！ すどーん！

出来立てはやはやだった工場の床は瞬く間にぶち壊されていき、一本しか見えていなかった触手が次々と床下から飛び出していく。

「あきやーっ！」

「トドーっ！」

まるで神の怒りに触れたかのように海獣組の連中は恐れおののき、クモの子を散らすように逃げて行く。逃げ道を争うあまり、セイウチ同士でケンカになったりしている。

「お、おい！ お前達、どこへ行くんだ！ 逃げるんじゃない」「激震の中で峰山は叫んだようだが、もはや言う事を聞くヤツなどいなかった。

さっきまで余裕しゃくしゃくで悪女の笑みを浮かべていたフィルも、峰山に抱きついておろおろしているし。

そして、ついに。

ばっごおおん………！

その辺にある機械なんかよりもまだでかい、見上げても足りないくらいにどでかく赤い何かが現れた！ しわっとしていて、どちらかといえば日光焼けした赤色みたいなカラーリングのそいつは

「……お前かね、フィルーシャ！ 人間と結託して東の海を支配しようとしていた悪いコは！」

その姿を一目見るなり、がくがくと震えているフィル。

彼女を抱き抱えている峰山も腰を抜かしたらしく、ずるずると床に座り込んでしまった。

説明は要らないだろう。

赤くてうねうねとした何本もの足を持っている方といえば、ずばり タコ。

ぶっっちゃけ、ありえないサイズ。

声が声だけに、タコのおじさんってところだな。

タコおじさんは頭の下についている、これまたでっかい目ん玉を

ギョロリと向き

「その人間の若者！ お前もお前だ！ どうしてこんなコトをする！ 海を汚せば、お前達人間だって生きていけないっていうことが、なぜわからん！」

「たたたたたたたたたた、た、タコ……」

もう、あのクールな峰山はどこにもいない。

今はただ、タコおじさんに睨まれて半べそをかいている哀れな金持ちのボンボンがいるだけだ。

「お前達、お仕置きだ！ 反省しなさいっ！」
ぶちやつ！

これはもう、お約束。

タコおじさんは峰山とファイルに大量のスミを吐きかけた。

二人とも逃げられるはずもなく、たちまち真っ黒け。目をぱちくりさせて呆然としている。ギャグアニメとかでよくこういうシーン、あつたかも知れない。

悪党に天罰を加えたタコおじさん、ちらりと俺の方を見ると

「……おや？ ナタルシアちゃんの婚約者、確か達郎君といったかな？ どうしてこんなところにいるんだい？」

あえ？

タコおじさん、どうして俺のことを？

床に伏せていた俺はゆっくりと立ち上がり

「確かに、ナーちゃんの婚約者で海藤達郎っていいんですが……どこかでお会いしましたか？」

すると、タコおじさんは目を細めて愉快そうに笑い出し

「おお、やっぱりそうだね！ ナタルシアちゃんやドルファちゃんから聞いていたよ。……私は十八同盟のスミスというんだ。達郎君とナタルシアちゃんの婚約があるからって、ドルファちゃんがわざわざ呼びにきてくれてねえ。君と会うのは初めてだ。これからよろしくねえ」

ドルファちゃんの名前が出てきた。

と、言っているそばから

「はい！ たつつろーさまーっ！ たっだいまーっ！ ドルファ、もどりましたあ！」

スミスおじさんの腕の一本をひよいひよいとよじ登り、ドルファちゃん登場。

んー？

そーいうことかっ！？

「あーっ！ あなたがスミスおじさんですかっ！ どこのどなたかと思ったら……」

ようやく合点がいった俺、一人で何度も頷いているとドルファちゃんか

「あえ？ あたし、説明しませんでしたかあ？ スミスおじさんはあ、大きなタコなんですよおって」

「うん、聞いてない……」

俺達のやりとりを聞いていたスミスおじさんは「はっはっは」とでっかい声で大笑いして

「私はねえ、普段は太平洋の真ん中で暮らしているんだよ。あんまり大きいものだから、このあたりの海じゃあ狭くて暮らせないんだ。久しぶりにやってきたと思ったら、この「ギロツとスミまみれのフイルーシャを睨みつけ」ファイルが海獣組の奴らをそそのかして悪いコトをしているようだと言ったものだからね。そしてちょうど、昔このあたりで海を汚していた建物と同じものがつくられているのを見かけたのさ。人間達がまた同じ事をするつもりなら一つ懲らしめてやらねばと思っっちゃって来たんだよ」

滑り込みセーフもいいところだ。

タイミングがあとちよつと遅かったら、また海が汚染されていたところだった。

スミスおじさんの派手な登場によって、工場の中はメチャクチャ。あの新品の機械もぶつ壊れてしまっていて、峰山がスイッチを押したはずだがさすがに動いていないようだ。人間がやったことなら器

物破損とかで犯罪になるだろうけど……海の世界の住人がやったんなら、法律じゃ裁けないよな。

ってか、これだけ破壊力があって俺達の味方になってくれる心強いおじさんがいたんだったら、今までの色んな苦労はなんだったんだ！ さつさとブルーフィッシュを救ってくれい！

まあ、たくさんの困難を乗り越えてきたから、今の俺達があるんだけどさ。

「ところで、たつろーさまあ？」

ドルファちゃんのぱっちりした美しい瞳がじつと俺を見ている。

「どーして、こんなところにいらっしやるんですかあ？ あたし、たつろーさまにお会いしたいと思って、早く帰ろうと思っていましたっ」

そーかそーか。

「それはねえ」

かくかくしかじか。

俺はスミスさんとドルファちゃんに、事情をかいつまんで説明してやった。

全てはそこで真っ黒になっているバカ野郎とその実家、ならびに色ボケ性悪人魚が仕組んだ謀略であって、決着をつけるためにここへやってきたのだということ。

「あれえ？ だったら、あたしとスミスおじさんが今日着くって、連絡が届いてませんかあ？ トビノちゃんに先に行ってもらったんだけどなあ……？」

「それ……誰？」

新たな固有名詞だ！

「トビタローちゃんの妹ちゃんですっ」

あいつに妹がいたのか。そりゃあさぞかし速いだろうな。

でも、俺の家にやってきたことがないから、迷子にでもなっってしまったんだろうか。

とりあえず、それはおいといて。

峰山はともかく、そのバカ人魚をどうしてくれたらいいものか。リーネは自爆して愛くるしい「リーネちゃん」に変身、無事マサに引き取られたからいいものの……フィールシャはおしな草もこわね草も口にはいないからフィールシャのままだ。彼女の処遇については海の世界の住人達に任せるより判断のしようがないんだな。

とか思っている

ズゴゴゴゴゴゴ……

再びものすごい揺れが！ 今度こそ地震か？

すると、こともなげにドルファちゃんが

「あ！ カイおばさんとエルシナさんが着いたみたい！」

今日は馬鹿に初対面の方が多いな。

カイおばさんにエルシナさん？

どういった形態の方々かと思いきや、その答えはすぐにわかった。ばちこーん！ と、でつかい機械が二つくらいふつとび、床下からこれまた巨大な、今度は白いのがよきつと天井目掛けて生えてきた。

「遅れましてごめんなさい、スミスさん。最近老眼で、暗いモノが見えないものですからちよつと迷ってしまいましたわ」

気品のあるおばさまの声が轟いた。

「おお、カイさん。私達も、今着いたところだよ。我々年寄りには夜の海はキツイねえ」

ここまでくれば、わかりやすすぎる。

白くてでかくてタコと双壁な生き物といえば　この世にたった一つしかない。

「カイおばさまーっ！ アタマ、大丈夫ですかあ？　ちよつと天井にぶつかってますよお！」

「大丈夫よ、ドルファちゃん。こう見えてもアタマは軟らかいの。

おほほほ

「楽しそうに笑っているカイおばさん。」

カイ、つまりはイカのおばさんでしたか。ゲソおばさん、とかよ
りまだネーミングは悪くないけど。

で、スミスさんの足の数プラスカイさんの足の数イコール十八、
それで「十八同盟」ということらしい。

確かに……これだけ巨大なタコとイカがそろえば最強だな。

「おばさまーっ！　こちらがナタルシアのダンナ様、達郎様なのー
っ！」

「は、はじめまして……海藤達郎です……」

挨拶すると、カイおばさんはでかすぎるヘッドを「ぶんっ！」と
前に倒して

「こんばんは、達郎さん。カイと申しますの。ナタルシアがすつか
りお世話になっちゃって。ナタルシアったら、こんなにステキな人
間の男性をつかまえたのねえ。うらやましいわあ」

「カイさん、年寄りには年寄りらしく大人しゅうしないとねえ。若者
をうらやんではいけないよ」

「あら、私っいたらはしたない。……おほほほほ」

目の前で楽しそうに談笑している巨大なタコとイカ。

これはいつたい　なんなんだろう？

俺は半ば呆然としてそのありえない光景を眺めていた。

いろんな海の連中を見てきたが、ここまでスケールが違いすぎる
と言葉もないというものだ。

しかし、さらにダメ押しで俺は驚愕の存在と対面する事になる。

「　カイさん、少しだけ、足を上げていただけませんかでしょうか
？　ここでは地上の様子がわかりませんの」

床下から、声がした。

女性の、それも今までに聞いたことのない透き通ったフルートの
音色のような美しい声。

「あらあら、ごめんなさいね。年をとると、こつも物忘れがひどく
なっちゃって……」

足の一本で頭をかきつつ、カイおばさんは別の足をゆっくりと上

にもちあげた。

その足の上には 一人の人魚が座っていた。

ナーちゃんよりもずっと大人びていてしかし美しく、視線をやるのが憚られるほど全身から気品が溢れている。真っ白く透けるような肌に、きゅっと細く引き締まった完全とっていいほどの身体つき。そのセクシーなボディには、天女の水浴びのように細長くふわりとした布が一枚、豊かな胸にかぶさっているだけだった。

そして彼女の下半身は……黄金鱗。

金色に輝く鱗をもつ者は、人魚族の中でも何十人に一人しかない。

そう、彼女は

「はじめまして、達郎様。人魚族の長、エルシナと申します」
にこっ。

モナリザも軽く卒倒するような最高の微笑み。

俺は度肝を抜かれた。

ナーちゃんの愛らしい笑顔はもちろん俺にとって唯一のものだが、それとはまた別のものだ。

ぶっちゃけ、海の世界の頂点に立つ存在。

だけどエラそうな感じなどは少しもなく、どこまでも慈愛に満ち溢れた神々しい笑顔。海というよりも、この世の女神様ではないかと思ってしまうくらいだ。

「こ、こんちは……」

不覚にも、そう言ってぺこっと頭を下げるのが精一杯！

するとエルシナさんはふふっと笑って

「ナタルシアは人魚族のコ達の中でもとびきりの甘えん坊さんですから、達郎様にはとてもご迷惑をおかけすると思いますが……誰よりも優しく、心の直ぐなコであることはこの私が保証します。ですから、どうか、よろしくお願いしますね？」

「は、はい……」

「海の世界の者達がいろいろとご迷惑をおかけしてしまったようで

すが、ブルーフィッシュの平和についてはご心配いりません。ナタルシアとは達郎様の世界で、安心して暮らしてくださいね？」

そして彼女は足許で真っ黒けになっているフィールシャに目をやった。

途端に表情は一変。

見た者全てを石に変えてしまっんじゃないかというすさまじい恐怖のオーラ全開で

「……ところで、フィールシャ。あなたはいつたい、何をしているのですか？ ちょっと私が目を離れたスキに」

「大姉さま……それは、その……」

「リーネといい、あなたといい、心悪しき人間と手を組んで野望を叶えようなどと、呆れて物も言えません」すうつと息を吸い込んだかと思いきや「恥を知りなさい！ 恥を！」

ひええ！

どうもすみませんでした！ 俺が間違っていました！

……と、思わずこっちが詫びを入れてしまいそうになった。

それくらい、エルシナさんの怒りは強烈で恐ろしいものだった。

「フィールシャ、あなたには罰としてアンジェリカの代わりにアマゾンへ行ってもらいます。ピラニア達が悪さをしないように、しっかりと見張りをなさい。アンジェリカにはナタルシアの代わりに東の海を守ってもらいます。……言っておきますが、彼等はあなたのようない人魚には簡単に従うような連中ではありませんから。心して罪を償うように」

「はい……」

ピ、ピラニア！？

そのお目付け役って……見張りも何もフィルのヤツ、あつという間に食われてしまっんじゃないだろうか？ エルシナさんも、見た目によらずコワイ方でいらっしやるようだ。

「それから、その人間の方？ 海はあなた達だけのものではありませんよ。もし今後、このようなことをして海を汚すというので

あれば「

美しくクリアなエルシナさんのボイスのトーンが一気に下がり

「……海の世界の総力を上げて相手になりましょう。よろしくて？」

俺には海の神・ポセイドンの警告であるかのように聞こえた。

その64 最後の試練

「まったく、あなたというコは！ 自分のダンナ様が一人で危険に立ち向かっているという時に、平和にぐうぐう寝ている妻があまりですか！ 昔からあなたは寝てばかりでしょう！ だからそうやっていつまでたってもみなさんに迷惑ばかりかけているのですよ！」
『ごめんなさい……』

峰山との対決を終えて帰宅した俺。

たつての頼みでエルシナさんをお連れしたのだが ナーちゃん
と再会するなり、猛然と説教が始まった。

案の定、俺が留守にしている間に峰山とフィルの指示を受けたアザラシやトドの連中が襲撃してきたらしい。しかし、ポイズン達の巧みな謀報網（というよりただの見張りだが）によっていち早く察知したみんなは迎撃に出た。何せ、こっちはあのセイウチですら敵わないジンベエさんジーナさんがついている。あっけなく奇襲部隊はコテンパンに返り討ちを食わされ、ほうほうの体で逃げた。

しかし、みんなはナーちゃんを守るためにあえて彼女を眠ったままにさせておいたのだが 気持ちよく眠っていたところを叩き起こされた拳げ匂いきなり怒られたナーちゃんこそ災難だった。

今にも泣きそうな顔をしてうなだれている。

何をそんなに怒る事やある……と八タから見ていると思うくらい、
エルシナさんは怒る怒る！

海の世界の一番偉い存在だけあって、誰も口出しできずにいる。リーネちゃんは自分が怒られているような気になっているらしく、マサの胸に顔を埋めたまま動かない。葵さんも何か言いかけたが、マシガンのようなエルシナさんの口撃には、なす術もないようだった。

なんだかんだとナーちゃんを責めていたエルシナさん、ついには

「そのようなことでは、達郎様のような立派な人間の方に人魚族として合わせる顔がありません。結婚は見合わせていただいて」俺をちらりと見てから「ナタルシアにはしばらく大西洋にいてもらった方がいいのかとも思うのですが」

たちまち、えっ？ という空気が部屋中に流れた。

それを真つ向から受けたナーちゃん、大きく目を見開いてエルシアさんを見つめていたがこらえきれず、たちまち涙をあふれさせてくすくすんと泣き出した。

かわいそうに。

ナーちゃん、何にも悪くないのにさ。

これはさすがに 黙つてられない。

俺は立ち上がってナーちゃんの傍に行き、そつと抱き締めた。

俺にすがりついてひつくひつくと泣いているナーちゃん。

「……ちよつと、いいですか？」

「なんででしょう、達郎様？」

俺は怖い顔でエルシアさんを見て「納得いきません。つてか、ムリです。撤回を要求します」

きっぱり。

今度は空気が凍りついた。

ちらりと見えたドツボさんの顔が「やっちまいましたな！ 達郎さん！」ってカンジになっている。その隣で声にださねど「ひええっ！」と叫んでいるドルファちゃん。ただ一人、マサだけが「ああ？」つていうキツツい顔に。

でも、知ったコトじゃない。

せつかく、ここまで来たつてのに。

人魚族の長だか何だか知らんが、こつちの事情を無視して勝手な権力の行使は俺が認めない。

それをいうなら、ここまで海の世界のドタバタを放置していたあんな達の責任はどこにある ということになりはしないだろうか。が、エルシアさんは表情を消したままで

「人間の方と人魚族が結ばれるという事自体、一見とてもロマンチックなことです。ですが、人間の方の世界と海の世界では、違いがたくさんあります。好きとか愛しているというだけでは、とても一緒に暮らしていけないのです。私には、ナタルシアにその覚悟がないように思えたのですが……ならば、達郎様？」

彼女の眼差しがぐつと深くなった。

「あなたには、一生人魚を愛する覚悟がおりなのですか？ どんなことがあっても、ナタルシアを守りきる覚悟が」

男女の間で、これはとてつもなく重い課題。

プロポーズとか結婚披露宴とかでよく、男が「なんたらさんを守ります！」とか言ったりする。

正直な俺の意見。

ありえん。

守るって何？

守られるってどういう立場？

そりゃあ、そんな言葉で愛を表現するのが悪いとは言わない。

もし、本気でそれができるとかしようと思っっているんだったら…

…ただの傲慢妄想、白昼夢だ。

守るも守られるもないと思う。

愛し合った男性と女性、互いに力を合わせるから一緒に生きていけるんだろつ。

逆に、力を合わせないんだったら一緒にいる意味なんかまったくない。どっちかがどっちかのために尽くすとか捧げるとか、そんなのは論外暴論狂気の沙汰だ。

あの日、滝女さんが言ってくれた。

あなたはあなたのままでもいいではありませんか、と。

そう。

特別怪奇な自分、そこにはない他所のどっかから別の自分をもってこようとすると無理が起こる。

違うんだ。

今のままの自分にできること、今はちょっとできなくても少しづつ頑張つてできるようになることがたくさんある。それらから目を背けて、夢の世界の自分を追い続けていたっていつまでたっても何もできやしないんだ。

一緒にたくさんいろんなコトをしようって言ったらナーちゃん、嬉しそうにうなずいてくれた。

それで十分じゃないか？

ってか、それ以外に余計な何かを求めたりしてはいけない。

そういうのを余所見ってんだ。

以上は俺の胸の中で、一瞬で通り過ぎていった思い。

だから、エルシナさんに向かって口を開いたタイミングは、ほぼ即答だった。

「……守るとか守らないとか、そういうのは傲慢です。大切なことは、男だろうと女だろうと、人間だろうと人魚だろうと、二人で一緒に力を合わせて……いや！」

だけじゃない。

俺はみんなの顔を見回した。

葵さん、ドルファちゃん、マサ、ドツボさん、トビタローにジンベエさん、ジーナさん

一番大切なのは、一人でも多く、みんなが心を一つにしていくこと。

「……俺達だけじゃなくて、人間も海の世界のみんなとも力を合わせていこうって、前を向くことが大切だと俺は思います。俺とナーちゃん二人だけで生きていくワケじゃない。なんだかんだでみんなと一緒に生きていかなくちゃならないんだから、俺はみんなにとって幸せがあるように、ちーっとでも努力する。そういうコトですよ。

「へんですか？」

いつの間にやらナーちゃん、泣き止んで俺の顔を見上げている。

「……」

エルシナさんほか、一同沈黙。

すると、おもむろにマサが

「へっへっへ」

笑い出した。

「このバカ野郎、タツう！ なアにてめエ、カツコつけてんだよオ！ ちーつと努力だなんて、バカ言ってるじゃねエよ！ おめエもオレも、いっつもバカみてエに全力こいてンじゃねエか？ だろオ！？」

言葉は果てしなく汚くてどーもならんが　マサはマサなりに、俺にエールをくれたんだな。

ありがたい友達。

このバカの力になりたいと思うから、俺は踏ん張れるワケで。

それはマサと俺とだけじゃなくて、みんなと俺と、みんなとみんなの間でインターネットのネットワークのようにつながっている。

マサの笑顔にほっとしたのか「きゃっ！」リーネちゃんも笑った。すると、凍った空気がするすると溶けていくかのように、葵さんやドルファちゃん、ドツボさん達も可笑しそうに表情を緩めていった。

「マサ様ったら、達郎様のことがお好きなのですね？ 男の方の友情って、ステキですわ！」

「だろオ？ 最初はクソ真面目でとっつきにくい野郎だと思ったケドさア……なんか、そのうち病み付きになりやがんの。こってりラーメンみてエに」

「ひどいひどい！ 達郎様のことをラーメンと一緒にして！」

ぶんぶん怒っているドルファちゃん。

気がつけば、流れはすっかり一変していた。

難しい顔をしていたエルシナさんはふうつと大きく一つ息をついて……きつと、そのように言うのではないかと思っていました」

じんわりと染み入るような笑顔をつくった。

「どんな生き物よりも愛情深いといわれている人魚族よりも、まだ大きな心を持った人間の方もいらっしやるのですから、世界という

のは不思議なところですね。 - ナタルシア？」

はい！ というように顔を向けたナーちゃん。

「必ず、幸せになるのですよ？ ……いいえ、あなたはもう、幸せなハズです。こんなにも、素敵な人間の男性と、それから仲間達と一緒にいられるのですから」

それが 承諾の言葉だった。

エルシナさんの言う意味がわかったのか、ナーちゃんはたちまち嬉しそうに微笑んで大きくうなづく

『達郎さまっ！ 私、私……』

『ああ。これで文句もないだろ。まだ何か言うヤツがいれば、その時はまた俺が 』

『いいえ！ 達郎さまがお一人で大変な事に立ち向かわれているのに、眠っていたりしてごめんなさい。これからは何があっても、私も達郎さまと一緒に参りますから！』

ナーちゃんは俺の首にしっかりと腕を回して、ぐいっとな唇を押し当ててきた。

「やれやれ。一時はどうなることかと思っただよ」

それまでずっと沈黙していたジーナさんがようやく口を開いた。

「あたしゃ、エルシナさんが反対しようとも、達郎ちゃんとナタルシアちゃんの結婚には断固賛成だったんだからね。それでも反対されるなら、バランスの意地をかけて物申そうと思っただけど…
…しなくて済んだようだね」

彼女独特の、にこーっとな横に裂けそうな笑顔になった。

「……そうだ。そうだ」

隣でジンベエさんが何度もうなづいている。

するとドルファちゃんがきょたきょたと笑い出し

「やった、ジンベエさんたら！ ジーナさんが言うことなら、何でも賛成なんですよお？」

「……そうだ、そうだ」

あとはもう、大爆笑。

エルシナさんまで、口に手を当てて笑っている。

でも、こういう夫婦っていいよな。

俺達もいつか、こんな風になれたらいい。

そういえば、だけど　　エルシナさん、陸上なのに普通に喋ってる。

不思議に思っただけで訊いてみると

「ふふ、それはですね、こわね草を口に行っているからですよ。確かに、こわね草は普通の人魚が口にすれば心を喪ってしまう恐ろしい海草です。でも、強い心をもってその副作用に打ち勝つならば、心を喪つことなく声を得ることができるのですよ」

ふわっと微笑んでから、すぐにきりつと表情を引き締め

「　これが、人魚族の長たる宿命をもった者の試練なのです。こわね草やおしな草の毒にも負けない強い心がなければ、とても海の世界を平和に治めていくことなどできませんもの」

　　壮絶すぎる試練だな。

　　一歩間違えばリーネのようになってしまう。

　　だけど、それを乗り越えたエルシナさんはどこまでも強い心をもった人魚だということになる。

　　そして、その彼女を納得させた俺にも　　強い心がいくらかでも宿っているっていうことだろうか。

　　ちよつとだけ、誇りかも知れない。

その65 祈り、清らかな夜に

その後どういふコトになったのか、俺にはよくわからない。

あの夜の一件以来、臨海再開発地区のドタバタには興味なくなつたし。

ただ、MCGが突然工場建設工事を中止し、それに伴つてあれだけ騒いでいた反対派住民の皆さま達もいらつしやらなくなつたといふことだけはわかつた。

いなくなつたといえは、峰山の野郎。

あれつきりヤツのクラスになんか行かなかつたから知らずにいたのだが、近くで女子達か

「ねえ、峰山クンって、ガッコーやめて海外に行つちやつたんだつて」

「うっそ？ お金持ちの人は違うよねえ」

とか会話しているのを耳にして、俺は初めてそのことを知つた。

さらに聞くと、ホントかウソか ヤツが行つた先はなんとブラジルだといふ。

フィールシャを追つていったのか？ それとも偶然？

まあ、どつちでもいい。

ピラニアだけは気をつけて欲しいものだが。

俺はといえは、あれからまためぐみだったり貝田なんかにも相談したりして、専門学校へ行つて何か技術を学ぶ方向に決めていた。

めぐみはどうやら清水先輩をあつさり振り、その後は飲食店のバイトに精を出しているようだ。

「あたし、ぜつたい料理人になるんだ！ 目覚めたよ！」

何に目覚めたんだか。

来いと言つから一度、海藤家一行で彼女がバイトしているという大きな中華料理店へ出かけてみた。

「はい！ いらつしやいあるねー！ 何食う？ ラーメンはダメ

よ！ 日本の食べ物ね！」

「どのインチキ中国人だよ、お前は。」

「チャイナドレスのコスプレなんかで喜んでいる場合か。」

「ってな具合に、ワケのわからなさに一層拍車がかかったような気もするが、本人がモチベーションMAXで頑張っている以上、特に問題はないだろう。」

「ちなみにその日はマサもお呼ばれで来ていて、ドルファちゃんと大食い対決をかましてくれた。」

「中華料理でヤメてくれよな。」

「一皿幾らすると思ってるんだ。」

「とまあ、相も変わらさずドタバタは続いていたが、それでも一日一日と近づいてきている。」

「俺とナーちゃん、婚礼の日。」

「いよいよ前日。」

「俺はナーちゃんと二人でぶらりと街へ出かけていた。」

「もう十二月だから、かなり寒い。」

「ナーちゃんは由美さんが送ってくれたコートを着て、良く似合っている。」

「達郎さまっ！」

「ん？」

「去年の今ごろ、達郎さまはどのようにされていたのですか？」

「去年の今頃かあ……そうだな」

「夏にナーちゃんとお別れしてから軟式野球部に入って、ひたすら自主トレに励んでいた俺。」

「そついや、三ヶ月みっちりやった成果が出てきてホームランを打てるようになって、ついでに四番の称号をもらったのも今くらいの時期だったような気がする。」

「大きな出来事っていえば、マサと出会ったのもちょうどこれくら

い寒い頃だったな。

それからほどなく、由美さんとも会ったんだ。

ナーちゃんや葵さんと別れたのは辛かったけど、そのおかげでマサや由美さんに出会い、さらに二人の力を借りてふたたびナーちゃんと一緒にすることができた。今こうしてあらためて考えてみると、一つ一つのコトに大きな意味とつながりがあったんだなって思う。

今年の夏にナーちゃんと再会して彼女を守る立場になった。しばらくは敵対する連中と戦う力の強さだけを追及してばかりいたけど、滝女さんに出会って本当の強さが何なのかどこにあるのかを教えてもらった。そうしてたくさんあった困難を一つづつクリアにして、ここまでやってきた。

何だか、色んな出来事が多すぎて、夢でも見ていたような気分になる。

でも 俺の目の前、腕の中に現実にはナーちゃんがいて、楽しそうに微笑んでいる。

全部、良かったと思うよ。

『ナーちゃんは去年の今ごろ、どうしてた？　すごく、大変だったんだろ？』

『はい。私は、確か』

夏休み前に海岸で俺とお別れした葵さんはイワシヤールと共に海獣組の連中がいるアジトに乗り込み、やっとのことでナーちゃんを助け出した。

そうして逃げるようにブルーフィッシュへと戻ったのだが……すでにリーネの支配下にあったSAは執拗にブルーフィッシュに襲撃を仕掛け、その都度葵さんや魚人たちが力を合わせて防戦した。ナーちゃんはナーちゃんではバランスー達に協力を求めようとしたが、海獣組はバランスーにも攻撃を仕掛けていたから、上手く連携することができなかったのだという。

やがて俺達が進級した時期、こっちでいえば春にブルーフィッシュはとうとうリーネの勢力によって蹂躪され、ナーちゃんと葵さん

は囚われの身となった。葵さんは総督府の奥深くに監禁され、ナーちゃんもセイゾーの元でひどい扱いをうけていたが、そのうちリーネと組んだ人間達に売られることになった。魚住興業の近海マリナーミュージアムだ。

しかし、後でわかったことだが ナーちゃんを買ってショールで見せ物にしたヤツというのは、実は峰山のMCGからスパイ同様に潜り込んでいた連中がやったことであって、魚住興業側の人間が自発的にやったのではないという事実だった。

ただ、裏側では、あれだけ敵対していたハズのリーネとフィールシャがナーちゃんを貶めるためだけに協同していたようだ。だからこのあたりの事情がまったくわかりにくかったということのようである。ま、今となつては二人とも、その報いを受けたワケなんだけど。

だけど、俺も悪かった。

ナーちゃんのどこまでも深くてまっさらな愛情に気がつくのが遅すぎたんだ。

そのせいで一年近くもナーちゃんは悲しい思いをしなければならなかった。

もう二度と、そんなことがあつてはならない。

でも、それは俺一人で気負うんじゃなくて……たくさんの人たちや海の連中の力になってやって、俺達もみんなに力を貸してもらおう。

そうすれば、みんなが幸せに、平和に暮らしていけるから。

悲しい思い出ばなしは途中でやめることにして、俺は

『明日の婚礼、俺達はどうすりゃいいんだ？ 人間の世界じゃ、挨拶したり酒注ぎまわったり、色々あるんだけど……』

訊いてみた。気がつけば、まだ何も段取りのコトなんか調べてなかったのだ。

『私もよくわかりませんけど……たぶん、大姉さま（エルシナさんのことだ）が皆さんにご挨拶をして、私と達郎さまで誓いの儀式を

するのですわ。あとはみなさんと楽しく過ごすのだと思いますけど。
『ごめんなさい。私もよくわかっていなくて』

いいよ。

行ってみりゃわかるさ。

『……あら？ 空から何か落ちてきましたわ、達郎さまっ！』

「……お？」

雲がどんより厚いと思っていたら、何やらちらちらと舞ってきたよ。

『まあっ！ 達郎さまっ、これはもしかして……雪、というものですか？』

『ああ、雪だよ。もしかしてナーちゃん、初めて見る？』

『はいっ！ ずーっと陸の世界に来たことがなかったものですから、私、雪を見たことがありますでした！ とっても綺麗なのですね！』

そうか。

じゃ、少し雪が落ちてくるのを待っててみようか。

陽が暮れた街はどこもかしこもイルミネーションが瞬いていて、ちよつと眩しいくらいだ。

クリスマスとか年末が近いから、街中飾りつけに気合いが入っている。

それがまた美しいといって、はしゃいでいるナーちゃん。

エルシナさんは、人魚が人間の世界で暮らすことは簡単じゃないって言ってたけど……そんなことは人間同士だっけ一緒さ。

分かり合おうとか、合わせようなんて思っていたら、何年かかるかわかったものじゃない。

あんまりじめじめ悩んでも仕方がないんだよな。

一人で困ったら二人で考えて、二人で困ったらみんな考えてみて。

ま、ナーちゃんを見ていたら思うよ。

綺麗なものを見て、素直に「きれい！」って言えることが大切な

んだって。

「ただいま」

そうして帰宅した俺達を、思いもかけない珍客が待っていた。

「……いよオ、タツう！ 元気でやってるかア！」

「由美さん！ 来てたんですか？」

「たりめエだろ！ タツとナーの結婚式だもの、来ないワケねエだろオ！」

すっかり武装天女の面影がなくなっている由美さん。

ファッション系なお店の店員らしく、お洒落に着飾っている。そもそもがキレイだから、いつそう映えて見えるよ。

俺もさることながら、何よりもナーちゃんが喜んだ。

がばつと由美さんに抱きついたりしているし。

「おお、ナー！ 可愛さに磨きがかかったなア！ アタシが送ってやった服のせいかな？ あはは」

その夜は、久しぶりに戻ってきた由美さんを迎えて大騒ぎの宴となつた海藤家。

ジーナさんと幸子が世間話をしている傍で、ドツボさんとさしつさされつ一杯やっていた親父。しかし、あとからやってきたエルシナさんを一目見るなり、鼻血を噴いてぶっ倒れてしまった。彼女は相変わらずセミヌード姿だったからだ。服を着る習慣なんかないから仕方がないのだが。

幸子はちらと一瞥しただけで、あとは何事もなかったかのようにジーナさんと喋り続けている。

慌てたのは葵さんで

「あらあら！ 大変ですわ！ お父様が血を！」

慌てて親父の手当てに駆け回っている。いつもすみませんね。

「あははは！ なんだア、そりゃ？ マサの腹踊りよりヘンじゃね

エ？ あははは」

やっぱり一座の中心は由美さんで、缶ビール片手にポイズンやレツドバック達の不思議な踊りを見てはゲラゲラと笑い転がっている。彼女を慕っているドルフアちゃんも、いつになく嬉しそう。

思いがけないことに、あのマサはリーネちゃんやトビタロー、その妹のトビノちゃんを相手に遊んでやっていた。ツツパっていた頃は、子供が大の苦手そうだったのに。とてもほほえましい光景。

俺とナーちゃん。

二人、庭に出て舞い降りる雪を眺めていた。

ふと見ると、ナーちゃんは目を閉じてじっとしている。

眠ったのかと思いきや家の中に入ろうとすると、ゆっくりと目を開けて

『もう少し、ここにいませんか？ 達郎さまっ』

『ああ。ナーちゃん、眠っちゃったのかと思ってさ。カゼひいたらまずいから中に入ろうかと』

『眠っておりませなんだ。ずっと、祈っていました』

『祈り？ なんだい？』

俺が尋ねると、しんしんと降る雪の中でナーちゃんはこの上なく清らかな笑顔になり

『 来年も、そのまた来年も、ずっとずっといつまでも、達郎さまとこの雪を見ることができますように、って！』

その66 おあとがよろしいようで

「……おい」

「なんですかあ？ 由美さまっ」

「ここに……飛び込めってか？」

婚礼の儀式当日、朝。今日は生憎の曇天。

やたらと雪混じりの風が強く、足許では重たい鈍色の海が大きくうねっている。

いよいよブルーフィッシュへ向かおうとしている俺達。

おさらいですが、海の世界へ行く方法はごく簡単です。

飛び込んで、海の住人の誰かにつかまっているだけ。あつという間に海の世界へ到着できます！

っていうか あくまでもそれは夏の話だ。

夏の時とは事情が違う。

どう見たって寒そう、とかいう以前に飛び込んだが最後、凍え死んだとしてもそれがフツーくらいに思われるだろう。誰からも同情されないに決まっている。

今日の婚礼は海の世界でやるから、人間の世界から出席するのは当然だが俺、マサ、そして由美さんだけ。親父とおふくろは連れてこなくて正解だった。一緒に来ていたら、間違いなく二人は無事に生きて戻れなくなるだろう。

「じゃあ、皆さん、お先に！」

「溺れないようにお気をつけてお越しなさい」

ポイズンやレッドバックの連中はひよいひよい飛び込んでいくのだが……俺達はそういう具合にはいかなかった。だって、寒そうなんだもの。

そんなワケで、埠頭の先端には俺とナーちゃん、マサとリーネちゃん、由美さんにジンベエさんジーナさん夫妻、そしてドルファちゃんと葵さんが残っている。

『達郎さまっ？ なにか、お忘れものですかあ？』

いつまでも飛び込もうとしない俺を見て、不思議そうな顔をしているナーちゃん。

るー。

行きたいよ。

行きたいんだけど……ここに飛び込まなきゃ、ダメ？

「あー……まいったな、こりゃ……」

泳ぐのが大好きでアメリカを目指そうとしたこともある由美さんだが、さすがに冬の海に飛び込んで泳ぐだけの気合いはないらしい。

「きゅー！」

早く！ とリーネちゃんに急かされているマサだったが

「ちょ、もーちょっと待ってねえ、リーネたん。心の準備があるからねー！」

多分、この調子だと一晩過ぎてても心の準備は整わないに違いない。三人そろつてもたもたやっている

「ああっ、もう！ これじゃ、婚礼の儀式に遅れちまうよ！」

しびれを切らしたジーナさんが、俺とマサの身体ををひょいと担ぎ上げた。

「アンタ、由美ちゃんを連れてってあげな！」

「……うむ」

え？

ま、まさか……！

「ちょ、ジーナさん！ ちょ、ちょっと待って」

「ちょっと何も無いよ！ ほんの少しの間だから、ガマンをおし！」

子供でも叱り付けるようにして、ジーナさんはそのまま岸壁を蹴った。

「あーっ！！」

どぼーん……

思いのほか、水は冷たくなかった。

なぜなら 呼吸を整える間もなく水中へ引きずりこまれた俺達は、ほとんど溺れかけていたから。

「げほつ、げほつ！」

「大丈夫ですかあ、達郎さまっ！ 苦しかったですか？」

ぶっ倒れている俺の目の前に、心配そうなナーちゃんの顔がある。

「こ、今回は失敗した。死ぬかと……思った！」

「ごめんなさい。もう少し波がおさまってからにすれば良かったですな……」

いや……波はあんまり関係ない。

よっこらしよ、と上体を起こすと、すぐ傍ではやはりマサが

「ういーっ……も、もうダメだ……」大の字。

ヤツの腹の上では、リーネちゃんが不思議そうな顔をしてヤツのほっぺたをちょんちょんとつついている。

「うおい、タツウ！ へばってないで見てみるよ！ アタシらが葵を助けに来た時とは違うぜエ！」

なんだかんだで泳ぎ好きの由美さん、早くも元気に活動している。

「へ？」

振り返った俺がその先に見た光景。

なんだコリヤ！？

葵さんを助けにやってきたあの日、がらんとして寂れていたブルーフィッシュのエリアには、どこから湧いて出てきたんだというくらい、海の連中がびっしり集まっている。青魚達やレッドバックにポイズン、アーマーな連中はもちろんのこと、その他俺の頭の図鑑にもない方々でごったがえしている。

それに、岩や地面（海底だけ）、いたるところがサンゴとか綺麗な石で飾りつけられていて、テレビで観たどっかの国のお祭り状態にフィーバーしていた。

魚人たちはやってきた俺やナーちゃんを見て

「おお、新郎新婦が来られたぞ！」

「あれがナタルシア様ね！ それと人間のダンナ様だわ！ すてきなお二人！」

なんか、すげえちやちやされている俺達。

これから婚礼するどっかの国の王子王女みたいで、こっぴड़ाかしいったらない。……ああ、ナーちゃんはお姫様だった。

「ささ、ブルーフィッシュのお屋敷へ行くよ！ 姫様にドレスを着せてあげなきゃならないんだからね！」

ジーナさんに促され、俺達はかつての総督府 今はお屋敷というらしいが に向かって歩き出した。

まるで花道のように、注目されっぱなし。

慣れない俺は召使いロボットみたいに淡々と歩くしかなかったが、ナーちゃんは嬉しそうに

「ありがとございまーす、みなさーん！」

手を振りまくって笑顔を振りまきまくっている。

由美さんやマサもブルーフィッシュを救った勇者という扱いになっているから、特に青魚な皆さま達に人気がある。

「キヤー、由美様ーっ！ 握手してくださいーい！」

「あれ、マサ様だろ！ おお、お姿を一目見られるなんて、ありがとうありがたや……」

握手を求められるやら拜まれるやらで、二人はたちまち青魚さん達にもみくちやにされてしまった。

そんな二人とリーネちゃんはおいといで、俺とナーちゃん、葵さんにドルファちゃん、ジンベエさんジーナさん夫妻はお屋敷とやらへたどり着いた。

あの厳つく見下ろすようだった総督府はすっかり様変わりし、今ではブルーフィッシュの民が自由に出入りできる場所として、ブルーフィッシュの象徴みたいになっている。中もセイゾーがいた頃とは違っていて、意味不明な調度品なんかはなく、どちらかといえば青魚たちに相応しく青い色調の美しい内装に整えられていた。可笑

しかつたのは、誰が描いたか知らないが由美さんやマサの似てない肖像画が飾ってあって、下に「海の勇者・由美殿」「海の勇敢なる戦士・マサ殿」とか書いて貼ってあったことだ。よく見れば、俺がアザラシ野郎を蹴り飛ばしてぶち開けた大穴がまんま残されていて「偉大なる自由の日の穴」とか命名されている。誰だ？ こんなもの残したのは。

ナーちゃんが到着したのを聞きつけて、たくさんのアジやらニシン、サバにサンマのおばちゃん達がやってきた。

「お待ちしておりましたわ、姫様。早速、お召し物にお着替えくださいまし」

「達郎様はどうぞ、こちらにてお休みを」

VIP扱い。

照れくさくて仕方がない俺は

「あ、どーもすみません……」

ぺこぺこ頭を下げてばかりいる。

「じゃ、達郎さまっ！ すぐに着替えてまいりますから！」

ナーちゃんは別室へ。

その間、休憩室といって連れて行かれた部屋には

「……あら？ ナタルシアのダンナ様だわ！ やーん、ステキ！」

「うらやましいですわ。私、まだ人間の男性と出会えないんですけど……」

何人かの人魚のコ達がいた。

どのコモ花のように美しい。さすがは人魚族。

「は、はじめまして。か、海藤達郎です……」

挨拶をすると、美しい金髪に褐色の肌をしたダイナマイトボイ的な人魚のコが寄ってきて

「はい！ はじめまして、達郎さん！ あたし、アンジェリカです！ 大姉さまに言われて、今度アマゾンからブルーフィッシュユに来ることになったの。よろしくね！」

褐色な人魚もいたのかと、ちよつと驚いた俺。

それはともかく、ナーちゃんと同じ人魚族かと思うくらい、陽気だったらありやしない。これだけ明るかったら、さすがのピラニアだって黙るだろう。ふと見ると、鱗が金色？ これって……。

俺がまじまじと眺めていると、アンジェリカちゃんは気がついたらしく

「ああ、コレ？ アタシ、黄金鱗じゃないのよ！ 金色に見えるけど、黄色よ、黄色！ ひまわりとおんなじ！ よっく誤解されるのよねえ。だから未だに人間の男性と結ばれないの。あははは」

とにかくよく笑う。

ブルーフィッシュもアンジェリカちゃんがくるなら安泰だろう。

ちよつと安心。

「ほら、あなたも達郎様にご挨拶なさいよ！ お世話になってるんだから！」

彼女に引つ張られてやってきたのは、対照的に真っ白い肌で、大人数の感じのコだった。

「あの、あの、私……南氷洋のセリーヌですう……。ど、ドルファがいつもすみません……」

「え……ドルファちゃん？ ってことは……」

「はい、私……南氷洋バルンサーの皆さんと一緒になんですう……」

以前、ドルファは私の護衛でして……今は交代しましたけどお……」

このコは大丈夫かというくらい、自己主張が乏しくて存在感がペラペラな人魚。見た目キレイなのに。よくまあ、強力な面子ぞろいのバルンサー達の中心にいるものだ。

そういう具合に、アンジェリカちゃんが次々と人魚族のコを紹介してくれた。

彼女達がいるエリアを詳しく把握していくと、日本の近海にいるのはどうやらナーちゃんとリーネちゃんだけらしい。元々リーネもフィールシャも別のエリアにいるべきだったはずが、一番おっとりして甘えん坊さんなナーちゃんがいるエリアに目をつけて狙ってきたようである。

そのリーネやフィールシャとの一件について簡単に話して聞かせ
てやると

「知ってるわよあ！ リーネったら、ずいぶん悪いコトしてたらし
いじゃないの。……でも、達郎様のおかげで人間の男性と結ばれる
ことができたからいいじゃないの。ちゃっかりしてるわあ」

と言って、アンジェリカちゃんは笑った。

リーネちゃんはまだ幼いから、結ばれたという関係かどうかはわ
からないけど……。

人魚族のコ達はやはり人間の男性に強く興味があるようで、ナー
ちゃんとの出会いとか生活とか、あれこれと質問をされた。

そうこうしていると

「 達郎さまっ！ お待たせしましたっ！」

葵さんに抱っこされてナーちゃんがやってきた。

アジーノさんとニシンシアさん合作のデザインドレスをまもって
いる。

胸まわりが白い生地、そこから下は刺繍の入った薄いブルーの透
けた生地になっていて、かなりセクシーではあるが清楚なナーちゃ
んにはとても良く似合っていた。頭には純白のヴェール。どこから
見てもすっかり花嫁姿だ。

「どおですかあ………？」

ちよっと恥かしそうに、俺の感想を待っている。

「うん、似合ってるよ。照れくさくて真っ直ぐ見られないくらいだ」

「えへへ……」

ほんのりと頬を赤らめたナーちゃん。

アンジェリカちゃんはじめ他の人魚のコ達も

「あーん！ いいなあ………うらやましい！」

「私も早く人間のダンナ様見つけなきゃ！」

羨望することひとしきり。

そこへ、自分も綺麗に着飾ったドルファちゃんがやってきた。

「さ、始めますよあ！ みんな、お屋敷の前にならんだならんだ

！」

「はい！」

めいめい各自の護衛に抱っこされ、人魚のコ達は外へ出て行った。ちなみに、人魚族には一人一人に葵さんのような護衛がついていて、みんな女性。ついでに、どの護衛も葵さんのような美人。

後には俺とナーちゃん、それにドルファちゃんと葵さんだけが残っている。

「達郎様とナタルシアと葵さんはこっちへどうぞ。お屋敷正面の入り口が開いたら、二人そろってみんなの前に出てくださいな。護衛隊長の葵さんも一緒に！」

「出たら、どうすりゃいいんだ？」

未だに段取りがよくわからない。

俺にそう尋ねられたドルファちゃんは楽しそうにウィンクして見せて

「あとはもう、なりゆきですから！　　そうそう、エルシナさんの言葉が終わったら海洋の鐘、オーシャンベルが鳴らされますから、そしたらお二人であっついキスをどうぞ！」

なんだ。

ちゃんと式次第があるじゃないか。つってもかなりアウトではあるけど……。

俺はナーちゃんを抱っこして、彼女の目をしっかり見つめ

「……じゃ、行こうか。いよいよだぞ？」

「はいっ！　達郎さまっ！　……でも」

「でも？」

そこでナーちゃんはちよっといたずらっぽく笑みを浮かべた。

「……達郎さまとお呼びするのは最後かも知れませんが、婚禮の儀式が終わってからはダンナさま、ですから！」

ダンナさま、か。

俺が誰かにそんな風に呼んでもらえるなんて、今まで考えた事もなかった。

「では達郎様に姫様、まいりますよ？　たくさんの方がお見えですから、笑顔で応えてあげてくださいね？」

葵さんが優しく促してくれた。

「葵さん」

「はい、達郎様」

いつもどこでも、俺達を見守ってくれていた葵さん。とっても強くて優しい人。葵さんがいてくれたから、俺はここまでくることができたといってもいい。

あの晩、リーネの前で彼女は言ってくれた。

俺とナーちゃんが結婚しようとも、いつまでも二人をお守りします、と。

「これからも……これからも、よろしく願いします！　いつも迷惑ばかりかけてるけど……」

お辞儀した俺に合わせて、ナーちゃんもゆったりと頭を下げた。

葵さんはいつもと変わらない素敵な笑顔で

「私こそ、よろしくお願いいたします！　達郎様と姫様のお傍にいられることが、私の生き甲斐ですから。どうか、いつまでもお二人のお傍においてくださいね？」

「葵さん……」

ちよつとこみあげてくるものがあつたのか、たちまち涙を浮かべたナーちゃん。

だよな。

どんな時でも葵さんは、ナーちゃんを守るために全力で、命すら投げ出そうとしていた。彼女にしてみれば、葵さんはただの護衛じゃなくって、お姉さんでありお母さんみたいなものだったし。

葵さんもそつと目頭を拭ったが、すぐにまた笑顔になって

「姫様？　せつかくの儀式なんですから、泣いてはいけませんよ？　笑顔になって！」

「はいっ！」

そうして、入り口の前に立った俺達。

ゆつたりと大勢の群集を見回していたが、やがてすつと両手を上げた。

途端に、拍手や歓声がピタリと止んだ。

「……みなさん、今日この良き日に、人魚族でブルーフィッシュの姫・ナタルシアと人間の男性・達郎様が晴れて結婚することとなります」

パチパチ、というよりもどどどという嵐のような万雷の拍手が鳴り響いた。

「達郎様とナタルシアは、人間の世界と海の世界をつなぐ架け橋です。私達は二人を心から祝福するとともに、両世界がいつまでも平和であるように、そして二人の愛が永久に続くように、祈りを捧げましょう！」

エルシナさんがそこまで言った時だった。

「ごおーん……ごおーん……」

いつの間に取り付けられていたのか、屋敷の屋根の上で大きな鐘に鳴り響いた。もしくはオーシャン・ベルというらしい　　が厳かに

俺とナーちゃんは視線を合わせてうなずき合い、そして　　キスをした。

「二人は今、結ばれました。……みなさん、どうか、二人へ祝福をお願いします！」

エルシナさんが宣言するや、たちまち沸き起こった歓声、そして拍手喝采。

俺達は今、晴れて結婚したことになる。

ゆつくりと離れると、ナーちゃんは瞳をうるうるさせていた。

「私、私……幸せですっ！　本当にこんな日がくるなんて……」

「くるさ。二人で一緒に目掛けてきたんだもの。こないワケがないんだ」

つてか、俺達二人の力だけじゃなくて。

ふと見れば、すぐ目の前に由美さん、マサにリーネちゃん、ドル

ファちゃん、ジンベエさんジーナさん夫妻、ドツボさん率いるポイズンチーム、トビタロー・トビノ兄妹、THE・鯛・チヨーほか鯛軍団にキンメ達、スミスさんとカイさん、そしてアンジェリカちゃんほか人魚族のコ達など……みんなの姿があった。そう。

みんなのおかげなんだよな。

決められた仕切りが済んだとみるや、みんながどどどと俺達二人を取り囲んだ。

「おい、タツウ！ この幸せ者！ アタシにもちったあ分けるよな！」

「おめでとございます！ 達郎様っ！ それにナタルシア！」

「たつろーにーちゃん、よかったねーっ！」

なんかもう……ただ笑っているよりない。

四方八方から祝福されまくっている俺とナーちゃん。

その時だった。

「……ひどい、ひどいですわ！ この私を見捨てるなんて！」

突然、嘆きのオスカルボイスが聞こえてきた。

この声……！

群集をかきわけかきわけして俺達の前に現れたのは ヤツだった。

イワシヤール。

すっかり忘れていた。

最後にどこの山へ届けてやったのか、それすら覚えていない。

まったく意味のわからないことに、ヤツはなぜか白い布を身体に巻きつけ、頭にも白い布切れをのっけていた。

ずざつと立ち止まり、はあはあと息を弾ませながら

「達郎どのっ！ ひどいにもほどがありますわ！ この私を捨てておいて、よりによってナタルシアと一緒にになるなんて……許せない！」

しーん……。

ヤツの一言で、群集は一斉に沈黙した。

「あら、イワシヤール！ しばらく見ないと思っていましたが……どこかへ修行に行っていたのですか？」

ナーちゃんがにこにこして尋ねると、イワシヤールはビシツと指さし

「うるさいのよ、このドロボーネコ！ 達郎どのは、私が目をつけていたのよ！ ……そりゃあ、クズだのペツペケプーだのアンポントんだのストコドッコイだのヘンタイだの一生モテない万年独身だの破廉恥だのスケベだの、その他諸々言っただし、今もその通りだと思っっているけど！ でも、それは愛あるゆえよ！ 私の愛が一番なの！」

突き出した方の手をくるりと裏返して手の平を見せ

「さあ！ くるのよ、私と一緒に！ あなたのためにほら！ こうやって花嫁衣裳まで用意したんだからね！ ナタルシアなんかとより、私と一緒に幸せになりましょう！ 私、あなたとなら月でも冥王星でもブラックホールでも行くわ！」

……ええと。

イワシヤールのヤツ、山で何かあったのだろうか？

ヘンなバケモノにでも取り憑かれてきたとか、あるいは元々足りなかった脳みそがとうとうカラになってしまったとか。

ともかく、式の邪魔。

このバカをどう始末してくれようと思っていると、

「……おう、よく見りゃナーを見捨てて逃げやがったアマイワシじやねエか。元気してたのか？」

そう言いながらヤツに近寄っていった由美さん。

イワシヤールはずざつと一步後退りして

「わ、私に近寄らないで！ ナタルシアをちやほやするようなヤツなんか、みんな許せない！ どうせ、ゴミダメ野郎のクズレナマコヘタレピツピーなトーヘンボクなクセに！ ……そうだわ！ アンタだって、いずれは万年どくし」

バカイワシはとんでもないカン違いをしているらしい。

由美さんは別に、話を聞いてやるために近寄ったワケではないのだ。

その証拠に 由美さんの右脚がすつと前に上がっている。

「……ブラックホールならためエ一人で行きやがれ！」

回し蹴り炸裂。

「あーれー……」

きらーん！

さらばイワシャル。お前のことは……永久に忘れてやるよ。

みんな、何事もなかったかのように和やかに談笑再開。

それから俺はナーちゃんと共に、いろんな海の住人達と会って挨拶をしながら、時間を過ごした。

しばらく経った頃

「……では、達郎様、姫様。そろそろ、次のエリアへまいる時間のようです」

メイドサンマが三匹ばかり、俺達の方へ近寄ってきた。

「時間？ なんだそりゃ？ 次のエリアに行くなんて話は……ねえ？」

ナーちゃんの顔を見ると「ふるふる、ふるふる」首を横に振っている。

すると、真ん中のメイドサンマが一步前に進み出て

「ブルーフィッシュのしきたりとして、人間の方と人魚の姫君がご結婚された場合、その日から東の海にあるエリアを順番に回る事になっております。長い間婚礼がなかったものですから、今ではご存じない方も多いと思いますが」

挨拶回り？

正月とか引越しじやあるまいし。

だいたい、今この場にいろんなエリアからいろんな連中が来てくれているんだから、これでよさそうなものだけど？

まあ、いいや。

とつとと挨拶回りを終えて戻ってきてから、またみんなとあれこれ話をすればいいだろう。

それくらい気持ちで俺は

「ん。どこどこ？ 一、二時間で戻ってこれる？」

尋ねると、左側のメイドサンマは無表情で頭を横に振り

「いえいえ、とんでもございません。達郎様の世界のネーミングでご説明しますと、瀬戸内海、東シナ海、日本海、オホーツク海、黄海、あとインド洋とアラビア海もございます。ざっとふた月ほど必要かと思いますが……」

……おい。

聞いてねーぞ。

ってか、なんだそりゃ！？

今から日本の領海をぐるっと一周した拳げ句、飛び出して西アジアまで行けっつのか！

一瞬、冗談かと思ったが、メイドサンマ達はいたって真面目な態度でいる。

「あ、あれえ……？ これから二ヶ月も……ですか？」

固まっているナーちゃん。寝耳に水らしい。

姫様は知らんと言っつるぞ！ どうなんだ、お前達！

「はい、二ヶ月と少しくらいでしょうか。長旅になります、私達もお供いたしますので、不自由はおかけいたしません」

十分、不自由だろう。

サンマが三匹いたところで、何の足しにもならん。

「そ、それは中止つてことで。今すぐとか言われたつて、こっちには何の用意も」

「いえ、なりません！」右側のメイドサンマが迫ってきた。「それがしきたりですから、ちゃんとお守りいただきます！ ささ、旅立ちの準備をなさいまし！」

う、有無を言わせてくれない……。

これはいつたい、どうしたものだろう？

黙っていたら俺達、日本一周&アラビアへの旅に連れて行かれてしまう。

「どうしましょう？ まだ、みなさんとたくさんお話がしたいのに……」

ナーちゃんもすっかり弱っている。

「おう、タツウ、ナー！ 挨拶は済んだのかア？ こっち来いよォー！」

そこへ、離れていた由美さんが近づいてきた。済んだどころじゃないんです。

これから途方もない挨拶回りに行けと、このサンマ達に強制されてまして。。
そうだ。

俺の頭に、突拍子もないアイデアが浮かんできた。強制されるのも つまらない。

しきたりなんていうものは、意味があって初めて役に立つもの。意味がないなら、守る必要なんかさらさらない。つてか、この際だからぶっ壊してしまえばいい。

「由美さーん！ ジーナさーん！ ちよっと、お願いがあります！」
大声で叫んだ。

「おオ！ どオしたア？」

「はいよ！ 呼んだかい？」

二人がやってくるのを見計らった俺は「そこにいるサンマのメイドさん、ちよーつと後ろから抑えてもらえますか？」

ヘンなコトを言う、といった顔をした由美さんだったが「がっ」とメイドサンマを二匹ばかり背後から抑え込んで「……こっか？」

「あっ！ 何をなさいますか！？ これはもしかして……達郎様っ！」

メイドサンマの一匹が叫んだが、もう遅い。

俺はナーちゃんを抱っこしたまま、全力ダッシュでその場から逃走を開始していた。

何がなんだかよくわかっていないナーちゃん、あっけにとられたカオをしている。

「こらーっ！ お待ちなさい！」

由美さんとジーナさんの抑えを振り切ったメイドサンマ達が、ばたばたと後を追っかけてきた。

ついでに由美さんやマサ、ドルファちゃん達も何か異変があったと思っただのか

「おい、タツウ！ どーしたんだよオ！」

「達郎さまーっ！ ナタルシアーっ！ どこ行くんですかあ！？」

みんなで走つてきやがった！

何だかよくわからないが、後に続く人数はどんどん増えてきて、いつの間にやらほとんど大集団鬼ごっこ状態。

せわしなく前へ前へと足を運びながら俺は

「……逃げるからね！ せっかくナーちゃんと一緒になったのに、あんなメイドサンマの連中と二ヶ月も顔合わすのはゴメンだ。

二人きりになれる場所まで行くよ。いいね？」

こりゃあ、前代未聞だ。

婚礼の会場から、花婿と花嫁が突如脱走。参列者達が総出で二人を追いかけている。

面白くなってきた。

このまま息の続く限り、突っ走ってやろう。

いっぺんこういうの、やってみたかつたんだよな。

追いつかれたところで、ここまで騒ぎが大きくなれば 挨拶回りの話なんか吹っ飛んでしまうだろうし。

俺の言う意味がわかったらしく、花嫁姿のナーちゃんは

「はいっ！ わかりました！」

につこり笑つてうなずいてくれた。

駆けながら上着やネクタイを外して投げ捨てた俺。すると、ナーちゃんも面白がって身につけていたヴェールやらアクセサリーをばいばいと放り出したりしている。

俺はしっかりと彼女の顔を見つめて

「行くぜ、ナーちゃん！ もうちよい先まで！」

「はいっ！ お気の済むようになさいませ！ 私はどこまでだって

」

とびっきりの笑顔で彼女は

「ダンナ様についてまいりますから！」

< やっぱり海でしょ！ 了 >

その66 おあとがよろしいようで（後書き）

お目通しくださいましてありがとうございます。

この作品は2009年夏から秋にかけて「海へ行きましょう」「やっぱ海でしょ！」と分割してアップした作品を一括し、全体的に修正・加筆のうえ修正版としてアップさせていただいたものです。本来一度掲載した作品を再掲載するというのは良いことではないのですが、筆者なりの思い入れが強かったことから、修正版掲載に踏み切らせていただきました。

喋り言葉がそのまま文章になっている部分が多く、ある程度修正はしましたが読みにくい部分があった点にご容赦をお願いする次第です。

内容について殊更に述べるべきではないと思っておりますが、一点だけ述べさせていただくと、この作品を貫くテーマは

「自己の成長を志向することの大切さ」

「協調・調和」

ということになります。

上手くお伝えしきれていないかも知れませんが、僅かでも感じ取っていただけたなら筆者としてこれほどのことはありません。ありがとうございます。

2011年9月15日 筆者 北野 鉄露

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8127u/>

やっぱ海でしょ！（修正版）

2011年9月15日22時47分発行